

英雄を目指したエウ リュアレ

タマモワンコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エウリュアレ、それは美の女神である。

原典から少しズレたエウリュアレに転生した、エミヤの魔術に憧れちゃったちよっとおかしい現代人が魔術とかビームとか武術とかビームとかチート能力とかビームとかを使って周りを巻き込みながら突っ走っていくお話。

基本的に何でもあり、ツッコミどころ満載で突然シリアスしたりもするけど結局はギャグです。

それを踏まえた上でぜひともゆっくりしていつてね！

：アンチ・ヘイト、R―15は一応ってやつです。
わーにん、わーにん。

この小説には多数の f a t e 以外の作品のネタが含まれます
わからなくてもフイーリングでなんとかはなります

例：仮面ライダー・ゼルダの伝説・R―TYPE・紺碧の艦隊など

古代ギリシア編完結？しました。

目次

古代ギリシア編

第一話　メドゥーサは現実逃避する

1

第二話　エウリュアレとゼウス

10

第三話　エウリュアレとステンノ

25

第四話　第三と半分の試練

43

第五話　神と女神と抑止力

60

第六話　旅人エコーとアルゴナウタ

イ　幕間の物語　外からエウを見てみよ

77

う

第七話　いざコルキス

100

第八話　旅の終わり

121

第九話　落ちた女神っぽい

第十話　冥界良いとこ一度はおいで

141

続・幕間の物語　外からエウを見て

みようplus

153

第十一話　そしてまた旅に出る

第十二話　怪物

169

第十三話　聖杯戦争、勃発？

177

194

幕間の物語　外からエウを見てみよ

77

				211
	第一四話	襲撃	――	227
	第十五話	翁さん大勝利!	――	242
	番外編	外からエウを見てみようEX	――	264
	!	おまけ付き!	――	318
	第十六話	鍛練	――	352
371	第十七話	突撃! 鮮血神殿!		477
	第十八話	終点	――	494
	外からエウを見てみよう	四回目		512
	第十九話	神と女神と肉球	――	512
	第二十話	ビームと左腕と必殺技		512
				397
	第二一話	悪と願いと封印と	――	417
	記念番外編	ぐだぐだギリシア神話		436
	!	そのいち!	――	456
	記念番外編	ぐだぐだギリシア神話!		477
	そのに!	――		494
	記念番外編	ぐだぐだギリシア神話!		512
	そもさん!	――		512
	記念番外編	ぐだぐだギリシア神話!		512
	最終回!	――		512
	キャラクタ―設定的な?	ギリシア編		512
	キャラまとめ	――		512
	番外編	これがエウリュアレの全て		512

だ！（大嘘）

528

冬木編

第二十二話

冬木と衛宮とぐだぐだ

と

550

第二十三話

猫とサバとタイガーと

565

第二十四話

黒き聖剣と光の剣

578

冬木編 キャラ設定等

598

第二十五話

デタラメばかり

612

第二十六話

やっぱり冬木は魔境

630

第二十七話

戦争の終わり？

645

古代ギリシア編

第一話 メドゥーサは現実逃避する

私の姉はおかしい。

「あらあら、そういうこと言っちゃうのねー?」

あ、いや上姉様は普通です…あ、ちよ、やめて、首に噛みつかないで、あいたたたた
たたた

く少々お待ちください…く

いやはや、酷い目に遭いました。口は災いの元です…。

まあ、二人いる私の姉の一人である下姉様のエウリユアレ姉様はおかしいのです。はい。

突然ブジュツ？とかいうのの鍛練を始めたり、農業を始めて林檎を育ててみたり、何処かへふらつと行つて犬やら猫やらドラゴンやらを拾つてきたり、魔術の鍛練を始めたり：挙げていくときりがありません。

なぜこんなにおかしいか。

私たち姉妹は元々は三人とも全く同じ、全く力を持たず、自我も持たず、成長もしない偶像として造られたはずでした。ところが、何故か私の作成に失敗した結果私は自我をもち成長するようになり、また姉様達も自我を手に入れることになりました。

本来ならこれだけで、上姉様と下姉様はほぼ同じ存在であり、私だけが異質な存在となるだけのはずだった。

そう、だったのです。

どうやらエウリユアレ姉様の作成も失敗していたみたいで、なんというか：中途半端に成長するといふかなんというか。背丈とか体重とかはあまり変わらないけど魔力とか魔術の伸びは凄まじいみたいです。

しかも、その成長した魔術とか魔力とかでなにをしたかっていうと、物を造り出した

んですよ。魔力を物体に変換して。本人曰く創造魔術だそうですが…ふざけてるんですか？

いや、それだけならまだよかったですよ。なんで鉄の塊とか金塊とかを魔術で造り出してるんですか。なんで適当に剣を作ったらビームが出る剣になるんですか。なにが『ちよつと魔力増幅装置混ぜこんでみた』ですか。なんで旗の先を槍をつけるんですか。しかもなんでその旗を広げながら『りゅみのじてえてるねっく』って魔力を通しながら言うような攻撃でも…それこそゼウスの雷すらも逸らせるんですか。なにが『対魔力EXは伊達じゃない！』ですか。というかなんでちよつと頑張つて造つたら白と黒のお互いに引き合うめちやくちや硬い双剣ができるんですか。なにをどう頑張つたら神秘殺しの弓矢なんて造れるんですか。

「メドウーサ？いつまで現実逃避しているのかしら？」

「上姉様…でも…」

「いい加減に諦めなさい。物を作るのに没頭したらエウリユアレは止まらないわ。」

「でも…！なんであんなばかでかい鉄の塊を下姉様は作っているんですか！まだ剣とかは納得はできましたよ?!でもあれは理解できません！」

「メドウーサ。」

「なんですか!」

「理解しては駄目よ。きつとあちら側に引きずり込まれるわ。」

「ええ…」

「鉄の塊とはなによ鉄の塊とは—!」

「な、下姉様!?聞いていたのですか!?!」

「当たり前よ!—というかこれは鉄の塊じゃないわ!—船よ!—」

「エウリユアレ…ついにそこまで狂っちゃったのね…。」

「な、どういふことよステンノ!」

「いや…下姉様、鉄は水に浮かびませんよ?魔術でも使うのならまだしも。」

「な、メドウーサ!?くつ、ならしつかりと魔術レスで完成させて目にもものを見せてやるわよ—!」

「はあ…。それで、この船?はどういったものなんですか?移動するだけなら木でいいので木で作ってください。」

「まさか!移動だけじゃないわよ。これの本質は戦闘よ!—そう!—船と船の戦い!—速く!—堅く!—強い!—51cm三連装砲三基に無数の対空砲と副砲!—そして対61cm全体防

御！うふふふふ！これぞ戦艦！これぞロマン！」

「やつぱり狂ってるわね。船と船の戦いなんて滅多に無いじゃない。というかこんな作ったら次こそはオリュンポスの奴等に攻め込まれるわよ？」

「まさか！この程度隠せない私じゃないわ！」

「いや、下姉様？前回ゼウスの雷を下姉様の『りゆみのじてえてるねっ』で逸らせたからまだ私たちは生きてますけど、ゼウスとかが本気出してきたら次こそ死にますよ？」

「だいじよぶだいじよぶ！なんとかなるわ！んじゃ、建造に戻るわね！」

「…駄目ね。」

「駄目ですね…。」

とまあ、下姉様はおかしいのです。鉄の塊が水に浮くわけがないでしょう、常識的に考えて。

まあ、こんな感じで変なものばかりを作っては何処かにしまっているのです。一体何処にしまっているのか。それは私も上姉様も知らない。

いや、確におかしいんですけど、人格は良い方ですよ。特にオリュンポスの神々と比べるととてもなく。事実、オリュンポスの奴等が現れる前は下姉様は老若男女問わ

ずすごい信仰されてましたし。私や上姉様は男を漁ったり誘惑したりしていたせいであまり多くは信仰されてませんが。ただ、なんとというか下姉様は神というよりは人に近いのかも知れません。本人も『できれば人として生まれたかった。』なんて言っていましたし。

はあ……。なにも起きなければ良いのですが。

→ここまでメドゥーサ。

←ここからエウリュアレ。

いえーい。

みんな大好き男鯖殺し星三アーチャーのエウリュアレだよー。

…でも、残念だけど別物なんだ、うん。

いやー、実は私転生した存在でして。なんかエウリュアレの体に私の魂が入っちゃったみたいなんだよねー。

しかもそのせいでおまけのバグもらっちゃったみたいで、私の知ってるエウリュアレとは違って多少体は成長できるし、魔術もバリバリ使えるみたいなんだよねー。

だってほら、エウリュアレといえば幸運EXと魔力EX、そしてなによりかわいいや

ん？あと男性特効。

ただまあ、自分の体になったエウリュアレを見てかわいいと思うのは難しいというかなんとというか。エウリュアレに失礼なのでできるかぎりその美貌を崩さないようにしてはいるし、性的行為なんて論外。

しかしここはギリシャ。ゼウスとかの時代になると男と女がいたら即よっしや！つてなる世界である。特に神とか神とかは絶対に駄目。ゼウスとかそもそも嫌。多少自分勝手なのは神だから、で諦められるよ？でもさすがに、ね？というかギリシャ神話、だいたいあの辺りが悪いじゃん？たぶん。

できればステンノとメドゥーサの二人を連れて極東にでも逃げたかったのだけど、さすがに説得は無理だった。未来を知つてるとかも言えないしねえ…。

んで仕方ないので鍛えることにしたのでした。魔力は溢れかえるほどあるのでそれで武器の素材を出しては魔力を混ぜながら武器にして、それを魔術で作った高次元空間の倉庫にしまう。それを繰り返しつつ前世でやっていた剣術や射撃、あと子供の頃にお隣のお爺さんに色々教えてもらった中国武術を延々と鍛練。

結果として、色々出来るようになった。魔術に関しては三種類特殊なものを覚えた。まずエミヤシロウの投影のような『創造魔術』を使えるようになった。これは解析したことがあるものならほぼノータイムで造ることができ、空想のものでも確固たる

イメージがあれば造れてしまうのである。凄まじい量の魔力と時間はひつようだけだね。

加えて『付与魔術』。これはまあ……言ってしまうえばエンチャント。マイクラとかのあれ。元々はやつぱりエミヤシロウの使っていた夫婦剣、『干将・莫耶』が作りたくて試行錯誤した結果使えるようになったものだ。この魔術は名前の通り物に能力を付与する魔術である。神造兵器でもなければ付与できちゃう。応用が効くので結構重宝する魔術。

そして最後に『加工魔術』。これはその名の通り物を加工する魔術。さすがに自力で鉄の塊を鉄板にするのは厳しくて……。ただ、これのおかげで砂鉄を錬鉄にしたりとかそういうことが出来るようになったのでよかったです。うん。

そして武術は……取り敢えず中国武術は普通。多少圏境とか絶招とか出来る程度。んで剣術は……縮地できました。やったぜ。

射撃はまだまだつてかんじなので頑張る。

そんな感じでがんばって修行してたのだけれど、メドウーサが fate の姿ぐらいに育った頃についてオリュンポスの奴等が現れてしまった。確か原典ではメドウーサがアテナに喧嘩売って三人揃って怪物にされちゃうはず。というわけで回避じゃーい。

てなノリでなんとか二人を言いくるめて『形無き島』に逃げ延びてついでに内部が不

可視になる結界も張ってやりました。どうだ、まいったかー。

さて、逃げ延びてのんびりやっていたわけなのだけれど……いやー、ポカやらかした。ちよつと島の外に猫とか犬とかを捕まえにいったら見事にゼウスに見つかつたみたいで、ついでも島の位置までばれちゃつた。うーん、ドラゴンは余計だつたかなー。

それでなにをしてきたかと言うと、夢の中でベツトにお誘いかけてきやがつたあのジジイ。

んで断つたらステンノとメドゥーサを人質に脅してくる始末。それでも断つたら……なんと雷落としてきました。これが天罰……。モンスター効果の発動を無効かな？

避けようが無いしまだ死ぬ気もなかつたので死ぬ気で偽ジャンヌの宝具（要するにパクリ）『りゆみのじてえてるねつる』を張つたらなんか生き延びれましたとき。

以降たまに夢に来るけどまあ直接手は出してこないでなんとかなってます。

それでも私は元気です。

そしてそう！今は気合いで『日本武尊』を作っている！やつぱ戦艦はロマンの塊！ひやつはー！

明日もがんばるぞいー。

第二話 エウリユアレとゼウス

最近姉がうるさい。

「あ、いや、上姉様のことではないですし何て言ってるかうるさすぎて聞こえないです、あ、ちよ、嘸まないで、いたたたたたたたた

く少々お待ちください……

…はい。下姉様がうるさいです。作った兵器を毎日のようになにか叫びながら撃ちまくっていてもうるさいです。

それになにか最近は気が立っているみたいで機嫌も悪いです。一体どうしたんでしょうか。

…あ、落ち着いたみたいです。

「メドゥーサ、メドゥーサ！今のうちにエウリユアレ止めて！毎日のようにあんな轟音

を聞いていたら死んじゃうわ！ほんと！」

「わかりました。」

タツタツタツタツ：

「下姉様？」

「はあ、はあ。あら、メドウーサ。どうしたの？」

「いや、下姉様こそどうしたのですか。最近ずっと機嫌悪いじゃないですか。」

「…最近ね、ゼウスが良く遊びに来るのよ。」

「はあ…は？え？」

「しかも隙あらば襲おうとしてくるのよ。夢の中で済ませておけばいいのに。でもあれの機嫌損ねたら面倒でしょ？だからほんとね？もうね、限界なのよ。もう…刺し違えてもいいかしら？」

「いや、駄目ですよ!？」

「…ええ、わかっているわよ。でもね、ストレスで三キロ痩せちゃったのよ。ただでさえ軽いのに。でもこのストレスの捌け口はないから海に向けてブツパするしかないのよ。ふふふふふふ、GAU—8は爽快感抜群よ？もちろんやつと完成した日本武尊の主砲も

ね？うふ、うふふふふふふふふふふふふふふ……」

「…あ、ならポセイドンさんに頼んでみましょうか？彼ならゼウスに多少なら注意は出来るかもしれないし。」

「…は？ポセイドン？」

「はい。」

「なに？もしかしてあれ？愛人とか？もうペガサス孕んでる感じ？」

「え、確かに愛人関係つちや愛人関係ですけど…、ペガサス？」

「…なんてこった。…まあ、なつてしまったものは仕方ないか…。それで、ポセイドンとの馴れ初めは？」

「えつと…昔海岸で下姉様から頂いたギターで『熱情の律動』を弾いていた時に会いまして、そこから…。」

「……………メドウーサ。」

ゴゴゴゴゴゴ

「は、はい？なんででしょうか？」

え、なんで下姉様こんなに怒ってるんですか？なんか後ろに角の生えた化け物がみえるんですが？まさかポセイドンは地雷とか？え？え？

「『熱情の律動』は！農地で麦わら帽子を被つて！横にゆつくりを置いて弾けとさんざん言つたでしょうがあああああああああああ！」

「ゆつくりしていつてねえええええええええええ！」

「そこですか下姉様といふかなにこのクリーチャー!?!」

「はあ、はあ。ああ、これがゆつくりよ？ほら、私が『熱情の律動』を弾いてるときに必ず聞こえてたでしょ？へエーラロロオールノオーノナーアオオオーって。」

「あ、え!?あの声つてこの子だったんですか!?!」

「…もしかして気付いてなかったの?」

「あははは…ずっと下姉様が歌つてるものだと思つてました。」

「ふーん。修行が足りないわねー。」

「それは毎日のように感じています…。にしてもこのゆつくりつてなんの生物なんですか?これ。」

「あら、これはお饅頭の妖怪よ?」

「…オマンジユウ?」

「ええ。お菓子のひとつ。この子は豚まんを作ろうと試行錯誤していた時にうっかり魔力を流しちやつてできちやつた子なの。」

「ゆっ!」

「…もしかして食べられるんですか?」

「ゆ!?!」

「ええ。所詮お饅頭だしね。」

「ゆっ!?!」

「といつても、さすがに私は食べないわよ。責任を持って飼うわ。」

「はあ…、そうですか。」

「ふゆー…。」

「…あら?」

「?」 どうされましたか?」

「侵入者。人間、それも大勢ね。しかも武装してるわ。んー、メドゥーサ、ちよつと様子を見てきてもらえるかしら。」

「戦闘行為は?」

「許可しないわ。メドゥーサはあくまで偵察だし、ね。」

「了解です。」

「あ、あと接触後はこうしてくれると嬉しいわー。」

「こうつてどうですか?」

「それはねー…」

……少女説明中……

「とうわけよ。」

「うわあ…えげつない。えっと、情報を適当に引き出したらこの煙玉を投げればいいんですね?」

「撤退するなら放置でいいわ。あと、投げたらすぐ逃げるのよ。全力で。」

「わかってます。まだ私は死にたくはありませんから。では、行ってきます。」

「がんばってねー。」

「…あれ、私放置ってひどくない、エウリユアレ…メドゥーサ…?」

……少女移動中……

さて…取り敢えず接触してみますか。おや、あれがリーダー格の人でしょうか。では

早速。

「すいませんが、この島になにかご用でしょうか？」

「っ！魔術師！あいつはエウリユアレか！」

「いいえ、違います！でかいのでメドウーサかと！」

「そうか！」

「でかいってひどい……あー、エウリユアレ姉様にご用ですか？」

「ああ。我らの王の元に悪神たるエウリユアレを倒せという神託が下つたのだ。なにもせぬなら貴様には手を出さん。エウリユアレの居場所を教えてはくれぬか。」

「いや、姉を売る妹とかどんな薄情な妹ですか。話し合いの余地は？」

「無い！倒さねば国が滅ぶそうだからな！」

「うーん、わかりました。では……ていつ。」

ボムッ！

「な、幻術の類いか!?魔術師！結界を！」

「ただの煙玉ですよー。あ、あとそこから動くときつい目に合いますからねー。動いちゃダメですよー。」

「なに!?!」

ドカアアン……………

「なんだ!? 雷か!？」

「いえ、空は晴れています！」

「ならばなんなのd」

ドガアアアアアアン!!

……………

「いえーい、初弾命中ー。」

「…うわあ。全滅ですよあれ。」

「いいのよ。あれは見せしめだからね。あの人数が全滅したってなったら大抵の人間は来るのを渋るから。」

「…下姉様、わざわざ船の砲で撃つ必要は有りましたか？」

「うん。射撃の練習がひとつと、あと死体を運ぶの面倒だから。」

「ミンチじゃないですか…。というか、軍隊が全滅したって話が行ったら、それこそ英雄

とかにすぎるんじゃないですか？例えば…あのヘラクレスとか。」

「あら、面白いこと言うわねメドゥーサ。でも流石にヒュドラを倒すような化け物がこんなところに来るわけないでしょ。」

「そうだといいのですが…。」

いやまあ下姉様ならヘラクレスあつても倒せますかね。下姉様強いですし。

取り敢えず私は…下姉様の足手まといにならないように修行ですかね。

頑張りましょう。

→ここまでメドゥーサ

←ここからエウリュアレ

いやっほーい。

男鯖相手に玉藻マーリンエウリュアレで脳死耐久するのが得意だったエウリュアレさんですよー。

いやー、絶対ヘラだね。うん。

メドゥーサがああ連中から聞いたことを私も聞いていたけど、神託の発信源絶対ヘラ

だって。

ゼウスが最近うちに来てるせいだよこれ。

やっぱりゼウスにアヴェンジャーぶちこむしかない。それくらいの権利はあるはずだ！うにやー！

でもそんな勇気はないへたれなので今日も今日とて海に撃つのです…。うにやあああああああああああ！

がくつ。

もうやだ…。寝よう。うん、寝よう。

ばたつ。

「おや、先にベットに入っていくとは…。ついに受け入れてくれたのかね？」

…は？

「ふふふ、今いくぞ麗しの女神よ。ワシの女にしてや」

「ぎゃあああああああああああ!?!」

「ぬおおう!?!どうした!?!なんだ!?!」

「な、ちよ、なんであんたここにいるのよ!?!ここに私の部屋よ!?!私の混沌としたプライベート

トが混ざりに混ざって銀河を為しているところよ!?なんであんなにここにいるのよ!?

「ああ、それはもちろんお主を手に入れるためだ!」

「死ね。消え失せろ。すべての次元から消えてくださいお願いします。」

「えー。」

「はあ…全く。まあお茶位なら付き合っただけから、終わったら帰りなさいよ?」

「むう…まあ仕方あるまい。」

「すぐに引いてくれるのは嬉しいわ。」

「お、もしかしてワシの好感度が上がった?」

「今ので下がったわ。はい、紅茶よ。」

「おお、ありがとう。」

「……………」

「なんじゃ、ワシの顔をじつと見て。あ、もしかして惚れたか?」

「それはない。オリュンポスの最高神、全能神と聞いてどんな厳格なクソジジイかと考えていたから…こんなフランクなおっちゃんだとは思ひもしなかったわよ。ほんと。夢の中に出てきた頃の威厳はどうしたのよ。」

「あー、あれか?あれはな、夢への介入は思いつきりへらにばれるのでな。こうして自ら来ていると言うわけだ。へらにばれないようにな。」

「ならなんで『悪神たるエウリュアレを倒せ、さもなれば国は滅ぶ』なんて神託が人間に下るのよ…。」

「なに？ どういうことだ？」

「今日の昼に来た連中よ。国を守るために死んだ英雄かしらね、彼らは。」

「いや、だがヘラには言っていないのだが…。」

「ポセイドンとかアルテミスとかヘステイアさんとかには？」

「…あ。」

「やつぱりか。」

「ははははは…いや、そのだな？ 酒に酔った時にポセイドンのやつにメドゥーサのことを自慢されてな、そのときにだな…。」

「待ちなさい、何て言ったのよ。」

「…ならばエウリュアレはワシの愛人にして見せる！ と高々とだな…。」

「…ねえ。」

「な、なんだね？」

「…私まだ死にたくないのだけど。」

「もちろん、死なせるつもりもないが？」

「やばいじゃない!? ヘラに完全にロックオンされちゃったじゃない！」

「う、うむ…そう、だな。」

「…終わった。どうかオリュンポスの神々に睨まれないようにしたかったのに…。」

「…その、すまぬな？」

「…ねえ。」

「な、なんだ？」

「私を愛しているのよね？」

「あ、ああ。そうだが？」

「なら…一緒に死にましょう？ええ、それがいいわ。貴方を殺してから私も死ぬから、ね

?ね?。」

「ぬおう!? 待て、待てエウリュアレ! その白黒の双剣を振り回すのをやめよ!。」

「だって貴方が原因じゃない! 取り敢えず一発斬らせなさい! 一撃で終わらせてあげる

から!。」

「いや待て! まだ諦めるには早いだろう!。」

「ヘラに目をつけられるとか詰みでしょ! なんてこうなるのよ! もうやだあああ! う

わあああああん!。」

……………少女錯乱中……………

「…落ち着いたかね？」

「…ええ。ごめんなさい、なんかもう色々いっぱいみたい…。」

「うむ…その、すまぬ。」

「…もういいわよ…。その分しつかりと私を守ってちょうだい…。」

「む？つまり愛人になってワシの傘のなかに入るといふことかね？」

「んなわけないでしょ。というかその傘のなかにはヘラがいるでしょ？」

「…あ。」

「もう…。」

「…取り敢えず、ワシの祝福位しか今は渡せぬのだが…。」

「それでも十分よ。私みたいな雑魚にはゼウスの祝福なんて破格よ。ただ…主に神絡み

で何かあったときは頼るわよ？」

「お主が雑魚…？うむ、それくらいなら。」

「じゃあ、よろしくね。」

「それで、今夜どうかね？」

「却下よ。」

「…だろうな。では、帰るとするか。」

「あらそう。…嫁さんは大切にしないよー？」

「当たり前だ。ではな。」

「ええ。またね。」

……

「…はあー。もつと強くならなきゃ、いけないわねー。」

なんて不幸な。

うーん、なんというかゼウス、私は好きよ？うん。ただ、私がエウリュアレである以上どうしようもないし。それにゼウスの愛人とか地雷でしかないし。ゼウスには悪いけど…いや、彼は多分私のことを気付いている…たぶん。

あくまで予想だけど、ゼウスは黒髭みたいな感じ…なのかな？うーん、まあいいか。…よし、明日は色々頑張ろうと。

第三話 エウリユアレとステンノ

最近姉が

「メドウーサ?」

え、ちよ、まだなにも言っつてな、まっつて、そこ首じゃなくたくちび

くずきゆうううんく

はあい。

メドウーサじゃなくて、姉のステンノよ。

メドウーサはどうしたかって?メドウーサはそこでイっているわ。漢字は各自で当てなさい。

では早速。

最近、妹が辛そうだ。

毎日何かに追い立てられるように物を作ってはそれを振り回したりしているわ。

というわけなので姉としてめんたるかうんせりんぐ？ってやつをやってみたいとおもうわ。

「エウリュアレ。」

「…あ、ステンノ。どうしたの？まだお昼ご飯には早いわよ？」

「あら、まるで私が常にお腹を空かせているかのような言い方ね？」

「え？違うの？」

「え？」

「…いや、うん。なんでもないわ。それでどうしたの？」

「そうそう、エウリュアレ、貴女どうしたの？最近ずっと武器を作り続けているじゃないの。」

「あー、それ？んー…言わなきゃだめ？」

「ええ。だって貴女、辛そうなもの。見ていてこっちも辛くなってくるぐらいには、ね。」

「そっか…。うーん、そんなかー。結構参ってるのかなあ…。」

「それで？」

「…うん。最近悪夢を見るのよ。内容はなんとも言えないのだけど、軽く首をつりそうになりそんな内容とでも。」

「…悪夢は私にはどうしようもないわね。」

「…ですよねー。」

「そうね、辛いからといって延々と自分の世界に沈み混んだらいけないと思うわ。だってほら、悪夢は基本的には自分の中から来るものでしょうしね。」

「ステノ…。」

「たまにはなにもせずのんびりしてみるのもいいと思うわよ?」

「…そうね。」

「じゃあ」

「でも、今日は作りたい気分だから作るわ!」

「ええ…。」

「でも…うーん、ネタが少しマンネリぎみなのよねー。なんかかない?」

「なんかかって…。あ、じゃあ私にも使えるような武器とか無いかしら?」

「…ステノに?」

「ええ。ただ妹に守られるだけの姉なんて嫌だもの。少し位は二人の役に立ちたいわ。」

「私としてはステノの笑顔だけでいいんだけどな。まあ、そうねえ。魔力を使うとして、杖とか?それか魔力を矢として打ち出す弓? 投げボルグみたいに魔力を込めると

と相手をホーミングする槍もいいかな?…よし、それにしよう。」

「なにを作ってくれるの？」

「それは出来てからのお楽しみー。それじゃ、ちよつと待っててね。」

「ええ、わかったわ。」

……………少女作成中……………

「……メドウーサ、貴女ブラフって物を知らないの？」

「……うー。」

「明らかにさっきの伏せカードはブラフじゃない。それにサイクロンを撃つのはダメよ。」

「でも伏せカード怖いじゃないですか……。」

「それで逆転されてちや意味がないわよ。あ、カオスMaxで守備表示のマシユマロンに攻撃するわ。」

「うう、負けました。」

「ステンノー？できたわよー？」

「あら、ちようどよかったわ。どんなものができたのかしら？」

「ふっふっふー。これよー!」

「…これは…寶石の首飾り?それも2つ?」

「ええ。待機状態では赤と白の寶石の首飾りになってるわ。適当に隠密魔術掛けておいたからその状態なら多分ばれないわ。」

「…それってかなりのものじゃないのかしら?」

「いやー、どうせ相手にするのは神とかだろうし無意味よ無意味。」

「ええ…。私流石に神の相手は厳しいのだけれど。というか戦うことになるような神つて確実にアテナとかその辺りじゃない…。」

「まあ、そうなるわね。ちゃんと修行はつけてあげるから頑張つてね。それで、説明を続けるわよ。その宝石は魔力を通すと戦闘形態に変化するわ。赤の宝石は槍で、白の宝石は弓に変化するわ。」

「なにそれすごい。」

「ふふふ、頑張つたんだから。いやまあ本気だしちゃうと抑止力に押さえつけられちゃうから多少抜いてはあるけど。…いや、真面目に作つたら対界宝具つばいのできちゃつたし…。」

「…え?」

「まあそんな事はどうでもいいのよ。うん。まずは槍の説明ね。取り敢えず展開してみ

て。」

「え、ええ。ていつ。」

ガシャン

「…成功ね。その朱槍の銘は『紅炎』。まんまだけどそういう名付けのセンスは私は持つてないから諦めて。その槍は魔力を通すと火炎が出るわ。」

「へえ…軽いわね。まるで絹を持っているみたい。それで？どの程度でどのレベルの炎が出るの？」

「先にそれを聞く辺り私という存在について理解してるわね。うん。」

「あの…びーむそーど？を見たら聞くわよ…。置いてあったあれを拾っちゃった時は大変だったんだから…。」

「島が半分消えたものねー。あれはちよつとやり過ぎたと後悔はした。」

「反省は？」

「それでその槍は魔力を通すと火炎が出るわけだけど、基本的には刃のある方向に火炎が出るわ。」

「してないのね。それで、どの程度？」

「んー、15スパルタくらいかな？」

「つまり15000人の兵士を消し飛ばせる程度ってことね。ふざけてるのかしら？」

「いやー、ちよつとがんばった。はじめての姉への一生残るプレゼントだもの。」

「いつそもつと平和なものの方がよかったわよ……」

「え？砲がよかった？」

「……これ突き刺して魔力通したらどうなるのかしらねー？」

「……ごめんなさい。」

「全く。」

「あ、ちなみに火炎は出す方向を意識すればどこからでも出せるわよ。頑張れば後ろと前に同時にぶつぱなすとかもできちやう。つまり30スパルタ！」

「今さらだけどスパルタってなによ。単位？」

「人類史上最強クラスの人種と私は記憶してるわ。ギリシアのトツプクラスの英雄が普通な種族って考えておけばいいと思う。」

「なにそれ怖い。」

「一騎当千を地で行く辺りすごいと思う。と、まあ槍はそれと、魔力を込めつつ投げると加速しつつホーミングしつつ炎を周辺にばらまきつつ、着弾すると刃からビームブツパ、あと投げたり撃つたり落としたりしても手元に戻ってくるわ。」

「すごいわね。ただ私に筋力はないから投げられないし、そもそも槍を撃つってなによ。」

「それは次ね。取り敢えず槍を待機状態にしてみて。念じれば出来るわ。」
「わかったわ。」

シューイン

「…うん、これも成功つと。それじゃ次は弓ね。」

「てい。」

ガシヤン

「こつちも成功つと。」

「これは…銀？にしては絹レベルに軽い。というかでかいわねこれ。」

「ふふふ、エウリユアレ驚異の技術力つてやつよー。あ、銘は『白雷』ね。」

「それで？これにはどんなとんでも能力をつけたの？」

「よくぞ聞いてくれました！まずこの弓は基本的に矢は使わないわ。代わりに魔力を打ち出すの。」

「…普通ね。」

「普通じゃないです。あ、もちろん魔力増幅機付きだからガンド一発位の魔力で撃てるわ。射撃タイプは拡散、収束、速射、三点バーストの3つよ。」

「範囲とかは？」

「拡散だと正面を0として方位20から340の方角にビームが飛ぶわ。収束は…まあ

普通のビームとでも。速射は収束を魔力を込め続ける限り打ち続けて、三点バーストは三発撃つって感じ。威力は…拡散はまあ2スパルタぐらい。収束は…まあちよつと山が吹き飛ぶ程度よ。」

「…普通ね。」

「普通じゃないです。んでこれはもうひとつ能力があるのよ。」

「…なにがあるのかしら？」

「この弓に物をセットして矢のように撃つと、魔力で加速して撃てるの。」

「…それがなにかになるの？」

「さてここでさっきの槍よ。弓で撃つのも投げる判定に入るみたいなのよ。なんでか。つまり、」

「高速で回りに火炎をばらまくことが出来る、と。」

「しかもホーミングする上槍は帰ってくるしね。どうよ！」

「すごいわね。ありがと、エウリュアレ。」

「いやいや、私も意外と得たものがあつたからいいのよ。特に形態変化ははじめての試みだったからね。まあ、魔力とかの関係でかなり純度の高い宝石が必要なのがネックだけれど。」

「ふふ、やっぱり貴女は笑顔の方がいいわ。」

「…そうなのかな？ありがとう、ステンノ。よし！それじゃ早速鍛練といきましょうか！」

「え、まって、明日でもいいんじゃないかしら…」

「なにいつてるのよステンノ、善は急げよ！ほらほらはやく！」

「…もう。わかったわよ、ほら、メドゥーサも来なさい。エウリュアレだけだとなんか暴走しそうだし。」

「あ、はい。」

…まあ、エウリュアレが笑顔になったし良しとしましょうか。

「取り敢えず一日一万回感謝の突きからね！」

…これ生き残れるかしら…？

→ここまでステンノ
←ここからエウリュアレ

——地獄を見た。

世界を闇が包んでいた。

——地獄を見た。

街は廃墟となっていた。

——地獄を見た。

善人も、悪人も、犬も、猫も、鳥も、花も、木も、空も、全てが等しく絶えていた。

——地獄に、居た。

そこにあるのは無と、黒と、歪みだけだった。

——私は、そこに居た。

ただの人間だったわたしは、瓦礫に押し潰されて死んだ。

無力だったわたしは、■に焼かれて死んだ。

お人好しだったわたしは、誰かを助けて落ちて死んだ。

誰かの死を受け入れられなかったわたしは、首を切つて死んだ。

運の無かったわたしは、■に飲まれて殺された。

好奇心旺盛だったわたしは、爆発に巻き込まれて殺された。

■の奔流に巻き込まれて殺された。

死んだ■が成り果てた化け物に食らわれて殺された。

黒い■■に、殺された。

またわたしは殺される。

またワタシは殺される。

じゃあ、私は？

家族を愛していた私は、妹と弟を助けて死んだ。

父親似の赤毛の子供。

それで、良かった。

助かって、良かった。

だけど――

赤毛の《少年／少女》は地獄の中に立っていた。

《少年／少女》は前に進めずにいた。

私はそれに近づいて、《少年／少女》を《抱き締めてしまった／背中を押した》。

そして《少年／少女》は、《捕らわれてしまった／また歩き出した》。

そして、私はそれを見て——

微笑み、言った。

《もう離さないから／信じて進みなさい》、と。

私は願ってしまった。

まだ、消えたくない。

二人を、《守ってほしい／見守ってほしい》と。

それが許されることのない願いと知りながらも、

願ってしまった。

願いは、叶えられた。

「っ！」

ガバツ

まだ、夜中だ。

「…はあ、はあ、はあ…。」

身体中に嫌な汗がまとわりついている。

また、あの夢だ。

ゼウスの祝福を受けて以降、毎日のようにこの夢を見る。

まるで自分が自分でないような感覚の夢。

なにかに侵されるような感覚。

地獄と形容するに相応しい光景。

幾度も殺される。幾度も絶望する。

それがまるで私の未来を表すことのような気がして、怖い。恐ろしい。

何よりこれの正体を掴めないのが辛い。正体不明は不明故に怖いのである。ばれれ

ばそうでもない…かも？

多分私なんだろうけど…わからん！前世だとしても記憶はさっぱりないし！

うーん、でもどうしようもないしな！

しやーない。獏の絵でも書いて枕の下にでも入れとこ。

はあ……。ステンノに言われた通りに明日は一日のんびりしようかな……。なにか気分転換になるものがあればいいんだけどなあ……。

……そうだ、本気で武器一式作ってみようかな。抑止力も多分なんとか出来るし。気合いで。

よし、そうしようつと！

第四話 第三と半分の試練

メドウーサだと思った!? 残念! エウリユアレでしたー!

いや、うん、取り敢えず今の状況を説明しよう。

ヘラクレスが来ました。

なんでき。

「いやー、ほんとなんでであろうなあ。」

「あんたのせいでしょうが!」

「えー? これでもわし全能神だよ? そうなら流石にわかるわ。」

「にしちや女心がわからないわねえ。まあ私もわからないけど。」

「んで、なんでなんだ?」

「絶対あれよ、ヘラが嫉妬でもしたのよ。んで私を殺すためにヘラクレスに動くようにしたんでしょ。」

「なにを言うか！ヘラが嫉妬なぞ…するかも。」

「いつそ否定したなら楽だったのに。」

「…それで、どうするのだ？」

「取り敢えずステンノとメドゥーサは地下に隠れてもらっているから心配ないとして、貴方はどうするの？」

「…流石に援護するわけにもいかんしなあ…。なんと言われてヘラクレスを動かしてるかもわからぬし。」

「そうね。貴方が洗脳されてるみたいない理由だったら余計にヘイトを稼いじやうしねえ…。でも勝てる気がしないんだけど。」

「そりゃヘラクレスだからな。ヘラは嫌っておるが、わしはあやつは気に入っておる…というか息子だしな。本人に何かするとヘラにはれるからこっそり周りの人間に根回ししたりしとるがなあ…。それでもあやつは規格外だ。なに？ヘラが嫌っておるのはわしのせい？美女がおつたら襲ってしまふのは仕方ないよネ！」

「ノツプは黙つといて…いやこいつゼウスだったわ。…せめて魔術でも使っていれば起源弾で倒せたんだけど…ないからな。」

「あやつは完全に技量だからな。」

「…やるしか、ないかー。」

「…行くのだな？」

「ええ。骨は拾ってくれると嬉しいわ。」

「まさか、君が死ぬとは思えんが？」

「いや、普通に雑魚よ。うん。まあ、行ってくるわ。」

「ああ、行ってらっしゃい。」

.....

ああ……ここが私の死に場所なのか…。

「…貴様がエウリュアレか。」

「…ええ。その通り、私がエウリュアレ、一応女神よ。どんなご用かしら、英雄ヘラクレス？」

「簡単なことだ。貴様の首を取ることと貴様に捕らえられた我が父を救い出すことだ。」

「…じやあゼウスを引き渡したら見逃してくれるかしら?」

「なに? どういうことだ。」

「だって私ゼウスを捕らえてなんてないもの。あいつが勝手にうちに来ているんだし。」

「…なぜ父が貴様のところに来るのだ。」

「私を愛人にしようと頑張ってるのよ…。ほんと止めてほしいわ。ほんと。おかげでこ
うやって貴方が来るようなことになっちゃったし。」

「なるほど、ヘラか。」

「ええ。…貴方も苦労しているみたいね。」

「まあな。今回の試練は少しおかしいとは思っていたが、そういうことだったのか。」

「…それで、見逃してもらえないかしら? ほら、私ただのか弱い女神だし? 正直赤子より
弱い存在だし?」

「…すまん。父を救うのも一つだが、お前の首を取ることも命令されているのだ。」

「…ほんつとなんでなのよ…。」

「ヘラだろうな。」

「ですよねえ…。取り敢えずゼウスを返した方がいいかしら?」

「ああ。」

「わかったわ…。ゼウスー。取り敢えずオリュンポスに帰ってくれないかしらー? ヘラ

クレスが困るからー。」

「…よかろう。ではエウリュアレよ、また来る。」

「私としては来なくていいです。じゃあね。」

「…死ぬなよ。」

「頑張るわー。」

「…親しいのだな、あの全能神と。」

「ええ。流石に毎日のように会っていたらこうもなるわ。」

「毎日だと？」

「ええ。こつちとしてはいつ襲われるかわからなくて怖いわ。」

「…まあ、お前の容姿ならばわからないこともないが…。」

「なに、貴方まで私を…。」

「まさか。私には愛する妻が居るのだからな。」

「それならよかったわ。…さて、そろそろ始めましょうか。」

「…なに？」

「さてさて、陰剣陽剣でどこまで行けるかしら。」

「剣、それも二刀だと？」

「ええ。我流だけだね。貴方相手にどこまでやれるか試させてもらおうわ。」

「気に入った。…いいだろう。かかってくるがいい!」

縮地で近づいて降り下ろす!

「なにっ!?!」

「せえりやあ!」

ガキイイイン

「ぬう、まさか一瞬で間を詰められるとは。それになんとという威力、なんとという重い一撃。お前、本当に女神か? 戦女神とかの間違いではないのか?」

「まさか! 私はただの偶像、美の女神に近い変な存在よ!」

「そう、かつ!」

ブオオン

「うひゃあ!?!こわっ! 大剣こわっ!」

縮地で下がってなかったら死んでた! ヘラクレレスこわい!

「今の距離でかわすのか!?! 確実に当たると思ったのだが。」

「一発もらったら死ぬのなもの、そりゃあ全力で避けるわ、よっ!」

縮地で近づいて切る! 狙うは腕! できたら武器落として!

ザシユザシユ

「ぬううん、一撃入れられるとは。なんて速度だ、目で追えん。」

びーむそーどを使わざるを得ない！

「な、剣の軌道が変わっただと！ツチイ！」

ガキンガキン！

あちやー、弾かれちゃった。だがこれはどうかな！

「びーむそおおおどー！」

ドカアアアアアン

「なにい!？」

ドーン

「…どう、かしら。」

「…ぬう、今のは効いた。」

「…まじかー。」

「どうした？もう無いのか？」

「いやー、今のやつ、私ができる最高クラスの一撃なんだけど…ええ…。」

避けられないように広範囲に広げたのが間違이었다か。でもヘラクレス殺したらあとに響きそうだしなあ…。

「仕方ない。私の奥義、食らってみなさい！」

来い、『勇者の弓』！

「む、次は弓か？」

「いくわよ！…九つの矢よ、光を纏いて我が敵を射よ！九つの矢！」
ナインアロウズ

ドヒヤア！

「ならばその奥義、正面から打ち砕こう！『射殺す百頭』！」
ナインライブズ

あ、やばい。

今撃った矢、爆弾矢だあれ。

しかもヘラクレスさんめっちゃ近いんですけど。これ爆風に巻き込まれますねえ！?
お疲れさまでした。エウリュアレの冒険はここで終わってしまった！

あふん。

ドカアアアアアアン！

→ここまでエウリュアレ

←ここからヘラクレス

流石だ。

まさか俺が迎撃することすらも読んで爆発する矢を撃つとは。俺がここまでやられるとは。

死なない化け物ならばともかく、人間の形をしたもの、それも無力と言われていたあの女神がだ。

だがまだ俺は戦える。

さあ、次はどこから来る？どんな力を見せてくれる!?

………来ない。どうしたのだ？まさか、逃げた？

…む？

「ばたんきゅー…。」

…は？

く少々お待ち下さいく

………どういう、ことだ？

爆発する矢を迎撃したらエウリユアレが倒れていた。

うーむ。まさか射殺す百頭が進化して十連激を打ち込めるようになったとかか…？
にしては外傷は見当たらないが…。

「う、うーん。」

「む、気がついたか。」

「あ、れ？まだ生きてる？」

「ああ。それで？何があった？」

「えっと…自爆しました。はい。」

「…は？」

「いやー、間違えて爆発する矢を撃ってしまったて…。」

「は、ははは。つまり、なんだ？俺はお前さんのうっかりでここまで追い詰められたと
？」

「いやまあまだ手はあったけど…どちらにせよ私は負けていたと思う。」

「ほう、なぜそう思う？」

「だって、まだ対人戦は修行の途中だもの。軍隊相手ならなんとかするのだけど一対一
はまだ無理よ。」

「ほんとね。未来とはいってるとはいつてるけど何時なんて言っていないものね。ずるいわー。全能神ずるいわー。」

「だがそんなもので退けるのか?というかヘラをどうするのだ?」

「…どうしようかのう。」

「ええ…。」

「…全能神とは一体…。」

「…まあ、なんとかしよう。うむ。」

「頼むわよ。いやほんと。まだ死にたくないし。せつかく助かったんだからまだ生きていたいわ。」

「俺としても成長したエウリユアレと戦ってみたいからな。」

「わしもエウリユアレをわしのものにしたいからな。というかエウリユアレよ、そもそもヘラクレスを殺す気など無かったんじやろ?」

「…やはりか。」

「…え、ばれてたの?」

「ああ。なんとというか、殺気が無かったからな。というか戦いのなかで『うぴやあ!』なんて悲鳴はおかしいだろう?」

「う、うるさいわね!怖かったのよ!」

「ははは。」

「むー。でもまあ、取り敢えずは終戦つてことで良いのかしら?」

「ああ。」

「そうじゃな。」

「じゃあ、取り敢えずメドウーサとステンノを地下から出してくるわ。」

「うむ。」

タツタツタツタツ…

「…なあ、ゼウスよ。」

「なんだ?」

「あいつは、エウリュアレは何者なのだ?あれが神とは思えん。まるで人間の小娘ではないか。」

「わしもそう思う。が、そこが良いのだよそこが。」

「…そういう考えをしているからヘラが嫉妬するのではないだろうか?」

「…まあそうだが…すまぬ。治せん。」

「だろうな。」

「…へえ、貴方がヘラクレス？」

「むう!? 何奴…む、エウリュアレか？」

「あら残念。私はエウリュアレの姉のステンノよ。」

「ふむ…エウリュアレにそっくりだな。だがお前はなんと…性格は神に近いのだな。」

「というよりはエウリュアレが人間に近すぎるのだと私は思うわ。」

「なるほど、そうかもしれないな。」

「にしても…エウリュアレがやられたと聞いてどんな化け物かと考えていたけど、普通の人間なのね。ちょっと身長は大きいけど。」

「いや姉様、これはちよつとではないと思うのですが。私の二倍位ありませんか？」

「とすると、お前がメドウーサか。」

「はい。はじめまして、英雄ヘラクレス。貴方の活躍はここにたまにくる人間に聞いています。」

「…たまにくる人間？」

「はい。エウリュアレ姉様を信仰している人間がちらほらと各地に居まして、その人たちがたまに来るんですよ。」

「…こんなところまでか。すごいのだな。」

「ええ。自慢の姉です！」フンス！

「…ふむ、大切にしろよ。にしても、戦闘の後だからな、腹が減った！」

「あら、じゃあご飯食べる？ぱぱとつくってあげるわ。」

「なに、女神の料理だ?!？」

「上姉様の料理はとでも美味しいんですよ。」

「頂こう！」

「じゃあご飯にしましょう！腕がなるわ！」

「…なんて平和な世界なのかしらねー。」

「良いではないか。無駄に殺しあうよりは数倍良い。人間の間引きなんてしなければならぬわしとしては平和なことは良いことだよ。」

「まあ、平和を崩すのも神なんだけどね。」

「…すまない。」

「…頑張りましょうね。うん。」

「ほら、エウリュアレ！何してるの！手伝って！」

「ええ、わかったわ！すぐ行く！」

「…あれ、わしは？放置？わしの扱いひどくね？わしにもご飯おくれー！」

第五話 神と女神と抑止力

どうも、メドゥーサです。

最近やけに神様がうちに来ます。

どうもヘラクレスとの戦いの結果下姉様の噂が尾ひれ付でオリュンポスとか各地に広がってしまったらしく、色々な神が降臨するようになってしまいました。

特に良く来るのはゼウスとアテナ、ヘパイストス、あとヘスティア神の四人ですね。ゼウスはまあいつも通りですね。

アテナ神はよく武器の打ち直しや新しい武器の作成の依頼に来たり、下姉様に稽古をつけたりしています。この前も、『アレスの野郎に盾壊されたからアレスに壊されないような強い盾を作ってくれ！今すぐだ！』とか言って盾を作らせていました。あのときは初めて下姉様の泣きそうな顔を見た気がします。

ヘパイストス神は下姉様と話が合うようで、武器とか防具とか色々な事について話しています。二人はなんというか：仕事仲間みたいな感じですね。

それでヘスティア神なのですが：下姉様はやけに信頼というかももう信仰に近いぐらいいには信じているようなのです。初めて来られた際には全力でもてなしていましたし、

敬語ですし。弟との扱いの差がひどいと私は思います。ゼウスは泣いていい。

それで、なんでこんな話をしているかというと…

「死ね！エウリュアレエエエ！」

「なんでよおおおおお!?」

こうなってます。

いやー、アテナが『この世で一番美しいのは私だ！』とか宣言していてですね、素で『え、エウリュアレ姉様じゃないですか？』って返してしまいました…こうなりました。

「一番美しいのは私だあああああ！」

「そんなの私は知らないわよおおお!?」

あーあー、槍をぶんぶん振り回してるよ…。

「というか！私は美しいよりも可愛いほうがいいわ！貴女は美しい！私は可愛い！それ

でいいじゃない！」

「なに!?…つまり私は美しいのだな？エウリユアレよ！」

「ええ！少なくとも私なんかよりは美しいわよ！メドウーサの美しいの観点が周りとずれているだけだから！」

「うん…うん、そうだな！私は美しいのだ！流石だエウリユアレ！」

「はあ…死ぬかと思つたわよ。」

「なにを言うか。お前が本気を出したら我が父でさえも勝てんだろうに。」

「んなわけないでしょ。これでもか弱い女神よ？戦闘前提の貴女たちとは違うのよ…。」

「まあ、そうなのか？」

「そうなのよ！もう！」

「ははは！そう怒るなって！」

「もー！」

なんか私の感覚がおかしいことになった。姉様たちのほうが美しいと思うんですけどね。

「みんなー、ご飯よー。手伝ってちょうだい！」

「おお！ステンの料理か！今行く！」

そうそう、あと上姉様も有名になりました。美の女神ではなく料理の女神としてですが。この料理を食べるために来る神様もいるほどです。

巷では『料理のステンノ、鍛冶のエウリユアレ、魔眼のメドゥーサ』と言われているそうです。

「メドゥーサも！ご飯よ！」

「はい！今いきます！」

.....

「…うん、今日も美味しくできたわね。良かったわ。」

「ううむ、やはり美味しいな。ステンノよ、やはりわしの元で料理の神にならぬか？」

「ごめんなさいね、ゼウス。私はここの生活が気に入っているの。だからまだ無理よ。」

「ぬう、そうか…。」

「というかゼウス、それただ単に貴方がステンの料理を独り占めしたいだけでしょ？」

「ぐ、ばれたか。」

「ふふふ。まだ、ね。いつかはそっちに行くことになりそうだから我慢なさい。」

「むう…。」

「…そうだ、エウリユアレよ。」

「なにかしら、アテナ。」

「お前、旅に出てみないか？」

「…なんでさ？」

「正直なところだな、お前はこの島に収まるような存在ではないと思うのだ。それに色々なところでさまざまな物を見ればさらに色々な物を作れるようになると思うのだ。それで私にもっと良い武器を作れ。」

「うん、絶対に最後のだけでしょ。」

「当たり前だろう。」

「開き直ってやがる…。」

「それで、どうなのかしら？」

「ん…、ちよつと考えさせて。」

「良からう。良い返事を期待している。ステンノ、おかわりいいか？」

「はいはい。」

「…旅かー。」

旅…狙われる存在でしかない私たちには危険ではないのでしょうか。

「大丈夫だ。手を抜いてヘラクレスと対等にやりあったとか私やゼウスと対等に話ができるだとか色んな噂が広がっているから少なくともエウリュアレはバカなやつに襲われることはなからうよ。」

「逆に各地で試合をやらされそうな気はしますけどね。」

「ははは、まああいつならなんとかするさ。どちらかというにあいつが気にするのはお前たち姉妹のことだろうな。」

「やっぱりそうですか？」

「ああ。あいつは優しいからな。」

「…ですね。まあ…すこし話し合ってみます。私としては下姉様のやりたいようにやっ
てほしいですし。」

「私もあいつにはもつと強くなつてほしいからな。出来るならばしてほしいのだが
なあ。」

旅ですかー。

→ここまでメドゥーサ

←ここからエウリュアレ

んー、旅かー。

いつかは行きたいとは思っていたけどなあ。

…まあステンノもある程度は自衛出来るだろうし大丈夫かな？

そういうえば最近服がきつくなってきた。おかしいなあ、私は成長しないはずだけだなあ。

そこでゼウスに聞いてみたら、『祝福ついでに成長するようにしておいたぞ！だってあれじやろ、成長したらメドゥーサのようにボンキュッボンになるんじやろ!? あ、もちろんいい具合のところまで止まるから安心すると良い！』って言われた。思わず殴ってしまった私は悪くないと思う。というかどちらにせよ黒髭に狙われるからあまり変わらないような…。

というか私メドゥーサと瓜二つになっちゃうのかー。あれ、でもそのあとゴルゴーンみたいになるんじやないか？ステイナイトメドゥーサ位で止まってくれると嬉しい

なー。

…取り敢えず旅は二人が反対しなかったら出ようかな？

ただその前に船はたっぷり作っておかないといけないわね。確実に作る場所がないし。

ふふふ…、目指せ旭日、紺碧、高杉三艦隊！いえあ！

あ、でもその前にあれだ、本気で武器防具一式作ろうかな。

という訳でイクゾー！

デッデッデデデデ

カーン

.....

という訳で完成したものがこちらです。

本気で作った物は色々とヤバイものなので私以外は使えないようになってます。ただまあこれに関しては何い扱いみたいだから解呪の上手い人がいたら使えるようになってしまいかも知れないのはすこし怖い。できうる限りのことはしたけど。…まああれか、出さなきゃいいか。

今回作ったのは剣、槍、アサルトライフル、刀、服、盾、杖の7つ。ちよつとやり過ぎたような気もするけど気にはいけないかな？ま、いつか。さあ、説明いくわよ。まずは剣。

形はエクスカリバーを模した物で、もちろんエクスカリバーみたいなこともできる。つまりブツパ！では対城宝具かって？残念、これは対人宝具なのです！

真名解放をすると一度ビームをぶっぱなした後に魔力が刀身に収束、その状態で斬ると：まあ恐ろしい威力が出るわけだ。これを説明するしたらホースの例えが良いのかな？通常のビームがホースの先を潰したあれならこれはウォーターカッターってところかな？まあつまり：対城宝具の威力の対人宝具ってところかな。騎士王サマが個人に向けてエクスカリバーぶっぱなすようなもの。あ、もちろん収束後のフェイントビームもできるよ！

次は槍。

これはあんまり特殊なことはないかな。形はトライデント：にしたかったけどポセイドンに悪いのでドラクエ9とかの『きしんのまそう』みたいにした。ただ：ゲイボルグみたいに必中にするのもつまらないので因果逆転の呪いをちよつと使ってみた。内容は、『当たったから死んだ』ではなく『死んだから当たった』みたいな感じ。逆に言えば死ななければ当たらない。当たらないかどうかの判定は幸運値で計算するみたい。

TRPGとかでいうラックだね。一応同じかたちのものをもう一本作ってあって、それは8分の1で即死って感じ。

アサルトライフルは…まあ普通かな？形はM4カービンまんま。ちよつと弾頭がホーミングするのと神秘特効なくらい。発射レートは毎分2000発程度。普通。魔力を通すとちよつと高火力なビームが出る程度でしかない。サブウェポンかなあ…。

刀は…もつと普通。今回作ったなかでは一番普通だと思う。だってビーム出ないし。ただ、なぜかこれを持っていると縮地の性能が上がるのと、あとどうも勝手に対魔の力が着いた程度。弱い。まあ刀好きだから使うだけだね！

次は…服ね。服装は今までと同じだけど、これは私の体が成長するとそれに合わせて合ったサイズになるようになってるわ。あとある程度の攻撃は完全に遮断、遮断しきれなくても軽減できる！そして自己修復するというおまけ付き！すっぽんぽんになっても三秒で全て戻る！しかも水洗い可！まあビームが出ないので普通かな？

あとおまけでコート。フード付で気配遮断C程度の能力が得られる優れもの。上の服とは絶望的に合わないのがネック。

あと盾。形はハイラルの盾で、これはロー・アイアスの発想を下にして作った。十枚の圧縮アダマントイト板を重ねたものでおそらくこれを斬るのは不可能に近いと思う。

あー、アマダントイトがなにかって？まあ…硬い鉱石？その程度よ。

そして最後は杖。

さて杖というと魔力弾を撃つための武器だったりするわけだけど…私が作るのだからもちろんそんなものな訳がない。

皆は知っているだろうか、とある仮面ライダーの武器を。そう、リボルケインである。

あれは剣ではなく杖なのだ。本編ではキングストーン等の無限のエネルギーを相手に送り込んで爆発させるというえげつない武器だったが、そんな無限のエネルギー源なんてないので魔力を増幅しまくってなんとかする。

結果としてまじでリボルケイン染みたものになった。わるた。

ロマンもあるので相手を殺すときには使おうかなあ。

…よし、あとは最近できた倉庫魔術の倉庫に突っ込んで、と。

…うん、おっけー。

そんじやいつも通り修行でも…

「…ふむ、君がエウリュアレかね?」

…む?この諏訪部ボイスは…まさか!?

「…抑止の守護者、かしら？」

「…ほう、よくわかったな。」

「ええ…知っているわ。まさか私なんかのところに来るとは思ってもいなかったけど。そんな守護者が動くようなことはしたかしら？」

「ああ。どうやら君の作った武器がどうも抑止力としては看過出来ないもののようにでね。それを生み出す君を實力をもって排除することにしたようだ。」

「…そんなすごいものを作った覚えはないのだけどね。せいぜいビームが出る程度よ？」

「いや、ビームが出るのは十分におかしいと思うのだがね。」

「あら、セイバーはビームを撃つものでしょう？」

「…待て、なぜ『セイバー』という単語が出てくるのだ？まだ聖杯戦争は…」

「…あ、それはー。」

「…なるほど、千里眼、それも未来視持ちか。それならばこの時代にはないものを知っているもおかしくはないな。」

「…流石ね。まあかなり先の未来しか見れないからあんまり役に立たないのだけどね。」

…うん、そういうことにおこう！

「なるほど、たしかに役に立たないな。」

「ええ。さっぱり役に立たないわ。良かったわね、『セイギノミカタ』さん？」

「…訂正しよう。十分に役に立つようだ。特に私のような存在にはな。…君は一体何者なんだね？私のことを視たことがあるようだし、そもそも私の知るエウリユアレはライ…メドウーサに守られる無力な女神だったはずだ。」

「ただのバグよ。本来なら無力だったはずなのに、ただの偶像でしかないはずだったのに『私』が混ざったからこうなった、それだけよ。」

「…よくわからないな。ではなんだね、私は平行世界にまで駆り出されたと？」

「よかったわねー。貴方、魔法を体験しているのよ？」

「魔術使いであった私としてはあまり嬉しくはないな。さて、そろそろ守護者としての仕事をしたいのだが？」

「えー。やだ。あ、はいお茶。」

「…あのだな、君は私に命を狙われていることを理解しているのかね？なぜ当たり前のように私に茶を出しているのかね？」

「んー、なんとなく。というか私はそのうちいなくなるから今動く必要はないんじゃないかな？」

「…これ以上の暴走はやめるんだ、抑止力が泣いているぞ！」

「抑止力…。」

「そもそもだ、君は一体何を作ったんだ!? 乖離剣エアでも動かないような抑止力が動くとは異常だぞ?!」

「思い付くのだと…これかしら?」

かもん、弓!

「それは…弓だな。そもそもどこ私の弓に似ていないか?」

「そりゃあ貴方の弓を見て作ったんだもの。」

「…表面しか解析できないな…流石神造兵器といったところか。というかなんだね、名前が『弓』ってどうなのだ?」

「…だって思い付かなかったんだもの。」

「せめて『無銘』とかだな…。」

「いいじゃない、絶対にこんな名前誰もつけないわよ?」

「たしかにそうなのだがな…。それで、これはどういう物なのだ? 私の解析魔術ではわからないのだが。」

「んー、ただ単に世界を削ることができる程度よ。ほんとそれだけ。」

「…十分におかしいと私は思うのだがな! なんだね世界を削るって! せめて空間を削る程度におさめておけばよかっただろう!?!」

「だってなんかできちゃったんだもの。」

「なんかできたでこんなものを作るな！」

「えー。」

「…ああ、抑止力も諦めたようだ。後日話し合いをしようとのことだ。全く…。」

「やったー。私許されたー。」

「まだ許されてなどいない。」

「えー。」

「はあ…。」

「まあこんど話し合いなんですよ？それじゃあわたしは修行するから、じゃねー！」

「…もう知らん。」

.....

おや、知らない天井。

「()は…一体…?」

「抑止の空間だよ。エウリユアレ。」

「あら、錬鉄の英霊さん。つまり…ここで話し合い？」

「ああ。私はこの場では抑止力と同等の力を持つことができるのでな、抑止力の代理にされたらしい。」

「つまり貴方との話し合いになるわけね。」

「ああ。それでなのだが…まず下手に対界宝具など作らないでくれ。すでに作ってしまった物に関しては黙認するからこれ以上増やさないでくれ。」

「出来ちゃったら？」

「全力で封印をかけてくれ。神造兵器は抑止力の力の及ばないものだから此方ではどうしようもないのだ。」

「…じゃあ対界宝具レベルの威力の対人宝具とかは？」

「…それなら…まあ。結局のところ世界に傷を作るようなものが駄目なのであってだな、個人に対してのものであれば…まあ。」

「わかったわ。」

「次だ。できることなら死後を抑止力に売ってほしい。下手に英霊として出てこられても面倒だからな。」

「嫌よ。」

「…なんですか。」

「抑止力に売るつもりはないわ。だってやりたくないことをやりたいようにできなくなるじゃない。それならいつそ世界の外に放り出されるほうがいいわ。」

「…そうか。まあそこはおいおいでもいいだろう。最後だ。お前は一体何者なのだ？」

「…正直なところ私も解らないわ。おそらく私を作るときにただの人間の魂でも紛れ込んだんじゃないかしら？」

「…そうか…。いくら抑止力でもそこまではわからないから…。いいだろう、そういうことにしておこう。」

「他には何かあるのかしら？」

「いや、今はそれだけだな。では良い夢を。」

「最近ずっと悪夢しか見ていない人にそれを言うのはどうかと思うわ。」

「む、そうか。すまない。ではさらばだ。」

「ええ、またね。」

はあ、ねむ。

第六話 旅人エコーとアルゴナウタイ

いやっふー。

みんな大好き、男セイバー絶対殺す女神、エウリユアレちゃんだよー。

セイギノミカタ襲来のあと、姉妹で会議した結果、旅に出てもいいってことになったので色々と準備して旅に出たわ。

最初の一年は転移魔術を駆使して日本に行つて一人で修行をしていた。なぜ日本か？そりや、TUBAMEやらINOSHISHIとかSHIKAとかは日本にしか居ないからね。特にTUBAME。いやー、あれは確かに斬るのには刀が三本ありますわ。燕返しは習得したよ！そうそう、INOSHISHIも恐ろしい存在だった。やつら地面を凄まじい速度で移動するから地面に足をつけたと勝手に轢かれるっていう鬼畜仕様。結果として空気を踏んで空中をジャンプし続ける技を手に入れました。やつばNHONやべえ。

一年の武者修行のあとギリシアに帰つて来たら…いつも通りだったわ。

それでのんびりと各地を見てまわっていたら、なんかケモミミさんに気に入られまし

た。なんでき。

そう、知る人ぞ知る、子供大好きアタランテさんである。なんか私のことを子供の魔術使いと思っっているみたい。まあ見ていて滑稽なので訂正しないんだけどね！

んでまあ…弓とか走りを半年ほど教えてもらっていました。そして今日に至る。

なに？適当すぎるだろう？まあそんなものでしょ。毎日剣を振り続けるだけの毎日だし。ただ身長とかは成長して少しずつメドゥーサに近づきつつあるよ！ごめんねステノノ！

声も少しずつ低くなつてて…今の私はちよつと背の低くてテンションの高いメドゥーサである。せつかくなので髪型もメドゥーサに近づけて、服装もホロウアタラクシアのメドゥーサの普段着にしてみたよ！もちろん伊達眼鏡もあるよ！

…あれ？私ってエウリュアレだよね…？

…まあ、それでだ。今日もいつも通り走り続けるだけの一日だと思っただけけれど…。

「エコー、イオルコスに行くぞ。」

あ、エコーは私の偽名ね。エウリュアレだとあれだし。

「…えつと、突然どうしたんですか？神様にでもやられましたか？」

「私は純潔を守っている。というか神がそんな節操の無いわけが無いだろう？」

「…いやなにいつてるんですか。やつらはそんなもんですよ？ 私だってゼウスに何度も夜這いかけられましたし、一度アレスに襲われたし。」

「…は？あの軍神にか？」

「はい。」

「…どうしたんだ？」

「逃げました。全力で。」

嘘です。半殺しにしちやいました。いやー、そのときちよーつとイライラしててね…。思わず魔力が滑ってしまいました。ちよつと山が消し飛んじやつたけど仕方無いよネ！

「…そうか。確かにお前の足ならできらるだろうな。」

「それで、なんで突然イオルコスに？」

「ああ、イオルコスのイアソンという男がギリシアの勇者を募っているらしくてな。お前の修行に良いと思うから参加しようとおもう。」

「…まじすか。」

「ああ。よし、準備しろ。行くぞ。」

「うへえ。」

.....
アタランテの足は早い。恐らくギリシアでも一、二を争うだろう。
だが！

INOSHISHIどもとおいかけてこをしていた私は！今や化け物じみた速度を
誇るのだ！はっはー！

というわけで二人して全力で走ってイオルコスに辿り着きました。因みにアタラン
テは普通のフォームの走りですが私は十傑集走りです。

さてイオルコス。いままで軽く俗世から離れた隠居生活状態だったからか人がこん
なに在るって凄く新鮮。

「エコー？なにをしている、行くぞ。」

「あ、はい。」

そろそろ形なき島にも帰ろうかなー。

.....

「お前がイアソンか？」

「ん？ そうだが、なんだお前？」

「アルゴ船に乗船する勇者を集めていると聞いてな。私と弟子の二人の乗船を許可して欲しい。」

「お前ら、名前は？」

「アタランテ、しがない狩人だ。」

「エコー。魔術使いよ。」

「へえ、あのアタランテか。君はいいだろう。ここに來るってことは噂通りの人物なんだろうしね。だけどエコー？ っていったか？ お前は駄目だ。」

「…何故だ？ エコーは十分に実力のある魔術使いだ。」

「簡単な話さ。まだ有名なアキレウスとかならまだしも、無名のガキンチョなんて連れていく気は無いよ。下手に死なれたら僕の栄光に泥がつくしね。」

「…らしいので師匠、私は家でのおんびりと待ってますよ。」

「なにを言うか。そもそもこれに参加するのはお前の修行の一環だ。イアソンよ、どうにかならんのか？」

「駄目だね、と言いたいけどあのアタランテの弟子だしそれなりの実力はあるのかも知れないか。じゃあ、こんなのはどうか？」

「どんなのだ？」

「簡単なことさ。ヘラクレスと戦って、ヘラクレスに五回明確なダメージを与えられたら連れてってやる。どうだ？」

「な、ヘラクレスにだど!?!」

「ああ。今集まつてる面子のなかでは一番ヘラクレスが強いからな。そのヘラクレスとやりあえれば十分な実力があると認めてやる。」

「…もちろん、危険だと判断すれば止めるんだろうな？」

「ああ。だけど死んでも知らないよ？結局その程度だったってことだし？」

「…エコー？」

「帰りませんか？」

「やれ。」

「あつはい。というわけで挑戦します。」

「…なんて軽いノリだ。お前、あの英雄ヘラクレスに挑むんだぞ？」

「んー、まあほら、いっそ胸を借りる位の気持ちで行こうかなーって諦めました。こうなったら絶対師匠おれないし。」

「…お前も大概だな…。わかった、とりあえずヘラクレスと…なにかあつたときのためにアスクレピオスを呼んでおく。すこしの間英雄達と話しておくといいさ。良い経験にはなるだろうからね。」

「有難う御座います。」

「ふん。僕がわざわざ動くんだからそれなりのことはしてみせろ。」

…なんだろう、ツンデレ？男のツンデレとか…需要無いでしょ。うん、無い（断言）。

…さて、どうしようか。ヘラクレスとの再戦とか考えても無かった。

仕方ない、やるか。

にしても、私としては一人会ってみたい人が居るんだよね。

薪の勇者、メレアグレスに！

だってほら、不死ってすごいと思うの。あと神性持ちに対しても効くのか調べたい。

…これは流石に駄目かな？

あとメレアグレスはランサーらしいのでブーメランサーやつてみたい…だめ？あ、はい。

「おい、なにブーツとしてるんだ！準備できたぞ！」

「…はっ！え、はやっ！」

「そりやそうだ。人を集めるだけだからな。ほ、ついてこい。」

「はい。」

.....

「…ふむ、君がエコーか。」

「ええそうよ。お手合わせお願いします。」

「うむ。では始めるとしようか。イアソン、最初の合図は頼むぞ。」

「わかつている。」

さて…それじゃあ神刀・無を帯刀して、と。

「…弓か杖は出さないのか？」

「ええ。それに…」

「？」

「弓兵が弓を使うわけないでしょ！」

「全国の弓使いに謝りたまえ!？」

「始め！」

「拔刀！」

縮地、斬る！

「む!？」

ガキーン！

「飛ばしていくわ！『秘劍つぼ：偽め・燕返がえし』！」

「遅い！ 『射殺す三頭』！」

ガガガキーン！

「ちいっ！ まだまだ！ 『偽・牙突』！」

「くっ！」

ガスッ

「…やるな。」

「そこまでじゃないわ。」

「ならば…此方も少々上げていこう！」

→ ここまでエウリユアレ

← ここからイアソン

…なんだ、これは。

なんであんな小娘がヘラクレスと対等にやりあってるんだ？

「…おい、アタランテ、お前の弟子って…」

「…いや、知らん。私はあんなことができるとは知らんぞ。」

「はあ？」

「私が教えたのは弓と走りだけだ。そもそもただの子供の魔術使いだと思っていたからな。」

「…じゃあ、あれは一体なんなんだよ？」

「…わからん。」

「自分の弟子なのか？」

「弟子でもわからん。」

「…そうか。ただそれでもあれはおかしい。あんな小娘があのかいへラクレスとやりあえるわけがない！」

「私もそう思っていた。それでも経験になるか、と思っていたのだが…。」

『ヒントミツルギスタイル！クズリユウセーン！』

『迎撃する！射殺す百頭！』

ガァン！

「…ナインライブズってヘラクレスの奥義の一つだったと思うんだが…。」

「…打ち合っているな。」

「何者なんだよあいつ…。」

「…あ、仕切り直したな。」

『行くぞ…！拔刀、突撃…！』

『来るが良い！』

『斬れ、進め、斬れ、進めえ！』

『おおおおおお！』

『ここが！新、撰！組だあああああ！』

ドカアアアアン！

『ぐあああ！？』

「…流星に剣からビームが出るのはわからないよな。というかヘラクレス吹っ飛んだぞ。」

「…ヘラクレスにさえわからないんだつたら私などにはわからないな。というか今のでやつと一撃か。」

「…五回は多かつたか？」

「まだまだ続きそうだな。」

『まだまだ行くわよ！ 一步飛劍、二步無間、三步絶刀！無明、三段突き！』
『ぐあああああああああ！』

「…五撃入ったな。」

「まじか。そこまで！」

「…むう、負けてしまったか。」

「たまたまよ。それに貴方本気じゃないじゃない。」

「…それは…いや、今は言うまい。まあ、これで合格だな、イアソン？」

「…ああ。エコーのアルゴ船への乗船を認めてやる。せいぜい僕のために働くんだな。」

「ええ。あまり期待はしないでね。あ、ちよつとヘラクレスと二人で話してきても良いかしら？」

「知るか。それは僕に聞くことじゃ無いだろ。」

「良いかしら？ヘラクレス。」

「ああ。こちらも話をしたかと思っていたところだ。」

「…エコー、話が終わったら私と少しお話しようか。」

「うへ、はい。」

「そうだな…取り敢えず街のカフェにでも行こう。あそこなら人も少ない。」

「わかったわ。」

タツタツタツタツ…。

「…ふと思ったんだけどさ、」

「なんだ？」

「もうあいつらだけで良いんじゃないかな？」

「…私もそうおもう。」

→…ここまでイアソン

←…ここからヘラクレス

「それだ。…エコー、君はエウリュアレだな？」

「…流石ね。すぐにばれちゃったわ。」

「全く。お前はなにをしているんだ？偽名なんて名乗って。」

「旅よ。アテナに勧められてね。」

「…そうか。」

「…できれば話を合わせてくれるとありがたいわ。」

「…そうか。にしてもあのときよりも…成長しているな。色々。」

「どこを見て言っているのかしら？」

「ははははは。」

「もう。貴方は相変わらずみたいね。」

「ああ。本当にどうにかして欲しいものだよ。」

「わたしもアレスに襲われたわ。ほんと自分勝手よね。」

「なに、アレスにか。それで、どうしたのだ？」

「もちろん半殺しにしたわ。私はすでに純潔の誓いを立てているからね。ゼウスに。」

「…流石だな。」

「ふふ。」

「…しかし、まさか負けるとはなあ…。」

「何言ってるのよ。貴方はさっぱり本領を發揮していないじゃない。」

「それはお前もだろう。あの弓を見せられたらさっきの戦いなぞおちよくられているようにしか思えんよ。」

「あー、あれは例外中の例外だからね？あのレベルはあんまりないよ。」

「あんまりということは少なくとも二つはあるのか。」

「あう。」

「全く。まあ…今回はお前に話を合わせてやろう。頑張れよ。」

「ありがとう。」

「かわりに今度ステンノの飯を頼む。あれは旨すぎた。」

「ええ、わかつたわ。よし、それじゃ戻りましょうか？」

「その前になにか食べよう。腹が減った。」

「…確かにそうね。パンでも食べましょうか。」

…やはり、ただの人間にしか見えんなあ…。いや、色々とおかしいのだが。

まあ、良い機会だ。今回の旅で見極めるとしよう。

人なのか、あくまでも神でしかないのかを。

幕間の物語

外からエウを見てみよう

・メドウーサ

下姉様ですか？んー、あの人はなんとというかよくわかりません。美の女神を名乗っているのに修行してますし、美の女神を名乗っているのに物を作りまくってますし。

ただ、とても優しくしてすこし子供っぽい可愛い姉ですね。

昔長剣と短剣をもちたことがあったのですが、とても恥じらいながら「これからも頑張りなさいよ。」って言いながら渡してきたんですよ。

ええ、思い出しただけでも鼻血が出そうです。

…だけど、ビーム狂いなのはどうにかして欲しいですね。なんで剣からビームが出るんですか。そう思いませんか？え、セイバーなら普通？…世界って広いんですね。

・ステンノ

エウリユアレ？ええ、良い妹よ。ただ順当に成長しているのは気に入らないわね。なんで…なんで胸がどんどん大きくなっているのよ。わたしと同じ姿なのに。かなり悲

しい気持ちになるわ。∴冗談よ。冗談だつてば！もう！

エウリユアレは優しい子よ。受けた恩にはしつかりと返すし、恩が無くとも助けるし。というかお人好しね。ただ悪人だとかそういう類いにはさっぱり容赦しないわね。今までに何回かメドゥーサをあの手この手で捕らえて犯そうとしたやつらがいたのだけれど、全員消滅したわ。というかそんなときくらいよ、エウリユアレの本気が見れるのは。

それですつと気になっていたのだけれど∴この天井つてなに？へえ、揚げ物なの。え、作り方を教えてくれる？ぜひ！ええ、ありがとう！

・ゼウス

む、エウリユアレか？ううむ、取り敢えずオリュンポスの最高神として回答すると、神であり人である存在、だろうか。あいつはなんとというか∴すでに人間に近い。なんとかわしの祝福で神の身に止めておるが、ちよつとした切つ掛けで完全な人間になつてしまうことも有り得るな。それほどにエウリユアレはおかしな存在なのだよ。

なに？わし個人として？∴エウリユアレはだな、まだ男性経験がないのだよ。そしてだ、美の女神故恐ろしく男に刺さる外見・声をしとるわけだよ。しかも結構無后だ。

二つをもとに考えるとだな∴やばくね？これはもうさ、男として襲わずにはいられない

いだろう？ けども本人が強いから誰も手を出せていないのだが。この前アレスのやつが挑戦して半殺しにされとつたしな。

まあなんだ、結論から言うとうエウリュアレマジ女神。

・ヘラクレス

なに、エウリュアレか？

ううむ、そうだな…底の見えぬ戦士だな。あいつの本気を想像することができない。事実俺と戦った時はどちらも手を抜いていたからな。

なにより今でも十分に強いのに、自分自身を雑魚だと評価しているのもあるだろうな。故に鍛練を怠らん。恐ろしい相手だよ。それに手数もいくらでもあるみたいだからな。

まあ…だからこそ越えたいと思うのだがな。いつか本気のあいつと戦ってみたいものだよ。

む、イアソンが呼んでいるようだ。すまんな。

・アテナ

エウリュアレ？…あいつはおかしいな。

なぜ数十分でアレスの攻撃に耐えるような盾を作り出せるんだ？いや確かに冗談半分で一刻以内に仕上げろとは言ったが…。

まああいつはおかしいよ。ヘパイストスも十分におかしいが、あいつもあいつで変な方向におかしい。

それにあれだ、戦闘のセンスも十分にあるな。戦女神のわたしとやりあえるのだからかなりのものだろうな。

だがなんでもビームが出るようにするのはどうかと思うのだ。そう思うだろう？なに？ビームはロマンがあるから良いんじゃないか？神っぽい？…そうなのか？ならいいか。

・ヘパイストス

む？エウリュアレか？あやつは面白いやつじゃよ。

まず発想が既にこの時代に無い！あやつは明らかに未来を見とる。恐らく千里眼でもあるのじゃろうな。叩き斬るのが主流じゃというのに刀を研いで研いで、刃の鋭さで切るじゃと。わけがわからん。

ただなんというかあの刀はまるで芸術品じゃった。わしには作れぬが。あれはわしにはつらい。

にしてもおぬし、その腰につけてる双剣はなんなのかね？見せてはくれぬか？だめ？むう、ならば仕方無い。

・ヘステイア

エウリュアレ？んー、良い子だよ！うん！

というかあの子、やけに私のことを信用してるんだけどなにかしたけっけ？わかんないや！

にしてもあれだね、あの子やばいね。なにあの剣。なんでビームが出るんだい？なんで矢がホーミングするんだい？というか当たり前のように島が何度も消し飛んでるんだけどなんであの姉妹はのほほんとしてるんだい!?

…はは、まあいいや。うん、エウリュアレは良い子だよ。ちよつとずれてる気もするけどね。

・エミヤ

なんだね。は？エウリュアレ？…それはどっちのエウリュアレだね。なに、でかいほうのエウリュアレ？ああ…あいつか…。

彼女は…規格外だな。うむ、その一言に尽きるな。ヘラクレスとやりあうような化け

物だぞ。私かね？いや確かに狂化したヘラクレスとはやりあつたが6回しか殺せなかつたからな。だが奴は、理性のあるバリバリ現役のヘラクレスと手を抜いて戦つて辛勝に持ち込めるほどだぞ。わかつたか？あれはおかしいんだ。あいつを目指そうとはするな。近付く前に確実に潰れるからな。あいつの背中を直指すぐらいならまだ私の背中の方がましだろうよ。なに？私か？…あれは目指すべきではない。だつて神だからな。

・アタランテ

…エコーか？あいつは…なんなんだ？すまない、あいつはなんなんだ？私はずっとただのお人好しな子供の魔術使いだと思つていたのだが…。

ああ、すまない。ちよつと頭がいたい。すまない。

・イアソン

は？エコー？

ああ…うん、なにあれ。あれ本当に人間か？

だつてさ、見た目まだ子供だぜ？なのにあのヘラクレスとやりあうんだぜ？ふざけるだろ。

ろ？ああ、お前さんなら■ ■ ■に、妹さんは…ああ、そつか、まだ再会できてないんだっけ？んじや、俺が叶えてやろうか？いや？ならしやーねえ。ま、■ ■ ■が帰ってきたら俺は消えるだけだからな。それまでのんびりとしてるさ。

じやな、坊主。強く生きろよー。

第七話 いざゴルキス

——アルゴナウタイ。アルゴノーツとかアルゴナイタイなんて言われることもあ
るって聞いた気がしなくもないような気がする（曖昧）。

ギリシア神話の英雄がイアソンの呼び掛けに応じてたくさん集まった、まあなんだ、
スーパ―戦隊の夏の映画みたいなものだ。

この旅の目的はイアソンを王にするためにゴルキスから黄金の羊の毛皮をもらい受
けることだ。なんだけど…

…いやあ、すごいね。

なんでみんはずーずーと酒飲んでんの？

あ、私は飲んでないわよ。身長が170cmを越えるまでは飲まないって決めてるか
ら。

たださ、吐くとかやめてよ…。

しかもさ、師匠もその男どもの中で普通に酒飲んでるんですよ。ようやるわ。

というわけで私はのんびりと舵取りのティーピユスさんと話すために上にきたとい

うわけです。

「なんだ、嬢ちゃん。こんなところに来てもつまらねえぞ?」

「私には下の方が辛いわ。それに操船の技術とかを見れるかもしれないし。」

「なんだ、嬢ちゃん船に興味あんのか?」

「ええ。海はロマンがあるもの。それに…落ち着くしね。」

「ははは! ロマンがあるときたか! だが…」

ザッバアアアアン

「あれ見ても言えるかい?」

ガオオオオオオオオ

「…は? 海獣?」

「そう、海獣だ。岸から追い風で1日位の距離まで来ると出てくる。しかもあれを倒すには神の加護のあるやつじゃなきゃいけないって言うおまけ付きだ。」

「うわあ…」

「だから神に嫌われてるヘラクレスにや倒せねーしそもそも剣やら矢でちまちまやつて倒せるよーなものでもない。詰みかねえ、こりや。」

「…はあ。ティーピユスさん、私がいつてくるわ。どうせ下のやつらじゃ無理だろう

し。」

「そもそも気づいてんのかねえ？ま、ちやちやつと頼むぜ、エコーさんよ？」

「やめてちょうだい。とうか絶対に私のことばらさないですよ？」

「たりめーよ。自分の信仰する神様を陥れる信者なんか何処にいるよ？」

「たまにいるから困るのよね…。ま、貴方はそんな人ではないでしょうけど。」

「ははは！ほら、頼むぜ！」

「わかつてるわよ。艦首はあいつに向けといてね。」

「あいあいさー！」

「私は女よ！もう！」

「ははははははは！」

…おや、下のやつらも流石に気づいたか。

「うおおおお!!?なんじゃありゃ!?!」

「化け物か！」

「ヘラクレス！」

「わかつている！くられ、『射殺す百頭』！」

グオオオオオオ!

「な、効いていないだど!？」

「残念だけど神の加護か神性でもないど攻撃は通らないってティーピユスさんが言つてたわよ。」

「はあ!?!じゃあどうすんだよ!」

「…はあ。逝つてくるわよ。いちおうアテナ神の加護あるし。」

「…できるのか?」

「頑張れば。」

「…わかつた、頼む。」

「はいはい。」

礼装展開、エウリュアレの服に。

倉庫魔術起動、『光の剣』召喚。

そして船首へ立つ。パパスもやってたからね、やらなきやならんでしよう。ゲマ許すまじ。

「いくぞ海獣。『魔の力よ、我が思う形を取りて、全ての敵を討ち滅ぼせ!』」

『ソード・オブ・アウローラ光の剣：限定解放』!」

ドガアアアアアアアン!

「…は?なんだよあれ。」

「…恐ろしいな、あの光は全て純粋な魔力だ。」

「はあ!?あれが全部純粋な魔力!」

「…ああ。」

「お、おかしいだろ!魔力が可視光を放つだって!?!どれだけ凝縮して放出すればあんなのできるんだよ!というかレーザーなんて普通は魔力を使ってエネルギーを産み出してそれを指向性を持たせて打ち出すものだろ!なのになんだよあれ!」

「…イアソン。」

「なんだよヘラクレレス!」

「…俺は魔術はよくわからん。」

「…お、おう。」

説明ありがとう、イアソン。

よいしょつと、礼装封印、普段の服につと。

うん、やつぱりズボンの方が良いわ…。ミニスカートだとぱんつみえちゃう。

「これでいいかしら、イアソン？」

「え？あ、ああ。よくやった、エコー。それであれば一体…？」

「あー、あれ？この剣の力よ。」

「…なんだよ、この剣？」

「私が昔アテナ神からいただいた剣よ。封印を解いた上で魔力を通すとあんな感じになるわ。」

「…ははは、やつぱり神の武器なのか。」

「ええ。もちろんある程度魔術が使えるなら貴方でも使えるわよ？」

「…まじで？」

「ええ。」

「…欲しいかも。」

「アテナ神と相談しておくわ。」

「…剣術、頑張ってみるかなあ…。」

「よっしやあ！エコーちゃんの手獣退治祝いに酒盛りだあ！」

「「おおおおおおー！」」

「…は？」

「…あー、ドンマイ、エコー。」

「…逃げよ。」

ガシッ

「びっ!？」

「…諦めるんだな。」

「ちよっと、ヘラクレス！離してよ！嫌よ！あんな何処に行くのは嫌よ！私ティーピュ
スさんのところに行くから！ちよ、服が伸びるから！やめて、はーなーしーてー！」

「あっはっはっはっは！諦めな嬢ちゃん！」

「いーやー！」

.....

ああ、ひどい目にあつた。

酒は飲まないっていつてるのに…。もういや。

「あつはつは！嬢ちゃん、ひどい顔だな！」

「うっさい。酒なんて飲んだことないのよ……。」

「へえ、珍しいな。がきんちよでも飲んでるやつは多いって言うのに。」

「だつて……酔つてなんかやらかしても嫌だし。」

「ははは！まあ嬢ちゃんの立場じゃやらかすわけにもいかないしな！」

「とうか飲んでいたら今頃ゼウスの愛人にでもなつてたわよ……。」

「嬢ちゃんも大変だな！」

「……それで、船はどんな感じかしら？」

「んー、とくになにもないな！」

「あら、なら順調に行けそうかしら？」

「ああ。少なくともあと1日の間は大丈夫だろうな。」

「へえ、なんでそう思うのかしら？」

「なに、船乗りはそういうことが何となくわかるのさ。」

「……船乗りつてすごいのね。」

「ははは！すごいのさ！」

.....

”島が見えたぞ”

誰かが言つたその言葉に皆は沸き立つた。

…まあ、目的地じゃないんですけどねー。

降り立つた場所は『女だけの島』、レームノス島。男どもはまーハッスルしちやつてるね。すごいね。

私は船でのんびり…してません。のんびりと島を探索しています。ついでで船作つてる。

それでわかったこと。一つ、どうもこの島の人間はアフロディーテを信仰していない。二つ、男は殺されて全滅している。骨を見つけたが見事に心臓を一突きだった。他にも子供のものと思われる骨もあった。

そして三つ。やつらはイアソン達をそのまま住まわせようとしていること。これはやつらがこそこそと相談しているのを聞いてしまっただけだ。特に特殊なことはしていない。してませんよ？

それでどうにか脱出したいのだけれど…どうもチャームかそういう類いの魔術が掛けられているみたいでみんな聞く耳を持たない。魔術が基本的に効かない私には効かないみたいだけれど、他は壊滅している。だって師匠まで…女同士でやつてるしさ。ど

うなんだ。いや、純潔ってなんだよ。

ティーピユスさんは船に残ってもらっているからなんとかなっているが、他は全滅だ。んー、どうしようか。

「イアソン。」

「あー？なんだよ。」

「あなた、一体何が目的でここに来たのかしら？」

「食べものの補給だろ？だけでももうどうでも良いんだよ。」

「…はあ。イアソン、歯ア食いしばれい！」

「は？」

バチーン

「いったあ!?!何しやがるエコー!！」

「あんたこそなにやってんのよ!あんたはイオルコス王になるんじゃないの!?!こんなところでいつまでも女とペちペちやってるのか!！」

「…は?なにいつてんだ、エコー?まだそんなに時間はたつてないだろ。」

「もう一週間も経ったわよ!私なんか暇すぎて戦艦を二隻も作っちゃったわよ!！」

「…はあ!?!一週間!?!」

「全く!気付いたならさっさと準備して!他のバカ共も目を覚まさせて!！」

「がああああああ!?!」

「それじゃさよなら!二度と来ないわ!」

.....

えーつと、そのあとは特に重大な事はなかったかな。ヘラクレスが置いていかれたりとかはあったけど。正直あの島のインパクトに勝るものはなかった。女つて怖い。

…あ、ヘラクレスはちゃんと回収したよ。当たり前だね。反対した二人?…知らない方がいいわ。

というわけで着きましたはコルキス。『裏切りの魔女』メデイアの出身地である。まあ、まだリリイなんだけどネ!

早速イアソンと一緒に数人で国王に謁見したわけです。

「…して、イオルコスの王子が何用かね。」

「はい、此度は貴国の宝である『黄金の羊の毛皮』借り受けたく参上した次第でございます。」

「ほう、黄金の羊の毛皮をかね。何故だ?」

「私が王になるためであります。」

「ふむ…それで貴君が王になるとわしやコルキスの国に何の利益があるのかね？」

「ありますとも！私が王になったのちにはコルキスとの国交を開き、交易を行えるようにします。」

「交易だと？だがかなり距離があるのではないのか？」

「その辺りも調査はしますが、今確認してある情報だけでも天候がどうであろうとも一月ほどの航海でたどり着けるようであります。ですので食料はある程度限られてはしまいますが他の…例えば武器や道具などはいくらでも運べるでしょう。そして何より、人の交流が生まれます。」

「…なるほどな。だが海に居る海獣はどうするのかね？あれが居る限り安定した航海は難しいと思うが。」

「それに関してはある程度は退治します。ですが完全な駆除となるとポセイドンの許可がないと厳しいかと。」

…ん？なんか嫌な予感が…？

「…まで、あの化け物を退治できるのかね!？」

「はい！我々アルゴナウタイの一人であるこのエコーができるのであります！」

「…あー、はい、どうも。ただの魔術使いのエコーです。」

「…そんな…子供にかね？」

「確かに見た目は子供ですがあのヘラクレスと対等どころか辛勝に持ち込めるほどの戦士であり、また海獣を一撃で消し飛ばすほどの魔術使いであるのです！」

「いやー、そんなに強くないんですけどね。」

「少々自己評価が低いのがあれですが。」

「…なるほど、凄いのだな。だが…如何にして海獣を全て倒すのかね？」

「…はあ。えーつと、その辺りは私に任せていただけじゃないでしょうか。」

「…よからう。イアソンよ、黄金の羊の毛皮、一時貴君に貸し出そう。ただし王になった後に貴君の手で返しに来るのだぞ。良いな？」

「はい！ありがとうございます！」

「だが、黄金の羊の毛皮は我が国の宝ゆえ多くの防御を施しておる。手に入れるにはかなり大変な旅になると思うが、大丈夫か？」

「勿論ですとも！我々はギリシアの代表のようなものですからな！」

…主にヘラクレスとかヘラクレスとかヘラクレスとかかな？

…む、なんか嫌な予感がする。

索敵魔術起動。

コーンコーンコーン

…ソナーじゃないよ？

「…？エコーさん、なぜ魔術を使っておられるのですか？」
「なに、どういふことだねメディアア？」

ポーン

みーつけ。

「その弓兵！何をするつもり！」

「チイ！」

パシユ

「きや！」

「な、メディアア!？」

「今のはなんだ、エコー!？」

「…神の類いね。」

「大丈夫か、メディアア!？」

「え、ええ。大丈夫です、お父様。」

「そうか…よかった。」

「大丈夫ですか？」

「あつ…」

…そういうえばメディアアってエロースだかの矢でイアソンに恋（強制）したんだっけ？

あつ（察し）

「…はい、大丈夫です、イアソン様。」

「…ん？ああ、そうか。ならよかった。」

「…そういうえば、いつ黄金の羊の毛皮を取りに出るのかね？」

「明日にでも出ようかと考えております。」

「了解した。こちらからも支援はさせてもらおう。」

「…あ、あの！」

「ん？なんででしょうか？」

「私も連れていっていただけませんか！」

「…は？」

「まだ大きくはないですけど魔術なら使えます！」

「な、メディアア!?何を言っているんだ！」

「お父様！行かせてください！お願いです！」

「…どう思う、ヘラクレス、エコー？」

「俺としては反対だな。いくら魔術ができようともあの体つきではついてこれまい。」

「エコーは？」

「…んー、なんとも言えないわね。確かに体力面ではヘラクレスの言う通りだけど魔術

の能力は未知数だし、それに現地の人間、それも王族となれば色々とスムーズにはいか
かも知れないわね。」

「なるほど…。」

「お父様！あの防御は私の魔術で生み出したものが大半です！ですから私がついていけ
ばイアソン様の旅もすんなりと思行けると思うのです！ですから！」

「む、むう…。イアソンよ！貴君はどう思う！」

「その…私としては来ていただけると旅は楽になるとは思います。ですが、旅に着いて
これなのか、どの程度魔術を使えるのかによるかと。」

「なるほど…むう、少なくとも魔術の腕は確かだ。」

「多分魔術に関しては私より上よ。まあ方向性が完全に違うからなんとも言えないけ
ど。」

「…だそうだ。」

「お父様！」

「…わかった。ただし、護衛をしつかりと頼むぞ。」

「わかつておりますとも。」

「よろしくお願ひしますね、イアソン様！」

「お、おう。」

「…そういえば海獣の駆除はどうするのだ？」

「私がやっておくわ。そっちは毛皮を取ってきて。それじゃ私はさっさとやってくるわ。範囲はどれくらいやっておけば良いのかしら？」

「…そうだな、とりあえずできる限り。無理はするなよ。」

「わかってるわよ。じゃね。」

さて、ここからは…

殺戮の時間だ、なんてね。

…そうだ、海獣の骨で槍でも作ってみようかしら。

まあ、いつか。よーし、やるぞー。海で私に勝てると思うなよー！

『我が祖国の英霊達よ、我が呼び掛けに答え、敵を撃滅せよ！』『旭の旗の元に！』

ザツバアアアアン！

ふはははははは！戦艦三隻、正規空母一隻、駆逐艦二十隻！さらに潜水艦九隻！如何なる海獣であろうとも消し飛ばしてくれよう！

行くぞ海獣！残機の貯蔵は十分か！

→ここまでエウリュアレ

←ここからヘラクレス

…なんかエウリュアレが船を何隻も召喚していたような気がするが気のせいだろう。ああ、そうに違いない。

しかし…イアソンはよくやっているものだ。ここまで試練の連続であつたらうに一人の脱落者も出さずにここまで来た。流石と言うしかないだろう。それに指示も理にかなつたものが多いから動く我々としては嬉しいものだ。

…意外とイアソンは王などよりも前線指揮官なんかの方が合っているのではないか？

…まあ、本人の望むものの方が良いか。

「…なあ、ヘラクレス。」

「なんだイアソン。」

「なんかアタランテがすごい落ち込んでるんだがなんでかわかるか？」

「…わからん。女の心はわからんからな。」

「ですよねえ。しゃーない。アタランテ！どうしたんだ！」

「…ああ、イアソンか。いや、実はな…弟子が私なんかより果てしなく強いことを知って落ち込んでいるだけなのだ。」

「…あー。なるほど。だけど弓と足はあんたの方が上なんだろう？」

「…それがだな、魔術込みで考えるとどうあがいてもあいつの方が上なのだ。」

「…は？」

「あいつ曰く、『魔術を使っているのなら撃てば当たる』だそうだ。実際に適当にばらまいた矢が全て猪に当たったりしたしな…。」

「なんじゃそりゃ。」

「…『これも魔術のちよつとした応用よ。』とか言っていた。」

「…魔術すげえな。」

「…私は悲しい…。」

「なんだ、うん、ドンマイ。」

タツタツタツタツ…

「ししよー！」

「…なんだ？」

「なんか竖琴をサルベージしたのであげます！それじゃ！」

タツタツタツタツ…

「なんだ今のは。」

「さあ。」

「…私は悲しい…。」

ポロロロン

第八話 旅の終わり

—魔女メディア。

神代の魔術師である彼女は当時でもトップクラスの魔術師であった。だがその人生は不運であった。

ヘラの策略によって半ば強制的にイアソンに恋をし、国からの追っ手を止めて彼らを逃がすために実の、それも幼い弟をナイフでバラバラにして海へと捨てた。これによりイアソンらは逃れることができたが、彼らの心はメディアから離れていた。

結果としてイアソンは他の女性と結婚し、それに対し憎しみを覚えたメディアはイアソンの親族を皆殺しにし、何処かへと去っていったという。

…まあなんだ、重度のヤンデレに近いものなんだね。それも独占したいし他のやつならんてどうでもいいって考えの。

しかし、これは前世での話である。今私が居る後世はまた違うのだ。なにがって？…イアソンの性格とか？

—なんとというかこの世界のイアソンは原典よりもかなり丸いというか。まあ優しいの

だ。気遣いもできるいい子なんですよ。

それにメディアが恋をした結果、

バカツプルみたいなことになったそうよ。

どうも毛皮を取りに行く途中で色々あつたらしく二人の間がすごい縮まっているんだよ。いや何があつたんだよ。

「…ヘラクレス、なにあれ。」

「…イオルコスの王子とコルキスの王女だが？」

「そういうことじゃなくて。なんであいつらずーずーと手を繋いでんの？バカツプルなの？」

「…俺にもなぜあんなつたのかはわからん。というか誰にもわからないだろうな。あいつらを除いて。」

「あれ見ててなんかすごいイライラするんだけど。しかもなんか既視感を覚えるというかなんというか。どうしてあんなつた！」

「…毛皮を取りに行く途中で二人が皆からはぐれてしまつてな、帰ってきたらあの調子だ。…にしてもお前はなぜまた神性が高まつているのだ？俺たちが旅に出る前よりも増えているような気がするんだが。」

「…一応これでも封印をして下げているのだけど…大体E相当には。」

「海獣を倒しに行く前がEなら今はDってところだな。なにがあつた？」

「…ちよつとポセイドンと殴りあいをしていたわ。」

「…ちよつとですまないだろうそれは。」

「あはは…そのせいで海の生物たちに恐れられちゃつたみたいだね。海辺に行くときから供物として飛び出してくる魚が居る始末よ…。」

「…というかよく生きていたな。ポセイドンはゼウスと同格と言つても過言ではないだろうに。」

「あはははは…いや、なんか新しく作つたものとか修得した技術とかを使つてたらすんなりと。」

「…そうか。」

「…あれ？イアソンとメデシアどこ行つた？」

「む？おや、見当たらんな。」

「…イアソンとメデシアなら城へ行つたぞ。」

ポロローン

「あ、師匠。ありがとうございます。」

「なに、これぐらいどうということはないさ。ではな。」

ポロローン

「…師匠どうしたの？」

「…端的に表すなら『絶望した！弟子よりも弱い自分に絶望した！』ってところだな。」

「…なるほど。うん、ごめんね師匠！」

「それで、どうする？イアソンのところにも向かうか？」

「そうね。なんか嫌な予感がするし。」

「お前の予感は当たるから困るのだが…。」

「私の予感は当たる（キリッ）」

「俺としては直前になってからしかわからない直感よりも占いとかが良いのだが。というかそのエイは何処から出した。」

「倉庫から。よし、お前の名前はエビルダイバーだ。」

これは最期はアルトリア辺りを宝具の一撃から庇って死ななきやならんですな。最期の言葉は『私の予感が…やっと外れる…』で。」

…ドラグレッダー作れるかなあ。

「…エコー、いくぞ。」

タツタツタツタツ…

「あ、待ってよー！」

……

「…むう、普通に歩くとやはり遠いな。」

「まあ街だしねえ。だからといって走るわけにもいかないしね。」

「お前は歩きでも恐ろしい速度が出るだろうに。」

「ああ、縮地のこと？あれをやってまで急ぎたくはないかな。それに下手に技術を盗まれても嫌だし。」

「なるほどな。ん？」

『どけどけどけー！』

『どいてくださーい！』

タタタタタタタタタ

「ありやイアソンとメディアか？」

「だねえ。」

「あ、ヘラクレス！早く逃げろ！捕まるぞ！」

「はあ…。イアソンよ、何をしたのだ。」

「メディアを嫁にくださって言ったらキレた。」

「…ばかなのか。」

「ばかね。」

「うっさい！早く船で逃げるぞ！」

「全く。あ、私は先に船に行っておくわね。すぐ出れるようにしておくから。じゃ、頑張ってるね。」

パシユン

縮地縮地。

スタツ

「ティーピユス！すぐ船を出せるようにしといて！とんずらよ！」

「へいへいほー。」

ダダダダダ

「着いた！ティーピユス！船を出せ！逃げるぞ！」

「あいよ！出航！」

「りようげんせんしんびそー。」

「なんだその呪文。」

「知らなくていいわ。んで、なんでメディアと…子供？まで連れてきたのかしら？」

「そりや結婚するためだよ？」

「はい！愛の逃避行なんてロマンチックです！」

「…これは戦争不可避やでえ…。」

「…俺もそう思う。」

「あつはつはつはつは！それで？この鈍亀舟じゃああいつらに追い付かれてしまうぜ？」

「それならば私にお任せください。」

「足止めできるのか？」

「はい！」

「よし、頼む！」

「わかりました！」

.....

「…それで？船尾でなにをするつもりかしら？まさかその子供をバラバラにしてばらまくなんて言わないでしょうね？」

「あら、よくわかりましたね。」

「…正気なの？」

「ええ、もちろん。これがイアソン様のためになるのなら私は喜んでやりますとも。」

「止めなさい。そんな事をして意味はないわ。」

眼鏡をはずす。

「意味はあります。必ず追っ手を止めることができますから。」

念話をヘラクレスに飛ばす。

(ヘラクレス!今すぐイアソンと出来る限りの船員を船尾につれてきて!早く!)

(ぬおお!?わ、わかった!)

「違うわ。そんな事したらイアソンや皆の心が離れてしまう。愛されることも無くなるわよ。」

「何を言っているんですか。イアソン様は私に頼んだと言ってくださりました。ならイアソン様からの愛が離れることはないでしょう。」

…仕方がない。封印解除、神性解放。

「ならば、女神エウリュアレとして魔女メディアに命じます。その右手のナイフを今すぐ海に捨てなさい!」

「な……断ります。イアソン様のためならば神すらも敵にしましょう!」

ダダダダダ!

「な、メディアア!何をしているんだ!?!いやというかエコー、なんだその神気!?!」

「うっさい!そんな事よりはやくメディアアを止めて!」

「さようならアプシユルトス。ごめんなさいね?」

「?」

「くそっ！『自己時間加速：四倍速』！」

縮地で近付いて右手を掴む！

「な、離してください！」

魔眼起動。メディアを睨む。

「止めろ、殺すぞ。」

「な…その、眼は…?」

「メディア！」

「イアソン様！これをどけてください！追っ手を止められません！」

「何をいつてるんだ！お前、そいつを殺すために連れてきたのか!？」

「ええ！バラバラにして海にばらまけばお父様達は必ず…」

「馬鹿野郎、なにしようとしてるんだ！そんな事俺は許さんぞ！」

「な…!？」

「メディア、少し話をしよう。エコー！あとは頼んでいいか！」

「ええ。えっと、アプシユルトスくんだったけ？行くわよ。」

「！」

よーし、アプシユルトスを抱えて先頭の船にジャンプ！

ドスッ

「な、なんだお前は！」

「女神エウリュアレ。ほら、お宅の王子…であつてるのかしら？返すわ。あとメディアアだけれど、今は呪いにかかつているから下手に手を打つと悪化するわよ。今はそのままにした方がいいわ。」

「だが、メディアア様が帰ってくるという保証は…」

「そのときはイオルコスを攻めなさい。イアソンとメディアアにはしっかりと伝えておくから。それじゃあね。」

さて、帰ろつと。

.....

「…エコー、いやエウリュアレと呼んだ方が良いのか？」

「どつちでもいいわ。それで？メディアアとの話し合いは終わったの？」

「ああ。…なんというか…神というのは」

「ストツプ。それ以上は言わない方がいいわ。」

「…そうか。くそつ。なんであんなことに。」

「…今は呪いのせいで盲目な感じではあるけど、いつかは解けるはずよ。メディアアはか

なりの素質があるから研鑽を積ませればいつかは呪いを解くでしょうね。」

「…ならいいんだが。ああ、そうだった。エコー、お疲れさま。よくやった。」

「どういたしまして。それじゃ、私は少し寝…」

『せんちよー！大渦に捕まった！すぐ上に来てくれ！』

「…休めそうにないわね。行くわよ、イアソン。」

「ああ。」

.....

「ティーピユス！なにがあつた！」

「言つた通りだ船長！大渦、いや特大渦だ！それに捕まった！」

「うわ、なんだよあれ！おい、脱出できるのか!？」

「無理だ！この船じゃあいい風が吹こうとも抜けられん！」

「…なら私が行つてくるわ。」

「な、できるのか!？」

「…半々、いや三割と言つたところかしら。船の後ろに張り付いて、私の剣の魔力放出で無理やり押し出すわ。」

「…おいまで、それってお前は…」

「ええ。十中八九あれに飲み込まれるでしょうね。ま、なんとかなるわよ。」

「馬鹿野郎！そんなの許可できるか！他の方法を……！」

「……なににせよ早く決めないと抜け出せなくなるわよ。」

「……そつ……エコー、頼む。」

「任務了解。大丈夫よ、女神エウリュアレは伊達じゃないわ。……じゃあね。」

タツタツタツタ……

「……くそおつ！」

「船長、準備を。嬢ちゃんを犠牲にして助からなかったじゃあ申し訳がたたねえ。」

「わかっている！総員、帆を畳め！急げ！」

……

……さて、やりますか。

私としては、イレギュラーである私が死ぬよりもヘラクレスとかが死ぬ方がまずいと思うのでまあ良しとしましょう。最後にメドウーサとステンノに会っておきたかったかなー。

まあ、今更かな。

さあ、大仕事だ。来い、『光の剣』。

『
——封印解放、開始。

魔の力よ、我が思う形を取りて、全ての敵を討ち滅ぼせ。

『
魔力の光の帯が空へと伸びる。

——第一封印、解放。

落ちし星の力よ、多くの命を救うために、その力を解放せよ！

『
ソード・オブ・シユルテイングスター
光の剣：第一解放』！』

その光は更に強まり——

確かな質量を持つて船を剣と共に渦の外へと押し出す。ただ、私はそのなかにはイナイ。

：見事に吹き飛ばされました。むう、エネルギーの放出方向の調整が必要だったなあ。撃つわけないさははは、とか言っただけで放置していたからこうなったわけだ。ちえ。結局自滅かあ。

ああ、吹っ飛んだせいでもう渦の中心近くだよ。うわあ、すごいなあ。渦のそこってこんなに深いのかー。

…いやー、しかもめっちゃ暗い。冥界にでも繋がっているのかなあ。

ま、もう関係ないか。せっかくだ、寝よう。疲れたしね。

おやすみなさい、みんな。

.....

—ここは、どこだ？

あかるい。しろい。なにも、みえない。

「…あら、貴女がここに来るなんて。よほど深い眠りについたのね。」

だれかのこえがきこえる。

だれかにとてもにていて、それでいてちがうこえ。

「…ちよつと？聞いているのかしら駄メドウーサ…じゃないんだつたわね。おーい？」

このこえをきいているととてもおちついて、とても…うれしいきぶんになる。

ああ、ずっときいていたい。

「ええい！いつまで寝ぼけているつもりなの、よー！」

バチーン

「いったあ!？」

突然世界が鮮明になる。目の前に居るのは…

「…え、エウリュアレ？」

「ええ。その通りよ。私が話しかけているのにポケットとしていているなんていいご身分ねえ？」

「あー、すいません。」

「よろしい。まずは挨拶でもしましょうか。はじめまして、■■。私は貴女の今の体に元々あつた魂のエウリュアレよ。」

…？なぜかノイズが。

「…えつと、じゃあ私は貴女を殺して…」

「あら、それは違うわよ。私はいつのお願いを聞いて貴女の魂を受け入れたのだから。それにこうやって貴女の中で生きているしね。」

「そうなのですか…。それにしても、あいつつて？」

「…それはまだ言つてはいけなそうよ。そのうちわかるから今は気にしないでいいわ。それにしてもほんと駄メドゥーサにそっくりねえ。」

「はい。元々三人とも同じ存在のはずだったからだと思えます。」

「それもあるかもしれないけれどやっぱり■■■■の■■■■つていうのもあるでしょうね。■■■■もその辺りを考えて■■■を作るべきだったわねえ。■がこうなつちやつてるわけなのだし。」

…やっぱりノイズが。なぜでしょう。

「…あら、もう時間みたいね。もう少し話していたかったのだけれど。」

体が不意に軽くなる。

「それじゃあ、また会いましょう？今度はあいつも一緒に話せるといいのだけれど。」

「…はい。それでは。」

「ええ。またね。」

視界が真っ白になる。

そして、いしきも…

→ここまでエウリユアレ

エウリユアレ

←ここから私

…ふむ、どうやら記憶にロックでもかかっているのかしらね。どうも理解できていなかったようだし。

「あー、あいつは帰ったか？」

「ええ、帰ったわよ。」

「そりゃよかった。今のあいつじゃあオレを見ただけで何者かわかっちゃまうからな。」

「貴方も大変ね。」

「…ま、あいつの願いを叶えるためだ。当分は協力してくれよ?」

「ええ。別世界とはいえ妹の形見だもの。これくらいどうってことないわ。」

「あんがとさん。いやー、感謝してもしきれねーぜえ!」

「なら…いえ、なんでもないわ。貴方に願っても駄目でしょうしね。」

「おやおや、オレのことをよくわかつてるじゃない! つつても、あいつの願いを叶えるのにキャパを完全に割いてるから今言われても無理なんだけどな!」

「でしようね。それじゃ、またお茶会でもしましょうか。」

「いいねえ。お前さんの淹れる紅茶は旨いからいくら飲んでも飽きないからな!」

「この空間じゃ飽きが一番の敵だものね。ま、のんびり行きましょう。」

「だな。」

→ここまで エウリュアレ 私

←ここからヘラクレス

た。
アルゴナウタイ。この全滅するとも思われた旅は船員一名の行方不明のみで終わった。

あの渦は海底に穴が空いていたことが原因で、これを重く見たゼウスとポセイドンがそこに巨大な山を投げ込むことで塞ぎ、渦は収まった。だが、その周辺にいた多くの魚と、そしてエウリュアレは戻ってくることはなかった。

イアソン達は悲しんだ。だがその犠牲を無駄にせんと必死に今を生きている。

ステンノとメドゥーサには俺が伝えた。二人とも悲しんだが…意外とあっさり受け入れていた。仕方のないことだ、と。

俺は…今は贖罪の続きに挑んでいる。次で十二回目になる。そろそろ終わらせたいものだ。

エウリュアレよ、皆、いつか帰ってくることを願っているぞ。

だから、帰ってこい。

第九話 落ちた女神っぼいの

どもども。

男鯖が戦闘したくなくてふるえるさーばんととつぶ（当社調べ）のエウリュアレだよー。

本日は冥界に来ていますー。

いやー、死んだと思ったんだけど、意外と生きていました。まあ冥界に居る時点で生きてるけど死んでる状態なんだけどネ!?

「ちよつと、なにかぶつぶつ話してないで水を掻き出すのを手伝ってほしいのかわ!？」

「えー、やだー!？」

『サンダー!』

『アリダー!』

「貴方たちやかましいのかわ!？」

なんでEDFの奴等が居るんですかねえ。

「冥界では見れない水と魚が見れたのはうれしいのだけど、これ後処理が大変なのだわー!」

「そもそもなんで穴なんて開けたのよ。」

「わ、私は悪くないのだから! イシユタルが金星を落として開けやがったのよ!」

「…またあの女神か。」

「もー! イシユタルめー!」

「喧しいぞエレシユキガル。もう少し静かにできんのか。」

「部外者の私としてはなぜ貴方がここに当たり前のように居るのが疑問です賢王様。」

「暇だったのだ。にしても私のことを知っているようだ。うむ、名を名乗ることを許す。」

「よ。」

「…女神エウリユアレ。ギリシアの女神よ。おそらく貴方達よりもあとの時代の女神

よ。」

「ほう、後の時代とな。つまりお前は魔法にでも至ったと言うことか?」

「魔法!?! すごいのだから!」

「いや、違います。もし至っていたとしてもそれはイシユタルかと。」

「なに? あれがそんなことをできるわけが…ああ、なるほど、あれが撃った金星の影響

か。」

「まだ推測でしかないけどね。」

「え？え？どういうことなの？」

「エレシユキガル、理解できないのなら黙っている。というか冥界に落ちてきた水をさっさと退かせ。鬱陶しくて敵わん。」

「あ、はい。」

「それで？エウリュアレよ、お前はどうか考えているのだ。」

「そうね、恐らくイシユタルの金星落としが常世と現世の間の境界を乱した結果何かしらの影響が出たのだと思うわ。」

「…なるほど、高いエネルギーが冥界と現世の境界をぶち破ったによる衝撃により時空間が捻れたか切れて繋がったかした、ということか。」

「そういうこと。」

「そうなるに戻るのは難しいだろうな。基本的に冥界と現世を往き来するには七つの門を通らねばならん。だがお前の世界と繋がっているのは…」

「冥界の天井ね。」

「そうだ。つまりあそこを通らねばお前はもとの世界には帰れない。だが、あの通り彼方側から蓋をしてある。」

「多分山でも落としたんだろうねえ。あれを壊すとなるとちよつと面倒かな。」

「いや、ちよつと面倒程度なのはおかしいと思うのだけど。」

「まあこいつならできるだろうな。だが壊すことは我が許さん。」

「そうね。あれを壊したらまた水が落ちてくるものね。」

「でも、壊さずに冥界からエウリユアレの世界に帰るのは無理よ？ 例えば私が冥界の加護を与えても冥界と現世の間の壁はまともな方法じゃあ越えられないもの。」

「…ならまともな方法じゃなければいいのね？」

「…失言だったかしら。」

「いや、良いではないか。こいつは面白い発想をするからな。それを楽しもうではないか。」

「はあ。」

「よし、やるぞー！ 作戦名はく名付けて『オペレーション・アールタイプ O.P. R—TYPE』！」

「…ギルガメツシュ、なにか嫌な予感がするのだけれど。」

「…うむ、我も今そう思った。」

「ふははははははは！ 私の波動は次元を越えるぜー！」

「冥界を壊したりは止めてほしいのかわー！」

「…うむ、我を楽しませろよ？ エウリユアレよ。」

.....

「ギルー！どうしようー！」

「ん？どうしたエウリュアレ。」

「なんか適当に波動砲目指して作ったらヤバイのよきたー！」

「どれだ、見せろ。」

「これー。」

「…ふむ、なんだこれは。魔術ではなく科学か？」

「ええ。魔術無しで動くわ。と言ってもエネルギー源に魔力は使えるけど。」

「にしても…『対星宝具』と言ったところか？星を砕くことに特化した兵器とはな。」

「星!?星を砕けるの!?それかなり危ないんじゃないの?」

「最悪星の抑止力に目をつけられるかも知れぬが、ま、面白ければ良い。それに、お前が目指すものはまだまだ遠いのだろう?」

「流石ギルー!その通りよ!」

「ならばこんなことをしないでさっさと仕事に戻れ。」

「その前に試射してもいい?」

「赦す。」

「落ち着け。貴様の権限なら冥界の生命体の場所など簡単に割り出せるだろう。」

「あ、そうだったのだから！どこなのかわ、エウリユアレー!?」

「喧しい。もう少し落ち着かんか。」

「…あ、居たのだわ！待っていなさいエウリユアレ、すぐに助けに行くのだわ！」

「落ち着けと何度も…。ん？どうした。」

「静かに。…寝てるのだわ。」

「ほう。過労はいかんで、過労は。」

「なら貴方が過労死なんてするんじゃないわよ…。」

「…あれは仕方無かろう。良い国とするために衰えた体で働き過ぎたのだ。」

「…あら、これはなにかしら。」

「盾…いや、なるほど。疑似固有結界を展開できるのか。」

「…え、本当に作っちゃったってこと？」

「そのようだな。恐ろしい女神だ。下手をすればすべてを滅ぼしかねんな。」

「私としては冥界が荒らされなくなるならなんでもいいのだわ…。」

「スヤア…。」



…おや？ここは何処だろう。冥界じゃ…無いか。思いつきりビルあるし。地面がアスファルトだし。

日本…かな。なんだか懐かしい感じだ。見た感じ…まだ2000年ではないか。20世紀末かな？核の炎に包まれてはないね！

…いや、2000年より後もあり得なくはないかな？んー、あまり差がわからないからなあ。

…ということは私の記憶なのかな。少なくとも『私』^{エウリュアレ}の記憶では無いと思うけど。

『ろうおとーさーん！ ■ ■ ■ おかーさーん！』

『おかーさーん！』

…おや、子供か。

…あれは…いつかの悪夢に出てきた赤毛の少年と少女か。…赤毛というよりは赤銅色？まあいいか。

『待ちなさい、 ■ ■ ■。お父さんもお母さんも逃げないから。』

…それに…私？いや、外見的にはメドウーサの方が近いのかしら？

…そういえば私の外見ってどんだんメドウーサに近づいていたわね…。まさか未来の私とか？ははっ、まっさかー。

『いいじゃないか、■。子供は元気でいいんだからな。』

『そういうお前は子供の頃はさっぱり動かなかっただろうに。』

『ははは、知らんな。』

『まったく。』

…あれが私の父母…? うん、父親は外見が士郎だこれ。母親は…メドゥーサ? んー、でも今のメドゥーサよりでかくね? 主に身長とか…胸とか! まだでかくなるのか!?

あ、ゴルゴーンか!

…ええええええええ!? ゴルゴーンと士郎!?

なんでさ!?! なんでさああああ!?!

いや、待て!?! メドゥーサがさらに成長したとかじゃね!?! ならわかる…わけないわ! いくら受肉してもああはならないでしょ!?!

ええええええええ!?!

第十話 冥界良いとこ一度はおいで

いえーい。

ステンノねえ様を生前当てられなかつたエウリユアレダヨー。

あの悪夢以降少しだけ生前の自分の記憶を思い出せるようになりました。

どうも私の家族は士郎(？)父、ゴルゴーン母、姉メドウーサ、赤銅色の髪の妹、士郎似の弟の四人みたいです。まさかのメドウーサルートなのかな？わけがわからないよ。

…これ、多分メドウーサ私なんだと思うけど…もしかしたらゴルゴーン私かも知れないのが怖い。士郎の妻とか…家事とか大体士郎にやられそうだし。桜怖いし。桜こわいし！桜こわいし！

あ、あと隣に中国拳法の達人のお爺さんがいて中国拳法を教えてもらっていたのも思い出した。だから圏境とかできたのかー。まあ、無二打にはまだ遠いけど。あのお爺さんは強かった。本当に人間なのかあれ。実はサーヴァントとか？まっさかー。

そういうえば、記憶は1994年位までしかまだ思い出せていないけれどなぜか知識は2016年位まであるんだよね。だからなんというかちぐはぐかなあ。生前知らなかったような気がするこの記憶もあるし。昔そんなにミリタリーは詳しくなかったと思うんだけどなあ。

「…おい、エウリュアレ。飯はまだか。」

「お腹すいたのだわ！」

…どうしてこうなった。

「もうすぐできるから待っていて。というか私のご飯なんてそんな良いものじゃあ無いでしょうに。」

「確かにウルクの飯には遠く及ばぬがこの飯よりはました。」

「いや、冥界にまともなご飯があると思うのが間違ってると思うのだけれど。でもその美味しくない素材を美味しいご飯に料理しちゃうエウリュアレはすごいのだわ！」

「適当なだけどなあ。」

「適当、良いではないか。確かにいい加減という意味もあるがちょうどいいバランスという意味もある。」

「いい加減、も『い→い←加減』と『いい→加減』の二つのイントネーションがあるものね。前者は良い、後者は適当。」

「イントネーションは地方によるがな！だが適当の良いところは無駄な力を割かないと言うことだ！故に過労から少しは遠ざかる！」

「ただだけ過労嫌なのよギル…。」

「過労はいかんで、過労は！我みたいに過労死するからな！自ら仕事を作りすぎた結果過労死など笑い者になるのが関の山だからな！我みたいにい！」

「ギルは十分頑張ったんだから笑い者にはならないでしょう。どちらかという的英雄王の方が未来で…。」

「その話は止めんか！あの頃は色々テンションが高すぎたのだ！だって未来見えてたしネー！」

「ギルガメツシュがなにかテンションがおかしいのかわわ！」

「ふははははは！気にするな！」

「多分カニファン次元にでも捕まったのよ。うん。」

「かにふあんってなんなの？」

「…ギャグアニメでも。あ、あとランサーが死ぬアニメ。」

「ランサー…。」

ろうよ。少なくともエレシユキガルではギャグ時空は無理だ。こいつじゃあ全てのルートできれいに死ねんし『自害しろ、ランサー』の名台詞もこのヘタレじゃあ聞けんだろうよ。良くてこいつの姿を見て動揺したフェイカーをアンブツシュで殺せる程度だろうよ。」

「とうかそもそも神霊は呼べないけどね。…水没王子ならぬ埋没女神?」

「貴様には地の底がお似合いだ!」

「ふはははははははははは!」

「あはははははははははは!」

「あー!もう!うるさいのだわああああ!」

「エレシユキガル。」

「エレシユキガルよ。」

「何よ!」

「うるさいwww」

「喧しいぞwww」

「…うがああああ!くたばれあなたたちいいい!」

「ふはははははは!逃げるぞエウリュアレ!捕まったら下手をすれば本当に死にかねんからなあ!」

「逃げるんだよおお！スモーカー！」

「待たんかああああ！」

く賢王女神逃走中く

「ぜえ…ぜえ…。」

「ふむ、その程度で疲れるようではいかんぞ。体を鍛えろ、体を鍛えるべきね。最初は…そうね…まずは、うん。」

裸 で 豹 と 闘 う の で す ！

「どんなスパルタ教育よそれえ!？」

「まずはトレーニングだろう。」

「むんぬうああ！」

「うるさいのかわ!？」

「とにかくトレーニングだろう。」

「テルモピュライ・エノモタイアア！」

「うわなんか屈強な戦士の幻影があ!？」

「それでもトレーニングだろう。」

「どんだけトレーニング好きなのよギルガメッシュ!?」

「滾ってきたぞお!!」

「ちよ、槍を振り回さないで!」

「死んでもトレーニングだろう。」

「これが：スパルタだああああ!」

「もういやああああ!」

閑話休題。

「全く。悪乗りもほどほどにね。」

「ごめんなさい。」

「すまぬな。つついっついやってしまった。後悔も反省もしていない。」

「いやそこはしなさいよ!」

「してエウリュアレよ、あのあとの進捗はどうなのだ? 試製波動砲以降あまり見せてくれぬが。」

「あー、一応一通りは作ったよ。ただ問題が発覚したんだよねー。」

「ほう？何が起きた。言ってみよ。」

「波動砲で次元潜航は可能になったけど、四次元時空に存在していたこの体だと高次元域で耐えられない。」

「…つまり、どういうこと？」

「高次元空間でも耐えられる入れ物が必要、と言うことだ。」

「あー、なるほど。そんなにきつい空間なの？それ。ちよつと我慢したら越えられたりとか。」

「多分無理ね。一度潜ったのだけどたまたま帰ってこれた感じだったわ。あとコンマ一秒でもこっちに戻ってくるのが遅れていたら今頃は魔力の一粒までバラバラだったわ。うん、幸運EXで良かった。」

「幸運Eだったら即死だったろうな。どれ、私のヴィマーナでも貸してやろうか？もちろん利息はトイチだが。」

「それ返しにこれないから次に会うときまでどんどん返す額が増えるじゃん。」

「なに、利息分はたまに取り立てて行ってやろう。」

「なんて酷い。」

「どうするの？」

「…しゃーない。R戦闘機本体も少し作るかなあ。」

「あ、なんとかしちやうのね。」

「まあ、それがエウリュアレだからな。ああ、そうだエレシユキガル。」

「なにかしら？」

「冥界側から、ギリシアに繋がる穴を塞げるように準備しておけ。」

「え、なんで？べつにあつちから塞いでるのだし大丈夫でしょう？」

「そうしておかないと世界が滅ぶぞ。」

「了解したわ。世界を滅ぼすわけにはいかないわね。」

「…何故かは聞かんのだな。」

「だって貴方の眼は未来が見えるのでしよう？なら疑いようなんてないじゃない。」

「…ふ。少しは疑え。我だぞ？」

「何言ってるのよ。貴方はそんなことしないでしように。嘘を言うならもうちよつとぶ

ざけたことを言うわよ。」

「…流石だな。」

「伊達に長く一緒に過ごしてなんか無いわよ。」

…え、まさかのエレギル？あ、でもこれ立花にエレシユキガルをとられちゃう？

…略奪愛もまた一つの愛か！

「何を馬鹿なことを考えている。そんなわけなからう。」

…心をナチュラルに読まないでくだせえ賢王様。

…うん、頑張つてR戦闘機作ろつと。

→ここまでエウリユアレ

←ここからエレシユキガル

女神エウリユアレ。

イシユタルが開けた穴から落ちてきたぎりしあ？の女神。

とてもつよい。

…いや、あの強さはおかしいのかわ！

だつて一撃で冥界の三分の一も吹き飛んだのよ!?あのギルガメツシュの三連白でも
そこまでひどくはなかつたのに！

しかも料理も美味しいしノリも良くて話しやすい！すごい良い子なのよ！もう困い
込んでしまいたいぐらいには！

…でもあの子は帰ろうとしている。だから私は応援するの。

でも冥界を荒らすのは止めてほしいのかわ!

にしても、あの子から色々と武器とか服とかを貰ったのよね。せっかくだしギルガメッシュにでも見てもらおうかしら。色々教えてくれそうだし。

「ねえ、ギルガメッシュ。ちよつと見てほしいものがあるのだけれど。」

「ほう?どれだ?見せてみよ。」

「エウリュアレが作ってくれたものなんだけど。この槍と、双剣と、マント。」

「ふむ…?ふむ、よくもまあ一つの物にここまで要素を練り込むものだな。」

「…?」

「まずこの槍だが、一つ目に必中の効果が付与されている。魔力を込めずとも投げれば貴様が敵と認識しているやつを追尾して、確実に心臓を抉るだろうな。しかも手元に戻ってくるおまけ付きときた。」

「…え、すごいのだわ!」

「この時点での犬めの槍と同等かそれ以上だが、まだある。」

「…へ?」

「この槍に魔力を流すと何百倍にも魔力を増幅した上で刃の方向にビームを放つことができる。威力は…場合にもよるだろうが貴様ならば対城宝具にも匹敵するやもしれぬ

な。」

「…え？対城宝具？」

「うむ。もちろん流す魔力の量を調整すれば威力や範囲は変えられる。魔力操作が巧ければビームを曲げたり一点に集中したり逆に拡散したり、などということもできるだろうな。」

「あ、それなら自信があるわ！だって冥界とか暇なもの！やることといったら有り余っている魔力で遊ぶことと檻作りぐらいなもの！」

「ふっ。相当な暴れ馬だぞ、これは。」

「それくらい手懐けてやるわ！私は冥界の女主人エレシユキガルよ！」

「ま、精々努力するのだな。三つ目にはこれで斬った相手に呪いが付与されるという効果だな。」

「呪い？」

「ああ。三つあって一つは回復、蘇生阻害。二つに霊基または魂への汚染。三つに…足の小指をタンスなどにぶつけやすくなる呪いだ。」

「…ん？タンス？」

「ああ。これは辛いな。かなり辛い。」

「これは私も嫌なのだわ…。」

「最後にちよつとしたものだが自身の陣地の強化、と言ったところだ。」

「…多いわね。」

「うむ。普通は使い勝手の良い道具には一つか多くて二つの能力しかないのだが、これは四つも持っている。それもその中の三つは魔術で編み込んだ物ときた。」

「すごいね。」

「あいつはギリシアでは鍛冶の女神と呼ばれていたようであるからな。これくらいは朝飯前、というやつなのだろう。」

「え、それはすごいのだわ！」

「…まあ、次の武器に行くぞ。この双剣は…なんだ、どうも太陽の力を宿しているようだな。」

「…太陽？なんで太陽？」

「…どうやらその双剣の発想の元となった双剣が太陽の力を宿した剣だったようだ。原典は私の倉庫にもあるぞ？」

「へー。」

「これは装備していると対魔力アップ、弱体無効と言ったところか。」

「…あれ？普通？」

「…うむ、普通だな。真名解放で一時的に光速に近い速度で動き、思考することができ

る。」

「なるほど、言葉通りの神速の剣ってことね。」

「うむ。最後にこのマントだが…なるほど、防御に重点を置いた物のようだな。」

「逆に攻撃に重点を置いたマントってなによ…。」

「…飛翔斬とかか？いや、あれは違うか。」

「…よくわからないけど、思い付かないわ。」

「まあ、それはいい。このマントには攻撃反射能力と装着者の傷などを治す効果、呪いや状態異常無効、温度調整などがあるな。」

「へえー！すごいのだわ！」

「因みに洗濯機で洗濯してもいいが陰干し推奨だ。」

「…冥界に太陽はないわよ？」

「…まあ、そうなるか。」

「…うん。三つとも良いものなのね。」

「少なくとも耐久に関してでは良いというレベルのものではないな。これは一生壊れんぞ。こういう何時までも使っていられるような素晴らしいものを作ってしまうからどんなに収益が落ちていくんだぞ日本企業！」

「それ良いことじゃないの…？」

「確かに杜撰なものを売り付けられるよりはましだが。」

「…この三つは大切にするわ。だって、初めて…初めて友達から貰ったプレゼントだもの。」

「…ふっ。あやつはお前にさまざまな物をくれたのだな。」

「ええ。私の一番の友達よ！」

「そもそも友がそこまでおらぬだろうに。」

「う、うるさいのだわ！私にだって友達ぐらい…いないのだわ…。」

「LINEの友達ですら少なそうだな、お前は。」

「ぎ、ギルガメツシユ、貴方は私の友達よね!?!」

「我の友はエルキドウただ一人のみだ。お前は友ではない。」

「…酷いのだわー!!」

「もう少し友好的になるべきであろうな。さすれば奇っ怪な人間などは友になれる…かもしれない。」

「なら、めぎせメソポタミアで一番フレンドリーな女神！」

「まあ…冥界に人は来んのだがな。」
「がくつ。」

続・幕間の物語 外からエウを見てみよう plus

・メドゥーサ

：おや、またインタビュですか。下姉様ですか？ 面白いえばそろそろ旅立ってから二年半になりますか。ヘラクレスさんは死んだと言っていましたけどどう生きてますよ。だって：死体が見つかったわけでもないです。それが見つかっていれば：見つかっても正直信じられないですけどね。

下姉様が居なくなっただからか上姉様が下姉様がやっていた分も家事をやるようになっていて、最近はヘスティアさんに色々習って技術を伸ばしているみたいです。おかげで私とゼウスのダメ人間化：いや、ダメ神かな？ それが激しいんですよ。

あれ？ もしかして下姉様が居ない方が平和なんじゃ…？

：考えなかったことにしよう。ここはカットしてください。お願いしますね。

あ、面白いえばこの前やつとビームを剣から出せるようになったんですよ。これでセイバーの仲間入りですかね？ え、剣技も必要？…頑張ります。

・ステンノ

あら、久しぶりね。インタビュウ？料理しながらでも良いかしら？ならいいわよ。

エウリュアレ？そういえばまだ帰って来てないわね。たまに帰ってくるとか言っていたのにもう二年半もたつたわねえ。

エウリュアレはどうしているのかしらね。多分冥界に居るような気がするのだけだ。意外と楽しくやっているんじゃないかしら？なんでわかるかって？だって私はあの子の姉よ？それくらいなんとなくわかるわよ。

ただ：そろそろ帰って来て欲しいわね。なんというか、嫌な予感がするの。私ではどうにもできないような事が起きる気がして、ね。

：そういえば、この前教えてくれた天井、完璧にマスターしたわよ！てんつゆを作るのには苦勞したけど、今はもう完璧よ！ちようどいいわ、貴方も食べていかない？うん！じゃあメドゥーサ達を呼んでくるわね。メドゥーサー！ご飯よー！

・ヘラクレス

む？おお、また君か。久しいな。インタビュウかい？良いだろう！

エウリュアレか？

：彼女には悪いことをした。ああいった死地に赴くのは男のすることだというのに、彼女に任せて：そして死なせてしまった。もし生きていたとしても：亡霊として、だろ

うよ。俺はそういった奴を何度も、見てきた。きつと俺たちの事を恨んでいるだろう。なにせ約束を破らしてしまったからな。いつか成長しきったときに全力で戦うという約束をな。

ああ…すまない、エウリュアレ。

…もしエウリュアレにあつたら？ そうだな、まずは謝る。そのあとに…
約束を、果たすさ。

・エミヤ

…またお前か。どうせあいつの事だろう？ はあ…。

私の方でも彼女の事を調べてみたのだが、どうも世界自体に彼女のデータが無い。ああ。彼女は…いや、彼女らは我々の世界の存在ではない。

だが、何故か抑止力には我々の世界の存在として彼女らも認識されている。事実私も駆り出されたしな。

つまりだ。

私にはわからん。

…なんだその顔は。ええい、笑うな！ 笑うなあ！

・アタランテ

…エコーか？ そうだな、あいつは最高の弟子だよ。恐らく一生あいつ以上の弟子には会えんだろうさ。ヘラクレスと同列かそれ以上の戦士なんて弟子にはできないだろうからな。

いつそ行けるところまで育ててやりたかったのだが…。ああ。もう、居ないからな。現実是非常だと言うが、ここまでとは思わなかった。出来ることならば生き返らせてやりたい。そう、思っている。ああ。

聖杯？ ほう、そういうものがあるのか。

…探してみるか。良い情報がありがとう。聖杯を探す旅にでも出てみるさ。ふふ。なに、弓はなくともこの琴で十分さ。ではな。

・イアソン

…エコーか？

…ああ、あいつには悪いことをした。あの決断は一生後悔するだろうな。

…もうあんな決断をしなくてすむように、もつと強くならなければならぬ。

…なに、やってやるさ。最高の王になって、あいつの分も救ってやるさ。

う!?しかも強いのよ!

へぷしっ!

…ごめんなさい。んー、にしてもあの子、かなり大きいわよね。なにがって、その…
うん。

私も元の姿ならそれなりにはあるのだけど、やっぱりこっちの方が気に入っているのよねー。ちよつと小さいけど。

え?その依り代本人も気にしていること?

…なんで貴方がそれを?え、へー。そうなの。不思議な縁もあるものね。

あ、この依り代の子に縁があるなら多分イシユタルとも縁ができているかもしれないけど、あいつは絶対に仲良くしない方がいいわよ!あいつは酷いんだから!エウリユアレが冥界に落ちてきちゃったのもあいつのせいなんだから。

あー!なんかイライラしてきた!おのれイシユタルく!

・『エウリユアレ
私』

あら?貴方は…なるほどね。こんなところまで来るなんて余程暇なのねえ。え、夢だから?なるほど…何かしらの影響が出ているのかしら。あいつに聞いておきましょう。

それで?何のようなのかしら。え、エウリユアレ?んー…、あの子は…なんででしょう。

すごいわね。なんであんなに成長しちやったのかしらね。いいなあ…。

はっ、いや、何でもないわ!? ええ! このからだのほうがいいわよ! ええ!

ちよつと、その微妙な表情はなによ! もう! あ、ちよつと! 待ちなさい! 逃げるな!
ええい! 食らえ、『女神メイトラの視線ザ、エクリユアレ』! 死ねえ!

第十一話 そしてまた旅に出る

イエエエエエー!

げほっ、げほっ。

あー、皆さんこんにちばー! みんな大好きエウエウでーっす!

…このノリ辛いな。わんわんの人ってすごいんだなあ。

さて、ついに完成しましたR戦闘機! いやー、疲れました。

とりあえず適当に何機か作ってみたら半年もかかってしまったという。

というわけでいまはお別れ会の途中です。

「…もう帰ってしまうのね…。」

「まあ、私の故郷はここには無いからね。それに、家族も待たせてるから。」

「家族は大事にするのよ? ひよんなことで失ってしまうから。」

「わかつているわよ。」

「…ふっ。私は別れは言わんぞ。どうせ冬木で会うからな。」

「さりげなく未来を確定させるのはやめてください…。」

「なに、もちろんエレシユキガルも一緒だぞ？」

「え！本当に!？」

「ちよつとまでーい！冬木にエレシユキガルが来たら駄目ですよ!？」

「なに、大丈夫だ！どうせカニファン次元だ!！」

「そうか！なら大丈夫ね!！」

「…カニファン!?え、ブーメランサーされちゃうの私!？」

「本家が居るから大丈夫よ!！」

「ならよかつたのかわ!！」

「さて…そろそろ行つた方が良さだろう。」

「そうね。それじゃ…」

「ちよつと待つてくれるかな?」

「その声は!？」

「米倉、貴様ア!！」

「私はエレシユキガルだし何もしてないのだわというか米倉って誰え!？」

「いや、言いがかりで喧嘩を始めないで欲しいかな、ギル?」

「エルキドウ、お前、生きていたのか!?! いや、死んだはずだ!」

「落ち着いてギル。君も死んでるじゃないか。」

「む、そういうええそうか。ならエルキドウが居てもおかしくないな。」

「いや、その理論はおかしいのだから。」

「貴方がエルキドウ…。あ、はじめまして。ギリシアで鍛冶の女神をやっているエウリュアレです。」

「うん、はじめまして。知っているかもしれないけど、ギルガメッシュの親友のエルキドウだ。よろしくね?」

「よろしく!」

「それで、エルキドウよ。どうしたのだ?」

「ふふ、ギルと仲良くしてくれたみたいだしね。ちよつとお礼でも、と思つてね。」

「お前は私の保護者か。」

「親友さ。というわけで、これ。」

「…これは…鎖の首飾り?」

「そう。そして、それをつけていると僕の鎖を使えるのさ!」

「え!ほんとう!?! よーし、やってみよう! いくぞ、えぬま・えりしゅー!」

「あ、それ似たことが本当にできちゃうから気を付けてね?」

「うわあああああああああああ……」

「エウリュアレが飛んでったー!?」

「あつはつはつは！いやー、愉快な子だね！」

「本当にな。む、帰ってきたな。」

「ま、まさか本当にできるとは……。」

「うん、大丈夫そうだね。じゃあ、大事にしてくれると嬉しいかな。」

「……ならば我からも餞別だ！受けとるが良い！」

「……これは……指輪？はっ、もしかしてプロポーズ!?まだ私は……」

「違うわ！」

「よかったー。」

「それはボムの指輪だ。」

「お返しします。」

「冗談だ。ただの呪い抵抗が上がる指輪……の原典だ。」

「なにその全ての呪いを打ち消しそうな指輪。」

「あの犬めの槍なら外れるぞ。」

「ゲイ・ボルクエ……。」

「恐らくそれが必要になるだろうからな。ふっ。しつかりと生きていくのだぞ。過労死

「なぞするなよ。過労死はあかんからな！ええな!？」

「なしてエセ関西弁…？まあいつか。ありがと、ギル！」

ニコッ

「…。」

「ギルガメツシユ？」

「…ふむ、女の心からの笑顔というのは存外尊い物なのだな…」（黄金の粒子になって消滅）

「ギルガメツシユううう!？」

『女神^エよ、ギル^マを繋ぎ^キとめよう^ル』。

ジャラジャラジャラジャラ…

「……………ふははははははははは！我、復活！」

「…エレシユキガル、これ本当にギルかい？かなりテンションがおかしいけど。」

「エウリユアレが来てからずーつとこんな感じよ。でも、私はこのほうが楽しくていいわ。」

「まあ、そうなのかな？」

「さて、我也渡したが…エレシユキガル、お前は どうする？」

「えっ!?!え、えーつと…」

(ぎ、ギルガメッシュ！友達へのプレゼントってどういうのがいいの!?) 目線で会話
(そうだな、深淵の加護でも渡しておけ。役に立つだろうさ。)

(なるほど!)

「えっと、私からは…深淵の加護位しかあげられないのだけど…」

「深淵の加護? あ、それってもしかしてキングハサンのあれ?」

「キングハサン…?」

「ああ、それに近いものだ。あの暗殺者のように深淵の炎を操ることができる。ついでで不死にもなるが。」

「ほしいほしい!」

「いいの?こんなもので…。」

「いいの!それにエレシユキガルからのプレゼントだからね!」

「…なら、うん!ていりゃあ!」

おお、あれが加護?ボール型なのか。

…ん?

え、なぜ投げたあ!?

ゴツツ

「あたー!」

「…なあ、エルキドゥよ。加護というのは投げて当てるものだったか？」

「そんなわけないだろうギル。一度常識というものを見直すと良いよ。」

「…だろうな。」

「いつつつ…なんで加護を投げられたの…？」

「大丈夫か？」

「多分…。ん、ん？おー。青い炎が出た…あつつ!？」

「あ、服に火がついた。」

「うわあ!?!ちよ、水！水！」

「冥界の水とか絶対に駄目だと我は思う。」

「ええい、創造魔術！水よこい！」

ばっしやあああああん！

「…びしょ濡れなのだわ…。」

「我は水避けの指輪をつけていたから無事だ。」

「せめて僕とエレシユキガルにも着けて欲しかったかな、それ。」

「ふははははは！なに、ちよつとしたお茶目のようなものだ！許せ！体と服は乾かして

やろう！」

「全く…。」

「ありや、おお？すごい！青い炎を使えるようになった！」

「筋が良いわね。大抵のやつは出せるようになるのすらかなりの時間がかかるのに。」

「ふっふーん！どうよ！」

「すごいわ！うん、頑張つて生きるのよ！」

「わかつてるわよ！」

ドガアアアアン…

「…む？何の音だ？」

「な、第一の門が壊されたのかわ!?」

「あー、うん、ギル。なにか投げつけるものはないかい？」

「ふむ、それならばこの投げ槍の原典を使うと良い。それなりには飛ぶはずだ。」

「あー、なるほど。奴が来たのね。」

「イシユタルなのかわ！なんであいつこういうときに来るのよ!?」

「ふははははははははは！なんせイシユタルだからな！」

「ああ、第二、第三の門も壊された!?!」

「イシユタル単独じゃあ無理だろうしまた父親にでも泣きついたのかな？」

「え、なんか星と人の抑止力から攻撃許可が出ただけだ。」

「それほど扱いに困る物体という事だろうよ。ふっ。では私のウルクの守りを見せてやろう！全砲門、開錠！」

「多少威力は落ちるけど、体当たりだけが宝具じゃないのさ！さあ、神を地に縫い付けてやろう！」

「第四、第五の門突破されたのだわ！」

「うわあ、詠唱も要らないレベルで補助してくれるんだけど。なんじやこりや。」

「冥界においてもウルクの輝きは失われぬ！」

「投げやりな対応ってこういうのを言うのかな？」

「お願い、メスラムタエア！冥界を守るわよ！」

「時間がないので真名解放の詠唱はまたの機会に！」

「エレシユキガル！今日こそは死んでもら」

「冥府を護るは我が決意！『王の号砲』！」

「友と共に守ろう、僕は。故に、『駄女神よ、死ぬがいい』！」

「来たことを後悔するのだわ！『霊峰踏抱く冥府の鞆』！」

「抑止力の補助で3000+3000で6000スパルタ！普段の二倍の振り上げが加わり6000×2の12000スパルタ！そして！普段の三倍の魔力使用を加えれば12000×3！お前の20万ペルシアを越える、36000スパルタだーっ！くらえ、ソード・オブ・ザ・ギョウケン『光の剣：真名解放』！」

「なんでよおおおおおおお!?」

ウルクより放たれた無数の宝具が大地を抉り、投げられた槍に鎖が絡み付き貫き、冥府の炎が焼き付くし、そして光がすべてを包む。

チュドーン

もしこの光景をメドゥーサが見ていればこう、言うであろう。

流石エウリュアレ姉様です、と。

.....

「……うむ、思わぬ乱入者が来はしたが今度こそ出発といくか？」

「ええ、そうね。」

「寂しくなるわね……。」

「なに、また会える。我が予言しよう。またこの四人で過ごせるとな！」

「あつはつはつは！いいジョークだね！少なくとも僕は無理じゃないかな？」

「いや、四人でだ。だって未来を見ちゃったしネ！」

「まあ、そうなるのかわ。」

「……さて、そろそろいくことにするわ。何時までもうだうだとしてられないし。」

「そうか。ならば派手に送り出さねばな！」

「花火だね？わかるとも！」

「ちよつと!?!なによそのロケット花火の山!?!」

「ふはははははははは！エウリュアレには打ち上げ花火でも足らん！ロケット花火と行くうではないか！」

「えっと…それじゃ、またね！」

「うむ！ではな！」

「また会いましょうね！」

「次に会うときは色々と話ができたらいいな。またね。」

「よし、来い！『R—9A2』！」

「でつかいのだわ！これが飛行機？」

「どちらかというと宇宙船の類いよな。さて、こちらも準備はいいぞ！」

「よし、行くわ！ザイオング慣性制御システム始動！エンジン点火！」

「ゴオッ

「ふははははははははははは！エルキドウよ！準備はいいか!？」

「うん。さあ、どこから火をつけようかな？」

「もちろんど真ん中ですよ！」

「同意見だ！」

「それも、いいね！」

「機体安定、波動砲エネルギー充填200%！さあ、時を越えるわよ！」

「あっはっはっは！」

「…綺麗ね。」

…さて、行くわよ！

力場解放、タイプデیفューズ！

拡散波動砲、つてえー！

バシユーン！

「よし！次元の歪みを確認！いざ、異相次元！」

.....

「…行っちゃったわね。」

「あっさりと行ってしまったな。もつと派手なのかと期待していたのだが。」

「そうかい？十分綺麗だと思うよ？あの次元に穴を開けたビームのエネルギーがほら、まるで雪みたいに降ってきてる。」

「…本当。なんだが幻想的ね。」

「…さて、では飯にでもするか？我は少し腹が減った。」

「いつから君は腹ペコキヤラになったんだい？」

「正直娯楽なんてそれくらいしか無いからな！仕方無かろう！」

「貴方の財を使えばいいんじゃないの？」

「…なるほど。」

「ええ…。」

「ならば、よし！TRPGでもするとするか！時間は有り余っているからな！」

「ていーあーるびーじー？なにそれ？」

「TRPGというのはだな…。」

「…あ、そういえばイシユタルのこと忘れてたね。」

「は？なんだそれは。」

「あ、うん。なんでもないさ。とりあえずクトゥルフでもやらないかい？」

「我としては艦これRPGをだな…。」

「ねえねえ、このエンドブレイカーって面白そうなのだわ！」

「…。」

「…。」

「え、なにこの険悪な空気？」

「…ジャンケンなんてどうだい？」

「良からう。」

「ちよつと？二人とも…」

「いくぞ、ジャン、ケン、ポン！」

「…ギル？今のは後出しじゃないかい？」

「何を言うか。そんなセコい事を我がするわけが無からう？」

「何を言ってるんだい。昔ジャンケンで後出しで勝ちまくっていたのは覚えているよ

？」

「ほう？やるか？」

「いいよ？久しぶりの喧嘩だね？」

「ちよつと!?!二人とも落ち着いて!?!」

「ふはははははは！初手エアも今の我は辞さぬ！慢心は無いからな！」

「なら僕も少し本気で行こうかな。」

「ちよつと！ふたりとも！」

「ふははははははははは！」

「あはははははははははは！」

「うわあああああん！帰って来て助けてエウリユアレー！」

第十二話 怪物

…とある怪物めがみの話をしよう。

怪物の名前はゴルゴーン。ギリシア神話における怪物の一つさ。

そいつは元は土着神の類いである女神のなり損ないだった。だが、偶然かオリュンポスの神の策略か、結果としてそいつは女神アテナによって呪いをかけられて怪物となった。

「…あのー。」

さて、その怪物となった女神は島にやって来た多くの人間を殺した。異界化した住み処の島でな。

「おーい。」

だが最後は神々の寵愛を受けた英雄ペルセウスに殺された。

「…おーいー！」

「ああもうなんだよ！俺が楽しく話してるってゆーのによー！」

「いや、なんで貴方が嬉々としてメドゥーサの話をしてるんですか。」

「…アンリ・マユ。」

「いやー、本当は出てくるつもりは無かったんだけどさ？もー我慢できなくなっちゃったんだわ！あつはつはつはー！」

「せつかく私もあんたのことを黙っていたのに、なんで自分から出ていくのよ…。」

「いやー、ごめんなエウリュアレ！もう色々と飽きた！」

「あんたねえ…！宝具で消し飛ばすわよ!!」

「ひえっ!?止めてくれ、その宝具だと返す前に死んじゃう！」

「…えっと、それでなぜ私はここに呼ばれたんですか？」

「あー、そうだったな。まあ結論から言うところの世界でもゴルゴーンが生まれちゃったってことさ。」

「…なぜそれを貴方がわかるのですか？」

「それは秘密だ。…おおっと、もう起きる時間か。それじゃあ[■]_な。最後に二つ助言だ。起きたらすぐにヘラクレスの所へ向かえ。そしてもうひとつ。メドゥーサを救うことは考えるな。それは無理だからな。」

体が軽くなり、意識が遠退く。

「そんじゃ、頑張れよ。救うべきものと切り捨てるべきものをしっかりと見極めろ。」

「またね、エウリュアレ。次は三人でのんびりと話しましょう。」

.....

…なんだ今の。

…あ、どうも。やっとギリシアに戻ってきたエウリュアレです。

…なんでアンリが私の中にいるんですかねえ。もしかして私汚染済とか？うわあ。

それに、色々と言ってましたね。ゴルゴーンが生まれたとかヘラクレスの所に行けとかメドウーサを救うことは諦めろとか。

…とりあえずヘラクレスの所へ…って何処にヘラクレスいるのさ。

…しーない、探すか。

「エエエエウリュウウウアレエエエ！」

…ん？なんか聞こえ

「おらあー！」

ドカーン

「うわあ!？」

親方!空から女神アテナがあ!？」

「エウリュアレ貴様!今まで何処をほつき歩いてた!」

「メソポタミアの冥界に落ちてましたが!」

「そんなわけがあるか!メソポタミアの冥界なぞ遠い昔に閉鎖したわ!」

「な、なんだってー!？」

「エウリュアレ!貴様が居ればステンノは…!」

「…待ちなさい。とりあえず状況の説明が欲しいわ。」

「…良いだろう。取り敢えずヘラクレスのところまで行くぞ。」

「わかったわ。」

→()までエウリュアレ

←()からヘラクレス

エウリュアレが生き返った。

その報を女神アテナが私のところへ持ってきたのは三日前のことだった。

そして今日、エウリュアレを連れてくるということなのだが…。

「ヘラクレス！エウリュアレを連れてきたぞ！」

「ちよつと、引つ張らないで！」

…は？誰だ、あの美女は。

「…待て、女神アテナよ。そいつ、いやその女性はエウリュアレなのか？別人ではないのか？」

「…ヘラクレス？それはどういう意味かしら？」

「…本物、なのか？」

いやいやいやまさか。あの全く成長しない子供体型のエウリュアレだぞ。あんな巨乳な美女になるわけが無からう。うむ。無い。

「…どうせあれでしょう？私が今まで全く成長しなかったから突然伸びた私を別人だと思つたとかかしら？」

「…なぜそこまで完璧に当ててくるのだね。」

「乙女の勘よ。というか体型で驚いたみたいだけど、よく考えて見なさい。私はメドゥーサの姉よ？」

「…ああ、なるほど。」

「さて、雑談はそこまでだ。情報の共有をするぞ。」

「了解した。」

「御願いするわ。」

「事の発端は一ヶ月前、ポセイドンのやつがメドゥーサを連れ込んで私の神殿で事になったのが始まりだ。」

「…あのバカ、神殿では絶対に駄目だと言ったのに…。」

「いや、おそらく二人は被害者の側だ。どうやら二人とも魔術、それもチャームの類いがかかっていた事がわかっている。それに関しては私もわかっていたから不問としようとしたのだが…。」

「どうしたのだ？」

「…ヘラがごねたのだ。『神殿でそんな事をするような不屈き者を不問にするなんて言語道断です!』と言ってな。オリュンポスの神のほぼ全員は反対したのだが、ごり押しで自ら呪いをメドゥーサへおとした。」

「…あいつ…!」

「…結果、メドゥーサは正気を失って暴走している。どんな呪いを掛けたのは不明だが、現在メドゥーサは巨大化して大体50mになっている。」

「…ああ、それは俺も見た。まさかメドゥーサだとは思わなかったが…。」

「しかも、周辺にかなり強い石化の効果と、ビームをばらまいている。ヘラクレスが島の端までしか近付けず、近くに居たステンノが石化するほどだ。」

「…じゃあ、ステンノは…。」

「…いや、死んではない。」

「待つて。石化したのでしょうか？なら死んでるんじゃない？」

「ああ。普通は石化によって身体は石となり、魂は破壊される。事実他の人間はそうだったのだ。だが、ステンノの体だけは違ったのだ。」

「…一部分だけとか？」

「いや、完全に石となっていた。だが、魂が破壊されていなかったのだ。」

「なら、ステンノは生きているのね!? 何処にいるの!」

「あ、ああ。二階の部屋に保存魔法と結界を掛けておいてある。」

「早く! 早く連れて行って!」

「ま、待て! 下手に何かすれば殺すことになりかねんぞ!」

「え、あ、どうしようヘラクレス!」

「ええい、一旦落ち着け! 俺を揺さぶるな! 落ち着け! 落ち着けえ!」

「どうしよう! どうすればいいの!」

「やめんかあ！いつも通りお前らしくばばつと作れば良いではないか！」

「だって呪いの付与はできても解呪は専門外なのよ！というかステンノ、対魔力EXレベルよ！それで無理とか私にも無理よ！」

「…ん？おいエウリユアレ。その指輪はなんだ？」

「これはただの呪い避けの指輪よ！もらったの！」

「それを作ったのは何者だ！？そんなおかしい呪い避けの指輪なぞ初めて見たぞ?!」

「…あー。」

「…なあ、アテナよ。呪い避けの指輪があればステンノの呪いも消すことができるのか？」

「普通は無理だ。呪い避けの基本は呪いを打ち消すのではなく逸らす事だからな。それ故にある程度強い呪いでもそこら辺の人間が作った呪い避けの加護でも防ぐことができるのだ。だが、その指輪は違うのだ。それは自らに降りかかる呪いを逸らすのではなく、装着者に関わる呪いを全てでできるのなら解呪、解呪が不可能でも打ち消すのだ。」

「え、なにそのチート。」

「だからだ。誰にももらった、その指輪を。少なくともその指輪は神の一人や二人程度では作れん代物だぞ。」

「えつと…言わなきや駄目？」

「あたりまえだ。そんな者を作れる奴がいるのならば是非ともマークしておきたい。」

「えつと…メソポタミアのギルガメッシュ王から頂いたものなのだけれど…。」

「…待て。何と言った?」

「だからギルガメッシュから…。」

「…あのな、ギルガメッシュが生きていた時代は1000年以上前だぞ? そんなわけがなからう。」

「だからこの一年半ずつとメソポタミアの冥界に居たの!そこでギルガメッシュと仲良くなってもらったのよ!」

「…いや、馬鹿な。少なくともあのギルガメッシュが女神である貴様などに…。」

「事実なんだからどうしようもないでしょ!」

「あー、それでだ。アテナよ、この指輪ならステンノの解呪は可能なのか?」

「…いや、解呪は無理だ。だがそれを着けていれば呪いを打ち消し続ける事で生きることは可能だろう。もちろん指輪を外せば石になってしまいが…。」

「…なんか頭にメタリカメタルカつていう単語が…。」

「…なんだか単行本三巻あたりで打ち切られそうな単語だな。」

「…気のせいよ。うん。取り敢えず助けられるのね!?!」

「ああ。少なくとも石化は解けるはずだ。」

「よし！やるからヘラクレス連れてって、早く！」
「おう！こつちだ！」

.....

「これだ。」

「…見た目は完全に石ね。」

「ああ。これで生きているというのだから驚きだ。」

「…待って、これ意識が有るじゃない。」

「なに？」

「これは…辛いわね。呪いが解けなかったら一生このままなんて。」

「…もしや、あの場にあつた他の石になった人間も…。」

「…それでももう救う手だてがないわ。諦めるしか、無いわ。今はステンノの方が大切よ。」

「わかっている。エウリュアレ。」

「ええ。」

…ねえ、ヘラクレス。」

「なんだ？」

「指輪…左手の薬指につけた方が良いかしら。」

「いや、何故だ。普通に人差し指で良いだろう。」

「…まあ、そつか。では、失礼して…と。」

ピカッ！

「うおっ、まぶしっ！」

「なんだ!？」

「…エウリュアレ…久しぶり、ね。」

「…ステンノ？動ける？」

「ええ、私はぼつちりよ。だけど、メドゥーサが…」

「…うん、これからそれについての話をするわ。取り敢えず下に降りましょう。」

「わかったわ。あ、あとヘラクレス？」

「なんだね？」

「私を見つけたときに取り敢えず胸を触ったことは助けてくれた事もあるし不問としてあげるわ。でも、流石に石になってるからって女性の胸を触るのはどうかと思うわ。」

「…ほう？へラクレス、ちよーつとあとでお話しようか？」

「あ、ああ。後でな。」

「全く。」

「…にしてもエウリユアレ、貴女かなり成長したわね。」

「あはは、どんどんメドウーサに近づいていつてるけどね。私としてはこれでいいのか、っていう思いが大きいかな。」

「あら、良いじゃない。成長できるのは良いことよ。私なんてゼウスの力でも成長できないんだし。にしても大きな胸ねえ。」

「戦いには邪魔だけどね。」

「良いじゃない。男の大半は大きい方が好みなんだし。その肉達磨もそうみたいだしね。」

「え…？」

「…。」メソラシ

「とうか貴女ね、それなりにボディラインが見える服なのにブラを着けてないでしよう。さつきから胸がばるんばるんしててなんか見てるこっちは悲しくなってくるわ。」

「…あ。」

「それを忘れている辺り貴女らしいというか何というか…。」

「あー、あー、えっと、先に行っておいてください。さっきの部屋で着けてきます。」
「わかったわ。ヘラクレス、行くわよ。…というか貴方も葛藤している位ならばと
襲えば良いじゃない。」

「だがな…。」

「即死級のカウンターは確定だと思っけどね。」

「…だろうな。」

.....

「…えっと…お待たせしました。」

「おや、なんだ。ノーブラはやめたのか？」

「わかっていたのなら指摘してほしかったわ…。恥ずかしい…。」

「いや、逆にそれに気づかないお前がおかしいのだと言っておこう。というか私はずっと
とそういうファッションなのかと思っていた。」

「うー。」

「エウリュアレの胸はあとで揉みしだくとして「えっ」今はメドゥーサの事よ。」

「うむ、メドゥーサについてなのだが…」

「ちよつと待った！」

「…えつと、アテナ？この方はどちら様でしょうか。」

「…アキレウスか。」

「ああ。久しぶりだなヘラクレスさん。」

「なるほど、貴方がアキレウス。して何用ですか？」

「簡単なことだ。メドゥーサ討伐に参加したい！」

「却下するわ。」

「なにい!？」

「…さてエウリュアレ。アキレウスは俺と同じぐらいに強い英雄だ。だから参加なら
…」

「駄目よ。今回の戦いで突撃役は要らないわ。」

「ふむ、ではどういう人員が必要なのだ？」

「狙撃。それも高火力なのが必要ね。といっても正直ステンノとヘラクレスにアテナの

三人が居れば足りるわ。」

「だが火力があってもあれを殺すにはこの三人では足りんぞ？」

「…私が首を落とすわ。メドゥーサ、いえゴルゴーンの討伐には抑止力の補助が受けられるから恐らく首も落とせるはずよ。」

「ならその突撃の援護を…」

「だから、要らないわ。というか貴方じゃゴルゴーンの魔眼には耐えられない。」

「そんなのやってみなくちゃわからないだろう！」

「…じゃあ、試してみる？」

「なに？」

「いちおう私も石化の魔眼…に近いものを持っているから。といってもまあランクは低
いけれど。」

「なにそれ、初耳なのだけれど？」

「だって気が付いたのはギリシアに戻ってきてからだし。」

「どの程度なのだ？」

「そうね…メドゥーサがA+とするなら私はC+ってところかしらね。」

「かなり落ちるのだな。」

「まあ、別でおまけがあるからいいのよ。それで？挑戦する？」

「ああ！当たり前だ！」

「じゃあ…やるわよ。」

…ほう、あの眼鏡が魔眼封じなのか。特になにも…感じないな。

「…む、ちよつと体が重くなった気がするな。」

「…じゃあ駄目ね。」

「はあ!? なんだ!」

「今ので駄目なら島にも近付けないわ。恐らくゴルゴーンになったことで魔眼は強くなってるだろうし、私の魔眼でそれなら確実に石になつてしまふわ。」

「ではエウリュアレ、お前は大丈夫なのか? 魔眼に耐えられるのか?」

「魔力が回せれば確実に。回せなくても多少は活動が可能だと思うわ。」

「…つくづくお前は可笑しいな。」

「あ、ステンノもできるわよ?」

「ええ。エウリュアレほど魔力の使い方は上手くないから燃費は悪いけどね。事実1ヶ月近くメドゥーサを抑え続けたのだしね。」

「…よくやったな。しかも近接戦でだろう?」

「ええ。まあ結局は魔力が切れて石になつちやつただけど。」

「して、どうやってメドゥーサを倒すのだ?」

「簡単なことよ。高火力の遠距離攻撃を絶え間無く叩き込んで動きを封じて、私が一気に接近して首を落とす。」

「…なるほど、単純で良いな。」

「でしよう？だから、アキレウスはこの戦いには必要無いわ。」

「むう…。」

「それに、ここにいる四人は皆貴方を殺せる奴等よ。せめてヘラクレスに自分より強いと言わせる程度には強くなって出直しなさい。」

「…わかった。だがエウリュアレ！」

「なによ。」

「いつか全力で試合をしてほしい。頼めるだろうか。」

「全力は無理ね。ちょうど良いくらいでやってあげるわ。」

「…ありがとう。」

「…さて！大体纏まったようだし今日は寝るとしよう。明日以降で作戦を詰めていこう。」

「わかったわ。」

…上手く行くと、良いのだが…。

第十三話 聖杯戦争、勃発?

…どうも、エウリュアレよ。

今はゴルゴーンの無力化または殺害のために例の結界宝具、『ばいどくうかん☆帰らぬ場所』を使ってそのなかで色々と物を作っていたのだけれど…。

「うおおおおお!!? 沖田、なんじゃこれはー!?!」

「知らないですよ! なんて変なのが溢れ帰ってるんですか!?! というかこれノツブが何かしたんじゃないんですか!?!」

「わしはなにもしとらんわ! というかここどこなんじゃー!?!」

「知らないですよー!」

ここどこ!?!

「ノツブ?」

どっかのえみやんのあれじゃない?

「ノブ?」

でも 歯車 ない よ?

「ノブノブノツブ?」

ちくわ大明神

「ピカチユーー!」

じゃあ別の人の固有結界とか!

「ノツブノブノブノツブノブ!」

…誰だ今の？
「…ノブ？」

「うるさいですこれ！ノツブ！なんとかかしてください！」

「わしなんか電気鼠が見えたんじやが!? まあよいわかった！三千世界に屍を晒すがいい

…！」

「やめんか！」

ゴツツ☆

「痛あ!?なにをするかこの蛇っ娘！」

「ここ、私の心象世界なんですけど。なんで貴女たちがここにいらっしゃるんですか。」

「あー、エウちゃんじやないですか！久しぶりですね！」

「なんじや、沖田知り合いか？」

「はい！私の弟子ですよ！結構筋が良くて色々教えちゃいました！」

「ふうん…だがわしには勝てそうにないな！だってお主神性持ちじやろ？わし神性特効

あるしネー！」

「ふむ、ではその特効を上回る火力があれば良いわけですか。」

…なん…だと!?
「…ノブ…ノブ!!」

「…は？なあ沖田。いまこやつとんでもないことを言わんかったか？」

「あはははは…。エウちゃんは少々脳筋などころがあるんですよ…。」

「広範囲高火力攻撃…？いや、防御と攻撃を両立するべきか…？ん…。」

「…ところで沖田、こやつの広範囲高火力つてどの程度なんじゃ…？」

「ノツブが火縄銃を打つ感覚で国が一つ消し飛ぶ位ですね。」

「ええ!!ノブウ!!」

「それってあれか!?噂に聞く対国宝具つてやつかの!!」

「本人曰く対軍だそうですよ?」

「なんじゃそりや…。」

「…ええ。ノツブ。」

「…ええ。ノツブ。」

「ええ。ノツブ!」

「…ふむ、ノツブですか。可愛い名前ですね。」

「えつと、そのバカにつられて来たの!ノツブ、えつと、そのバカにつられて来たの!ノブノブノツブツブ!」

「なるほど…うん。あ、ここに住み着いてもいい?その信長の召喚に引き摺られてみんな来てしまったと。」

「うん。あ、ここに住み着いてもいい?ノツブ。ノブ、ノブノブノツブ!」

「おや、こんなところが気に入ったんですか?別にまあ、ここに住むのは構わないですけ

ど…。」

「やった!じゃあちょっと探検してくる!ノツブー!ノブノツブー!」

タタタタタタタタ…

「おや、行つてしまいました。」

「……。」

「……。」

「おや、どうしました？二人とも口をあんどぐりと開けて。」

「いや…お主、あれの言葉がわかるのか？」

「はい。昔似たような生物を飼っていたので。」

「弟子が不思議ちゃんだった…だと!？」

「師匠のほうが変人なので大丈夫ですよ。」

「なんか弟子に罵倒されたあ!？」

「ふはははははははははは！沖田さまあwwwwww」

「貴女も大概ですけどね。」

「なん…じゃと!？」

「それで？なんで貴女たちはここにいるんですか。ノツブは信長の召喚に引き摺られたと言っていましたか。」

「いやー、私達もよくわかってないんですよねえ。」

「うむ。なんか聖杯に呼ばれたから召喚に応じたらここに放り出されたのじゃ。それで

うろろろしとつたら沖田とエンカウントした次の瞬間にはあの珍生物の塊に巻き込まれてここまで運ばれてきた、といった感じじやない！」

「聖杯……？私、そんなものは……あつ。」

「む？何か心当たりがあつたのか!？」

「昔……ふざけて聖杯作つたことがあつた……。」

「聖杯を作つたじゃとお!?!しかも『ふざけて』!?!何もんじやお主い!?!」

「ただのギリシアの鍛冶の女神です。待てよ、じゃあ今つて聖杯戦争中なんですかね?」

「ううむ、どちらかというとかかへのカウンター召喚みたいな感じじやない。事実わしも沖田もマスターがおらぬからな。」

「じゃああととはランサーと四騎士ですか。うーん、ここ結構広いんで探すのは面倒ですね……。」

「……」
青い「……」
ランサー「……」
だー!「……」
ころ「……」
せー!「……」

「うおおああああああああ!?!なんだお前ら!?!やめろ、おろせえええええ!?!」

「おや、この声は……」

「うむ、型月一死んでいるサーヴァントの声じやない。」

「今だと二位じゃないですか?ほら、ステラさんが居ますし。」

「あれは殿堂入りじやろ。」

「ノツブ！」
放はなて！

「「「「ノツブー……」」」」
てえー！

「うおおあああああああああ！」

「たつた六人のノツブに投げられるケルトの大英雄……」

「こうして人間は空へ飛び出したんですね。」

「……なあ、あやつあのままだとあの剣山に突っ込まぬか？」

「……あ、そういえばなんとなく剣を刃を上にして立ててたんですね。」

「うおおおおお！？ちよ、待って！？」

「これ、『ランサーが死んだ！』コメ待機の為の時間ですかね？」

「『↑この人でなし！』コメもじゃな！」

「そんなわけ無いでしょう。さて、では高性能高級釣竿を創造してと。」

「釣竿？お主何するつもりじゃ？」

「もちろんこうするんですよ。釣り針を飛ばして……」

「フイイイイイイイイイッシユ！」

「ぬおおおおおおお！？」

「おお、すごいな！ランサーがこつちまで吹っ飛んできおったぞ！」

「『ふつ。ランサー一匹目フイッシユ。ところでその槍兵、今は何フイッシユ目だ？』」

「うるせえ！今日は釣りなんてしてねえよ！というかなんであいつの台詞なんだ！」

「ランサーが死んでない！」

「このネタ潰し！」

「やかましいわ！なんで俺が死ななきやなんねえんだよ!？」

「そりゃ青いランサーは死ぬものじゃからな！」

「謝れ！全国に居るであろう青いランサーに謝れ！」

「青いランサーなんて他に居ましたっけ？」

「プロトニキはノーカンとしても…あ、あの困りますさんは青いランサーかの？」

「んー、どちらかというと紫では？」

「じゃなあ。」

「にしてもなんでここに来たんですか、ランサー？」

「ん？お前…ライダーか？背え縮んでないか？」

「…なるほど、貴方は冬木から来たんですか。」

「ああ。魚屋でのバイト終わらせて帰る途中であの変なのに捕まってここに連れてこられたんだが…どこだっこ。」

「私の擬似固有結界です。」

「…はあ？いや、ライダークラスは宝具が多いのは知っていたがお前固有結界まで持つ

「「「「「ふおーやー!」」」」」

「きやああああああああ!!」

「またフィツシユするののか?」

「まさか。あんなこと人間にしていいいわけが無いでしょう。」

「なにいい!!俺が人間じゃねえってのかあ!!」

「お、おちるおちるおちるー!」

「おーらーい、おーらーい、そのあたり、そのあたりー。」

ほすっ

「ふにやあ!!」

「はーいオツケーです。」

「誘導の兄ちゃんかお主は。」

「うわあ!!えっ、えっと…取り敢えず下ろしてもらっても…?」

「…ふにやあ。」

「止めてください!!」

「……。」

「…こほん。私はファラオ・ニトクリスです。名を名乗ることを許します。名乗りなさ

い。」

「ドーモ、ニトクリスⅡサン。エウリユアレデス。」

「あー、ランサー、クー・フリーンだ。」

「ふははははは！我こそは第六天魔王、アーチャーの信長である！」

「あー、えつと。セイバーの沖田です。」

「…なんで三騎士がここに揃っているんですか？」

「A：正規の聖杯戦争ではないから。」

「はあ…。ああ、私はキヤスタークラスですよ。それで、エウリユアレ。貴女はクラスは

？」

「…あ、普通にこの時代の生物なまものです。」

「…待ってくれ。今って大体何年頃だ？」

「んー、さあ。ギリシア神話の時代ってところです。」

「過去じゃねえか!?何？俺たちタイムスリップしちゃったってことか!？」

「何いつてんですか。コハエース本編でもタイムスリップはしていましたよ？」

「まじかよ!?!コハエースって魔境だな!？」

「どちらかという都合主義とかそういう感じじゃと思うんじやが。じゃが!」

「タイムスリップ…!それってすごいことじゃないですか!？」

「まあ、意図的にできたら魔法だね。」

「やりました、フアラオ・オジマンディアス……ニトクリスは少し貴方に近付けたのかも
しれません……！」

「なんじや、フアラオって魔法が使えぬとなれぬのか？」

「んなわけないでしょうが。ノツブは常識から見直すといいと思いますよ？」

「あとはアサシンとライダー、バーサーカーだな……。」

「……ノツ………ブ、ノツ………ブ………ブ………！」

「……なんだあれ。」

「ちびノブの上に……黒い鎧？」

「……ふむ、自らの仕事すらも果たせぬか。ならばその首は要らぬな。首を出せ。」

「……ノブウ!?^{うひやあ!?}ノッブノブー!?^{働さますう!?}」

「あのごついのCV: ジョージじやぞあれ。アゾられたりせぬか？」

「……ノブー!^{ついた!}」

「……うむ。よく仕事を果たした。では………」

「首を出せ。」

「……ノブウウウウウ!?^{ええええええええ!}」

「やめたげてください、山の翁。」

「…なに、ただの冗談だ。ハサン・サツバーハ、幽玄の谷から召喚に応じた。」

「「「「「ノ、助た、助かつた…」」」」」

「よろしく願います、キングハサン。」

「ふむ…汝は…いや、今は言うべきではないだろう。うむ、よろしく頼む。」

「では…あとはバーサーカーとライダーですか。」

「ねーねー!
「ノブー!」

「おや、どうしましたか、金のノツブ?」

「探したよ! だけど、どっちも固なかつた!
「ノツブ! ノブ、ノブノブノツブ!」

「なるほど…。」

「恐らく、この結界の外に召喚されたのであろう。一度外へ出て情報を集めるといい。」

「わかりました。あ、その前に皆さん、契約しますか?」

「不要だ。聖杯からの魔力供給がある。」

「なるほど。ではちよつと外に行ってきますね。」

「うむ。」

→「」までエウリュアレ

←一旦信長

「いやー、にしても聖杯戦争で七人のうち五人が揃うとは面白いこともあるものじゃない！」

「そうか？俺が召喚されたとこだと七人全員で戦ったこともあつたぜ？」

「せ、聖杯戦争とは一体…。」

「気にするな。戦いの形式とは日々変化する物。多少変わろうともそれが流れなのであらう。」

「な、なるほど…。」

「…あ、私ってこの中だと一番後輩ですねえ…。お茶でも持つてきましょうか？」

「うむ！良い茶を頼むぞ！」

「ノツブは水道水でいいですね！」

「ひどくね!？」

「それじゃ、ちよつと沸かしてきます！」

「全く沖田は…。」

「それでだ。結局この聖杯戦争ってなんなんだ？いまいち俺はわかってねーんだが。」

「うむ、わしもわからん！」

「なんなんだよ!？」

「今のところわかっていることというと、この聖杯戦争はエウリュアレが作った聖杯によつて起きたもので、完全に意図していない開催って事だけじゃな！」

「聖杯を…作った!？」

「ふむ、それほどか、あの娘は。」

「といっても本当かはわからないがの。実物をみれたわけでもなし。」

「はいはい、お茶ですよー。」

「おお、サンキュー。」

「うむ。」

「あ、ありがとうございます。」

「わしは!？」

「はい、『これ、お茶』。」

「やっぱひどくね!？」

「嘘ですよ。はい。」

「おお、流石沖田じゃな！」

「手のひらを返すのが早いですよノツブ。」

「…旨いなこれ!？」

「…良い。」

「これが極東のお茶…。体が暖まりますね。」

「大絶賛じやの沖田！」

「いやー、照れますねえ。」

「あー、そんでだ。結局今のところエウリュアレ待ちっこといいのか？」

「まあ、そうじゃな。」

「あ、じゃあちよつとお茶菓子持ってきます。」

「…ふと思ったのですがどこから持ってくるのですか？」

「あー、なぜかあつたキッチン部屋にありました。食べても良い、と書いた紙も丁寧に置いてあつたので良いかと。」

「…よし！どうせエウリュアレのやつが戻って来るまで暇なんじゃし、雑談とするかの！」

「ノツブは壁にでも語っていてください。」

「やっぱわしにひどくね!？」

→ままで信長

←ここからエウリュアレー！

「ああ、やっと見つけたぞエウリュアレ。」

「おや、アテナ。どうしたの？」

「うむ、メドゥーサについての追加情報だ。ヘラの掛けた呪いは成長する呪いだけだそうだ。」

「…でも今のゴルゴーンはバーサークしているのでは？」

「うむ。つまりだ。」

「…別のなにかもある、ということですか？」

「ああ。それについても調査をすることになった。それだけだ。」

「わかりました。色々と考えておきます。」

…ゴルゴーンは現在狂化状態って話だったけれど…、あ、もしかして私の聖杯とか？

…うわあ。これ私のせいじゃね？

…うわあ。

…うん、絶対に解決しなきゃ。

第一四話

襲撃

聖杯戦争。

それは魔術師たちが万能の願望器、ゼウスの血が注がれたという奇跡の器である聖杯を手に入れるために戦うその名の通りの『戦争』である。

参加権を得たものはマスターとなり、過去の『英雄』を一人使い魔として召喚し、戦う。

七人のマスターはそれぞれ『クラス』を持って召喚された英雄、『英霊』または『サーヴァント』と呼ばれる存在を役とする。その『クラス』は通常は七つ。剣士である『セイバー』、槍兵である『ランサー』、弓兵である『アーチャー』、騎兵、騎乗兵である『ライダー』、暗殺者である『アサシン』、魔術師である『キャスター』、そして狂った戦士『バースーカー』。

この七つのクラスのサーヴァントによって聖杯戦争は行われる。

その聖杯戦争でも特に有名であるのが、日本の冬木における『第五次聖杯戦争』rate/stay night であ

ろう。

この聖杯戦争ではさまざまな大英雄が召喚されたためだ。イギリスの騎士王アーサー、ケルトの大英雄クー・フーリン、裏切りの魔女メデア、そしてギリシアの大英雄ヘラクレス。

この聖杯戦争は各々が聖杯を求めてか、それか自らの目的のため戦った。そしてその記録は他のものに比べればしつかりと残っている。故に有名なのである。

…さて、ここまではいいでしょう。聖杯戦争とは聖杯を求めて戦うものであり、またそうでなくとも何かしらの目的があつて召喚されるのである。

しかし。

しかしだ。よく考えてほしい。

何事にも例外というものはあるのだ。いや、例外を作るために基本を作っているような気もしなくはないが例外があるのだ。ああ、ある。あるのだ！

それが今回の、ギリシアにて偶発的におきた聖杯戦争である。なにかが例外なのか。それは簡単な事である。

全員、特に目的も願ひも無いのである。

「…それで？結局何が言いたいんじゃない？」

「聖杯に自爆機構つけてあるんで吹き飛ばしていいですかね？」

「脈絡無さすぎねえか!？」

「いやー、なにか願ひ事があるのであればそのままでもよかつたんですけど、みんな特に無いんでしょ？」

「まあ…そうじゃな。わざわざ過去で叶えてものう。場合によつてはこの世界線に囚われてしまふかもしれないの。」

「まあ、そうですね。願うとしてもこの病弱なのを直してほしい、とかですかねえ…。」

「あ、確かに。」

「キヤットはご主人と一緒に居ればよいぞ。」

あ、そうそう。あの後タマモキヤットと黒髭が遅れて召喚されました。ただくろひーがちよつと真面目め。

「私も特にありませんね。自力で何とかしなければフアラオ失格です。」

「フアラオつて大変な仕事なんじゃのう。」

「ですなえ。」

「我に願ひは無い。そもそも聖杯など信用に足るものに無し。」

「俺はさつさと帰りてえ。あの坊主の飯が食いてえ。いや、ステンノの飯もうめえんだけどよ、どうもあの日本の飯が食いてえ。というか米が食いてえ。」

「…餌付けされたワンコ…。」

「ああん？なんつった!？」

「なんでもないよ!」

「拙者としてはステンノちゃんを眺めていられるのならなんでもいいでござる。ステンノちゃんまじ女神。」

「なんじゃ、手は出さんのか?」

「…死ぬ未来しか見えないでござる。いや、なんなんだよあの強さ。正直俺が本気で殺しに掛かっても軽くないなされるぞ。」

「くろひーでも勝てないなら私では勝てないかな。」

「うわあ、あのティーチをこうまで言わせるってことは相当なんですわ…。というかこの中で最強の貴女は黙っていてください。」

「あら、そんなこと無いわよ。まだまだ私は弱いわ。メドウーサを…止められなかったし。」

「まだ成長する気だぞこの女神…!？」

「とうかさあ!あんたのその槍はなんなんですかねえ!俺のゲイ・ボルクが完全に下位互換じゃねーですかよお!」

「それに関しては私に文句を言われても困るわ。エウリュアレに言つてちょうだい。」

「ちよつと気合いを入れて作ったらそうだったのよ。許してほしいわ。」

「というかあれなんですよねえ、エウちゃんってここの全員の上位互換に近いんですね。」

「ああー、確かにそうですね。拙者とかほんと必要ないんじゃないか?」

「強く生きるのだな!ちなみにキャットは料理と変化はご主人よりも上手いぞ!」

「まあ…私は料理の腕は普通だし。」

「でも普通に美味しいですね。」

「ありがと、ニトクリス。」

「…なあ、エウリユアレ。」

「なに?」

「ゼウスから伝言だ。『我が予言の下、怪物ゴルゴンとなったメドゥーサを撃破し、英雄となるのだ!』だ、そうだ。」

「…。」

あ、ちよつと思いついた。

ボオツ!

「エウちゃんが燃えたあ!?!」

「いやまて沖田!あれを見るのじゃ!」

「…。」

「あら、昔の姿に戻ってるわね。懐かしいわ。」

「…。」

「…エウリュアレ？」

「嫌よ。」

「わざわざその姿になって言うことか!？」

「ええ！よし、じゃあ戻ろうかしら。」

ボオッ！

「しかもその為だけかよ!？」

「ネタには全力が基本よ。」

「しかし…嫌とはどう言うことだ？」

「簡単なことよ。英雄つてのはね、英雄になろうとした瞬間に失格なのよ。英雄になれなんて私には無理よ。」

「なるほど、面白いことを言うな。」

「ま、とある人の受け売りだけどね。だから私は英雄は目指さないわよー。」

なんかタイトル無視とか受信したけどいいのよ。気にはいけないのだ！

「…なるほど。確かにそうだな。俺も贖罪のために必死に生きていたらこうなっていた

な。」

「私とか新撰組で誠の旗のもと人を斬ってただけの人切りですしねー!」

「拙者とか英雄じゃないでござる。ただの悪党ですし?」

「キャットなどなにもしていないぞ! 英霊とは適当なのだな!」

「…だが、メドウーサは倒すのだろうか?」

「ええ。それが、姉としての役目だろうから。」

「私も、それに参加させて貰えないでしょうか。」

「…その声は、もしや。」

健啖家で本編ではまともだけどそれ以外だとひどいことになっているあの…!

「サーヴァント、ルーラー。この正しきカタチから外れた聖杯大戦の調停者です。」

そう! ジャンヌ・ダルクだー! かぶさばではランサーにも呆れられてたジャンヌです

よ! いえーい、ジルさん見てるー?

＼ジャンヌウウウ!／

「るうらあ? なあ沖田、なんじゃそれ。」

「知りませんよ。私横文字そこまで強いわけではないんで。」

「ルーラーって言やあ、中立の立ち位置なんじゃなかったか？こつちに着いたら立場上駄目なんじゃあねえのか？」

「自らの職務すらも果たせぬその首：置いていけ。」

「アサシン氏、別の人が混ざっているでござるよ。それ妖怪首置いてけですぞ。」

「…。」

「…睨まないでほしいですぞ。」

「…不味いわね。」

「どうしたのですか、エウリユアレ？」

「ルーラー、貴女今『聖杯大戦』って言ったわよね。」

「え、はい。そうですが…。」

「他の七騎ははぐれ？それとも集団？」

「集団で、どこかの島に少し前には居ましたが…。」

「やっぱり！総員、警戒態勢！」

「な、なんでじゃ!?!」

「了解した。ご主人は必ず守ろう。」

「…なるほど。こりゃあ面倒だな。」

「なに、拙者の最後の戦いの時よりはましでござるよ。」

「え、え!? な、なんですか!？」

「ルーラー! 聖水あげるからサーヴァントの位置を出して! ヘラクレスとアテナは変なのが来たらいつでも叩き潰せるようにしておいて!」

「よくわからんが…わかった。」

「ふっ。お前の作った『女神イージス・エウリュアレーの盾』、やっと仕事のようだな。」

「じいじ、敵のサーヴァントが来たら首斬っていいから!」

「請け負った。」

「結界張るわ! ステンノ、補助お願い!」

「ええ!」

「サーヴァントの位置…ここから12km東、七人全員居ます!」

宝具によっちゃ届くぞそれ!？」

「移動は!？」

「今はしていません!」

「ルーラー、外に出て宝具開帳をいつでもできる態勢でいて! 位置は常に更新して! 遠距離宝具または武器持ちは準備をお願い! 近接のみは護衛をお願い!」

「わかりました!」

「なんじやなんじやあ!?! どう言うことか説明せんか!」

「なんでサーヴァントなのにわからないんですか。馬鹿なんですか？」

「やっぱりお主わしに辛辣じゃなあ!？」

「これは七人のバトルロイヤルである聖杯戦争じゃなくて七対七の聖杯大戦だったんですよ。なのでサーヴァントが他にもいるんです。」

「な、なんじゃってー!？」

「結界構築完了!これで侵入は感知できるし、ある程度の攻撃は防げるわ!」

「それほんとに結界か!？」

「結界だとおもうわ!」

「異常な魔力を感じ!敵宝具、来るぞ!」

くそ、やっぱりか!

「ルーラー!」

「はい!宝具開帳!我が旗よ、我が同胞を守りたまえ!『我が神はここにありて』!」
リユミノジテ・エテルネツル

ドガアアアアアン!

「まーた髪の話をしとる…」

「へあーじゃなくてごつどの方ですよノツブ。」

「なるほど、なら寺を焼かねばならぬな!」

「特に理由の無い焼き討ちが延暦寺を襲う!やっぱりノツブって最低ですね!」

「ひどくね!？」

「ルーラー! 宝具について情報! あと敵の位置!」

「敵宝具は恐らく対軍宝具、黒いビームでした! 敵は…七名中一人を残して此方へ来ています!」

「遠方の空に…船だど!? 攻撃が来るぞ!」

「ルーラー!」

「あの規模は無理です! 旗が持ちません!」

「ならこの旗使つて! アテナ、防御!」

「わかっている! これは我が友が造りし最強の盾! 『女神の盾』!」

ドガガガガガアアアアン!

「おい、おいおいおい。ありやあ、あの船は…!」

「どうしましたか、ティーチさん!？」

「ありやあエル・ドラゴか! ははは、なんてこった! エウリユアレ! 俺あ船で飛ぶぞ!」

「わかったわ! ただ私の艦隊も出すからね!」

「いいぜ! 世紀の大海戦といこうじゃねえか! はははははははははははははははは! いくぜえ!

『アン女王クイーンアンズリベソの復讐』!」

「空をも征すは我が艦隊! 『旭の旗の下に』!」

「敵サーヴァント、視認しました！」

「ならば先手必勝じゃ！ 三千世界に屍を晒すがいい……！ 天魔轟臨！ これが魔王の

『^{三段撃ち}三千世界』じゃあゝ！』

「ついでです！ 可愛い死霊がぎざーん、ぎざーん！ 『^{アンブ、ネブ、タン、ジエセル}冥鏡宝典』！」

「な、一人強硬突破してきました！」

「ルーラー！ あれのクラスと真名は!?」

「サーヴァント、クラスセイバー！ 真名：アルトリア・ペンドラゴン！」

「アーサー王か！ でもなんか黒いわよ!? あれオルタじゃない!?」

「宝具来るぞ！」

「卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め！ 『^{エクスカリバー・モルガーン}約束された勝利の剣』！」

「正面から行かせてもらおうわ！ 第一封印解放！ 落ちし星の力よ、これでまともな人が救える気はしないけどその力を解放せよ！ 『^{ソード、オブ、シユール、テイニングスター}光の剣：第一解放』！」

ドガアアアアアーン！

「敵の宝具を宝具で相殺するとかふざけてんのかああ!?」

「ヘラクレス！」

「了解した。黒騎士よ、足止めさせてもらおう。」

「ヘラクレスだと…、良かろう。全力で行かせてもらう。『卑王鉄槌』！」

「行くぞ！『射殺す百頭』！」

「初手奥義だど!?!」

「敵艦隊接近！右回頭85お！左砲戦よおい！さあ、いくぜえ！『アン女王の復讐』！
一斉射あ！」

ドンドンドンドンドン…！

「あははははは！いいねいいね！やっぱこうやってぱーつと撃つてこそ海賊だあ！野郎ども、出番だよ！亡霊の王、嵐の夜、ワイルドハントの始まりだあ！」

ドンドンドンドンドン…！

「諸元入力完了！大石司令長官、いつでも撃てます！」

「全艦、いつでも砲撃できます。にしても司令長官…まさか日本武尊が空を飛ぶとは考えてもいませんでしたな。」

「全くだ。それもフランシス・ドレイクと戦うことになるなど考えたこともなかったさ。」

…さて、雑談はここまでだ。全砲一斉射撃…つてえー！」

「撃て！」

ドオオオオオオン！

「上はどんぱち始めたわね！さあ、私たちも行くわよ！」

「了解。さあ、いくわよ『白雷』！」

「残りの敵真名看破しました！ランサー、メドゥーサー！アーチャー、エミヤ！アサシン、カミラ！キャスター、メフィストフェレス！バーサーカー、クー・フリーンです！」

「なに!?メドゥーサーでランサーなら幼女では無いのか!?というかエミヤもクー・フリーンもオルタだし！」

「反逆のうんたらかんたら！とりあえず沖田さんはあの鎌持つてるやつを相手しますねー。」

「ならば私はあの…かーみら？を相手しよう。なに、エウリュアレの盾があれば問題ない。」

「わかったわ！」

「俺は俺の相手をするぞ。というかあれ、俺じゃあねえような気もするがまあいいか。バーサーカーの俺つてもつとひどいはずなんだが…。」

「わしは適当に援護するぞ！誤射しても許してくれ！」

「では、私とステンノであの…えっと、仮名ボブを相手します！」

「あんなのエミヤじゃないわ！銃もつただのボブミヤよ！」

「だったら殺しやいいだろ！」

「そんなあ……。」

「よし、ルーラーは高火力の攻撃を防いでおいて！キャット！私たちはめっふいいーを潰すわよ！」

「了解した。タマモ地獄を見せてやろう！にやははははははは！」

戦闘は始まったばかりだ！

第十五話 翁さん大勝利！

—— 戦いは、終わった。

長く苦しい戦いだった…。

「…NKKT…」

「いやー、本当に長く苦しい戦いでしたねえ!? ワタクシもあのあまりに一方的な虐殺っぷりは悪魔の血が騒いでしまいましたあ! いや、ワタクシは善のメツファイーなので行動はしませんけどねえ!」

「ご主人、この喧しいチクタクを消し飛ばしても良いか?」

「一応味方だからだめ。」

「うひゃひゃひゃひゃひゃ! 『一応』味方ですしね!? あでも裏切ったらばっさり切り捨てて構いませんよお?」

「当たり前だ。ご主人を裏切るなど言語道断だ。」

…うん、どうしてこうなったのか。軽く説明しよう。

まあ、結論から言うところの圧勝でした。まず三人ほどじいじが張り切つてさくさく（比喩にあらず）とやっちゃいました。なんか久々の首だつたらしくすぐくテンションが高かったです。クー・フリーンオルタの首かつさばいたときとか『毎度毎度、お前の槍はなぜ外れるのか…』ってどこぞの麻婆ボイスで言つてたし。

そんなかんじのノリでじいじがクー・フリーンオルタ、ランサーメドゥーサオルタ（大人）、カーミラさんをさくさくつと（比喩ではない）殺つてしまいました。流石グラランドアサシンは格が違った。

アルトリアオルタは…なんというかすごいことになっていました。

く回想く

「初手奥義だど!? くつ、うおおおおお!」

墜ちた聖剣に全力の魔力を流し、魔力放出も使つてアルトリア自身の持ちうる全ての力を使つて神速の九連撃を迎え撃つ。

ギャリン!

星の聖剣と岩の大剣が一瞬のうちに九度ぶつかり、音と共に火花が散つていく。

後ろへ吹き飛ばされながらも、魔力放出で無理矢理体勢を建て直した。

——アルトリアは一つ、安堵した。ヘラクレスの奥義たる『射殺す百頭』^{ナインライプス}。それをギリギリとはいえども無傷で耐え抜いたのだ。これ以上のものは恐らく無いのはわかっている。ならばこの戦い、勝てる。そう、考えたのだ。

——だが。

『斬り殺す一頭』^{ワンライフ}。

一拍にて、一瞬にて振り下ろされた大剣によつて、霊基ごと二つに切り裂かれた。

「——かふつ。」

黒き騎士王が、膝をつく。

「…見事だった、黒き戦士よ。」

岩が如き英雄は、騎士王を心から賞賛する。これまでに『射殺す百頭』を打ち破つた物は三人しか居なかつたのだ。それをこの騎士王は、打ち破つた。たつた数分の戦いとはいえ、賞賛を送るに値しよう。

「…ふつ。見知つたものと、思っていたが。実際は形と同じ、別の存在だったか。」

「なんのことは知らんが、敵の前で油断するのは即ち死である。ただけは忠告しておく。…にしても。」

「…なんだ？」

「…なぜ、お前はエウリュアレと同じ赤い血なのだ？」

「…は？」

「血とは黒いものだろう。だからエウリュアレだけが特別だと思っていたのだが…どういふことなのだ？」

「…お前の血は、黒いのか？」

「ああ。」

騎士王は思案し、何かを思い付き…そして、それを心の底にしまった。

「なるほど…もしかすると、この世界は…虚構なのかもしれないな。」

「…どういふことだ？」

「演者たる貴様がそれを知るべきではないさ。」

それを言い終わると共に、黒き騎士王の体は光の粒子となっていく。

「では…さらば、だ。」

「…ああ。さらばだ、黒き戦士。」

く回想終わりく

てなかんじ。

それでボブミヤは…うん、どうもステンノと一緒にギャグ時空に捕まってしまったよ
うなんだ。

回想…いる？あ、いる。はい。

くボブな回想く

「止まりなさい、えつと…えつと、ボブさん！」

ニトクリスが叫ぶ。

「…。」

「…。」

「…。」

ニトクリスは杖を、ステンノは槍を、エミヤオルタ（以下デミヤとする）は二挺の拳銃を油断なく構える。

——無言の時間が過ぎる。遠くの砲撃の音が木霊する。

「…。」

「な、なんですか?」

「ボブとは…誰だ?」

「…え、貴方のことですけど…」

「…そうか。」

よく分からない空気がその場を包む。既にポンコツしているニトクリスはまあいいとしてもボブを否定しないデミヤも既にギャグ時空に捕まっているのだろう。だめだこの戦闘早くなんとかしないと。」

突然、ステンノが槍を仕舞いナイフを取り出す。

「来なさい、ベネット。銃なんて捨ててかかっつきなさい。」

そして、挑発する。どこぞの元コマンドーの如く。

「ボブじゃあなかったのか…?」

悲しいかな、デミヤのツツコミは誰にも聞こえなかった。

「どうしたベネット、怖いのかしら?」

「…安い挑発だな。だが、買ってやろう。」

「てめえなんか怖かねえ! (銃を投げながら)」

野郎オブクラッシャアアアア!」

銃と一緒にキャラクターも投げてしまったようだ。

…うん、戦闘シーンはカットでいいね！ニコニコとかでコマンドーの戦闘シーンでも見るといいよ！もちろんコマンドー本編を視聴するのも良いぞ！なに？手抜き？気にするな！

…まあ色々ありました。

最後はステンノが槍をデミヤに突き刺して終わりつて感じでしたとき。

…デミヤベネット説…うん、無いか。

く回想終わりく

ボブミヤ、扱いが悪いですね。

ちなみにニトクリスは涙目で震えています。女神怖いとか言いながら。ははは、女神なんてそんなものだよ？

ドレイク船長は…うん、悲しいかな、ロ号弾——今で言う燃料気化弾頭弾——で船団ごと消しとんでしまいました。それに耐えたとしても…ねえ？近代軍艦と木造帆船じゃあ戦いにはならんよ。

そして最後にめっふいーなのですが…。

「おいご主人。こつちのす巻きにしたチクタクは殺してもいいか?」

「まだだめ。悪のめつふいを殺しちゃうと善のめつふいも死んじゃうから。」

『『まだ』ですかあ! 確かに正しい判断ですねえ! もしワタクシが逃げたときも悪のメツフィーを殺せばいいわけですからあ! アハハハ! さながらワタクシはトラファルガー・ローに心臓をとられた状態と言ったところですかねえ!』」

…うん、すげえうるせえ。

キャットと私でこいつと戦っていたら、突然二人に分裂してですね?

善のめつふいー悪のめつふいーを自称したのでとりあえず悪のめつふいーをす巻きにしたと言った感じです。

ナニコレ。

「…とりあえず情報を吐いてください。全て吐いたら殺しますので。」

「まさかの死刑宣告とききましたかあ! 戦力としてのメツフィーはいりませんかあ!」

「要らないわ。さあ、吐け。」

「ですよねえ。私星3のキャスターですし? 同じところにクー・フリーンさんが居ますから影薄いですしい!?! 子安ボイスはアンデルセンさんがいますしい!?!」

「…うん、なんかごめんさい。というわけで吐け。」

「辛辣! もう少し優しくしてくれてもいいんですけどねえ!?!…まあいいでしょう。ここ

からは善のマジメツフィーと行きましょう！まずこの聖杯大戦ですがあ、これはメドゥーサさんが手に入れた聖杯によって行われていきますう。」

「やつぱりか…。」

「ええ！聖杯とは名ばかりで明らかにあれの形は茶碗な気がしましたが役割は十二分に發揮していたようでしてえ？メドゥーサチームとそれ以外と言った感じで召喚されたみたいなんです。まあ、それ以外のサーヴァントは当たり前のように一ヶ所に集中して召喚されてしまいましたからこっちは全滅したわけなんですけどねえ!?ギヤハハハハハハ！」

「それで？なんでメドゥーサはこんなことを？」

「なぜ？それはワタクシにも完全にはわかりませんねえ。此方のサーヴァントは皆命令に従うか適当にやるタイプばかりでしたしい？メドゥーサさんはセイバーの食事の作成のせいで不定の狂気を食らったみたいですし？流石にこの時代にハンバーガーをたんまり超越せつて言うのは厳しいですよええ。」

「他に、何か情報は？」

「…あー、そういえば、『ヘラを墜とす』とは言っていたような気がしますねえ。ヘラつてあのヘラですよねえ？それ大丈夫なんですか？」

「…ハハッ。」

「まあ貴女ならなんとかなりそうですねえ。さて、ワタクシが話せることはこの程度ですけどもおお?ああ、一体ワタクシはどうなってしまうんですかあ?」

「:そう。ならいいわ。とりあえず貴方は待機していなさい。その悪のめっふいも貴方に任せるから。」

「おやおやおやあ!?!ワタクシ善のメツフィーとはいえども結局は悪魔ですよお!?!いいんですかあ!?!」

「まあ、そのときは貴方達が二人とも消し飛ぶだけだから。」

「あひやひやひやひやひや!たしかにそうなりますよねえ!いやー、こういうのを恐怖統治って言うんですかねえ!?!まあまだ死にたくはないのでおとなしくしていますともおー!」

「ならよし。何かあったら言いなさい。ある程度なら叶えてあげるから。」

「万能の願望器を作った女神に叶えてもらうとか、どんなことでも叶っちゃいそうで頼むのが怖いですねえ!?!」

「じゃあいいわよー。」

「なにかあつたら言いますのでえ?今はいいですううう!」

「はいはい。」

.....

「……というわけで、アーチャー、ランサー、ヘラクレス、アテナ。」

部屋のなかにエウリュアレの声が響く。恐らく普通の男が聞いたのなら魅了がかか
るようなきれいな声。

「……これから、聖杯爆破大作戦について話し合おうかと思います。」

……その声で、突拍子もないことをいい放ったが。

「いや、どうしてそうなった。」

青い槍兵がツツコミを入れる。よくやった。そしてまだブーメランサーはされてい
なかつた。

「いえ、メドゥーサの狂気の原因は先ほどヘラクレスが倒したあの黒騎士王だと言うこ
とがわかつたので、あとは聖杯を手に入れて、メドゥーサを元に戻した上で吹き飛ばせ
ば万事解決ダナー、と思いい付いたので。」

「ん？ならばここからさっさと聖杯を吹き飛ばせばよいではないか？」

「いえ、それではいけません。あくまで可能性ではありますが、聖杯をメドゥーサが取り
込んでしまっている可能性があるので。」

「なるほどのう。確かにそれでメドゥーサが死んでしまえば元も子もあるまい。」

「はい。というわけでどうします？ 私にやらせるといきあたりばつたりになりますけど。」

「…以外とそれでいいんじゃないか？ なにせ今は情報がねえ。ライダー…じゃねえ、メドゥーサの発狂も一時的なのかそれとも永続的なのかもわからねえしよ？」

「まあ、そうなんですけどねー。」

「それに、メドゥーサの魔眼の有効範囲に石化することなく突入できるのはお前とスティンノだけなんだろ？ なら他が遠距離で援護してお前らが突入するだけだろ。」

「あう。」

「…わかったか？」

「はい。」

「んじや、そういうことだしさっさと寝よう。俺あ疲れた！」

「ええ、おやすみ。」

「おうよー。」

「…私も寝るわ。」

「うむ。」

.....

——目が覚める。

また変な夢の続きを見ていた。

「ここは、俺の部屋で、家は、武家屋敷。うん。確かに俺の生きてきた世界だ。夢じゃない。」

「……どうあがいても夢でしかないよなあ、あれ……。エウリユアレがああなるとか、ヘラクレスが当たり前のようにぼこぼこにされるとか、ギルガメツシユがあんなにご機嫌とか、遠坂が女神とか……。うん、どれも絶対にあり得ないよなあ。特に一番最後。」

ふと時計を見ればもう七時だ。いくら今日が日曜日で今日の料理当番が俺じゃなくてもそろそろ起きるべきだろう。

顔を洗って身だしなみを整えて、襖を開けて居間へ入る。

「おはようございます、シロウ。今日は起きるのが遅かったですね。」

「あ、お兄ちゃんおはよ——！」

「おはよ、シロウ。」

「おはよう、セラ、イリヤ、リズ。」

そういうしながら、座布団に座ってお茶を飲む。

…いつも通りの日曜日の風景だ。セラが料理をされていて、イリヤとリズはニチアサを見ている。この時間だとそろそろ――

「おはようございます、シロウ、セラ。この臭いは…今日の朝御飯は焼き魚と味噌汁といったところですか?」

「流石セイバーさんですね。その通りです。」

「ふふふ、私の鼻はごまかせません!」

そう言つてセイバーはふんす!と鼻をならす。

「うん、おはようセイバー。」

「おはようございます…。」

「おう、ライダーもおはよう。眠そうだけどどうしたんだ?」

「いえ…キノ…じゃなくて小説を読んでいたらいつの間にか寝るのが遅くなつていてです…。」

「なるほどな。確かにキノは面白いけどほどほどにな?」

「はい…。」

「…そういうえばランサーはどうしたんだ?」

「いえ、帰っていないようですが。」

「へえ…珍しいな。あいつが何も言わずに帰ってこないなんて。」

あいつは大抵帰りが遅くなるなら何か言ってから行くんだがなあ。あー、どっかで事故ったとかか？

「まあ、大方どこかで事故に巻き込まれているのでしよう。いつものことですし。」

…まあ、同じ事を考えるよなあ…。

「ライダー…、いくらランサーでもそこまで酷くは無いだろ。多分。だって今月はすでに20回以上事故ってるぞ？」

「まあ、そうですねえ。あつても月に20回前後が普通ですからね。これ以上は…多分。」

「そうそう。ランサーは丈夫だから医療費もそこまでかからないし特に問題も無いしなあ。事故も大抵は起こした方の過失が多いしな。」

「シロウ、ライダーさん。ご飯が出来たので運んでくれますか？」

「おう。行くぞ、ライダー。」

「わかりました、シロウ。」

.....

「…おや、今日は魚かい?」

「あらあら、セラが和食を作るなんて珍しいわね。」

「ご飯が並ぶ頃にじいさんとアイリさんが起きてくる。」

「おはようございます、アイリスフィール、キリツグ。この前シロウに教えてもらったので挑戦してみましたのですが…。」

「おはよう、じいさんにアイリさん。」

「おはよう土郎。」

「おはよう。」

「…そうだ、シロウ。今日の昼から買い出しに行くので同行をお願いしますか?」

「ああ、わかった。俺だけで大丈夫か?」

「はい。そこまで沢山買い込むわけではないので。」

「りよーかい。」

「そういえばお兄ちゃん、最近起きるのが遅い日があるけど調子でも悪いの?」

「んー? あー、いや、特に体調が悪いわけではないんだが、最近変な夢を見るんだよ。」

「夢? どんな夢なの?」

「なんでそんなに興味津々なんだイリヤ…?」

「なんとというか…ギヤグ？」

「へ？」

「夢なのにどうも色々としつかりとした舞台設定がされているみたいでな？ 舞台が古代ギリシアで主人公が女神エウリュアレなんだよ。」

ピシッ

何かが固まった音がした。

音のした方向に顔を向けてみると、ライダーが空っぽのご飯茶碗を少し持ち上げた状態で固まっていた。そういえばいじめられてたんだっけか。ごめんな、ライダー。

「へー。でも、エウリュアレってただの弱い女神だったんじゃないの？ ギヤグって…？」

「ああ、ギヤグなんだよ。まずエウリュアレが成長する。」

パキッ

何かにひびが入った音がする。やっぱりライダーだった。

「…ライダー、これ夢だからな？」

「…え、あ、はい。えっと…ちよつと体調が悪いみたいなので部屋に居ますので。何かあつたら呼んでください。」

「わかった。」

「それでだ。そのエウリュアレはな…ヘラクレスよりも強いんだ。」

ズーン!

廊下で何かが転けた音がしたが気にしなくてもいいだろう。

「シロウ…エウリュアレは美の女神で、かつ最も弱い存在の筈ですが。」

「それがな、夢に出てくるエウリュアレは魔術で剣とか銃とかを作って戦うんだよ。それで鍛冶の女神を自称してるんだ。」

ドン ドサドサドサ…

ライダーの部屋の方角から何かが崩れた音が聞こえたが気のせいだろう。あのライダーがいちいちリアクションをとるわけがないしな。

「訳がわからないですね、それ…。」

セラに呆れられてしまった。

「夢のまんまなんだけどなあ…。あ、あと海に落ちたら古代メソポタミアの冥界に落ちて、外見が金髪になった遠坂の女神エレシユキガルと、すごいご機嫌なギルガメッシュと楽しく過ごしていた時もあつたな。」

ドカーン

何かが爆発した音が聞こえるが誰も気にしない。意外と俺にしか聞こえていないとかだろうか。というか何が吹き飛んだ…?

「あのギルガメツシュが…!? シロウ、その夢はあり得ません。あのこの世全てが俺のもの、なギルガメツシュが、神は見たら即殺するようなあのギルガメツシュが女神と仲良くするなんてありえませんか！」

すげえ反論するな、セイバー…。

「だから明らかに夢なんだろう？ あとあつたことと言うと…あー、すごいスタイルが良いことだな。」

「…スタイル？」

「ああ。なぜか具体的な数値まであるのがよくわからないんだが。」

…ん？…なんでセラはこつちを睨んでるんだ…？

「それで？ その数値とは？」

…セラさーん？…なんでそれを聞くんですかねー？

「え、えつと…確か身長が174cm、体重が57.5kgだったと。」

「ライダーよりも大きいですね、それ。」

「ああ。外見もライダーそっくりだ。テンションとかノリとかはそつちの方がいいんだが。」

「…スリーサイズも夢の中にあつたのですか？」

「…えつと…セラ、それ言わなきゃ駄目か？」

「はい。シロウが普段どう言うことを考えているのかわかるかもしれないから、それを元にシロウが淫らな行為に走らないよう対策をすることができますし。(シロウの好みの体型もわかるかもしれませんが…)」

「いや、そんなことしない。でもほら、夢とはいえ女性の気にするとこらだし…なあ、セイバー?」

「私は知りたいですね。」

…え?

「…イ、イリヤは…」

「わたしも知りたい…かな?」

…あれ?

「ア、アイリさん…」

「えー? 私も知りたいわー? だって思春期の男子がどういうことを妄想しているのか気になるもの! キリツグはそういうものはないもの。」

「あ、ははははは。その頃は色々と大変だったからね…。」

ああ、じいさんの目が死んだ…。

「…リズ…」

「…だいじよぶ、シロウ。私はシロウがどんな性癖でも大丈夫だから。」

取り付く島どころか藁すらもない…。

「…はい、言います…。スリーサイズは上から92、60、94だそうです…。」

デブーン

「どこかで某龍球で星が消えたときのような音が聞こえた気がするが…なんか外明るくないか？気のせいか。」

「…私と胸は同じだけどおしりが大きい。つまりシロウが胸派ならイケる。」

別に俺の好みというわけではないんだが…。というかセラ、なんで世界に裏切られたかのような表情なんだ…？

「…シロウ、胸はやっぱり大切なんですか…？」

セイバーは涙目だし…。

「…いや、セイバー。俺は性格とか相性だと思うぞ？」

あ、セラが復活した。

「うん、まあ俺の好みというわけではないんだと思う。…多分。」

「…ええ、きつとそうですね。それで、その夢のせいでなにか不調になることはありませんか？」

「いや？最初にもいったが特にないぞ。」

「わかりました。もしなにかあればすぐにいつてくださいなね。」

「おう、わかったよセラ。」

「ええ。あ、デザートにプリンがあるのですが食べますか?」

「プリン! はい! 食べます!」

「あ、わたしもわたしも!」

「わたしもいただこうかしら。」

「僕はいいかな。あ、お茶はあるかい?」

「今から沸かしますよ。」

「ならセラはみんなと一緒にプリンを食べていてくれ。俺が沸かすからさ。」

「ですが…」

「いいっていいって。のんびりしてろ。」

セラがプリンを楽しみにしているのも知ってるしな。

「…わかりました。お言葉に甘えさせてもらいます。」

「うむ。」

…そういえばランサーのやつどこ行ったんだらうなあ。

番外編 外からエウを見てみようEX！おまけ付き！

・ステノン

あら、久しぶり！元気にしていたかしら？…うん、それならよし！

エウリュアレのことでしょう？ええ、やっと帰ってきたわね。少し遅かったけど…。

メドウーサはああなつてしまったし、ね？それでも帰ってきてくれたことはとても嬉しいわ。

ただ…成長しすぎじゃないかしら？特に胸とか。え？別に憧れたりはしないわよ？小さくても不便ではないし、力よりも速度が中心の私だと大きくなったら逆に戦えないもの。

にしても…貴方つてイケメンね。しかもかなりの手練れでしょう？イケメンで強いよね、嫌いじゃないわ！

…うひゃっ!?なんか寒気がしたわ…。やっぱり慣れないことは言うものじゃないわね。うん。

・ヘラクレス

おや、君か。元気かい? うんうん。子供は元気なのが一番だ!

そういえば、最近新しい技を開発したんだが、意見をくれないか? ああ。『斬り殺す一頭』という技なんだが、少ししつくりこなくてな。

なに、エウリュアレか? ああ、生きていたな。やはりあいつは…本当に何者なんだろ
うな。冥界に落ちていたとか言っていたいなあ。女神とは一体…。

メドゥーサは…どうにかなるといいのだが。あいつが死んでしまつたらステンノや
エウリュアレは悲しむだろう。やはりヘラはどうにかせねばならぬな。

む? アテナが呼んでいるな。すまんがここまでだ。

・エミヤ

む? どうした? ランサーなら見ていないが…。おかげでサバがよく釣れる。…む、サ
バ68匹目フィッシュ。

なに? エウリュアレ? なぜお前が…ああ、そういえばあっちにもなぜか居たな、お前
は。なんだ、インタビューアーの真似事か?…まあいい。

エウリュアレだが、どうやら聖杯戦争が関わっているようだ。あの世界が出来たのは
第四次聖杯戦争終結時だということがわかった。そして、第四次聖杯戦争には受肉した
サーヴァントが参加していたこともわかった。ああ、第五次のギルガメッシュのような

存在だ。サーヴァントの真名は『ゴルゴーン』。第三次聖杯戦争で召喚され勝利したサーヴァントだ。おそらく、あのエウリュアレにはこのゴルゴーンが関わっているのだと思うが…いかんせん情報が無い。もう少し調べることにフィイイイイッシュ！

・アテナ

エウリュアレが帰って来た！これで勝つる！

…しかし、サーヴァントとは強いのだな。あのかーみらとやら、変な鉄の箱を飛ばして戦うとか言う不思議なやつだったしな。それを一太刀で切り捨てた翁もすごいし、な。

これはもう、戦女神として戦うしかあるまい！

よし！ちよつとやってくる！すまん！

・沖田

あ、どもどもー。とりあえずお茶をどうぞー。

それで、エウちゃんのことですよ？エウちゃんは…鬼才、ですかね。新撰組にいら隊長でできましたね、あれ。土方さんと斎藤さんも気に入ってるみたいですし、結構楽しくやれたかもしれませぬー。

私が生涯で磨いた技を、あつさりとマスターしてさらに成長していく。あの子は師があつてこそ成長するタイプですね。日本人的ってやつです。改良と魔改造は日本の十八番ですからね!

おそらく、聖杯戦争に参加しようものならどんどん成長して手がつけられなくなるでしょうね。

あ、ノツブがなんか言ってますね。ちよつと黙らせてきますのでー。

・信長

なんじゃ? エウリュアレ? ああ! あやつは面白いな! なんてあんな発想ができるのか、わしには理解できぬわ! まださるのやつとか明智のバカの方が分かりやすかつたぞ!

しかも近代兵器もバリバリつかうじやろ? しかも神秘特効とかいうおそろしい能力持ちじやろ? わしの上位互換じやの!

…言つてて悲しくなってきたわ…。すまぬな、ちよつと寝る!

・ノツブたち

※翻訳してお送ります

あれ？おにーさんだーれ？

あれじゃない？えーつと、えーつと、そう、エミヤリリイ！

でも白髪じゃないよー？

まあいつかー。

え？エウリユアレ？

うん！いい人だよ！良い茶碗くれるし！

わたし、火縄銃の強化をしてもらったよ！

キヤタピラ作ってもらったりもしたよ！

すごい人！

エウリユアレさんばんざーい！

——この後万歳コールが十分経っても終わらなかつたため取材を断念した。

・クー・フリーリン

んあ？坊主か。

エウリユアレ？あー、なんだあれ。バケモノ？

明らかにあいつおかしいだろ。エクスカリバーを量産できるとかさ、訳わかんねえよ。

すまねえ、疲れてるんだ。休ませてくれ…。

・黒髭

おやあ?…なるほど、大勢の女に好かれちゃいるが、もう一人に決めてんのか。好かれてるのは気に食わねえが、一途なのは評価してやる、爆死しろ。

ああん?エウリュアレ?あいつとはそれは会わねえな。あいつは軍人、こちら海賊だ。こつちにはこつちの、あつちにはあつちの誇りがある。それは譲れねえからな。

ただ、ステンノちゃんはまだ女神だ。母性が半端無い。料理もうめえし性格も良いし顔も良いし最高じゃねえか!

あつ(昇天)

・”山の翁”

今言えることは無い。天命を待て。

・ニトクリス

え、エウリュアレさんですか…?

はい、いい人ですよ。優しいですし、強いのですし。

…強い女神とは一体…。
というかあれですよね、私影薄くありませんか？薄い？そんなあ…。

・タマモキヤツト

む？ご主人か？うむ！ニンジンを与える良いご主人だぞ！バーサーカーとしては三流以下のキヤツトを受け入れてくれたしな！おそらく後にも先にもキヤツト唯一のマスターだな！

うむ、少し脳筋なところもチャームポイントだぞ！
にやはははははは！

・モーさん

ヘラクレスと戦える黒い父上かけえ！

・メフェイストフェレス

エウリュアレさんですかあ!？うひや、うひやひやひやひやひや！

あれなんですか？

いや、女神なんてもっと糞みたいな、それこそワタクシたち悪魔よりも屑な存在で

しょう?なのになんというかまともすぎやしませんか?

もう少し神に近ければ後ろからバツサリとやったんですけどねえ。

まあ、かなり見ていておもしろいので、のおんびりとさせていただきますよお!?

番外編：エウリユアレとアンリ・マユのメタい話。

「さてさて、はじまるぜえ?アンリとー?」

「エウリユアレのー?」

「メタい話ー!」

「はい、というわけでここからはメタ当たり前で色々と謎空間で話していくコーナーだぜ。」

「あれね。竹本泉さんのなかがきみたいなものね。」

「ぎつつらいと。これからは外エウの後にこのコーナーを入れたいと思うわ。」

「ちなみにここで話されることは基本的に本編とは関係ないことだぜー。だから読まなくても問題はないぞ。」

「というか色々と元ネタとか設定の説明とかあとと没になった話について、それと話の補足を話すだけよ。」

『タママ^バモワン^イコとは…』

「それじゃあ最初は…筆者についても話すか。」

「筆者のタママ^バモワン^イコは…一言で言うなら馬鹿ね。」

「だろうな。話はプロットも作らずに書いているし、キャラクターは崩壊させるし、チートだしとただの糞二次小説家だな。」

「だからといってプロットを書くとかやる気がなくなる、とはあのバカの主張よ。」

「作家としては三流以下だな。まあ、そういうやつだから今みたいな突拍子もなくぶつ飛んだ話になってるわけなんだが。」

「それでもまあ、こんな小説でも毎回読んでくださっている方がおられるわけなので。」

少しずつでも進めていくわよ。」

「さて…それじゃあ一話から読み直しつつ振り返りつつ話していくか。」

「どんだんなかき化が進んでいくわね…。」

「まあしかたないだろ。ははは。あ、本編を眺めつつみることをおすすめするぜ!。」

『第一話 メドゥーサは現実逃避する』

「一話はメドゥーサの『私の姉はおかしい。』から始まって、ステンノがおしおきするっていう流れで始まったわね。」

「そういえばこの頃はまだステンノとメドゥーサの性格は原作に近かったんだな。」

「今では見る影もないけどね。まあその辺りも理由付けはしていくとか筆者は言っていたわよ。」

「下手に触れない方が良いと思うんだがなあ…。」

「設定をしつかりと詰めておかないからこうなるのよ。」

「まあ、そうなるな。それでエウリュアレの奇行がメドゥーサによって並べられるわけだ。」

「…そういえば背丈とか体重が変わらないっていう設定は…」

「あーあー！聞こえませんか!?」

「…そう。そしてエウリュアレが初登場！」

「まだ頭のおかしいキャラでしかなかったよなあ。」

「今でもそうだとは思うけど…?」

「…確かに。にしても、まだこの頃はしつかりと設定が固まってないから今見ると矛盾とかおかしいところもあるな。」

「耐久は成長しないとか書いてあるものね。その辺りのおかしいところは基本的に最新話準拠でいくわよ。」

「あいよ。」

『第二話 エウリュアレとゼウス』

「それじゃ二話だな。まず二話は…うん、ゆつくりがなぜか現れたな。」

「なんであれ出したのかしら。というか今頃死んでるわよねあれ。」

「島はゴルゴーンが占拠してるしな…。その辺りはまだ不明ってことで。」

「だな。そして軍人たちは…なぜころたし。」

「なんとなくかもしれん！」

「今となつてはわからないわね。敵意があつたからつてことの一つ。」

「可哀想に。そしてついに登場、最近影も形もないゼウスさん。」

「このころはやつぱりまだキャラが定まつてないわよね。」

「そもそも出す気も最初の頃はなかつたからな。」

「あ、この小説はこういうことが多いわよ。突然予定になかつたキャラが出てくるとか。」

「適当だなあおい!? まあ、そんな感じだったな。そして、宝具がやつと決まつたな。」

「ドレイク船長涙目な宝具よね。近代艦艇がバリバリ出てくるし…。」

「やつぱ筆者つて糞だな! ははは!」

「もう。」

『第三話 エウリュアレとステンノ』

「えっと、次は三話ね。この話は始めてまともにステンノが話したわね。」

「二応一話でも話してはいるがな。まあ、キャラが大体定まつたつていうことではここが始めてかもな。」

「それでもまだやさしめのステンノつて感じではあつたけどね。」

「腹ペコキャラもあるぞ！さっぱり出てこないがな！ちなみにこの時点で特技に裁縫と料理があるので既にママ気質はあつた模様。」

「どうしてああなつたのか私にもよくわからないわ…。」

「多分ヘステイアさんのせいだろ。」

「それで…エウリユアレの夢、ね。結局あれなんなの？」

「ん？前世の最期だろ。」

「え、言っちゃうの？」

「逆に他に何があるって話だしさ。それにほら、ぶっちゃけこの小説独自設定が多いから多少情報を出しても問題ないだろ！」

「いやまあそうかもしれないけど。」

「ちなみにその死んだ原因とか環境もこの俺、アンリ・マユがここにいて話してることから予想できると思うぜー！」

「そうなるにあの赤毛の男の子って…」

「それはいいとしてももう一人の女の子は多分まだわからないと思うぜ！あ、シリーズのどれかの主人公の一人ってことだけは明かしておくぜー。」

「つまり、またキャラ改変かつ設定変更と。というか赤毛なんてそんなにいないじゃないかい。」

「まあ、そうなるな!」

「全く:。」

「あ、そういうえばこの話からかな?次回予告でふざけ始めたのって。」

「確かにそうかもしれないわね。まあ、どうでも良いことね。」

『第四話 三と半分の試練』

「さて、初めての戦闘だな。」

「作中初戦闘がヘラクレスって:。」

「たしかに、メドゥーサとの模擬戦とかを入れておいても良かったかもしれないわね。」

「今更だな。にしても:戦闘シーン、酷いな。」

「ええ。酷いわね。どうなってるのかさっぱりよ。」

「今度地の文を入れて強化させておこうか。」

「まあ、それくらいならいい:のかしら。」

「そして戦闘の終わりかたも雑う!」

「大方書いてて辛くなったのでしよう。駄目じゃない。」

「今更だな。そしてそのあとの流れも雑よな。」

「円満な感じにしようとして失敗した感じがあるわね。」

「どうにかしてほしいものだな。」

「そうそう、この小説を書き始めるまえに考えていたストーリーだと、エウリュアレはヘラクレスに連れ去られ、メドゥーサとステンノは殺されるっていうシナリオだったそう
だ。」

「うわあ…。」

「そうならなくてよかったな。」

『第五話 神と女神と抑止力』

「さて、第五話だな。」

「今のエウリュアレって…可愛いの種類かしら。」

「多分外見は美しいの類いになるんだろうな。だってメドゥーサとほおなじだし。」
「つまり、この時点ではまだあそこまで成長するはずではなかったってことなのね。」

「だな。そしてみんなの女神、ヘステイア神が名前だけか登場したな。」

「ちなみにヘステイアは巨乳よ。」

「いるか？その情報。」

「さあ。ちなみにイメージはブルーデイカさんよ。どっちもママって感じなのかしら。」

「そしてだ。ここで料理の女神と鍛冶の女神が確定したんだな。」

「ええ。料理はすごい美味しいっていう設定なのかしらね。」

「なのだろうな。そして、武器紹介の回だな。」

「今回あの『光の剣』が登場したのね。」

「他の武器はさっぱり使われないがな。いつか使うだろうけど。」

「そして、まさかのエミヤ登場である。」

「思い付きだそうだ。」

「ですよー。」

『第六話 旅人エコーとアルゴナウタイ』

「これはひどい。」

「アタランテが海のリハクみたいなことになってるわね。」

「その目、節穴じゃねーか!」

「そして戦闘シーンも相変わらずね。」

「だな。」

『『弓兵が弓を使うわけがないでしょ!』』

「やめてやれ。筆者が苦しむ。」

「そういえば、この時点で既に沖田とエウリュアレは面識があるのよね。」

「ああ。エウリュアレの夢に出てきたそうだ。色々とあれだな！」

「そしてさりげなく話の外でぼこぼこにされるアレスエ…。」

「そういやメレアグレス、結局本編では出なかつたな。」

「なんというか…その…ほら、なんかやめておいた方がいい気がしたのよ。」

「なんじゃそりゃ。まあいつか。それで、この変な日本はなんなんだ？」

「んー、神秘の濃い日本。」

「…そうか。」

『番外編 外エウ』

「初めての番外編だな。」

「題名はとある番組のパクリね。」

「オマージュと言えオマージュと。」

「はいはいそうですね。」

「そういえばここからか、メドゥーサのセイバーIIビームの勘違いが始まったのって。」

「どうあがいてもエウリュアレのせいよねえ…。しかも短長二刀をプレゼントしてるしね…。」

「ちなみに、三姉妹のクラス適性はステンノが弓・槍・術・殺、エウリュアレが剣・槍・弓・騎・殺・術・復・作製者（クラフター）、メドゥーサが今のところ剣・復つてところよ。」

「エウリュアレ多すぎねえか?」

「仕方ないでしょ。物を作りすぎなのよ。」

「そういや俺たちの初登場もこの回だったな。」

「正直なところこの回で気付いた人はいないと思うわ。居たらそいつはきつとルパンよ。」

「ばかもーん、そいつがルパンだー。」

『第七話 いぎコルキス』

「ギリシア夏の映画の回ね。」

「なぜかサブキャラ入りしたティーピユスさん。」

「ほんとなんでティーピユスなのかしらね。」

「知らん。だけでもティーピュスがサブとしてでもまともに話しているような作品なんてうちくらいだろうよ。」

「でしようね。」

「そして現れたのは海獣という。」

「イメージはフタバスズキリユウよ。」

「うっわいらねえ情報だな。そしてでました光の剣!」

「おそらくエウリユアレの代名詞になるんだと思うわ。これ。」

「ちなみに、光の剣の真名解放にもレベルがあつて、抑止力の補助の度合いによつて変わるんだよな。」

「人の抑止力はほぼ服従状態だけどね…。」

「ははは。」

「エウリユアレのみが『ソード・オブ・アウローラ』、人の抑止力の補助があり『ソード・オブ・シユールティンクスター』、人、星の抑止力の補助ありなのが『ソード・オブ・ギアラクシー』…。名前のセンスが…。」

「やめてやれ。筆者が首を吊りそうだ。」

「そして道中大体カッツつてどうなのよ。」

「書くのが辛くなつたんだそうだ。うまーく変えるのはなかなか難しい上、ヘラクレス

とエウリュアレがいると大体消し飛ばせちゃうしなあ……」

「それをやるのが二次作家でしょうに……。やっぱり首を吊るべきね。」

「ははは……」

「にしても、メディアは原作通りエロースの矢を受けちゃうのね。」

「大抵の小説では回避していたからな。あえて受けてみてもらおうかと。」

「ついでにエウリュアレが万能ではないことを示そうとしたらしいけど……」

「そんなことができるはずもなく。はは、ざまあ。」

「あ、ついに首を吊ったわね。まあすぐリスポーンするわよ。」

「死んでも生き返る筆者とは一体……」

「ある意味で私たちの世界の創造神ね。きつと土管から出てくるわよ。」

「それはほら、神というよりゾンビじゃないか?」

「似たようなものよ。」

「ええ……」

「そして一話からあった『旭の旗の元に』。初使用ね。」

「一応言つとくとなんの変鉄もないただの旭日旗だぜー。ちよつと倉庫魔術への干渉と

自立行動をさせられるようになるだけのな。」

「あれよ、ギルガメッシュの『王の財宝』でいう、ばういる? だったかしら。あれみたい

なものね。」

「違うような気もしなくはないがまあそうだな！」

『第八話 旅の終わり』

「タイトルで盛大にネタバレしていくの止めない？」

「実際には終わってないからいいのよ。それで、メディアとイアソンは……」

「平和に結ばれましたとき。」

「二人が行方不明になってるときに何があったのよ。」

「よく考えてみる、バーニングラブ（物理）で燃え盛っているヤンデレ適性のある美少女お姫様と、イケメンで性格も良くて、独身の王子様が暗い森の中で二人きりだけ？あとは、な。」

「あー、なるほど。なら私からいうことは一つね。リア充爆発しろ。」

「美の女神ならいつでもリア充になれるんじゃないの？」

「充実するとは限らないじゃない？」

「なるほど。」

「そしてよ。なんでエウリユアレは画面外でポセイドンと殴り合いをしてるのよ……」

「あー、メドウーサとの正式なお付き合いを許可を貰いに?」

「なんて律儀な。それ本当にポセイドンなの?」

「多分。それでエウリュアレが『妹が欲しければ私を倒してみせろお!』↓『ウィーンエウリュアレエ パーフエクツ』って感じになったみたいだ。」

「…お付き合いは?」

「許可が出たそうさ。ちなみに話にすら出ていないがポセイドンはステンノにもぼこぼこにされてる。素手で。」

「美の女神とは一体…うごご。」

「そして…アタランテが…。」

「トリスタン擬きになっちゃったわねー。」

「ちなみにアタランテは普通に歌とかは巧いぞ!」

「まさかとは思うけど琴でトリスタンみたくぎざぎざぎざぎざってできるわけではないわよね?」

「あー、音で切るみたいなことか?できないできない。アタランテは琴の弦で矢を撃つ程度だ。」

「へー。」

「まあ、基本は琴で殴るんだが。」

「ええ…。それで…エウリュアレが渦に飲み込まれたわね。」

「ざまーないぜ！はははは！」

「まあ、死ぬ死ぬと言っておいて結局生きてたのよね。」

「逆に死ぬと思うか？あれが。」

「…無いわね。」

「だろうな。そして遂に本物のエウリュアレが現れたな。」

「私ね！」

「そして俺も登場だ！」

「まあ、ちよい役だけどね。」

「それはほんとな。」

「というか■が多いわねー。」

「まあ、仕方ないというかなんというか。■はエウリュアレの『転生者』のスキルのランクが上がっていくにつれて外れていくぞ。ちなみにEーで九割九分九厘■になるぞ。」

「もはやテレビの砂嵐ね。」

『第九話 落ちた女神っぽいの』

「ひどいタイトルだな。」

「事実女神（笑）だから仕方無いわね。」

「まあエウリユアレだしな！」

「そういえばこの話辺りからどんどんギャグに傾いていった気がするわね。」

「それは…主にギルガメッシュのせいだな。事実この話を書くまでは結構シリアスめに行くつもりだったんだが…。」

「今では見る影もないと。」

「というかそもそもメソポタミアの冥界に落ちる予定も八話を書いている時点では無かったしな。本来なら落ちた次の話でエウリユアレが復活してゴルゴーン戦に入って速攻でメドゥーサを殺す筈だったんだが。」

「ほんとうにどうしてこうなったのかしらね。」

「まあ、筆者はメソポタミア編は書いてて楽しかったらしいからな。書いてる当時は自分が書いて動かしたエレシユキガルに自分で癒されるとかいう変態なことをしてたしな。」

「うわあ…。」

「にしても、ギルガメッシュのキャラ崩壊が酷いな。」

「筆者曰く、『恐らく英雄王のギルガメッシュは第五次聖杯戦争編（エウリユアレは出な

いので番外編)でしか出ないと思う。子ギルと賢王様は出るけど。あ、でもCCCはわかんない!』だそうよ。」

「え、第五次聖杯戦争にエウリユアレは乱入しないのか?」

「らしいわね。まあ、それについては最期辺りに話すと思うわ。」

「あいよー。それで、なんでR—TYPEなんだ?」

「時間を越えると考えて最初に出てきたのがR戦闘機だったらしいわ。もつと他にあつたわよね。例えば…デロリアンとか、デンライナーとか。」

「まあそうだよなあ…。」

「そして特殊カテゴリー宝具、『対星宝具』ね。他の対星宝具だとBBの『カースド・カッティング・クレーター』と殺生院キアラの『この世、^{アンリマユ}全ての欲』があるわね。」

「前者は世界を侵食して呪いにてそれを扶るもの、後者は星の元に生きる生命を快楽にて融かすとかいうわけわからん能力だが…エウリユアレのこれは名前の通り星を消し飛ばす宝具(?)だな。」

「対星宝具と名付けたときは特に考えていなかったのだけど、調べてみるとどつちも大権能とか大地母神とかそういうレベルの話なのよね…。これ、大丈夫かしら。」

「今更だな。そんな事より問題なのはこれがばかすかノーリスクでどこでもなににでも

撃てちまうことだろ。」

「バランスブレイカーだものね。あまり使わないようにしないと駄目ね。」

「波動砲のパープルヘイズ化が進む……!」

「そして賢王は過労どんだけ嫌なのよ。」

「この世界でのギルガメッシュは過労死ということとひとつ。最期には諸説あるみたいだからな。ここまできたらネタに走ってもらおうかな、と。」

「ええ……。」

「……あ、そうだ。地の文の練習ついでに後書きのFINAL波動砲のシーンを強化してみたんだが……」

「それ、いる?」

「まあ、読み飛ばしてくれればいいからな。だってここおまけだしネー!」

「というわけでどぞー。」

.....

——アンリ・マユ。

なるほど、あのエロ尼はそう形容するに相応しいだろう。

この世全ての悪ならぬこの世全ての欲。全てを犯し、全てに犯され、快樂によつて全てを融かす。

快樂の獣―即ち人類悪といつても過言ではない。

あれは、倒すべき存在だ。我々のためにも、そしてBB達のためにも。あと純粋な子供たちのためにも！

「…エウリュアレ。」

マスターが心配そうに、されども覚悟を持って私の名を呼ぶ。

「…大丈夫ですよ、マスター。アレみたいな獣を倒す秘策もあるので。ただ、何時もみたくに出してすぐブツパとは行きません…。ですので、ギルガメッシュ、はくのん。」

何時もならドラえもんのように新しい宝具を出して敵を消し飛ばしていたが、今回ばかりはそうはいかない。

ならば頼るしか有るまい、英雄王を！

「なんだ、女神。」

「なに、エウリュアレちゃん。」

「…一分、時間を稼いで下さい。」

「…はくのん、どうする。」

「何言ってるの、ギルガメツシュ。珍しくエウリユアレが頼ってくれたんだから。やるしかないでしょ!」

「ふははははははは! だろうな! では先鋒は勤めさせてもらおう! なに、別に我が倒してしまっても構わんのだろう?」

「それ死亡フラグだよギルガメツシュ!」

二人はいつも通り、マイペースだ。うん、流石としか言い様がない。

「…最後のお話は終わりましたか?」

妖艶な声が響く。

「まさか! 終わるわけが無かろう! 貴様のような売女なぞに我が負けるわけなどないのだからな!」

「あらあら…まさか勝てると思っっているのですか?」

「あつたりまえよ! ここで勝たずしてなにがマスターよ、魔術師よ!」

「さあ、ゆくぞはくのん!」

「ええ! ギルガメツシュ、お願い!」

「まとめて融かして差し上げましょう…!」

『ゲートオブ・バビロン』
「『王の財宝』!」

黄金の波紋の中から、数多の黄金の武器が射出される。それは真っ直ぐにエロ尼へ進

み…そして、消滅した。

物も融かせるとかわけわかんねえな。

「召喚、『FINAL波動砲』」

背中に巨大なバックパックが装着される。時間は無い。すぐにエネルギーのチャージを開始する！

《change start.》

無機質な音声がエネルギーの充填の開始を告げる。

《ロックオン、方位角固定》

あのエロ尼がロックオンされて、必中が確定する。

《力場生成開始》

エネルギーを留めるための空間の歪みを前方に生成。それは普通ならば見えない物だが…この月の裏側においては空間が歪んで見えるようだ。いらぬ情報だなあ。

《グラビティアンカー射出、座標固定》

バックパックから、重力を操作するアンカーを地面に撃ち、反動で吹き飛ばないように固定する。さながらBIG・Oの『ビックオー・ファイナルステージ』の如く。

「その程度ですか？では、次はこちらからイかせていただきますよ…！」

「ふははははは！その程度効かぬわ！」

エロ尼がギルガメッシュヘビームを放つ。できればそのままギルにヘイトを向けといてください。

《ザイオング慣性制御システム作動、エネルギー生成加速》

ザイオング慣性制御システムを起動、爆音と共にエンジンに火を着ける。エネルギーの生成は加速するが、このままでは波動砲では撃てない。だから…

《波動砲ユニットリミッター解除、ハイパードライブシステム起動エネルギーの波動エネルギーへの変換を開始》

波動砲ユニットとハイパードライブシステムを起動する。ハイパードライブシステムにてエネルギーを無限増殖し、波動砲ユニットにて波動エネルギーに変換し、歪みに溜め込む。

それでも、足りない。あのエロ尼を倒すには。だから。

霊基の魔力への、エネルギーへの変換を開始。

魂が、霊基が削れ、歪みがさらに強くなる。

——音が消えた

靈基が削れると共に、岸波白野との繋がりも溶けていく。だが、それを気にしている余裕はない。

『——エウリュアレ、頼む。』

——頭に、彼の声が聞こえた。

「ええ！ やつてやりますとも！」

《力場の不安定化を確認、ストラグルビット起動、前方に展開…安定化確認》

過剰にも過ぎる波動エネルギーが器を破り、溢れ始めた。それも二つのビットを使って無理矢理に抑え込む。そしてビットを回転させてエネルギーの方向も整える。

靈基が崩壊し、四肢の感覚が無くなる。視界が失われる。

《後部スラスター起動…機体完全安定》

バックパックの後ろにあるスラスターが起動し、私というひとつの波動砲が完成する。

《change completed.》

「私達の、勝ちだ。」

「」

これは人類の全てを掛けた一撃、

これは散っていった英霊達へ手向ける鎮魂の光、

これは帰れなかつたモノ達へ捧げる導きの光!

そして巨悪を討つ人類最後の光!

この光、我が全てを掛けて放つ!

食らうがいい! 『終焉の光』ラスト・ウエーヴ!

「」

最後の光は——放たれた。

.....

「うあああああああああ! 長かったあああああ!」

「お疲れさま。それで? なにが変わったのかしら?」

「…地の文が少し…。」

「無駄ねえ。」

「ぐふっ。」

「…はあ。ほら、起きなさい。次行くわよ。」

「…うい。」

『第十話 冥界良いとこ一度はおいで』

「少しずつ転生者のランクが上がっているわね…。」

「というかどんだけ桜こええんだよ。」

「まあ…ね？うん。」

「だろうな。」

「そしてギルガメツシユは…。」

「…もう、だめね。完全にギャグに染まつてるわね。というかまだブーメランスー諦めてないのね。」

「まあ…そうなるな。」

「そして…なんてスパルタなのかしら。エレシユキガルが可哀想ね。」

「ははは、スパルタは実際はもっと酷いんだろうけどな。」

「うわあ…。」

「そして、波動砲も大方完成と。」

「ところがどつとい、脱出できません…!」

「是非もないネ!」

「そしてエレシユキガルが強化されたというね。」

「強化三人目か?」

「ええ。これいいのかしらね…?第七特異点がハードモード化待たなしよ?」

「どうせエウリユアレがなんとかするだろ。」

「ですよー。」

「そういえばあの双剣ってなんなんだ?マントと槍は原作のあれだそうだが。」

「…筆者は適当に双剣としか考えてなかったそうよ。一応今は設定があつて、外見は仮面ライダーアギトシャイニングフォームのあの双剣よ。」

「へー。」

『番外 外エウ プラス!』

「番外編そのに、だな。」

「メドウーサが…」

「ああ。ついにビーム撃ちまっただな。そしてインタビューの彼に剣技も必要と言われ
てちよつとしよぼーんとしてるな。」

「そしてステンノもどんどん強化されてるわね。主に料理の面で。」

「そして…ギルガメツシユは…。」

「まさかのスリーサイズ暴露…。」

「はははは…。」

「そういえば、エレシユキガルのくしやみはなんなの？」

「あのくしやみの時に髪が黒くなってます。」

「…それだけ？」

「それだけ。」

『第十一話　そしてまた旅に出る』

「やーつと脱出か。」

「まあ、脱出だけでまるまる一話使ったけどね…。」

「は、ははは。」

「そしてギルガメツシユは未来を確定してきたわね。」

「冬木がどんどんカオスになるなあ!」

「しかもそこにエルキドウ投下よ!」

「うわあああああ!」

「しかもまさかの外部からのエウリユアレ強化ときた。」

「…うん、これ以上強化してどうするんだ?」

「この小説はそんなものよ。」

「ええ…。」

「そして…イシユタルエ…」

「この小説で扱いの悪い神の一人だな。他はヘラとアレス。」

「え、ポセイDONは?」

「メドウーサと円満な時点でましだろ。」

「…まあ、そうね。」

「というかエヌマ・エリシユあそびすぎじゃねえか!」

『『神よ、ギルを繋ぎ止めよう』やら『駄女神よ、死ぬがいい』やら…流石ギャグ時空ね。』

「せやな。」

『第十二話 怪物』

「突然のシリアスね。」

「なに、いずれこれもぐだぐだに沈む…。」

「ぐだぐだとは腐海だった…?」

「そしてだ! ついに! 俺、参、上!」

「本来は出るはずではなかったという。語りを書いているときはマーリンにでも語らせようかと思ったのだけど。」

「マーリン産まれてないよな。」

「というわけでアンリになったわ。」

「なんて適当な!」

「そしてエウリュアレの名前が少しずつ解放されてるわね。漢字二文字で読みが三字、三文文字目は『な』。」

「…明日菜とか?」

「それはSAOのヒロインよ。ちなみにその名前を漢字で入れてグーグルで検索したらなるうの作家さんがヒットしたわ。まあ、数ある星の一人かしらね?」

「かぶつちやつてもしやーないしやーない。」

「それで?結局メドウーサとポセイドンを嵌めたのはだれだったの?」

「ヘラだな。ただ、怪物化したのは完全に予想外だったらしい。たまたまそこに聖杯があつたからああなつたとか。」

「つまりエウリユアレのせいじゃない?」

「まあ、そうなるな。」

「ええ…。」

「そしてステンノが…」

「あつさり復活したな。ちなみにゴルゴーン編を考え始めた頃のストーリーだとステンノは石から戻らず、死亡するっていう感じだったそうだ。見事にギルガメツシュがぶち壊したが。」

「流石ギルガメツシュね。」

「そしてアキレウスが登場したな。」

「参加は突っぱねたけどね。」

「対魔力の値はライダーの時を基準にしているからもしかするともつと高いのかもしれない。だが今さらだな!」

「まあ、そうなるわね。」

『第十三話　聖杯戦争、勃発?』

「なるほど、これがコハエースですか。」

「いや、違うからね?」

「ありや、そうなのか? んじゃ、ぐだぐだオーダーか?」

「それも違うわ。というわけで突然のノツブとおき太ね。」

「なあんであとの時代の奴等が召喚されるんですかねえ?」

「まあほら、それを言い出したら第七特異点でレオニダスがいるのもおかしいんじゃないかしら。」

「ちなみに筆者曰く理由はあるとのこと。一体どういうことなのか…。」

「あの筆者の考えはわからないから…。(遠い目)」

「…まあ、そうなるな…。」

「そしてノツブも引くレベルの脳筋なエウリュアレ…。」

「もう大英雄クラスの化け物よね。知名度補正は無さそうだけど。」

「無しでもヘラクレスクラスに強いんじゃないか? まあいいか。」

「そしてまさか聖杯を作っていたという。」

「聖杯舐めてるの?」

「汚染した貴方が言うと言得力あるわね。」

「まあ作つたなら仕方ないけどさ。そしてまさかの本家ランサーの出現である。」

「そしてまさかの死亡回避。ランサーとしてどうなのかしら。」

「死ぬだけがあいつの取り柄じゃないからな…?」

「まあ、兄貴と呼ばれる程だからねえ。」

「では、行きますか。」

「なるほど、あれね?」

「ランサーが死ななかつた!」

「このネタ潰し!」

「…そういうえば、今更だけれど青いランサー、パールヴァティーが居たわね。」

「…あー、あれはほら、どうせ制服になるからノーカンで。というかどうせ桜だし。」

「…人妻桜…。」

「やめろ。」

「そしてニトクリスとじいじも来たわね。」

「ニトクリスはともかく山の翁って…召喚されねえだろ。」

「最初の頃はゴルゴーンがビースト扱いされて召喚されたっていう設定だった。ぼつた。」

「ええ…。」

「だーってどうやっててもエウリユアレが一瞬で消し飛ばすんだもの…。どうにかできないかしらあれ。」

「ムリダナ（・×・）」

「ですよー。」

「というか、山の翁のキャラも少しギャグに寄ってないか？」

「まあ、そうなるわね。」

「そういえばさ、『これ、お茶』ってなんだ？」

「サンガリアが販売しているペットボトルのお茶よ。それなりに美味しいわ。」

「へー。」

『第十四話 襲撃』

「まさかのキャット登場である。」

「黒髭もおるぞー。」

「というわけで7つのクラスが揃ったわけね。」

「この戦い、我々の勝利だ!」

「どうやつてもこいつらに勝てないとおもうの。ヘラクレスを並べても難しいんじゃない?」

「いや、勝てないわね。だってエウリュアレ相手だと十二の試練も微妙だし。」

「正直一撃で命全部抉りそうね。」

「はははは。」

「そしてまさかの聖杯大戦ね。」

「ルーラーがおもつきし片方の陣営に肩入れしてるんだが…?」

「緊急事態故是非もないネ!」

「…ですよねー。」

「そしてなんか襲撃されたでござるの巻ね。」

「セイバーアルトリアオルタ、アーチャーエミヤオルタ、ランサーメドゥーサオルタ、ライダーフランシス・ドレイク、アサシンカーミラ、キャスターメフィストフェレス、バーサーカークー・フリーンオルタ。なんだよこれ。」

「オルタが基本で…あとは適当かしら?」

「ええ…。」

『第十五話　　翁さん大勝利！』

「なんだあ？このタイトルはあ？」

「いいから入ってみようぜえ…であってるのかしら？」

「さあ？デスクリムゾンやったことねーからわからん。」

「ならネタとして使うのはどうなのよ。」

「まあいいのさ！ここからもネタもりもりだぜ！」

「ええ…。」

「さあ、皆さんご覧頂けていますでしょうか。エウリュアレが殺戮するというパフォー
マンス！非常に美しい光景です！」

「まさにNKRT…って無理矢理ネタをねじ込まなくていいわよ。というかそれだとエウ
リュアレが三十秒程度で城を壊す変態になるじゃない。」

「まあエウリュアレなら潜入もせずに消し飛ばしそうだがな。」

「…軌道修正するわよー。」

「あいよー。」

「それで、あれだけ出しておいて出番無しってどうなの? なにか弁解は?」

「ありません…。最初は全戦闘を書いていたんだが、しつくり来なくてこうなった。後悔も反省もしている。」

「全く。そしてアルトリアオルタもなんとかあつさりとやられてるし。」

「まあ…これは仕方ないんじゃないかと思う。アルトリアオルタは聖杯があるならばバサクレスは圧倒できるって情報があるけど、これマトモクレスですし? しかも原作より強化されてるし。」

「…『斬り殺す一頭』ってなんというか…ださい。」

「ぐはあ!」

「いや、ナインライブズに対してのワンライフってのはわかるけど、なんというか…」

「…やめてくれえ…。」

「まあ、いいわ。それで…血の色云々はどうかということなのかしら?」

「それに関してはおいおい。まあ、黒くてどろどろした液体で型月っていえば一つくらいなものだろう?」

「…? まあ、そこは読者が想像して楽しむところよね。うん。」

「そしてだ、デミヤエ…」

「彼はギャグ時空に捕まったのよ…。」

「どちらかというどぐだぐだ粒子とかそういうものよな。」

「…それいいわね。そういうことにしておきましょう。」

「ええ…?」

「そして、だ。なんで突然士郎がでてきたのよ。」

「セラが書きたくなくなって書いたとは筆者の談。」

「…あとでしめておきましょうか。」

「漬け物にしようぜ!」

「まあ、それは置いといて。この世界線なんなのよお!なにこれ!?ぐっちゃぐちゃじゃないー!プリヤ世界線かと思つたらサーヴァント共がいるし!セラと同居してるっぽいから衛宮さんちのきょうのご飯の世界でもないし!なあにこれえ。」

「筆者曰く複合世界線だそうだ。ぐっちゃぐちゃ。」

「…ええ?それ色々大丈夫なの…?」

「もちろん原作からかけ離れてるぞ。特にプリヤ組がな。」

「あー…どんな感じなの?」

「まだ確定というわけではないが…取り敢えずイリヤはプリヤ準拠、セラとリズは性格はプリヤ、能力はステイナイトから超強化、士郎は性格はきょうのご飯とかで能力はベツモノ、凜とルヴィアはプリヤ準拠など…。」

「待って、もしかして凍って…」

「恐らく聖杯戦争の事を知らない設定だろうなあ。」

「それ、ぐつちやぐつちやじゃない。」

「まあ、頑張るしかないな。」

「それで…ヒロインって誰なの?これ。」

「もちろんセラだとも。」

「…ええ?」

「…うん、それはおいおい決めていきます。」

「…そう。」

「やーっと終わったわね。長かったわ。」

「これぞNKT。」

「それじゃあ、最後にいつかエウリュアレに言わせたい台詞を一つずつ出して終わりにしましょうか。」

「なんだその企画?」

「気にしてはいけないわ。それじゃ私から。」

『Dance with our angels!』なんてどうかしら?」
 「A C 6 の合言葉だ。な。なら俺は :
 『Yo, buddy. Still alive?』なんてな。」
 「結局どっちもエスコンなのね…。まあ、そういうわけで、おまけの『エウリュアレとア
 ンリ・マユのメタイ話』は終わりよ。またいつか!じゃあね!」

おまけのおまけ エウリュアレが適性クラスのどれかで呼ばれたら…?
 ・セイバー

筋力 : B

耐久 : B

敏捷 : A

魔力：A+++

幸運：EX

宝具：EX

スキル

対魔力：A++

魔力放出：A+

騎乗：C

神性：A

宝具（主力のみ一つ）：『光の剣』

・ランサー

筋力：B

耐久：D

敏捷：A+++

魔力：A++

幸運：EX

宝具：B

スキル

友との誓い：EX

心眼（真）：A

戦闘続行：C

対魔力：A

神性：A++

宝具：『きしんのまそう』

『どくばりのやり』

『友^エの力^ス、お借^マり^エし^リま^シす^ユ！』

・アーチャー

筋力：D

耐久：D—

敏捷：A

魔力：A++++

幸運：EX

宝具：EX

スキル

千里眼(偽) : A

創造魔術 : B

加工魔術 : B

射撃 : A

単独行動 : B

対魔力 : B

神性 : B

宝具 : 『弓』

『吹き飛ばす七つの砲』

・ライダー

筋力 : EX

耐久 : EX

敏捷 : EX

魔力 : EX

幸運 : A

宝具：E X

スキル

太陽の加護：E X

王の石：E X

正義の味方：E X

フオームチェンジ：E X

進化：E X

てつを：E X

宝具：『リボルケイン』

アサシン

筋力：C

耐久：D

敏捷：A+++

魔力：A

幸運：E X

宝具：—

スキル

中国武術：A

縮地：A

深淵の加護：EX

単独行動：C

宝具：『燕返し』

『無明三段突き』

『牙突』

キャスター

筋力：E

耐久：E

敏捷：B

魔力：EX

幸運：EX

宝具：EX

スキル

陣地作成：C

高速神言：D

魔術：EX

神性：C

アヴェンジャー

筋力：A

耐久：EX

敏捷：D

魔力：E

幸運：C

宝具：A

スキル

魔王の子：EX

ウオートホッグ：A

近接航空支援：EX

戦闘続行：EX

千里眼 (AWACS) : EX
魅惑の美声 (ロマン) : EX
射撃 : A

第十六話

鍛練

やあやあ。

みんな大好きエウリユアレだよー？

なんか久しぶりな気がするけど気のせいかな。うん。

さて、現在何をしとるかというですね…。

特訓しております。

はい。ステンノと二人で特訓です。

突入組の二人はかなり頑張らないといけないからね。クー・フリーンを審判に置いて
試合しています。

「しっ…」

鋭い気合いと共に真紅の槍が一瞬前に私の体があつたところを通っていく。

「せいっ！」

さらにそこから魔力の炎が私を焼かんと迫る。まあ当たってあげないけど。

「ユクゾツ」

どこかの世紀末病人っぽく縮地をつかつて距離を取る。ふははははは！仕切り直し

d

「炎の槍よ、心を穿て！『フレイムランス・オーバーレイ炎槍一穿・過剰蒼炎』！」

やり投げえ!?!うわわわわわわわわわわあ!?

「まだまだ！魔討ちし矢、女神の加護をもって敵を射たん！『ライトニング・オブ・ステン天煌めく白き雷』！」

光の矢が空へと飛び…

そして、雷となつてたくさん降ってくる。

…うわあ。

—おそらから

—めっちゃかみなり

—ふってくる

—せなかはあつい

—やりがあるもの。

エウリユアレ、心の一首。

うわあああああ!? 後ろから猛スピードでホーミング槍！空からは自機狙いと自機から少し外れたところにランダムで落ちる雷！

まだギルガメッシュのお遊びの方が楽だこれー！

「ほら、エウリユアレ！そのままじゃ私が勝つわよー！」

ええい、やってやるさ、くそー！

「よし、花火の中に突っ込むぞー！」

狭い安地を全力で走りつつ、そんな事を言う。

そっちがアーチャーの真似事というのならばこっちはランサーといこうじゃないの！

えーっと、この倉庫のこの辺りに…あつたあつた、サーヴァントカードー！（某青狸っぽく）

あ、サーヴァントカードはFGOのキャラ絵とHPとATKが書いてあるあれね。決して麻婆神父がOPでばら蒔いたりしてるカードじゃないわよ。

その中から…あつた、エレシユキガルとエルキドウのカード！よし、いくわよー！

「エレシユキガルさん！」

『女神、エレシユキガル！』

「エルキドウさん！」

『兵器、エルキドウ！』

「鋭いやつ、頼みます！」

『カジノメガミエウリュアレ、ランサーフォーム！』

「冥府の炎、神をも穿つ！」

変身完了！黒のワンピースに白銀の鎖、そして白黒の槍！え？変身がどつかのウルトラマンぽかった？気のせいよ。

せーかいじゅうがーきみをまーつてーいるーやーみをーてらせーせいぎーのーばーわあーでー

「な、なによその変身！」

「あ、やっぱりだめだつて」

「かつこいいい！」

…どうやらステンはロマンがわかる口のようだ。

「いーなー、そういうものがつくれてー。」

「…あとで教えてあげるから。とりあえずいまは特訓よ！」

「ふふつ、ただどこの勝負は私の勝ちでしょ？」

「それはどうかな？（某ATM風に）」

「なにい!？」

「貴女が天ならば、私は地の力を使うまで！エレシユキガル！」

『ええ！やってやるのだわ！』

「これが冥界、地の底の底！」

『ごめんなさい、エウリユアレのお姉さん！』

『「クル・キガル・イルカルラ
靈峰踏抱く冥府の鞆！」』

→ここまでエウリユアレ

←ここからクー・フリーリン

よう。

おれおれ、クー・フリーリンだ。

いまはステンノの嬢ちゃんとエウリユアレに頼まれて二人の模擬戦を見てたんだが
：

なんだよこれ!？

模擬戦って当たり前のように宝具を放つものだったか!? それもよ、手加減してとか
じゃなくてあれ当たったら普通に死ぬぞ!?

しかもなんだよこれ!? なんだ、最終戦争か!? 空からはバリバリと雷が降ってくるし
よお!? 地面からは岩が生えて炎が吹き出すしよお!? うわああああ!?

というかなんで雷を炎で相殺できるんだよ!? 電気タイプと炎タイプは等倍だろ!?

「もういっぱーっ! 作成者が同じだからきつとゲイボルク理論が通じるはずだし! 喰ら
え、『冥府の槍』!」

ガキーン!

…は? なんで槍に槍が当たるんだよ?

というかこっちに飛んできてませんかねえ!?

ちよ、ちよちよちよ、う、うわああああ!?

ガスッ

ぐふっ。

→ここまでクー・フリーリン

←ここからエウリュアレ

…あー、やっちゃった？

うん、これは死んだね。右心房と左心房に一本ずつ、必殺の槍が刺さってるし。二本の槍をぶつけた結果は二つの槍が別の目標をロックオンしただけだった、と。うん、このデータは貴重だね。

「ちよ、ちよつと!?!エウリユアレ!?!ランサーが…」

ステンノが慌てる。慌てている姿もかわいい。

「…そうね。」

「ねえ、なんでそんなに落ち着いてるのよ!?!」

「大丈夫よ、ギャグが続く限りは次の話あたりで蘇るわよ。それよりも大事なことがあるわ。」

「な、なにがあるのよ?」

「ええ、この状況になったときには必ず言わなければならないことよ。」

「…それは?」

「…それは…」

「…(ゴクリ)」

「ランサーが死んだ！」

『このひとでなし！なのだわ！』

「なによそれー!?!」

.....

「あー、ひどい目にあつたぜ……。」

「……やった私が言うのもなんだけれど、なんで生きてるのよ……?」

「あー？んなもん心臓貫かれるなんてしょっちゅうだからな。ブーメラランサーでもされない限りはひどいことにやならねえさ。」

「そのわりには車に跳ねられて死ぬけどね。」

「鉄の塊と武器と一緒にすんな。」

「……ランサーって、すごいのね。」

「そりゃあ、ランサーだからねー。」

「全員がそうってわけでもねえぞ？知り合いの小僧なんて心臓を自分の槍で突き刺した

後にや恨み言しか言えなかったしな。近くに敵がまだいんだから一人ぐらい殺って死ねってんだ。」

「いや、それを求めるのは酷つてもんでしょ…。一応貴方、ケルトのトップクラスの英雄なんだし。」

「それがどうしてこうなったかねえ…。いや、切実に。」

「あはははははは…、必中即死装備とかいうチートのせいじゃないかしら?」

「確かに、こいつ全く当たらねえしな。ほんと、英霊になつてから戦闘ではろくなことがねえ。」

「ら、ランサーも大変なのね…。槍、やめようかしら…。」

「何言つてんだ。嬢ちゃんと俺とじゃ方向性が全く違うだろ。例えるなら…:そうだな、俺は敵の弾を受けつつも突っ込んで敵を叩き潰す重戦車。嬢ちゃんはその速度と小こさで敵弾をすべてかわして必殺の一撃を叩き込む中戦車。それを比べるのは間違つてるだろうな。」

「そつかー。うん、ならこれからも頑張るわ!」

「私は?わたしは?」

「あ?俺たちが戦車ならお前は遠い洋上にいるミサイルレーザーなんでもござれの航空戦艦だろ。こつちがどんな強い陸上兵器でも一番嫌な一手を打って確実に全滅させて

くる敵としては最悪な類いだ。」

「おー、クー・フリーンにそこまで言われるってことは本当に強いのかな、私?」

「それは冗談で言ってるんだよな...? お前がそこまででないならヘラクレスでさえも普通止まりだぞ...?」

「いやいやいや。ヘラクレスはつよいよ? だって十二の試練なして私と同等なもの。なら今はあつちの方が強いわよ。」

(微妙な気がするわ!)

(同感だ。)

「...?なにをこそこそ話してるの?」

「...いや、なんだ、頑張れ。てっぺんは遠いぞ。」

「...?」

.....

「というわけで、教えてちょうだい? 創造魔術!」

「いいけど、できるかはわからないわよ?」

「わかってるわ!」

「俺も見せてもらって良いか？知り合いが似たような魔術つかってんだ。」

「え、ケルトに？」

「いや、冬木にだ。ケルトは大抵ルーン魔術だからな。」

「冬木ってことはもしかして衛宮士郎？それともアーチャー？」

「そうだが…なんで知ってんだ？」

「あら、これでも千里眼持ちだよ？」

「ほーん？未来も見えるのか？」

「限定的にならね。大体は現在、それも一部しか見えないわ。」

「逆に言えば現在が多少見えてかつ未来も見えるってことか。劣化ギルガメッシュみ

てーなもんか？」

「まあ、そんなところね。」

「…？」クビカシゲ

「あー、ごめんステンノ。とりあえず…創造魔術だったわね。そうね…私が創造魔術を編み出したきっかけが投影魔術なのよね。」

「投影魔術ついていやアーチャーの野郎の得意な魔術じゃねえか。」

「ええ。それを千里眼で見ても、まあ憧れたのかしらね。なんとか独学で投影魔術をマスターして…そして絶望したわね。」

「絶望？」

「…ああ、そーいやあいつの投影は特殊なんだったな。」

「ええ。あれは投影というよりは彼の固有結界から溢れたものって感じだから再現をしようがないのよ。私ではがわしか作れなかったわ。」

「エウリュアレでそれなら相当ね…」

「まあ、投影魔術で四苦八苦したから創造魔術は簡単に実戦レベルまで持つていけたけどね。創造魔術の基本はイメージ。ある程度解析によって補助できる投影魔術とは違って、イメージの通りにできてしまうから確固たるイメージをもつていないと不思議な物体ができるわ。」

「不思議な物体？」

「例えば針が逆に進む時計とか。例えば刃と峰が逆の日本刀とか。」

「うわ、それは…。」

「とうるかそれ、戦闘中にやるのは厳しくねえか？」

「最初は大変だったけれど、並列思考ができるようになれば楽よ？鍛練の方法は…：そうね、例えば模擬戦をしながら創造してみるとかかしらね。実戦に勝るものなしよ。」

「ええ…？」

「よし！じゃあ早速作ってみましょうか！最初はそうね…：ただの立方体とか？」

「…どう作るのよ？」

「んー、その物を作りたい空間座標に物のイメージを置いて、そこに魔力を流し込む感じ？」

「なるほど？んにゆうううううう…」

ほむっ

「…できた？」

「…なんだ、この黒い…箱？」

「8ZhidweZw<」

「き、きやあああああ!?喋った!?」

「いや、なんだよこれ!？」

「えっと…箱？」

「これが箱なわけあるか!どう見ても新種の化けもんじゃねえか!」

「7y77ー!」

「え、ちよ、こつちきた!?こ、来ないで!来ないでー!」

「ちよつと!?エウリユアレ!?どこ行くのよ!」

「うわーん！」

「…なんじゃこりや。」

「…箱形謎生物、良いと思うのだけれど…。」

「O q d m c 4 6 m e j r」

→「」までエウリユアレ

←「」から ■ ■ ■ ■

どうも、メドゥーサもといゴルゴーンです。
はい、現在進行形で大変なことになってます。
とりあえずこれだけは言わせてください。

どうしてこうなった！

確かに出来心で下姉様の杯を触ったのは駄目だったと後悔してますよ!?!でもこれは酷くないですか!?!なんでこんな…こんなに大きくきれなきやならないんですかあ!?!

恥ずかしさのあまり上姉様と喧嘩して石にしちゃったし！

しかもなんか杯が起動して私のなかに溶け込んだじゃうわ7人の変な人は召喚されるわ黒い剣士はハンバーガーを要求してくるわ！

うわあああああああん！

.....

ぐすつ。

…それで、杯もとい聖杯を取り込んだことでわかったことがあるんです。

どうやら、私たちの生きているこの世界は正しい歴史からは外れた世界なんだそうです。

原因は、下姉様。

下姉様が遊びまくった結果、こうなつたようです。
…ええ。下姉様が楽しく生きていたからだそうです。
なんですか。

第十七話 突撃！鮮血神殿！

「とうわけで。」

「……？突然どうしたのだ？」

アテナが不思議そうな目でこちらを見る。

「いや、みんな準備も出来ただろうし突入しようかな、と。」

「……お、おう。」（軽くメドウーサのことを忘れていたとは言えないな……）

「それで、みんなにはこれを装備してもらおうわ。」

「これは……？」

……まあ、わからないよね。

「ただの無線よ。ボタンを押している間だけ声が届くわ。あ、私とステンノの方からの音は基本的に流した状態にしておくわ。」

「了解した。」

「さて、じゃあ流れを確認するわよ。まず私とステンノが突入、問題がなければ聖杯を爆破してゴルゴーンを鎮圧するわ。もし戦闘になった場合は援護射撃をしてもらう。」

「まあ、仕方ないと言えば仕方ないか。」

クー・フリーンが少々不満そうに言う。

「あら、不満？」

「いや、まあ命あつての物種だからな。今回は遠距離で援護ができると納得するさ。」

「そう。ならいいわ。よし!じゃあそういうことだから、三十分後に出発ね!」

「おう!」

.....

というのが二日前のこと。

今はゴルゴーンを射撃できる位置に拠点を作つて突入準備中。

「それで、ステンノ?どう?」

「酷いわね。島まるごと異界化してるわ。」

「遠距離射撃は通りそうに:無いわねえ。」

「高火力の砲撃なら多少は通るかも、つて程度ね。回りに死体が見えない事から考えるに行きはよいよい帰りは怖い、つて感じかしらね。」

「んー、やっぱり初手光の剣でまるごと消し飛ばした方がいいかな?」

「絶対に駄目よ。姉として、絶対に助けなきゃ。」

「私もそうしたいのはやまやまなんだけどねー。」

アンの言っていた「メドゥーサは諦めろ」っていうのも気になる。救えないってのはどういう意味なのやら。

「そういえばステンノ、魔力は大丈夫？」

「ええ。行きでゆつくりしたからね。」

「なら大丈夫ね。」

「エウリュアレ、こっちは準備が完了したが…」

ヘラクレスが準備の完了を伝える。

「了解したわ。」

.....

「なに、援護が難しいじゃと？」

「ええ。形無き島が完全に異界化してて、砲撃が通らないかもしれないわ。恐らく異界内部は完全にメドゥーサの魔眼の効果範囲内だから、救出も不可能ね。」

「それじゃエウちゃんとしてステンノちゃんは…」

「まあ、決死隊つてところね。是非もないわね。」

「…勝算は?」

「さあね。わからないわ。」

「なら私も!」

「だめよ、アテナ。」

「だが…!」

「大丈夫よ、多分なんとかなるわ!」

「まあ、エウリュアレ殿ならなんとかするでござるよ。」

「ですね!」

「お前らのそのエウリュアレへの信頼はなんなんだよ…。」

「よく考えて見るのだな、クー・フリーン。ご主人なら大体なんとかなるだろう?」

「いやまあそんな気はするけどよ!?!方が一つてこともあるじゃねえか。俺はみすみすマスタを失いたくねえんだ。」

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね。でも…」

「ああ、わかつてる。俺はなんもできねえ。くそつ、せめてセイバーで召喚されてりや…!」

「おい、沖田。言われとるぞ。」

「悪かったですわね病弱でげほっ！げふっ、こふっ！」

「大丈夫かのお。」

「メジエド様…ニトクリスはこの先やっていけるか不安です…。」

「ローマ」（無言で大丈夫と訴える）

「メジエド様あ…！」

「うん、まあ仕方ないしね。なにがなんでも魔眼だけはどうかしてくるから、死んだらそのときは頼むわ！」

「無事で帰ってくるのだぞ、ステンノ。」

「アテナ殿の言う通りですな。ステンノちゃんが死んだら黒髭は大人気もなく泣きまますぞー！」

「…え、私は？」

「正直に言うとうエウリュアレは殺しても死なんと思うからな…。実際に冥界から帰って来ているから余計にな…。」

「そんなー。」

「大丈夫だぞご主人！ヘラクレスが心配せずともアタシは心配しているからな！」

「キャット…！」

も勇者がやるものよあれ！」

「まあほら、勇者はそんなものよ？それに悪とされちやつてるメドウーサを倒しにいくわけだし私たちって勇者っぽくない？というわけでトロッコを出します！」

ドガン

ガシッ

「何がというわけでよ離しなさいエウリユアレえ！」

「あつはつはつはー！だいじよぶだいじよぶ！ゾンビホバーをやろうつてんじやないからー！もちろんボムチュウホバーもやらないわよ！スーパースライド？まともな生物にできるわけないでしょ！やっぱ勇者つて変態だな！まあ、ほらほら、トロッコにのって
！」

「ちよつと!?さりげなくトロッコに縛り付けるな！」

「ビタロック！さあ！いくわよ、いくわよいくわよいくわよー！」

ガインガインガインガイン！

ハンマーで時間を止めたトロッコを殴って力を貯めていく。

「助け…助けてアテナあ!？」

「…すまない、武運を祈る。」

「アテナー!？」

『止めて、殴つて、吹き飛ばす』!
プレスオプザワイルド面白よ

時止め解除!吹っ飛

「いいいいいいああああああああああ…!?!」

「あつはつはつはつはつはつは—!」

んだ—!

→ここまでエウリユアレ

←ここからヘラクレス

…いつであつても、エウリユアレはエウリユアレだった。

トロツコを吹き飛ばして、それに乗つて移動すると言うのは…独創的というか、ぶつ飛んだ発想というか…。まあ、いつも通りか。あいつの発想は突飛すぎる。

しかし…エウリユアレの奇行に巻き込まれるステンノは大変だな…。さっきの吹き飛びも一度体験しているようだしな。

…強く生きろ、ステンノ。

→ここまでヘラクレス

←ここからエウリュアレ

というわけで飛んできました鮮、血、神、殿！
うわー、空が紫だよ。

紫の空、走る雲、吹き飛ぶトロツコ、転がるステンノステンノオ!!

「いたたたたたた…。」

「大丈夫ー?」

「げっほ、げっほ…!もう、着地のタイミングは教えてよ…。」

「あはは、ごめん。」

「笑い事じゃないわよ…。」

『エウリュアレ、かなり大きな音が聞こえたが大丈夫か?』

「大丈夫よ。ただ、もう魔眼の影響下みたいね。」

「魔力に気を付けながら進まないとね。」

『了解した。何かあれば言え、すぐに突入するからな。』

「ありがと。」

にしても高ランクの石化の魔眼ってすごいね。ずっとピリピリくる。あと、頭がすっごいちりちりとする。魔眼って結構効くねえ。

「…エウリユアレ、大丈夫?」

「ええ、問題ないわ。ちよつとピリピリ来るけど。」

「…ピリピリ?」

「ええ。来ない?」

「いえ、全く?」

「あれー?まあ、いつか。」

「それで?ここに来たはいいけどどうするのよ。」

「そりゃー、とりあえずは首を落とすしに行くわよ?そのために来たんだし。」

「…ええ…。」

「…来たのですね、姉様。」

「あら、メドゥーサ。巨大化したとも、発狂したとも聞いていたのだけれど…大丈夫そうですね。」

「はい。大量のハンバーガーを要求された時には気が狂いそうになりましたけどね。ただ、色々と大きくなりましたが…。」

「…ねえ、正気なら倒す必要は…」

「…すいません、上姉様。それはできません。」

「なんで？」

「私は、許せないのです。私を…私をこんなに大きくしたヘラがあ！」

「…まあ、そうなるな。」

「え、納得しちゃうの？」

「だってヘラ嫌…じゃなくて苦手だし。いや、やっぱ嫌い。こちとら被害者だつっの。そんなに夫をとられるのが嫌だつて言うなら手綱でもつけとけば良いのに。」

「そうですね！ほんとなんで放し飼いにしてるんですかね！しかもそのせいでPOSEイドンさんやアテナさんにも迷惑かけましたし！」

『…エウリュアレよ、あまりヘラを悪く言わないでやってくれ…。後が面倒だ。』

『その通りだな。あとで痲癩を起こされようものなら次こそオリユンポスが割れるぞ。』

『うへえ、やっぱ神って酷いんでつね。』

『ご主人！鞆のなかのニンジンは食べて良いのか!?!』

「いいわよー。」

『ふははははははは！ニンジンがあつてご主人がいればアタシはなんでも良いぞ？神との戦争だろうとついていこう！』

「…下姉様…。」

「んー、流石にそれは駄目ね。ゼウスはなんだかんだ言つてヘラのことを愛しているし、

私達がヘラを殺してゼウスが最高神を降りたとしてもどうしようもないし。」

『…もういつそエウちゃんが一番最高神にでもなれば良いんじゃないですか?』

「駄目。私は既に古い時代の神だからね。もう時代はオリュンポスの神々に移った。なら、オリュンポスの神々かそれ以降の新しい神が時代を進めていくべきよ。」

「…エウリュアレ。」

「それに、めんどろくさいし!」

『…まあ、エウリュアレならそう言うと思っていた。』

『自分の興味の無いことにはとことんやらないからな。』

『つまりいつも通りと言うことですねわかります。』

「…それで?どうするのメドゥーサ。戦わないなら戦わないでさっさと決めて欲しいのだけど?」

「…もし、戦わなかったとしてこの体は元に戻るんですか?」

「さあ?ゼウスにでも頼めばいけるんじゃないかしら。あいつ意外となんでもできるし。」

『まあ…我が父はいちおう全能神だからな。』

『女癖の悪ささえなければ完璧なのだな…。』

『言ってやるな…。』

なんかアテナとヘラクレスが言ってるけど気にしない気にしない。

「じゃあ…」

「…あ、でも流石にお咎め無しで許すわけにもいかないわよね。よし！そういうわけだから戦闘といこうか！」

「ええー!?!」

「ちよつと、エウリユアレ!?!」

「あつはつはつは！大丈夫よ、命まではとらないから！」

「下姉様、待って!?!」

「えー。なによー。」

「ひとつ、聞かせてください。」

「うん。なにかしら？」

「その…、エウリユアレ姉様は、本当にエウリユアレ姉様なんですか？」

「…どういうこと？」

「失礼なことを聞いているのは理解しています。ただ、聖杯を取り込んだときに見てしまったんです。」

「一体、何を見たの…?」

「異世界のエウリユアレ姉様は…小さかったんです。」

「…え?」

「異世界のエウリユアレ姉様はどれもみな小さくて可愛い姉様だったんです!ですが姉様は…エウリユアレ姉様は私みたいに可愛くなく成長してしまってます!それに、ぶっ飛んだものを作ったりもせず私を虐めて生きていて、私の姉様とはさっぱり違うんです!だから…だからもしかしたらエウリユアレ姉様は実はエウリユアレ姉様ではないのかも…」

…泣くほどの事かしら、それ?少なくともメドゥーサに損は無いように思うのだけだ。だって、ねえ?

「それは違うわ、メドゥーサ。」

ウエ!?

「…ステンノ、姉様?」

「確かに、異世界では私のように成長しない体であるのかもしれない。でも、今ここに居るエウリユアレは貴女にとってのエウリユアレなのでしょう?それに、アテナが教えてくれた異世界論では、可能性の数だけ世界があるそうよ。つまり、エウリユアレが成長したり、ぶっ飛んだ発想をしていたり、ギリシア最強クラスだったりしても別におかしくはないのよ。そういう世界なんだから、ね?」

「ですが…」

「メドウーサ、じゃあ私は貴女の姉であるとは認めてくれないの？」

「いいえ！エウリュアレ姉様は私の姉様です！ただ、不安になって…。」

「全く。そういう事はもう少し賢くなつてから考えなさい。いや、全く帰つてこなかった私も悪いのかしら…？」

『まあ、そうなるな。』

『だろうな。』

「…ごめん、メドウーサ。そしてアテナとヘラクレスは帰ったらスパルタコース三時間ね？」

『は？』

『なに!?!』

「…さて、じゃあ…そろそろやりましょうか？」

「…そう、ですね。ええい、ここで私に負けるようならそれはエウリュアレ姉様ではありません！全力で行きます！」

「私を姉だと否定したいのか肯定したいのかはつきりしなさいよ…。まあいいわ。今回は色々と試させてもらうわよ！倉庫魔術起動、検索、『ファイズドライバー』、『ファイズギア』、『ファイズアクセル』！」

いつもの倉庫魔術を起動してとあるベルトを取り出す。

「…ベルト? 一体何を…」

「見てればわかるわ!」

ファイズドライバーを腰に巻き、ファイズギアを開く。

— 5 5 5 —

” Standing by ”

「な、へんな箱がしゃべった!」

「変身!」

” Complete ”

赤いラインが体をなぞり、まばゆい光と共に服が仮面ライダーファイズっぽいスーツに変わる。

「…うん、確かに変身はできたけど…さ?」

「なんでぴちぴちのライダースーツなんですかねえ!」

「くっそ、作ったとき何を考えていたんだ私い…! ボディラインがすっかり見えてるだ

ろうなこれ…!」

「うっわー、恥ずかしい格好!」

「やかましいわ!」

流石にあの怪盗ほどじゃないわ!

『ステンノ殿！カメラで写真を！どんな格好かはわかりませぬがエロい格好なのはわかりますので写真をお！』

「黒髭…後で覚えときなさいよ？スパルタ500時間コースなんだから！」
『き、筋肉達磨しかいないのはいやでござるうううう！』

うん、そうしよう。聖杯でクラス違いのレオニダス一世を7人喚んで2100人で追いかけて回してやろう。うふふふふふふ…！

「ですが！たかが服がエロくなっただとこで変わりません！行きます！」

メドゥーサが二振りの剣を構えて突撃してくる。あれ、私が結構前にあげた剣だな…まだ大事にしているてくれたのか、しっかりと手入れもされてるみたいでとっても嬉しい。まあ、手加減なんてしないんだけどネ！

「こつちもいくわ！召喚、ファイズエッジ！ファイズの力、見せてあげるわ！…にしてもこれ動きやすいわね。まるで裸でいるみたい。」

『エウリユアレ殿は裸族なんでござるかあ！？』

「ちげーわ！」

『…なんとも締まらない始まりかたじやのー。』

『そりゃノツプがいますからね、仕方ないですね。』

『…是非もないネ！』

…
エウリユアレ先生の次回作に
お待ちください
これからだ!

第十八話 終点

キン！キン！

赤い閃光と紫の流星が幾度も切り結ぶ。交わった回数に既に百は越えるだろう。端から見ればこの剣のぶつかりあいには未だ互角だ、と感じるのかもしれない。

だが、実際は違う。

結論から言うとな私が押されている。

「せいっ！」

メドゥーサの気合の一声と共に長刀と短刀が同時に上下から私を挟み切らんと迫る。それを魔力放出で目眩ましをしつつ後ろへ飛んでかわす。

「くっ…」

けっこうきびしい。うん、かーなーり、やばい！

ファイズに変身したパワーアップのおかげでなんとかギリギリで回避はできてるけどこのままじゃ負ける！

というか技量に関してはメドゥーサの方が上だ。剣術、魔力操作、どちらも私が負け

ている。

そもそもそういった技術に関しては私はステンノとメドゥーサに何歩も劣っている。だって縮地からの不意討ち暗殺か縮地からの超至近距離高火力攻撃とかしかやってなかったしネ！ビームも魔力も暴走させてぶっぱなしているようなものだからいうて特に難しくもないし。

：そんな私が三人の中でトップと言われるのは創造魔術と付与魔術でその場で相手に一番効く武器を作り出して戦うことができるからだ。物量には広範囲攻撃、弱点があればそこをつき、ないなら無いで物量で押す。とりあえずバスターで殴るんだ。

じゃあ、なんでそうしないか？

いやー、したいのはやまやまなんだけどね。どうもメドゥーサの魔眼が強くてそれの対処で精一杯なんだよね。

私の対魔力は魔力を回していけばルーラーしか持ち得ない対魔力EXクラスになる。逆に言えば魔力が回せなければそこらへんの女神と変わらない対魔力でしかないのだ。更に、メドゥーサの魔眼は正直対魔力EXクラスを維持しないとたちまち石になってしまっただろう。流石にそうなってくると魔術に魔力を回しにくくなるのに、おまけにどうも魔力の通りが悪い。そのせいで多分一度しか倉庫魔術を発動できないだろう。二度目を使ったら多分どっかしらが石になる。くそう、ストロスの杖を作っとくんだった

なあ。

「せいやあー！」

メドゥーサが二刀にて斬りかかり、それをファイズエッジで受ける。バキン、とファイズエッジから音がする。

「くっ！」

うわ、やばい。明らかにいまファイズエッジから嫌な音がしたよ。

…まあ、メドゥーサの怪力で振り下ろされる剣をここまで受け止めてきたのだから仕方ない、か。

恐らく次に受け止めたら折れるだろう。なら…

パシッ

縮地で距離を取る。もうこれ事実上の瞬間移動よな。

「仕切り直しなんてさせませんよ！」

メドゥーサが私の首を断たと長刀を振りかぶりつつ駆け寄る。

「なら真正面からぶつたぎるだけよ！」

” Ready”

ミッシヨンメモリーをファイズエッジに刺し込み、刀身にフォトンブラッドを通す。なに？ファイズエッジはミッシヨンメモリーを刺さないと刀身が出ない？ははは、そこ

まで再現できなかったんだよ。フォトンブラッドを完全に固定するのは無理だったんだ…。

「…いくわ!」

互いに剣を構え走る。

「はああああああ!」

「てやああああああ!」

三步にて互いの首を落とせる距離。メドゥーサの剣は確実に私の首を落とすだろう。

そう、そこまで正確に斬ってくるだろう。

だが、私にだって秘策はあるのさ!

深淵の炎よ…!

エウリュアレが、蒼い炎に包まれる。

「な、消えた!? いや、違う!」

「そう、昔の姿になっただけよ! そして! 一瞬の隙が…」

ガスト

メドゥーサの剣は私の頭上を通りすぎ、わたしのファイズエッジの刀身はメドゥーサ

の腹を捉える。

「ぐっ…」

「命取りよー！」

” Exceed Charge ”

それと同時にファイズエッジにフォトンブラッドを流し、高熱にて斬る！

ギューイイイイン！

「ぐうう!？」

ばきん。

「ぐうあ…」

「…折れたあ!？」

ま、まさか一度の真名解放(?)も耐えられないほどに損耗していたとは…!

はっ、一度間合いをとらなきや!縮地!

「…ぐ、流石ですね、エウリユアレ姉様。まさかそんな方法で不意を討ってくるとは。」

「あはははは…、逆に言えば不意でも討たなきや勝てないってことなんだけどね…。」

そういういながら深淵の炎で普段の姿に戻る。

「ぐう、途中で折れたとはいえ高温の剣に…これは毒、ですか。効きますね…。」

「だけど、まだ手は残しているのでしょうか?」

「…それを言うなら、エウリユアレ姉様なんて一度も私の剣を喰らってないじゃないですか。私なんてさつきの一発以外にも何度も細かい傷をもらってるんですよ?」

「いや、私だと一発食らえば変身解除、そのまま食らえばワンパン即死だからね?ただでさえすぐ取れるベルトなんだから。」

というか流星に私がお遊びで作った剣を折るとかメドウスアのパワーやベーよ。

「…仕方ありません、本気の一撃、受けてもらいます!」

「できれば使つてほしくないけど戦いだし是非もないよネ!」

そういういつつメドウスアは二刀を下段に構える。すると、剣が光を帯びていく。

「…ビーム、かあ。」

ならばこちらもやるしかない。

魔力をーまーわせー魔術をー起ーこせー、今ーがそ、の、と、き、だ!

テレレーテレレーテレレーテレレー

ビィイムソオオド！（チエエエンジゲツタアアアア！風に。）

先手必勝、先に撃つた方が有利だ！ならば即撃てるこいつでしょ！

半身に立ち、剣を持った左手を顔の横まで上げ右手は刀身に添える。

「敵吹き飛ばせ光の帯！『なんかビーム撃てる剣』！」

そこから剣を前に突き出してビームを撃つ！左片手一本突きじやーい！

光の奔流がメドゥーサへと伸びていく。

これなら…

「これは我が夢、我が想い、我が希望！しかと受けよ！『希望具現せし…』」

な、結構発動が早い！いや、光の剣の発動が遅いだけなのか！くそう、おのれ抑止力う

！

ドカアアアアン！

メドゥーサが二刀を同時に振り上げてビームを撃ってきた…けど、この威力なら押し

きれ…

デュアルブレイク

「…『一本の剣』！」

メドウーサの気合の声と共にさらにビームが強まり、剣がどんどん崩れていく。
やがて剣が完全に崩れ：光が迫る。
さて、ではいつちよ行きますか。

” S t a r t U p ”

瞬間、世界が縮んだ。

→ ここまでエウリユアレ
← ここからメドウーサ

…『希望具現せし二本の剣』。私が追い求めた剣ビームの極致。

まさか一撃目を優勢に持ち込まれるとは思わなかったが、なんとか二撃で押しきることができた。

さて、エウリュアレ姉様は…

…な、居ない!? 一体どこへ!?

まさか消滅したとか!?

” Three ”

突然、空間に無機質な声が響く。

” Two ”

視界の中をなにかが高速で通り過ぎる。

” One ”

それがエウリュアレ姉様だと気付いた時には、

” Time Out ”

目の前に、エウリュアレ姉様の顔があった。

「真の女神は、眼で殺す。」

その顔は、とても辛そうで、苦しそうで。

『アイ、オブ、ザ、エウリュクレ
女神の視線』

もう終わりにしよう、と受け入れたと同時に視界は白く染まった。

.....

目覚めたのはベットのの上だった。

結局、エウリュクレ姉様に私は負けてしまった。

そして、私が見たのは、様々な感情を露にする皆だった。

ステンノ姉様は泣いていた。いつかこうなる気はしていたが、まさか今日だとは、と。

アテナは怒っていた。命を捨てるようなことか、と。

ヘラクレスはただ剣を振っていた。いつか約束を果たすため、全力で戦えるように鍛練を続ける、と。

ネコみたいなキツネみたいな生物ナマモノは昼寝をしていた。よく考えろ、ご主人だぞ？と言いなから。

ほかのサーヴァントは居なくなっていた。生物曰く聖杯の魔力源であったエウリュアレから魔力が来なくなっていたからだそうだ。

…結論から言おう。

エウリュアレ姉様は死んでしまった。

どうやら、あの高速移動の反動がある状態で目からビームを撃った結果私の魔眼を打ち消せず、また魔力の暴走も相まって魂のみが砕かれた、とステンノ姉様は考えているそうだ。

事実、ビームを撃ったときのエウリュアレ姉様は苦しそうな顔をしていた。そして、エウリュアレ姉様の体はベットの上に、冷たくなつてはいるがきれいなまま寝かされている。

私のせいでエウリュアレ姉様が死んだ。

そう、理解するのに時間はいらなかった。

エウリュアレ姉様が昔に行方不明になったときは遺体も見つからなかったし、なんだから生きているだろう、と思っていた。

だが、今は違う。目の前に、冷たくなった姉様の体がある。

動かない。なにもしない。いつものようにふざけた口調で話してもくれない。

私は、罰を受けようとした。だけど、ステンノ姉様たちはこう言った。

「エウリュアレは貴女を生かした。ならエウリュアレの分も生きること。それが義務で、そして罰にもなるだろう」と。

そのあとも、ゼウスとハデスとポセイドンが協力して蘇生しようとしたりもしたがで
きず、せめてもの報いとして『妹を命を捨てて救った女神』として天上へと捧げられる
ことになった。

捧げる星は空にて特に明るい21の星の一つ、フォーマルハウト。

その星に、エウリュアレ姉様とついでに生物は奉られることとなった。

エウリュアレ姉様は、星となったのだ。

「…まあ、キャットとしてはご主人と居れた方がいいから言わなかったが、この後生き返るんだワン。だって、ご主人だぞ？ははは。」

→ ここまで古代ギリシア
← ここから冬木

目が、覚める。

…いや、なんなんだよこの夢は…。

なんでエウリュアレがガチでメドウーサと殴り会えるんだ…？しかも相討ちとか…。

…取り敢えず今日は何もなし、起きる…あれ？誰か腕を掴んで…

「すう…すう…」

「…え？」

…うん、なんでセラが俺の横で寝てるんだ？しかも俺の手を握って。

…とりあえず、起こすか。

「おーい、セラー。セラー？起きろー。」

「…むう、んん…ああ、おはようございます、シロウ。」

「おはようセラ。それでなんで俺の布団で一緒に寝てたんだ？」

「…あ。」

「…？」

「…えっと、昨日の夜シロウがうなされている声が聞こえて、せめてましになればと手を握って…そのまま寝てしまいました。」

「…。」(ジトツ)

「な、なんですか。疑ってるんですか!？」

「…ははっ。いや、セラが嘘をつくとは思えないしな。うなされてたのか…うん、ありがとう、セラ。」

「うえ、え、ええ。どういたしまして。ほら、シロウ。もう明るくなってますしご飯、を…」

ん？どうしたのかセラが時計を見て固まってしまった。なんでだ？と思い時計を見るとき…

見事に昼真っ盛りである。

これは、マズイ。

なにかマズイって他に料理を積極的に作る人間が俺とセラ以外に居ないのだ。ランサーは行方不明、ライダーは早朝からバイトだ。

つまり居間には腹を空かせた騎士王様がいるわけで…

下手をすれば俺達が食われかねない。

セラの方を向くと、目があつた。

「…なあ、セラ。」

「…なんですか、シロウ?」

「…二度寝、しよつか。」

「…ですね。」

そうして二人は布団に戻り、目を閉じ…

「いい加減に起きたまえ、バカ夫婦。」

布団をひっぺがされた。

「な、アーチャー!?!」

「なぜいるのですか!?!というかバカとはなんですか、バカとは!」

「なに、早朝から釣りに行ったは良いものの一人では食べきれない量だったのでね。お

裾分けに来てみれば腹を空かせて凶暴化したセイバーが居るとききた。流石に彼女に罪はないからな。料理を作つて、そして君達を起こしに来た、というわけだ。」

「な、なるほど…。とりあえず、サンキュな、アーチャー。」

「なに、ただの気まぐれだ。にしても、君達は…なんだ、お楽しみか?」

「違う。断じて違う。」

「え、ええ!そうです!まだそんなことはしてません!」

「まだつてなにさ…。」

「…ふつ。まあいい。…ああ、そうだ。昨日の夜、夜道を歩くイリヤスフィールを見た。」

「え!?!」

「な、どういうことだ!?!」

「私は知らん。そのときは死にかけのランサーを運ぶので手一杯だったのでね。ただ、子供の夜遊びはいただけないからな。君達から叱つておいてくれたまえ。」

「…ん?ランサー帰つてきてるのか?」

「ああ。昨日の夜道路でしわくちやになつているのを拾つた。今はアイロンがけをして畳んでおいてある。」

「…ランサーとは…。」

「…さて、では昼飯だ。とりあえず居間へ行くぞ。」

「ああ。」

「わかりました。」

.....

「…それで？なぜお昼になって起きてきたのですか？シロウ、セラ？」

「えつと…うなされてました。」

「それを抑えるために一緒に寝てました。」

「…なるほど、なら仕方ありませんね。私は許しましょう。」

「セイバー…！」

「ですがこの聖剣が許すかな!？」

「セイバーッ!？」

「茶番はそこまでにしておけ。今から料理だ。バタバタするな。」

「わかりました、アーチャー。」

「…なあ、べつに俺達は起きたんだし昼飯まで作らなくてもいいんだぞ？」

「ふつ。せつかく騎士王に俺の料理が求められたのだ。作るべきだろう？」

「いや、多分本人はそこまで深くは考えてないと思うのですが。」

「なに…別に三食とも作ってしまっても構わんのだろう？」

「いや、別にいいけどさ…」

「ならば問題はないな。では行くぞ。 : I a m a a p r o n b o y : !」 (B G

M : E M I Y A)

「なんの詠唱だよ…。」

今日も冬木は平和です。

外からエウを見てみよう 四回目

・メドゥーサ

ああ、お久しぶりですね、■■■。え、なぜ名前を知っているか、ですか？そりゃあ、平行世界の私がお世話になってましたからね。たまたま見えてしまっただけです。

そうそう、純粋な剣技でエウリユアレ姉様を越えられたんですよ！いやまあ代償としてエウリユアレ姉様が亡くなりましたがそれはそれ。ビームも撃つて剣技も十分！これでセイバーの仲間入りですよね!?

…え？それではまだ個性が足りない？二刀流とかベタすぎる？

うむむむむむ…！これ以上は私だけでは厳しいですね…。

仕方ありません。ヘラクレスにでもなにか助言を貰ってきます。

・ステノ

…あら、久しぶりね。ごめんなさいね、左腕を骨折しているから何も出すことができないの。別に大丈夫だと思うのだけど、アテナがすごい剣幕で安静にしていると言って

くるのよ……。全く、私は子供じゃないんだから大丈夫なのにね。

…そうだ。ひとつ助言を貰えないかしら？エウリュアレから教わった創造魔術なんだけど、あまりいい感じの生き物ができないのよ。ちびノブならいくらでも作れるのだけれど、完全な人間とか動物なんかは作れないのよ。

…なるほど？大事なのはイメージ、ね。『イメージするのは常に最強の自分』？それは…あまり役に立ちそうにないわね。まあ、ありがとう。お礼にこんどご飯を作つてあげるわ。

・アテナ

む、またお前か。

なに、エウリュアレ？ふん！あんなやつ知らん！わざわざ正気な奴に無理やり戦闘を吹っ掛けておきながら追い詰められて自爆だぞ?! 一体あいつはなにがしたかったんだ?! 本当に！

全く！勝手に死ぬのは構わんがもう少し周りのことも考えろつてもものだろう?! とうか鍛治の女神が正面きつて戦うか?! 普通はせいぜいが後方支援止まりだろう！いや、美の女神なのに、がしがし戦つてるステンノもおかしいがな!?

…いや、違うな。あの三姉妹がおかしいのだ！なんだあの三人は！

だー！もう！やってられるか！アルテミス！アルテミス！酒だ！酒持つてこい！なに？オリオンにお仕置きするのが忙しい？うがー！

・ヘラクレス

む、また会ったな。

まあ、エウリュアレの事だろう？うむ…こんなことを言うのはアレだが、どうせ復活するんじゃないか？エウリュアレだしな。それに、なんだかんだで約束は守る奴のはずだからな。俺との約束は破りはせんだろうよ。

しかし…あの三姉妹はなんなの？うむ、なんなんだ？

当時からエウリュアレはおかしかったが、最近…というかエウリュアレが昔に行方不明になって以降ステンノとメドゥーサもかなりパワーアップしているな。メドゥーサは剣一筋、といった感じだが魔眼がかなり強くなっていて、ステンノに至っては槍の扱いは達人の物だ。それに脚も恐ろしく早い。恐らくアキレウスとやりあっても圧勝するような技量だ。うむ…本当にあいつらは美の女神として産み出されたのか？戦女神とか英雄の女神とかではないのか？

…やはり、美の女神なのか…。ううむ、美とは一体…。

・ヘファイストス

む？なんだ坊主。ここは子供が来るようなところではないぞ。

なに？エウリュアレについてのインタビュー？ふむ…酔狂なことをする子供もいるのだな。

エウリュアレは、一言で言うなら『馬鹿』だな。やることなすことが明らかに常識をぶち壊していくような類いのものばかりだ。いやまあ、作り出す存在からすると革新的なのは良いことだが、あいつは基本から完全に特殊だからな…。その上でしつかりとしたものを作ってくるから羨ましい限りだ。

創造魔術、真面目に習得を考えてみるか…。

・エミヤ

む？なんだね。お代わりならまだ残っているが？ああ、エウリュアレのことかね？うむ、やっと尻尾を掴めた。ゴルゴーンは第三次聖杯戦争にて勝利したマスターのサーヴァントで、その際に受肉して生きていたようだ。そして、そのゴルゴーンは第四次聖杯戦争の最後に溢れ出た聖杯の泥によって…恐らく消滅したと見られている。

…確認は出来てはいない「アーチャー、お代わりを下さい。」…うむ、わかつたセイバー。それで。エウリュアレはそれに関連して産まれた平行世界の存在か、彼女に作られ

た別の歴史なのではないかと考えている。例えば…そうだな、ゴルゴーンが第四次聖杯戦争でも勝ち残り、平和に生きた自分を願った…などか？

そもそも私の知っている第四次聖杯戦争とは違うからあまりわからないが、少なくともセイバーは早い段階で脱落しているからな。そんなことがあっても不思議ではないだろう。

…なんだセイバー？なんで私を睨んでいるのだ？なに？あのときは知り合いが出て来てビックリした隙にやられた？今の私なら簡単に勝利できる？

ははは、ぬかしおる。

・山の翁

…うむ、一つだけ伝えさせて貰おう。

晩鐘は未だ彼の者の名を指し示さず。女神エウリユアレの旅はまだ続くであろう。…ただし、墮ちし時には晩鐘が鳴るであろう。

・キャット

うむ！その先はタマモ地獄だぞ？

なるほど、進むのだな？この演劇を見ることを止めても良いのだぞ？

ふむ、決意はあるのだな。ならば最後までエウリュアレと地獄に付き合ってもらおう！このモフモフ地獄に、だワン！

…なに？キャットは本当にバーサーカーなのか？ふむ、確かに狂化はCランクあるぞ？まあ、本質的にはアルターエゴだな。うむ、まだわからないだろうがいつかわかるだろう。

ご主人は…脳筋だな。もつと言えば多分バカの類いだな！だからその場で思い付いたことをパツとやってみたりする。メドゥーサとの戦闘なんかはそれの最たるものだな！まあ、そう言うところがアタシは好きなんだがな！

…ただ恐らく、メドゥーサと無理やりにも戦ったのにはなにか理由もあるんじゃないかなとキャットは睨んでいる。例えば…お昼御飯の取り分が少なくなることとかかな！

あははははははははは！

・めつふいー

…はい、ワタクシですとも。

いやー、今回は短くいいようかと思えます。

ワタクシの活躍がなかったんですけどお!?

敵から味方に寝返ったキャラって何かしら重要なところで役に立つんじゃないんですかあああああ!?

ワタクシ、退去してしまいましたけどおおおお!?

いやまあ、色々と貴重な体験ができたのでいいですけどおおお? 例えば善悪のメツフィーに別れたりとか? まともな状態のヘラクレスと話したりとか?

…まあ、面白かったのでよしとしますかねええええ!

うひゃひゃひゃひゃひゃひげほっ、げほっ。

おまけ・例の冬木のキャスターの事とか。

「いえーい、この作品ではかなりの善人にされちゃうアンリさんだぜー?」

「主人公の心の中で生き続けるほうのエウリユアレよー。」

「というわけで番外編だが…スパンが短くないか?」

「タマモワンコ曰く、『区切りのいいところで入れていく』そうよ。今回はエウリユアレ

が死んだからちようどよかったのでしょうね。」

「しっかしついに死亡確認されちまったな、エウリュアレ。これはあれですか、ついにF GO 編突入か？」

「残念、まだ古代ギリシアよ。」

「つまり復活する、と。」

「まあ、そうなるわね。どういう理由で復活するかは楽しみにでもしていないさい。」

「どーせ下らない理由だろうーよ。それで今回話するのは…ああ、十七話の後書きで突然出てきた『冬木のキャスター』とやらについてか？」

「みたいね。全く、こんなところで補足しないといけないようなものを後書きに書くなっつての。」

「本当だな。えつと、なにになに？ FGOでのイベント的なタイトルを考えた？」

「これ、いる？」

「まだ入らないとおもう。けど書きたいから書いてるんだろうさ。えーつと、

『聖杯集結都市 冬木

エミヤンを救え！

ネコセラエウジャガ

大行進！』

だそうだ。」

「…うん、カオスになりそうね。」

「まあ、仕方あるまい。タマモワンコだからな。流星の俺もどうかしてると思うが。」

「にしても、その冬木に本編で突入するのはいつになるのかしらね。」

「ワンコとしては本編三十話までには冬木に突入したいそうだが…ぐだぐだだからな。」

「どうなるかなんて英雄王ぐらしかわからん。」

「でしようね。…というかこのまま行くと士郎の夢オチ、なんてこともしかねないから」

困るのよね。」

「流星にそれは…ないだろ？ない、よな？」

「…。」

「…。」

「うん、とりあえずこの言葉をワンコの奴に送っておくわ。『ワンコ執筆しろ！』」（コハ

体で）

「…けどよ、これが投稿されてるってことは執筆はしてるんじゃないか？」

「ワンコ執筆してた!？」

「あの駄文メイカーの名前をきのこ氏を弄るネタで使うのはきのこ氏に失礼だと思っ
ぜ。」

「まあ、そうなるわね。」

「うん、他に特にならないしこのぐらいにしておくか。」

「ええ。それではまた次回。にしても次回予告でフォーリナーとか大体予想できるわよね。」

「まあ、蛸の方じゃないけどな。」

第十九話 神と女神と肉球

「…起きろ、メドゥーサ。検査は終わりだ。」

しわがれた声に起こされ、目が覚める。

「…おはようございます、ヘファイストスさん。検査とやらは一瞬でしたね。」

いつもの我が家のベッドだが、今回はヘファイストスさんがベッドの横の椅子に腰かけている。

検査の内容はただ一つ、私の体に同化した聖杯についてだ。

「ふん。検査をしていたこつちからすればなにが起こるかわからない代物を調べていたのだからな？ エウリュアレめ、自爆機構なぞつけおつてからに。」

「あははは…、エウリュアレ姉様はちよつとお茶目なので…。」

「あれがお茶目で済むか。あいつのことだからどうせロマンがなんだかんだといって着けたんだろうな。全くもって面倒なことをしてくれおる。」

「あはははは…。」

エウリュアレ姉様ですから仕方ありません：けどもう少し自重してもいいと思いませんね。

「…それでだ。お前の体は特に異常はない。これ以上成長することもないし、魔眼も不必要に周りに撒き散らすことはないだろう。」

「…私つてそんなに魔眼を撒き散らしてたんですか…？」

「自覚はなかつたようだが、少なくともヘラクレスが死にかける程度には撒き散らしていたようだぞ？お前の配下のサーヴァントには効いていなかったから感じなかつたようだが。エウリュアレの魔眼封じの眼鏡がなければこの治療も困難を極めただろうが…まあ、いい。」

「にしても、なんでエウリュアレ姉様は魔眼封じの眼鏡をいつも掛けていたのでしょうか。戦った時にはいつの間にか外していましたが…」

なんとなく眼鏡を作ったら魔眼封じもついてしまったとかでしょうか？エウリュアレ姉様ならありえますね…。

「いや、エウリュアレは魔眼持ちだが？」

「…へ？」

「なんだ、知らんのか？あいつは後天性の魔眼でな、覚醒した当時は大変だったそうだが。」
「へえ…、エウリュアレ姉様も魔眼を…とすると、あの『女神の視線』アイ・オブ・ザ・エウリュアレも魔眼の力で

すかね?」

カレス・オブ・メドゥーサー
私も似たようなことができますし。

「それは違うわ。あれはただの魔力ぶっばよ。」

後ろから鈴の音のような声が聞こえる。

「ステンノ姉様…。体の方は大丈夫なのですか?」

「大丈夫…ではないわね。まだ左腕は固定していないと駄目だしね。…にしても、残念だわ。」

ステンノ姉様は、エウリユアレ姉様の『アイ・オブ・ザ・エウリユアレの視線』の余波で吹き飛ばされてしまつて左腕を骨折してしまつている。私やヘラクレスなら直ぐに治るのですが、ステンノ姉様は元々戦いに向かない美の女神。普通の人間よりも治りは遅い。しかし…

「あの、残念、とは?」

「あら、勿論鍛練ができないことよ。私は弱いから、毎日しっかりと鍛練しないと。それどうやつても限界はあるから、少しでも手を増やしておかないと。」

「お前は一体なにを目指しているのだ…?」

「無論、エウリユアレよ。妹に負けているなんて嫌なもの。」

「技術の面ではあいつより上だと思ふのだが?」

「その通りですよ、ステンノ姉様。」

エウリュアレ姉様を越えるとかどんな化け物ですか。

「なにいつてるのよ。エウリュアレのやつ、模擬戦とか、メドゥーサとの戦いの時とかも必ず自分に縛りを加えた上で戦ってるのよ?」

「え、ほんとうですか?」

「それでもなきや貴女との戦いの時にビームソードしか使わないとか私との戦いの時に槍しか使わないなんてことはないわよ。」

「確かにそうだな。エウリュアレは多くの武器を所持しているが、使うのは決まってるだの刀かビームソード、光の剣程度だ。あいつはぶっ飛んだ武器なぞいくらでも持っているのにな。」

「…例えば、どんなものですか?」

「そうね…一発直撃したら体が塵になるような弾を何千発も連射する武器とか?」

「たしか地球すら破壊できる『リボルケイン』とかいう杖も持っていたはずだ。」

「…やつぱりエウリュアレ姉様っておかしいですね。」

もしかしてエウリュアレ姉様が死んだのは世界にとっては良いことだったり…?

「…二人とも、お茶にしましょうか。フナちゃん、お茶を持ってきてちょうだい!」

…フナちゃん?

そう疑問に感じた時に、ドアを通過して無数の脚が生えたお盆がやってきた。

「o...t...y...a...」

喋った…だと!?

「ありがとう。」

「…なあ、ステンノよ。その…なんだ、ほぼまつ平らで、黒くて脚が無数に生えた生物？
はなんだ？」

「ああ、紹介してなかったわね。この子はフナちゃん。昨日エウリユアレから教えてもらった魔術で産み出したのよ。どう？可愛いでしよう？」

…かわ、いい？

その黒い紙みたいなのが？猫目のついた変な存在が…？

「…う、うむ、かわいい…のか？」

「…いや、私にふらないでくださいよ…ただ、なんというか…私は苦手です…。」

「えー、かわいいと思うのだけけど。」

ううむ、なぜ私の姉は二人ともこんな感じなのだろうか…。

…あ、姉妹だからか。なるほど。

「…それで。メドゥーサの体に同化した聖杯だが今は完全に停止している。恐らく稼働のために使っていた魔力がエウリユアレから供給されていたのだろう。エウリユアレが死んだ今は動くことはあるまい。」

「…あれ？でもエウリユアレが冥界に行っていたと言っている頃にメドゥーサはあんなっていったわよ？」

「うむ、それなのだが、恐らくヘラの呪いが魔力源になってしまったようなのだ。ヘラがかけたのは成長の呪い。しかも成長させるために過剰に魔力を使ったのだろうか。その魔力で動いていた痕跡がある。」

「またヘラですか…。」

「いつものことだ。ただ、エウリユアレはこれの維持にかなりの魔力を取られていたのかもしれない。本人は自覚していなかったのかもしれないが。」

「…それって、無自覚にハンデを貰っていたってことですか？」

「まあ、それは本人しか知らぬことだがな。」

「その、維持の魔力ってどの程度なの？」

「そうだな…常に剣でビームを撃っているのが近いかもしれない。実際は更に多いかもしれない。」

「…それってかなりの量では…？」

「やっぱりエウリユアレは異常ね…。」

「です…。」

「…さて、結局エウリユアレも居なくなってしまったしな。そろそろ帰る。」

「わかりました。今日はわざわざありがとうございます。」

「なに、同僚の妹の命を救うと考えれば軽いものよ。なにかあれば頼れ。多少ならこの爺でも役には立つだろうさ。」

「はい、よろしくお願いします。」

「うむ、ではな。」

∴エウリュアレ姉様の分も、しっかりと生きなければなりませんね。

頑張りますよう。

→ここまでメドウーサ

←ここから ■■■■

（ ・ ・ ・ ） やあ。

うん、またなんだ。また冥界に行ってました。それも今回は魂だけだったから大変だったね、うん。ガルラ霊って魂で戦うと結構強いんだわ。しかもエレシユキガルの許可がないからこっちは全裸武器なしだし？ いやー、初めてまともに八極拳を使ったかもしれない。

それでまあなんだかんだあつて二ヶ月ぐらい冥界をさまよった挙げ句追い出されて帰ってきたのだけど：

うん、何処ここ!?! うちゅーだようちゅー! しかも下には蒼い星！

おお、こんなときには解析の魔眼は役に立つね。なになに、『フォーマルハウト』？ えーつと、みなみのうお座の一等星だっけ？ うお座だっけ？ まあいつか。

しっかし、なんでこんなところに居るんだ…？ んー、わからん！ というかなんで呼吸できてるの？ 魔法？ 実は死んでるとか？

『そんなもの、我が加護によるものに決まっておろう。』

…ん？なんだか神様の類いの気配が…？

『後ろだ。』

…後ろ？うむ、まあとくに変なことはせず振り替えるかな。さーて、だれかな？

『我だ。』

なるほど、貴方ですか。

…して、どちら様でしょうか…？

『まあ、知らぬのも仕方なからう。そうさな…お主達の言語で《クトウグア》と言えば分かるか？』

…クトウグア、クトウグアあ!?

外宇宙の旧支配者やん!? ハザードトリガーよりヤベーやんか!

しかも…赤髪ツインテじゃなくて普通(?)のじいちゃんや…。

『うむ、なぜ赤髪ツインテという発想が出たのかは我にもわからんが、流石におかしいだろう日本人。』

日本だからね!是非もないね!

…それで、なぜ私がここに？

『まあ待て。その話の前に彼女が話したいそうさ。』

…彼女？

「ようご主人！まだ生きてるか？」

「え、キャット!?!」

「そう！ご主人のサーヴァントたるキャットだ！アタシはご主人の側に居たかったからな！ついてきたというわけだ！」

「流石バーサーカー！躊躇いもないね！」

「それでだご主人！なぜあんな無茶苦茶をしたのだ!?!アタシも一瞬ご主人が本当に死んだのかと思って野生に還りかけたのだぞ!?!」

「あー、いや、それはですねー。」

「言い訳無用だご主人！どうしてこうなったのかだけをアタシに説明するのだな！」

「…えつと、アクセルフォームの速度がめちゃくちゃきつくて、これ以上の戦闘続行は厳しいかなー、って思ったから魔力全振りでもドゥーサを殺すぐらいの気持ちで大技をぶっぱなしたら見事に暴走して自爆しました。はい。」

「……………なんとというか…ご主人らしいな。」

「おうふ。」

「今回は生きていたから良かったが、ご主人が死んだらキヤットはとても悲しい！だから無茶はしないで欲しいんだワン。」

「キヤット……。うん、わかったわ。できる限り無茶はしないようにする。」

「うむ、断言しない辺りがご主人らしくて良いな！ではそろそろクーさんと交代しよう！」

『……。うむ、良い主従関係……。なのか？まあいい。お主とこのキツネ「キヤットだ。」……。うむ、キヤットがここにいるのはゼウスによってこの星に祭り上げられた、ということになっっている。』

「『なっている？』それって……」

『お主の考えた通りだ。我が呼び寄せたのだ。』

「我が脚本を書き換えたのだ！」

「何処のドン・サウザンドよ……」

『我はラスボスではない。どちらかという悪魔城ドラキュラのアルカードポジだ。』

「アルカードオ！」

「アルカードオ！」

「アルカードオ！」

「アルカードオ！」

「いくぞ！」

「おう！」

「グランドクロス！」

「しまった」

「しまった」

『グランドクロスを誤爆している場合か。というかそのネタはまだ未来のものだろう。』

「あつはつはつは、ギャグ時空みたいだしいいのよ。」

「ここにいる3分の2が存在がギャグだからな！仕方あるまい！」

『…まあ、そうでもなければこうなつてなどおらぬか。』

「まあ、そうなるわね。それで？なんで私をここに呼んだのかしら？」

『…うむ、面白そうだったからだ。』

「…まあ、神だし仕方ないか。」

「皆が皆そうでもない…と言えないのが悲しいところなのだな。」

『というわけだ。少しの間、ここで過ごしていくといい。』

「拒否権は？」

『無いな。』

「デスヨネー」

「つまり、アタシとご主人の新婚生活なのだな！うむ…g o o d！」
キャッ

「あつはつはつは！え、新婚？」

「うむ！うむ！」

「…え？え!？」

『落ち着け、そいつはバーサーカーだ。』

「うん…うん？まあ…いい、のか？」

.....

久しぶりの白い空間。夢か現か、曖昧な…んー、精神世界的な？

「…久しぶりね、■ ■。」

「よーう、生き残っちゃったんだな、おまえさん。」

「…ええ、どうやら生き残ったようです。エウリユアレ、アンリ・マユ。」

「いやー、なんだ？ほんとお前は運がいいな。なんで外宇宙のカミサマにまで気に入られてんの？」

「あら、そのカミサマが■ ■に目をつけたのは貴方の気まぐれのせいじゃないかしら？」

「ううむ、まあそうだよなあ。」

「…それで、どういった内容で？」

「あー？ ああ、とりあえず生存おめでとう。まさか外部からの干渉があるとは思わなかったけどな。」

「あら、良かったじゃない。メドゥーサも■■■■も死ななかつたんだしね。」

「…まあ、そうだな。」

「…そういうえば、今更ですけどなんでアンリ・マユがいるんですか？」

「あつはつはー！ それを言ったらつまらないだろ？ まだその時じゃないからな。ま、もしかしたらあのカミサマが教えてくれるかもな。」

「できれば聞いてほしくないけれどね。」

「それはどういう…？」

「…おっと、そろそろ起きる時間みたいだぜ？」

「な、まだ話は…？」

「さて、では心優しいアンリさんからの助言だ。『鉄の巨人、打ち倒すは鍛練の結果なり』とでもっ。」

「鉄の巨人ってそれヘラクレスじゃ…？」

「そんじゃ、またな！」

「頑張りなさいよー。」

「ちよー!ちよつと待、待ちやがれアンリ・マユー!」

「あつはつはつはつはー!」

ガバツ

「…うむ、あまり良い目覚めには見えぬなご主人。アタシの肉球で癒されるか?」

…うん、なんなんださっきの夢。夢?…夢つてことにしとこう。

鍛練、鍛練かー。最近武器製作ばかりでちよつとサボってたからなー。頑張りよう。でも、その前に…

「とりあえず肉球で癒して…。」

「うむ、よかろう。タマモ地獄をくろうがよい!」

ポムツ。

「…ああ…良い…。」

「うむ、ご主人が嬉しそうでアタシも嬉しい！」

このあと、腹を空かせたクーさんが来るまでモフモフは続いた。

第二十話　　ビームと左腕と必殺技

ぶおん、ぶおんと剣が空を斬る音が庭から宇宙空間へ溶けていく。空気のない宇宙で一体私は何を斬っているのか些か疑問に思うが切り捨てる。

すたたたたたたた、と気持ちのいい音をたてながらキヤットがキツチンでキャベツを千切りにしていく。キャベツを切っているのにしゃきの一つも鳴らないとかそもそもあの手でどうやって包丁を持つているのかと疑問に思うがそれも切り捨てる。

ただひたすらに剣を振る。だるくても、血が流れようと、ひたすらに剣を振り続ける。それが私のやり方だ。昔メドゥーサにそのやりかたは非効率的だと言われたが、いつか剣が音を置き去りにするまではこれをするつもりだ。ちなみに拳の方は音を置き去りにできた。といつても鍛練を少々サボっていたのでまた一からやり直したが。

そうして一万回の素振りが終わる。なかなか無心になるといのは難しいもので、普段から常になにかを考えていたせいで無心になれないというのがなんといいか悲しいところだ。

「日課の素振り、ご苦勞様なのだな。とりあえずキヤット特製のお茶でもいきなり飲むといい。」

そういつてキャットがお茶を渡してくる。一体なにが特製なのかはわからなかったが、ちやうど喉も乾いていたのでありがたくいただくことにした。

「ありがと、キャット。」

「良妻たるもの、これぐらいは当然なのだ。」

キャットと二人でちやぶ台を囲み、のんびりとお茶をすする。

……ちなみに、今いるのはクーさんことクトウグアによつて完全再現された衛宮邸（庭と蔵付き）である。宇宙に浮かぶ衛宮邸はなかなかシニールである。まあ、おかげで今こうしてのんびりと鍛練ができているのだが。

「そういえばご主人。」

「んー？なに？」

「いや、そのな……ご主人には、必殺技は無いのか？」

「必殺技？」

「うむ。ご主人が多くの武器を持っているのは知っているが、ご主人とまともにやりあうような相手ならご主人のその武器を封じるぐらい容易いのではないかと思つてな。」

「…ねえ、キャット。」

「む？なんだご主人。」

「キャットつて…本当にバーサーカーなの？」

「あはははは！うむ！確かに狂化はあるぞ？」

「…そっか。うーん、確かに武器封じは弱点なのよねー。実際にそれでメドウーサに負けたし。」

「やはりか。それで、何かあるのか？」

「うーん…女神アイ・ネフ・ザ・エウリユアの視線とか？」

「…ご主人、残念だがアタシは知っているぞ。その技はまだ未完成な上にどうやっても自爆技でしかないことを！」

「な、なんだとお!?まさかばれていたとは！」

「事実自爆したわけだしな。」

「うぐつ。」

「それで、なにか無いのか？」

「うーん、一応なにかしらの刀か弓があれば必殺技はあるんだけど…エルキドゥと武術程度かなあ。中堅クラスまでなら素手でもそれだけでなんとかなるけど、メドウーサとかアキレウスとかヘラクレスとかみたいなたップクラスのやつらにはせめて得物が欲しいかな。…あ、神性が無い前提でだからね。」

「ふむ。逆に言えばトップ組とも得物があればやりあえるのか。やはりご主人は強いな。」

「あつはつは、流石にそこら辺相手だとまともによっても厳しいけどね。」

「あははは、うそつけ。」

「ひどい!?!」

「そもそも、ご主人はエルキドウの鎖に加えて深淵の加護があるのではないか? それにご主人の武術は無二打に近いレベルではないか!」

「いや、さっぱりだと思っけど。」

「…ご主人…。」

「…な、なに?」

「…いや、なんでもない。」

キャットが明らかになにかを諦めたかのような顔をしてるんだけど一体なにを言おうとしたんだ…?」

「えー、なによう、気になるじゃん。」

「そういえばご主人。」

「突然話題を変えてきたね…。で、なに?」

「うむ、ご主人はいつからそんなものを体に住ませ始めたのだ?」

「…そんなもの?」

「ご主人の左腕を形作っているその泥だ。」

「…泥？泥つてーと…思い当たる節はあるけど、腕？」

アンリ…なのかな？…うむ、キヤットしててもアマテラスってことなのか。

「…まさか、自覚がないのか？」

「うん。普通の腕だと思うけどなあ。」

「…ふむ、わかった。ならばご主人、左腕を出してくれ。」

「え、なにをやるの？」

「もちろん、ご主人とその泥を分離するのだ。その泥は…生きるものにとつて害でしかないからな。」

「そういつてキヤットが私に近づいてくる。その後ろからはなんだか光が…え、後光？後光なんで？」

「ちよ、キヤット後ろから光が、後光がでてるよ!？」

「当たり前だ。今のアタシはご主人を救うために必死だからな。ガチモードなオリジナルに近づく程度どうということはない!？」

「まって、うえいと!？キヤットはサーヴアントなのに泥に触つて大丈夫なの!？」

「ふつ、この程度腕に神力を纏わせておけば侵食はされないし泥も消せる故な。だから安心して腕を出せ、ご主人?？」

「でもほら、別になにか害があるわけでもないし…」

「確かにアタシやクーさん、それとご主人は大丈夫かもしれないが、それ以外はそうとは限らぬぞ? それにだ。すべての毒あるもの、害あるものを絶つのが婦長の教え故な。」

「お願い、すとつぷ、すとつぷぷりーず!」

「むう……なぜそこまでして逃げるのだご主人? それは害しかないと思うのだが。」

「いや……これの原因に心当たりがあるからちよつと検証してからにしてほしいなー、と。できれば自力で解決したいし。」

「……ふむ、わかった。ご主人がそういうのならあてはあるのだろう。」

「ふう……。ありがと、キヤット。」

「だが、なにかあつたら問答無用で分離するからな?」

「ええ。そうなるときには私にはどうにもできない時だろうしね。」

「ならばよし。……うむ、いい加減狂化を抑えるのが辛くなってきたから解放するぞ。おそらく普段の二割増し程度にはおかしいかもしれない。」

「やつぱり無理してたのね。……私のためにありがとう、キヤット。」

「……うむ、うむ。ご主人のその言葉と気持ちだけでキヤットは嬉しい。」

「キヤット……!」

「あ、そうだ。せつかくだからな、ご主人の必殺技を見せてはくれぬか? キヤットは気になる。」

「うん、いいよ。では庭へゴー！」

「ランサーとセイバーがやりあつたあの庭だな？うむ、では開演と行こうではないか！ニヤハハハハハハ！」

.....

庭に出ました。キャットは縁側に座っている。

「とういうわけだけど……まず何からやればいいの？」

「そうさな……ではキャットから刀をリクエストさせていただこう！標的のゴーレムは準備済みだ！クーさんがな！」

そう言うキャットが指を指す先には燃え盛る炎のごついゴーレムが立っている。

「うむ、お主の技見させていただこう。」

「クーさんも見るのね……。了解、じゃあ最初は……そうね、これでいくわ。一步音越え、二歩無間……三步絶刀……！『無明 三段突き』！」

縮地を使つて三步にてゴーレムの懐に潜り込み、たたたん、とリズムよく三回の突きを入れる。これはかなり練習したので、沖田師匠のように一つの突きに三つの突きを内包した突き……に限りなく近くなっている。まだまだだが。

それでもゴーレムの胸にあたる部分に直径50cm程度の穴が空く。ひえー。

「…なあ、クーさん。アタシには今の突きは一発しか入れていないように見えたのだが。」

「なるほど、一の太刀を払おうともそれに続く二の太刀、三の太刀があるわけか。なるほど、よく考えられた技だな。」

「…うむ、そうだな。うーん、アタシがおかしいのか…？」

……………あ、そういえばアタシはバーサーカーだったな。なるほど。」

うん、なんか気分が乗ってきた！ひゃっはー！

「次いくわ！抜刀…突撃…。」

斬れ、進め！斬れ！進めえ！

「ここがああ！」

刀を構えて全力で走り、跳んで、

「『新！』」

上から斬る。

「撰！」

返す刀でもう一度斬る。

「組だあああああ！」

そしてとどめに刀からビームを撃つ！

ゴーレムは爆発四散！

「…流石にただの刀からビームを出すのはどうなんだ…？」

「よく考えろ、ご主人だぞ？」

「…なるほど。」

「まだまだ！『秘剣：偽・燕返し』！」

第二魔法の一端たる多重次元屈折現象。それを成した燕返し…を真似たものだ。未だに平行世界から事象を取り出すには至ってはいないが、燕を斬れる程度にはなっている。

なおゴーレムは三枚下ろし。

「…ふむ、平行世界から事象を取り出しているのか…。」

「ん？どうしたクーさん。」

「いや、なんでもない。」

「これが最後よ！俺が戦う目的は、昔も今もただひとつ…！即ち、悪・即・斬！いくぞ…！」

左手のみで刀を持ち、右手を刀身に添えて平正眼に構える。

『牙突』！

一度の踏み込みにて近付き、突き飛ばす！

「『ガトチユセツケンスタイル牙突式』！」

そして、跳躍し上から突き潰したのち右手で掴んで空へ投げ飛ばし、

『ガトチユセロスタイル牙突参式』！』

空から落下するゴーレムに向かい跳躍、下から上へと突く。

「そして喰らえ！『ガトチユセロスタイル牙突零式』！』」

そして超至近距離に着地してで体のバネのみで穿つ！

ゴーレムは木端微塵！

「…ふむ、最後の一撃はもろに喰らえば我であつても痛手を負うかもしれぬな…。」

「…うむ、あれはガチモードのオリジナルであつても厳しいかもしれぬな。」

「あはははは、買い被りすぎよ。齋藤さんでもない限り無理だつて。」

「ご主人にそこまで言わせるとはすごい奴なのだな、齋藤とやはら…。」

「む？刀はもうしまうのか？」

「ええ。必殺技クラスはこれくらいしかないからね。よし！じゃあ次は弓ね！」

「弓か…しかし弓の必殺技とは一体。」

「ご主人の事だしビームだと思ふんだワン。」

「ビームも撃てなくはないけどただの弓で撃つよりは剣から撃つ方がやりやすいのよ

ねー。あ、もちろんそれを目的に作った弓は別よ?」

「まあ…そうなるのか?」

「アタシに聞かないでくれクーさん。」

というわけで倉庫から『弓』を改造、改良した『弓・改』を取り出す。

「待てご主人、その弓は…」

「ええ、私の持つている武器でもトップクラスの物よ。」

「なるほどな。それほどのものはまず見れまい。」

「では手始めにこれから! 九つの矢よ、光を纏いて我が敵を撃て!」 『^{ナインアロウズ}九つの矢!』

魔力を帯びた矢が九本同時に放たれ、ゴレムを粉々に吹き飛ばす。なんちゆうもろ

いごーれむじや。ちなみに矢の消費は一本である。原理は謎。

「…? なあクーさん。アタシには一本しか矢をつがえていなかったように見えたのだ

が。」

「確かに九本飛んだな。また平行世界から事象を取り出したのか…?」

「さあ、次はこれよ!」 ^体I ^はa ^剣m ^でt ^出h ^来e ^てb ^いo ^るr [:]n [:]o [:]f [:]m [:]y [:]s [:]w [:]o [:]r [:]d.

螺旋状の剣をその場で創造し、『空間を抉る』という効果を付与魔術で付与して弓につ

がえる。そして、真名解放!

『^{フエイク・カッドホルグ}偽・虹霞剣』!」

初速から音速を軽く越えたそれは空間ごとゴーレムを抉りとる。

「まだまだ！——I am the born of my sword.」

創造するのは黒き剣、付与するは血を追い、敵を食い破る獣の本能！

『偽・赤原獵犬』！

紅き獵犬がゴーレムに食らい付く。見事なまでにゴーレムは食い荒らされ、消滅する。通常ならここからさらに『壊れた幻想』に繋げるが今回は無し。

にしても赤……あか……緋色？

……あかしけ やなげ 緋色のねこです くさはみ ねはみ よろしくおねがいします。

……はっ、私は一体何を考えていた……？うーん、まあいつか。

「なるほど、敵を追尾するわけか。にしてもさつきからなんだかどこぞの無銘に似た技を出すのだな。」

「だつてリスペクトしてるからネ！さあ、次が弓はラストよ！」

「一体なにが飛び出すやら。」

「さあ、いくわよ！——魑魅魍魎跋扈するこの地獄変……エウリュアレは此処に居る！」

矢をつがえ、全力で魔力を込めつつ引き絞る。矢は光を放ち、周りに風が巻き起こる。

——む、謎の電波を受信した。なんか空に向けて撃たなきゃいけない気がする——
「『アロー・オブ・ザ・エウリュウアレ星を射落とす女神の弓矢』！」

凄まじいほどの衝撃波と、少しの反動を残して、光の奔流は…

空へと消えていった。

「…なんで上に撃つたのだ？ご主人。」

「…いや、なんか新しい種類の直感が私に空へ撃てと…」

「ご主人はニュータイプだったのか？アタシはオールドタイプでいいが。」

「…しかし、お主が矢を放った方角は見事に地球のある方向だな。」

「やっぱ電波かなー。」

「まあいい、ご主人！次はないのか？」

「楽しんでるね、キャット。」

「うむ！こんなに新しい料理を思い付きそうなものはないぞ！」

「…料理とは一体…？まあ、あと三つかな。ではまずはこれ！私の十八番よ！」

手に取るのはいつもの『光の剣』。ちよつと詠唱が長いのは難点だけどねー。

「魔の力よ、我が思う形を取りて、全ての敵を討ち滅ぼせ！」

光の剣へ、詠唱をしつつ魔力を込める。すると剣の中で増幅されて光る！魔力消費が少し多いのはご愛嬌。

というわけで皆さんご一緒に。

エクス…

『ソードオブアウローラ光の剣：限定解放』！』

カリバアアアアアア！

さらばゴーレム…。

「ビームだ。」

「ビームだな。つまりいつものご主人だ。」

「なにより、私がビーム狂みたいとでも？」

「うむ、そうだろう？」

「…えー。」

「…まあ、次だ次。」

「次はこれ。」

かもん！ 『きしんのまそう』！

「…これは…槍か？」

「ええ、槍よ。あ、刃には触らないでね。死ぬから。」

「…は？」

「どうということだご主人。」

「刃にあたると即死するの。この槍。」

「…なんと。」

「ためにゴーレムをつつくと…てい。」

ドウウウン（即死の入る音）

「…ね？」

「お、おう。」

「…ゴーレムエ…。」

「それじゃ、こんな危ないのはしまつて、と。次がラストかな。」

「…ふむ、意外と少ない…のか？」

「さて、サーヴァント的に考えると宝具が十個以上あることになるから十分おかしいんだワン。」

「…確かにそうだな。」

「さあ、ラストいくわよー！ 『リボルケイン』！」

さりげなく腰に装着しておいたサンライザーの前に右手を置き、リボルケインを出し左手に持ちかえる。

「トウアツ！」

そして跳躍、ゴーレムに突き刺し、押し込む！

「…酷いな、火花が散っているではないか。」

「それよりもあれは太陽の力だワン！アタシは嬉しい！」

必死にゴーレムが逃れようとするが貫通したりボルケインは抜けない。

そして、ちょうどいいタイミングで…

抜いて、跳びつつ振り向く！そして大きくRを作るように振りつつ腕をXにクロス！
そして最後に左手をベルトに、リボルケインを右真横に構えて…

ドカーン！

うむ、ばっちり。

「ふむ、それは…剣か？」

「なに？リボルケインは杖ではないのか？」

「棒っていう説もあるわね。まあ、一応杖っていうことにしているわ。」

「なるほどな。にしても、多彩というか器用貧乏というかなんというか…」

「いいと思うんだワン。だってご主人だからな！」

「…なるほど。」

「なつとくするんだ…。」

「…む、そろそろご飯時だな！キヤットはご飯を作ってくる！ではな！」
「…では、私は仕事でもしようかね。ではまた。」

「……………素振りでもしてよう。」

→ここまでエウリュアレ

←ここからヘラクレス

…ヘラクレスだ。

今俺たちはステンノ達の家で…まあ酒盛りをしている。

その状況なのだが…

「すてんのお！おさけ！おさけもってきてー！」

「ちよつと、アタランテ！ぐでんぐでんじやない！」

「うるしい！のまにゃきゃこんにゃんうけいれられにゃー！」

「あ、アタランテさん耳！猫耳生えてきてます！」

「にやー？………にや、にやんだこれえええ!?」

「えうりゆあれじゃー！えうりゆあれのしわざじゃー！」

「もうえうりゆあれだけでいいとおもうわー。」

「イアソンにメデイアまで……」

「わしいる？わし全能神名乗ってていいん？」

「ボコボコにされていたのでノーコメントで。」

「ぐふつ。アテナ……わしに厳しくね？」

「日頃の行いだと思うわ、あなた。」

「へらまで……」

「傷つきはしなかったけど吹き飛ばされて即脱落って……すまねえ姐さん、ステンノさん……」

「……いやまあ居ても居なくても変わらなかつたからまあいいんじゃないかしら？」

「ひでえやステンノさん……」

……とまあなかなか混沌とした状況だ。

「これのきつかけは先の『ギガントマキア』である。」

突然宇宙から山以上もある巨人が大挙してやって来て、山を野原を蹂躪していった。オリュンポスの神々は人間の力が必要だという予言のもと人間にも協力を求め、その呼び掛けの元：そこまで多くはない人数が集まった。

駿足のアキレウス、豎琴の狩人アタランテ、イオルコスの王イアソン、魔術の女王メディア。そして女神ステンノにメドゥーサ。俺はまあいい。

さらにそこにオリュンポス十二神。ギリシア最強の面子といっても過言ではないだろう。

だが、結論から言うところ：完全敗北だった。

十二神は神ではあまりダメージは入らないとはいえ簡単に撃退され、アキレウスは殴り飛ばされて遙か彼方へ吹き飛ばされ、アタランテは弓矢で攻撃するもまともに通らず、イアソンとメディアのコンビネーションも流石の巨人相手ではどうしようもなく撤退、メドゥーサは善戦するも重症を負い、結局五回ほど死んだ俺と超遠距離での狙撃に徹していたステンノも撤退した。

そんなこんなで敗北し、撤退したのだが：

うむ、まさしく『その時不思議なことが起こった』だった。突然空が光ったと思っただらたまたま平野に集まっていた巨人すべてを光が飲み込み、塵一つ残さず消し飛ばしたのだ。

…ああ、ギガントマキアはそれでおしまいだ。一応各地にはゼウスの雷によつて巨人は全滅した、と報ぜられたが、各地では『もしやエウリユアレ神の仕業とかでは？』だとか『それも全部エウリユアレって神のせいなんだエウリユアレ神の怒りだ！』とかと囁かれている。それが本当かどうかは…神すらもわからん。

ああ、全く。どうしてこうなったのやら…。

第二一話 悪と願いと封印と

やあやあ。

叛逆おやすみから叛逆おはようまで、圧政に叛逆するエウさんだよー。

今はスペースエミヤハウス（命名タマモキヤット）にて四人で重大な話をしている。
イントネーションの位置は『エ』だよ。

「クーさん。いったいなにがわかったのだ？」

「…そうだな。結論を言おうと……………」

「この世界は消滅する！」

「「な、なんだってー!?」「」

という状況なのである。まる。

これだけではわからないMマガジンミステリー調査班M Rの諸君も居るだろうし、少し時間を遡って説明しよう。

く時間はその日の晩御飯終了後く

「ふふふ、どうだご主人にクーさん！このカレーライスの味は！」

「もう少し辛くてもいいんじゃないか？」

「もう少し甘くていいかなー。」

「むう、真逆の事を言われると困るのだな。だがそれを成すのも良妻の仕事よな！」

「…辛いものが苦手なのかね？」

「というよりは辛すぎるカレーが苦手ね。麻婆豆腐とかは普通に好きだけど、カレーは…こう、子供の頃から食べていたものがそこまで辛くなかったから。」

「なるほどな。まあ、食に関しては人それぞれの好みだからな、仕方あるまい。」

「そうね。」

「古代ギリシアにカレーがあるのかとかそもそもご主人の子供の頃とは一体なにかとかの突っ込みどころは今はおいておこう。それでご主人、結局その左腕はどうするか見当

「はついたのか？」

「んー、一応置換魔術を使えばとりあえずもとの腕に戻すことはできるけど…」

「けど？」

「多分また欠損したらでてくるわ。」

「…一体なんなのだその泥は…」

「それは…」

多分アンリよねー、と言おうとしたその時だった。

『おおっと、そこから先は俺に説明させてくれるかい？』

「む、何奴！」

「うわあ!？」

突然左腕から声が出したと思ったら泥が溢れ出した…だとう!?!ちよ、左腕が、うでが！

『聞かれたからには名乗らにやならねえ！ある時は聖杯の泥、またある時はただの復讐者…しかしてその正体は！』
アヴェンジャ

そして溢れ出した泥が集まり少しずつ形を作っていく。

この時点でキャットは気付いたみたいなのでせっかくならと目配せして二人でネタ

に走る。

そして、泥が人形になり、目がついて…

「…そう！この俺、ア「仮面ライダーだ！」はあ!?!」

「出たなRX^{ご主人}！だが今回の怪人は怪魔英霊大隊最強の戦士、アンリマユンだ！行けアンリマユン、RX^{ご主人}を泥でドロドロに溶かしてやるのだ！」

「…え、は？」

・アンリ は こんわくしている！

「泥ならば、こちらは水だ！はあああ！」

「その時、不思議なことが起こった。

RXの爆発した思いが、その体をバイオリダーへと変身させたのだ！」

「いや、そののじいさんはなにさも当たり前のようにナレーションとして参加してるんすかねえ!?!」

「俺は怒りの王子！R、X！バイオ、ライダー！」

「ライブマンが、五人に!?!」

キャットの反応は別の作品だし一文字しかかすってないけどまあいいか。

変身なんて言っただけはいるが実際はいつもの黒いセーターから水色のセーターに着替えたただけだ。

「聖杯の泥で全てを汚染し人々を苦しめんとするその野望、俺が打ち砕く！バイオブレード！」

バイオライダーの武器の名を呼ぶと同時に右手を左腰に添え、鏢のない直刀を創る。

「ちよ、ちよあまつてくれ!？」

「いくぞ！トウアツ！」

跳躍して一気に懐に潜り込む。もちろん、バイオブレード（仮）は刀身に光るといふ能力を付与して光らせておく。

「まてまてまてまてえ!!?ここで俺を殺しても話が進まねえだけだぞ?!」

必死に止めようとするアンリを無視して、刀身に物体透過と斬ったら数秒の後斬ったものから爆発エフェクトが出るという能力を付与する。よし、これで行ける!

「そんなこと、俺が知るか！」

「その台詞はRXじゃねえじゃねーか！」

「食らえ、ギャバン・ダイナミック！」

というわけで真一文字に叩き斬る!

「しかもそれ仮面ライダーですらねーじゃねーかあああああああ！」

一閃。だが刀身はアンリをすり抜ける。さて、乗っつけてくれるかな？

「ぐあああああ!く、流石だジライヤ…貴様ならばこの先の敵とも戦っていけるだろう

……！」

なぜジライヤをチョイスしたのかはわからないけど乗ってはくれた。

「貴様の旅路に幸運あれ、されど聖杯には呪いあれえええ！」

ドカーン

ばたつ、とアンリは畳に倒れる。

「……あくは、ほろびた！」

「いや、結局なんだったんだよ。」

ねっころがったままでもちやんとツツコミをいれてくれるアンリ流石。

……

「……というわけで、みんな大好き聖杯の泥が生まれる原因となった、そう！この俺、アンリだ！」

「というわけでアンリマユさんです皆さん心無い拍手をお願いしますー。」

「わー（棒）。」

「（無言の拍手）」

「ひでえな!? それならいつそシーンとされた方がましだわ!」

「で、なんでわざわざこっちに來たの?」

「反応すらしてくれない!」

「ご主人が聞いているのだ、さつきと答えろまっくろくろすけ。」

「泥ですらない! それ煤だから!」

「なるほど…この場に足りなかつたのはツツコミ役だつたのね…。」

「(無言の同意)」

「おいコラ勝手に俺をツツコミにするな! とうかじいさんはなんでさつきから無言なんだよ!」

「(無言の腹パン)」

「げふっ。」

「…あれよ、多分それがやりたかつただけかと。」

「(無言の肯定)」

「ぐ…貴様が遊戯王ネタに走るのなら俺だつて乗つてやる! デュエルだ! 暗黒界の力を
見せてやらあ!」

「…ふ、ならばBFにて受けてやろう!」

「普通に喋るのかよ! まあいい! いくぞ!」

「決闘！」^{デュエル}

「…どうしようかこれ。」

「思うままにやらせておけばいいとおもうんだ、ワン。」

「そうだね。」

.....

「…三戦三敗とか、やだ、俺って弱すぎ…?」

「うむ、ガツチャ、よいデュエルであった。」

「ぼこぼこにしておいてよく言うんだワン。」

「はあ…。それで?なんでわざわざ外に出てきたのよ。」

「あー、あー。すっかり忘れてたぜ!」

「全く。」

「エウリュアレよー、お前さんなんてことやらかしてくれやがったんだよう!」

「…え、私?」

「そうだよお前だよ!なんで気まぐれで対界宝具持ち出した上に地球にぶっぱなしてくれましたかねえ!」

「え、直感だけど。」

「くそう、こういう無駄なときにスキルにない直感発動させやがって！お陰さまで地球は救われましたよ！」

「む？なら別によかったではないか。ご主人はなにもやらかしてなどはないとキャットは理解したのだが。」

「いやまあ、人間の側からすりやそうだけどさ…見事にこの先のシナリオをぶち壊してくれやがったんですよ！」

「私がシナリオだ！」

「一応決まってたんだよ！」

「あつはつはつは！シナリオブレイカー！」

「ルルブレみたいに言うな！」

「…なあ、くろすけよ。」

「あー？なんだ生物^{ナマモノ}。」

「今の口振りから察するに、おまえは未来を知っているのだな？」

「あー、まあ知ってるというか作ってるというか…」

「…どういうこと、アンリ？」

「そもそも、エウリュアレの生きていた世界は冬木の杯によって作り出された平行

世界……に近いものだ。」

「近いもの？」

「ああ。言ってしまったえばこの世界は冬木の大聖杯の内部にある空間なわけ。」

「いやいやいや、流石の大聖杯でもこれは無理でしょ。」

「まー、一度の聖杯戦争だけじゃ無理なんだけどさ？ 第4次聖杯戦争まで見事に全て失敗してたじゃん？ それのせいで無駄に大聖杯に魔力がたまつててさー？ そこでたまたまお前さんの願いを受け取っちゃつてこうなつたわけ。」

「…待つて。私の願いつてどういうこと？」

「………あー、なんだ、まだ思い出してないのか？」

「ええ、前世についてはまだ、ね。」

「まじかー。うーむ、どうするか…」

「待てご主人、前世とはなんのことだ？」

「んー、私、転生してこの世界のエウリュアレになつたみたいなのよね。だからいろいろ知識があるのよ。」

「…なるほど、ご主人の奇行はそれのせいだったのだな。」

「奇行つて…まあ、そうね。それで？ どうするのよ。」

「………なら、まあいいか。取り敢えずお前が願つたことだけ教えておく。お前が願つ

たのは、『二人を守ること』だ。」

「…二人？」

「ああ。お前は前世…いや、現世か？まあいい。外で聖杯から漏れでた泥に取り込まれて死んだんだが、そのときになぜかお前さんの願いを聖杯が受け取ったんだ。」

「…だがまつくろくろすけよ、ご主人が外で生きているときに願ったことなら、その『二人』はここにはいないのかそれかここでまた別人として生きているのではないか？」

「生物ナマモノ、お前本当にバーサーカーか…？まあ、その通りその二人はまだ外で生きているぜ。かなり奇つ怪な人生を歩んじやいるがな。」

「ならばなぜこの世界を作り出してご主人を生かしているのだ？」

「そりゃー、まず第一にはエウリユアレの体を作ることさ。エウリユアレの元々の体は聖杯の泥を浴びた時点で消滅しちまつてるからな。現世に戻るために体が必要だったのさ。」

「ご主人がエウリユアレである必要性は？」

「最終的に元の姿になれば誰でもよかつたんだが、予想外な事に一番近い形になる存在がエウリユアレだった。それだけだ。最初はメドゥーサになるはずだったんだが。」

「私からも質問させてほしい。この世界はどう作っているのかね？」

「この世界か？これは英霊の座にあるこの時代の情報を元に作ってるぜ。だから台本通

りに行けるはずだったんだが…元々のイレギュラーだったエウリユアレが予想以上におかしくなったからかなり予定とは違っているな。」

「なるほど…だいたいわかった。」

「クーさん？ いったい何がわかったのだ？」

とまあ、こういった感じで冒頭の会話に繋がるわけだ。

.....

「…いや、なぜ君が驚くのかね？」

「いやほら、雰囲気的に言わなきゃならない気がしたんだが。」

「是非もないわね！」

「それでクーさん、どうということなのだ？」

「ふむ、よく考えてほしい。この世界は聖杯によってできており、その中心はエウリュア
レなわけだ。」

「まあ、聞く限りだとそうね。」

「そして、今回アンリ君が出てきたのは…外の世界にエウリュアレを出すためだろうか？」

「…流石じいさん。その通りだ。」

「えーつと、どういうことよ、アンリ?」

「要するに体を育てる期間は終了つてことだ。本来ならギガントマキアにお前さんが乱
入して、そのあとのテュポーンとの戦いで相打ちして退場つて流れだつたんだが…」

「だが?」

「お前さんの対界宝具で巨人は消滅!しかもその後のために大気圏外で待機させてた
テュポーンに至つてはその流れ弾で見事に蒸発しちまったんだよ!いやほんととお前
さんおかしいだろ!?ギガントマキアのほうは千歩ぐらい譲つていいとしてもなんでお
前さんと同程度で想定して強化してあつたテュポーンが余波で溶けるんだよ!おかし
いだろ!」

「いやー、それほどでも。」

「ほめてねえよ!?!だー!もう!」

「あつはつはつはつは!流石ご主人だな!略してさすじん!」

「そこにtを加えると?」

「さつじんだな!つまりご主人は殺人犯だったのか!?見損なつたぞご主人!」

「確かに自衛のために殺しちやいるわね。」

「ふむ、自衛なら仕方ないな!うむ!」

「ほんとお前ら楽しそうだな…。」

「にしても、エウリュアレはかなり異常な存在となつていような気がするのだが…どうやって外の世界に出すのかね?」

「あー、それは簡単なこつた。外の世界で聖杯戦争を起こす。」

「待つて、聖杯戦争なんか起こしてどうするのよ。」

「んなもん魔力回収に決まつてんだろ。だいたい三騎分の魔力があればあつちにエウリュアレを召喚して受肉までできる。そのために一旦こつちでエウリュアレを封印する必要があるがな。」

「なるほど。では、エウリュアレが封印された後この世界はどうするつもりだ?」

「エウリュアレに関わつた人間が全員座に登録されるまでは続行するが、終わつたら強制終了だな。」

「待てまつくろ、あのはちやめちやな連中を座に登録するのか!」

「ああ。その方が面白いだろ?」

「確かに面白いが…」

「ま、そういうことだから安心して外に出てくれ。」

「はあ、まあいいけど…元々の私の名前がわかんないんじゃないと思うのだけど。」

「確かにそうだな。ま、封印されてる間に頑張つて思い出すんだな！」

「んな適当な…。」

「そういうわけだからエウリュアレ、封印するぞー。」

「待て、ご主人が封印されるならアタシはどうなる?」

「あー、お前さんには外で聖杯戦争…いや、召喚戦争に参加してもらおうぜー。頑張つてご主人を召喚するんだな。」

「なるほど。よし、ご主人!安心して封印されていてくれ!アタシがしっかりと迎えに行くとゆえな!」

「あー、ねえ、アンリ。」

「あー?なんだ?」

「封印に抵抗するから精神力でロールしていい?あ、これキャラシね。」

「いや、なんで突然TRPG始めてんだよ…、というかPOW最大値じゃねえか…。じゃあ、1D100でファンブル出したら失敗な。」

「りよーかい。というわけでダイス go!」

カランカラン…

「…ご主人、これは…」

「ふむ、素晴らしく運がないな君は。」

「99…まじか…」

「はい、お疲れさん。おとなしく封印される。」

「おのれダイスの女神いいい！」

「あつはつはつはー。……………あ、そうだ。」

「ずーとこつちを見てる『観測者』さんよ、

もう夢から目覚める時間だぜ？」

「は？アンリ、何言ってるの？」

「いや、ただの独り言だ！というわけで楽しい封印ライフを楽しんでこーい！」

「いや楽しい封印ライフってなによおおお!?」

「またなご主人！すぐ助け出すからなー！」

.....

目が、覚める。

いつもの不可思議な夢が終わり、いつもの日常へ戻ってくる。

取り敢えず一言。

『この世^ア全^ンての悪^リ』ってあんななのかよ……。」

まさか自分の人生を狂わせた元凶たる存在があんなのとは……なんというか……うん……。

「シロウ？もう朝ですよ？」

「…ああ、セラか。おはよう。」

「おはようございます。もう朝ご飯もできますから、着替えてくださいね。」
「りよーかい。」

……うん、いつも通りの朝だ。さて、考え事もほどほどに着替えるか。

にしても、変な夢だった。なんでかアンリ・マユは俺のことを『観測者』って呼んだし。

………待てよ？観測ってことはあれは俺の夢なんかではなくて現実なんじゃないか？

「…まずいな。」

そうなるよ…召喚戦争とやらがこの冬木で起きるのかもしれない。

「…なら、被害がでる前に止めないとな。」

よし、朝ご飯の時に皆に話してみるか。

「シロウー、ご飯だよー。」

「わかったリズ。先に行つててくれ。」
「わかった。」

変なことにならなきやいいんだがな…。

記念番外編

ぐだぐだギリシア神話！そのいち！

—— 人理継続保障機関 フィニス・カルデア。

それは未来を観測し、保障する機関である。

そのカルデア、そして人類史に対しビーストは人理焼却を始動、それに対しカルデアはグランドオーダーを発令、人類史を取り戻すべく戦った。

そしてカルデア、そして人類最後のマスター『藤村立香』ふじむらりつかと英霊達はビーストによる人理焼却の企みを阻止し、無事人類史を守り通したのであった！

これは、そのマスターの藤村立香を巻き込むかなりぐだぐだなお話である！

.....

カルデアの唯一のマスター藤村立香の部屋、通称『マイルーム』。別名屯所、ローマ、
e t c :

そこで俺、立香と信長、沖田、茶々はのんびりとお茶を飲んでいた。

ノツブ「……そういえばわし、昨日変な夢を見たんじゃよ。なんかわしと沖田が聖杯戦争に召喚される夢なんじゃけど……」

おき太「あー、エウちゃんですネ?わたしも同じ夢を見ましたねー。」

立香「エウちゃん?沖田さんそれ誰?」

おき太「エウリュアレさんです。ほら、カルデアにもいるじゃないですかアーチャーの。」

立香「うん、確かにいるけど……夢?もしかしてハリエツトって名前だったりしなかった?」

この前の不思議な事件虚月館殺人事件がまだ続いているのならまたあつちに呼ばれるかもしれないかな?

おき太「いえ、ちゃんとエウリュアレさんでしたよ?」

立香「そっかー。」

……ジュリエットに会えないのは少し残念かな……。あのあとあの二人がどうなったかすごい気になる。

そういうえば虚月館殺人事件あれの後辺りからステンノ様にちよくちよくランチに誘われたりゲームに誘われたりするようになったんだけどどうしたんだらう……。まあ、いつか。

茶々「それでそれで!?伯母上、どんな夢だったの?」

ノツブ「あー、なんじゃ？沖田と食堂のアーチャーと二丁拳銃の海賊を足して三を掛けてメドゥーサに流し込んだようなエウリュアレがギリシアで起きた聖杯戦争で無双する話じゃったわ。」

茶々「あはははは！なにそれ、茶々大爆笑なんだけど！」

立香「それ本当にエウリュアレなの…？」

おき太「まあ、夢ですしねー。こういうぶっ飛んだ内容なら楽しくみられますし別にいいんじゃないですか？エウリュアレさんには悪いですけど。」

ノツブ「どこぞのゆめにつきとか色々としんどいからのう。というかあれ3D化しとるとかわし初めて知ったんじゃないが。なんじゃDDって。」

おき太「そのあたりはインディーズゲームですからつつこんじゃだめなんじゃないですかね？」

立香「モノ子とか完全に敵キャラになってたもんね、あれ。」

茶々「んー、茶々には何を話しているのかよくわからん！」

おき太「あー、まあ、そうですね。ゲームの話ですし。」

ノツブ「…そういえば沖田。」

おき太「なんですか？」

ノツブ「…わしらってたしかカルデアから退去せんかったか？そもそもカルデアって

…

おき太「いつものことじゃないですか。あ、ノツブその煎餅とつてください。」

茶々「いつものことで済ませていいとは妾は思わないんだけど!」

立香「あはははは…カルデアだとよくあることだから仕方ないよ…。」

茶々「立香、そなたはこの環境に毒されすぎだと思っただけど!」

立香「んー、そうかもねー。あ、ノツブその団子取って?」

茶々「まさかのマスターが一番毒されてる!」

そんな感じでぐだぐだと話していたときであつた。

ビー ビー ビー

と、カルデア内に警報が鳴り響いた。そして

ドガアン!

と、部屋のドアが開かれた。

ヒツジ「沖田ア!立香ア!敵襲だ!新撰組、出るぞ!」

おき太「土方さん、それ自動ドアなので自分の手でこじ開けないでください!」

ヒツジ「ああ?ああ、わりい。それよりも敵襲だ!屯所各地で他所のノブノブ鳴く奴が騒いでやがる!」

ノツブ「…これはまた聖杯かのう？」

おき太「ですねえ。次はなにをやらかしたんですか、ノツブ？」

ノツブ「わ、わしじゃないわ！」

おき太「どうせまた血縁者でしょ…。」

ノツブ「違うし！わし違うし！」

そんな感じでやつぱりぐだぐだと話していると…

『
』
ダヴィンチ『…立香君！緊急事態だ！また特異点が発見されたから管制室に来てくれ

とダヴィンチちゃんからのお呼びがかかる。

おき太「…よし、じゃあ行こっか。」

茶々「んー、茶々は最近の周回で大変だからパスー。」

ノツブ「わしは茶を飲みたいからパスじゃ！」

おき太「なにいつてんですか、行きますよノツブ。」

ノツブ「やめろー！離すのじゃ沖田あああ！」

〈カルデア管制室〉

「ダヴィンチ「うん、またぐだぐだ粒子が観測されたんだ。」

マシユ「ダヴィンチちゃん、もう少し説明を…」

「ダヴィンチ「嫌だね!なんなんだあの粒子は!いくら真面目にこつちが観測しても全部お釈迦になるとかやつてられないね!」

マシユ「えつと…:具体的にわかつていることは、特異点が紀元前1210年のギリシャにあることと、ぐだぐだ粒子が観測されていること、聖杯の存在がほぼ確定していること、カルデアがちびノブによつて襲撃を受けていること、そして魔神柱の反応はないうことです、先輩。カルデア内のちびノブはサーヴァントの皆さんに対処してもらっています。」

立香「了解、ありがとうマシユ。」

ヒツジ「ギリシャ…:つてのは何国にある土地だ、沖田。」

おき太「土方さん、ギリシヤは日本じゃなくてヨーロッパです。海外ですよ。」

ノツブ「うむ、ならばわしの血縁者は関係無いじやろうな!だつてギリシヤじゃし!」

立香「そうだといいいねノツブ。」

ノツブ「な、立香お主、まだ疑つとるな!?!ひどくね!?!」

立香「にしてもマシユ、紀元前1210年つて…:何の頃の時代なの?」

マシユ「えつとですね…あ、アキレウスさんとヘクトールさんが戦ったトロイア戦争の二十年後ですね。つまりギリシア神話の時代です。」

立香「ギリシア神話かー。そうなるとステンノ様とかがいるのかな？」

マシユ「そうですね…えつと、その時期だと亡くなられてしまっているかもしれないですね。」

立香「そっかー。」

うーん、ちよつと残念…じゃないか。カルデアに居るしね。

マシユ「あ、そうですね先輩、メドゥーサさんに今回の特異点解決に参加してもらってはいかがでしょうか？メドゥーサさんならギリシャのこともわかるかもしれないし。」

立香「なるほど！なら来てもらおうかな。ダヴィンチちゃん館内放送貸してー。」

ダヴィンチ「あいよ。」

立香「ありがとう。『あー、あー。アナさん、ギリシャの特異点解決に参加して欲しいので管制室までお願いしますー。』」

ダヴィンチ「なんて適当な呼び出しかたなんだろう…。」

ノツブ「まあほら、ぐだぐだじゃし。」

おき太「是非もないんですかね？」

ノツブ「それわしの台詞じゃ沖田ア!」

ヒツジ「なあ盾っ娘、ギリしやの沢庵はうめえのか?」

マシユ「えつと…多分ギリシヤには沢庵はないかと…。」

.....

二十分後、アナさんが何かを引きずって管制室へと到着した。

アナ「マスター、少し遅れてしまいましたませんでした。」

立香「大丈夫だよアナさん。それで…なにを引きずってるの?」

アナ「これですか? 通路に未来の私っぽいのが転がっていたので引きずってきました。」

…うん、いつも通りの服…じやなくてエウリユアレ様っぽくかつロングスカートな服を着たメドウーサさんだこれ!?

ノツブ「ひえっ、流石女神、容赦がないのう。」

おき太「そうですか? 通路に転がってたなら別に引きずられても文句は言えないと思いますけど。私もよく近藤さんにやられましたし。」

ヒツジ「そうだな。」

マシユ「：新撰組って凄いですね：。」

ダヴィンチ「うん、多分新撰組はそんな所じゃない：と思うんだ。」

立香「まあ、とりあえず起こそうか。おーい、メドゥーサさん。起きてー。」

メドゥーサ？「むにやむにや：はっ、此処は誰、私は何処!？」

立香「何寝ぼけてるのメドゥーサさん：。此処はカルデアで、貴女はメドゥーサですよ?。」

メドゥーサ「メドゥーサ：？ああ：はい、そうでした。有難うございます。それで、貴女達は：：？」

ノツブ「うーむ、どうも記憶が曖昧になってるようじゃの?。」

メドゥーサ「ええ：あまり、思い出せないというか：。」

ダヴィンチ「：あれ？おかしいな。」

マシユ「どうしたんですか、ダヴィンチちゃん。」

ダヴィンチ「いや、メドゥーサただけど：どうやら霊基が変わっててクラスがセイバーになってるんだ。」

立香「セイバーに？でもメドゥーサさんにセイバー適性は：。」

ダヴィンチ「まあ、ほぼ確実に無いね。つまり、聖杯のせいかもしれないかな。」

メドゥーサ「…えっと、私はセイバー、なんですか?」

ダヴィンチ「ああ。それは確実だね。なにか剣とかは持ってないかい?」

メドゥーサ「剣…? あ、こんなものならありますけど…」

そういいながら、メドゥーサは一振りの日本刀を实体化させる。

ダヴィンチ「…日本刀だね。」

メドゥーサ「日本刀ですね。」

ダヴィンチ「…うん、訳がわからないよ!なんでギリシャの女神のメドゥーサが日本刀を持つてるんだい?」

ノツブ「まあ、十中八九聖杯のせいじやろ。とりあえずさっさと行かぬか? いい加減待ちくたびれたんじやが。」

立香「そうだね。それにここでぐだぐだ話しても何にもならないし。」

ダヴィンチ「…わかった。特異点に向かうのはこの五人で良いのかい?」

立香「うん、それでいいよ。」

正直これ以上増えてもどうしようもないし。

アナ「…あ。」

立香「ん? どうしたのアナさん?」

アナ「えっと…姉様達からの頼み事があるのを忘れていて…」

立香「…うん、なら仕方ない。ステンノ様とエウリユアレ様の頼み事の方が優先だからね！土方さん、沖田さん、ノツブ、メドゥーサさんの四人で行ってくるよ。」

ダヴィンチ「了解だ。じゃあコフィンに入ってくれたまえ！」

マシユ「先輩、私は管制室からマシユつと支援させていただきますね！」

ダヴィンチ「うん、お願いね！それじゃ、レッツゴー！」

「「「おぉー！」」」

.....

く地点A：イオルコス近郊

その1く

立香「…うん、無事にレイシフトできたね。みんな、大丈夫？」

おき太「はい！沖田さんは無事ですとも！まだ血も吐いてません！」

ノツブ「わしも大丈夫じゃー。」

ヒツジ「おまえら、他人の心配する暇があるなら警戒しろ。敵地だぞここは。」

立香「確かに土方さんの言うとおりでね。…あれ？メドゥーサさんは？」

ふと姿の見えないメドゥーサさんを探すと

メドゥーサ「……………助けてくださいあ〜い。」

ノツブ「…うむ?どこかから声が…」

メドゥーサ「……………なんか穴の中なんですー。」

…と、なぜか空いている穴の中から声がした。

立香「…土方さん、お願いしていいですか?」

ヒツジ「わかった。おら、手エだせ。」

メドゥーサ「ありがとうございます…。…うう、なぜ私だけ穴の上…。」

おき太「ありやー、メドゥーサさんは既にぐだぐだ粒子に毒されちゃってるんですかね?」

メドゥーサ「そんなあ…。」

よくネットで見る『ort』のポーズをするメドゥーサさん。これはぐだぐだですねえ。

ノツブ「それで、ここは一体どこなんじゃ？」

立香「ダヴィンチちゃんならわかるかも…あれ、通信が繋がらない…」

おき太「まーた通信障害ですか？」

立香「みたいだね。」

メドゥーサ「…あの、マスター。遠くになんか大勢の軍勢が見えるんですが。」

立香「え？」

イアソン王「なあ…なんで俺はここに居るんだ？」

メデア女王「どうせ聖杯か魔神柱でしょう。」

リリイ女王「かなりしつかりと言い切るんですね…。」

メデア女王「だってこれ三回目よ!?!いい加減にしてほしいわよ!」

イアソン王「どうかこのへんな生き物はなんなんだ？」

ギリシアチビノブ「ノツブ!」

メデア女王「…だそうよ。」

イアソン王「なんだよそれ…。」

遠くで言い争っている(?)のはメディアとメディアリリイ、それとオケアノスにて戦ったイアソンだった。

立香「…うん、ぐだぐだだね。」

ノツブ「ぐだぐだじゃな。」

イアソン王「…ん?お前は確か…?」

メディア女王「ああ…またなのね…。」

立香「またみたいですな。」

イアソン王「おい、何がだ?」

メディア女王「毎回毎回召喚されては倒されてるのよ、こいつに。」

立香「毎回仕方なく…。」

イアソン王「ふうん…よし!なら倒すか!いくぞメディア!」

メディア女王「はあ!?!なんでよ!」

リリイ女王「わかりました!行きましよう、イアソン様!」

メディア女王「白歴史の私まで!?!ああもう!」

ノツブ「なんじゃ、戦闘か?」

立香「みたい!ノツブと土方さんはちびノブの掃討をお願い!沖田さんとメドゥーサ

さんはイアソン達を倒すよ！」

ノツブ「了解じゃ！いくぞ土方：っていないじゃとお!？」

おき太「土方さんならもう突撃しました！」

ノツブ「あのバカ！」

メドゥーサ「マスター、私たちも行きましょう。」

立香「うん！」

――戦闘――

サポート枠

沖田（セイバー）Lv. 90

メドゥーサ（セイバー）Lv. 50 スキル3未解放

ステータスは後書き

w a v e 1 ギリシアチビノブ（ランサー）×2

w a v e 2 ギリシアチビノブ×3

w a v e 3 イアソン王（ライダー）、メディア女王（キャスター）、リリイ王女（キャ

スター）

リリイのみ消滅演出、他二人は撤退演出

—戦闘終了—

Now loading…

ガキイン!

リリイ王女「きやあ!」

イアソン王「な、小さい方のメディア!」

リリイ王女「ごめんなさい、イアソン様…お先に失礼します…。」

シユイーン↑消滅するときの音

メディア女王「くっ、不味いわよイアソン!へんな生物もほぼ壊滅したわ!」

立香「よし、このままならいけるよ!」

イアソン王「仕方ない…メディア、宝具を使うから手伝え!」

メディア女王「ああもう!どうとでもなりなさい!」

おき太「不味いですマスター!敵宝具、来ます!」

イアソン王「来い、我が船の元集いし英雄達よ!『荒波越えし英雄の船』!」

宝具の名前をイアソンが叫ぶと同時に世界が塗り替えられていく。

ノツブ「な、固有結界じゃと!?」

レジェンド・オブ・アルゴノーツ

ヒツジ「…ああ？…ここは、船の上か？でけえ船だな。」

メドゥーサ「これはアルゴノーツ…なんだか懐かしい感じです。」

イアソン王「でかいのは当たり前だ！これはギリシアの海を旅した最強の英雄が集いし船だからな！といつてもまあ、俺だけじゃあこの宝具は発動できないんだがな。」

ノツブ「なんじゃと…？まさか！」

立香「あれか、『王の軍勢』と同じ類い!？」

イアソン王「さあこい、この船にて共に旅した英雄よ！主にヘラクレス！」

メレアセタンタ「…あー、すまねえが恐らくお前さんの望みの人間は来ないと思うぜ。」

メデア女王「…なるほど、また貴方達なのね…。」

エミヤテーテース「ああ、残念な事にな。にしても私などがヘラクレスの親友の名を騙るのはどうかと思うのだが。」

謎のティーピュスX「それを言うならなぜ私が舵取りなのはどうでしょうか。」

イアソン王「ええい、そんなことはどうでもいい！かかれえい！」

おき太「敵来ます！」

立香「ばっばとやっつけちゃおー！」

ノツブ「ええい、ノリがぐだぐだすぎじやぞ!」

—戦闘—

サポート枠

信長Lv. 80

沖田Lv. 90

土方Lv. 90

メドゥーサLv. 60 スキル3未解放

wave1 ギリシアチビノブ×2、謎のティーピュスX (アサシン)

wave2 ギリシアチビノブ、エミヤテーテース (アーチャー)、メレアセタンタ (ラ
ンサー)

wave3 ギリシアデカノブ、イアソン王 (ライダー)、メディア女王 (キャスター)

—戦闘終了—

Now loading…

エミヤテーテース「ぐつ、すまないイアソン。私達では倒せないようだ…。」

シユイーン

メレアセタンタ「はあ……いい加減幼名はやめてほしいんだがよ。」

シユイーン

謎のティーピュスX「なぜ私が舵取り……え？もつとしっかりと国の舵を取るべきだった？……なるほど……無念！」

シユイーン

メデア女王「……駄目だったわね。」

イアソン王「……だな。あー、こうなるならやめときや良かったか？」

メデア女王「でもまあ、楽しめたからいいわ。それじゃ、先に行くわね。イアソン。」

シユイーン

イアソン王「……全く。ああ、固有結界も消えちまったか……。くそつ。」

ノツブ「残ったのはお前だけじゃが……わしが手を下すまでもないようじゃの。」

イアソン王「ああ。……おい、人類最後のマスター。」

立香「……なんだい？」

イアソン王「西へ向かえ。西にある小屋にサーヴァントが居るはずだ。」

立香「わかった。ありがとう、イアソン。」

イアソン王「ふん。勝者が敗者に礼などするな。じゃあな。また機会があれば会お

う。」

シューイン

立香「うん、またね…。」

おき太「…さて!では言われた通り西に行ってみましょうか!鬼が出るか蛇が出るか!」

メドウーサ「できれば蛇はやめてほしいですね。」

立香「それじゃ、レッツゴー!」

立香達の旅は始まったばかりだ!

To be continued…

記念番外編　ぐだぐだギリシア神話！そのに！

ぐううだぐだギリシア神話あ！前回のあらすじ！

さらばイアソン王！また会う日まで！

く地点B：謎の小屋Xく

イアソン達を倒してから西へ西へと歩き続けたが、いつまでもどこまでも平原が広がるばかりであった。まる。

ノツブ「なんじゃこのステージの適当な名前は。」

おき太「多分アルトリアさんリスペクトなんじゃないですかね？」

ノツブ「適当じやのー。…む?」

おき太「どうしたんですかノツブ? 馬糞でも踏みましたか?」

ノツブ「んなわけないわ! あそこ見てみるんじやあそこ!」

そう言つてノツブが地平線を指差す。別になにも:

立香「…あ、なんかある。」

メドウーサ「やつとこのコピベして嵩増ししてある平原フィールドから脱出できるんですね…。」

ヒツジ「…んで、どうする。奇襲なら沖田に任せるべきだと思うが。」

おき太「なんで戦闘前提なんですか土方さん!」

ヒツジ「んなもんサーヴァントならどうやつても戦うしかねえんだろう? なら奇襲でもかけて少しでも優位に持つてくべきじやあねえか? というわけで沖田、手頃な奴にあの魔剣ぶっぱなして逝つてこい。」

おき太「字がおかしくないですか!」

立香「…うん、土方さんの意見ももつともだね。よし、沖田さんゴー! 奇襲が成功したら僕たちも突入するから!」

おき太「あー! もういいですよやけっぱちですよ! 私が新撰組ですともおお!」

そう沖田さんは叫びながら小屋へ突撃していった。そして…

おき太「こんにちは、氏ね！『無明三段突き』！」

「ぐあああああああ!?!」

「ライダーが死んだ！」

「この人でなし！」

立香「よし、突撃！ゴーゴーゴー！」

ヒツジ「御用改め！新撰組だ！」

ノツブ「いいやわしらは織田軍じゃ！」

メドウーサ「え、えつと地球連邦軍だ！」

立香「なぜ地球連邦!?!」

韋駄天小僧 アキレウス「ぐう…あいつの剣には神性の欠片もないはず…なのになぜ…!?!」

おき太「だつてほら、FGOですし。」

韋駄天小僧 アキレウス「なん…だと!?というか俺の出番これだけかよ!?!くそつ、FGOに不幸あれ、聖杯に呪いあれえええ！」

シューーン

キヤスランテ「アキレウスが死んだか…だがあいつはギリシア英霊四天王の中でも最弱

…」

アチャクレスヘラ「アタランテ、貴女までネタに走らないで欲しい。」

キヤスランテ「だがなヘラクレス!私のクラスがキヤスターでしかも弓じゃなくて琴
しかないのだぞ?!これでどう戦えと!」

アチャクレス「いえ、我々の先の時代によつて敵を切り裂く弓使いが居ると聞いた
ことがあります。貴女ならできるのでは?」

キヤスランテ「できるか!」

ノツブ「…うむ、ぐだぐだじゃな。」

立香「ぐだぐだとはいつたい、うづ(づ)…。」

ヒツジ「んなことあどうでもいい!戦闘だ!」

立香「さあ、戦いだ!」

メドゥーサ「何処のサイバトロン戦士ですか私たちは…。」

おき太「まだ病弱が発動しないやつたー!…こふつ。」

ノツブ「沖田も死んだ!」

メドゥーサ「この人でなし!」

— 戦闘 —

サポート枠

信長Lv. 80

土方Lv. 90

メドゥーサLv. 65スキル3未解放

wave1ギリシアチビノブ（アーチャー）×3 ↓攻撃のみ

wave2ヘラクレス（アーチャー）、アタランテ（キヤスター）

ヘラクレス ↓ 攻撃（弓）、勇猛、心眼、戦闘続行

宝具：射殺す百頭ナインライブズ

自身に無敵貫通付与、敵単体に超強力な攻撃＋防御ダウン

アタランテ ↓ 攻撃（琴で殴る）、治療の竖琴、音楽を奏でる（全体攻撃アップ）

宝具：野生の唄

味方全体のHP回復＋攻撃アップ＋回避付与（1ターン）

— 戦闘終了 —

Now loading…

アチャクレス「なるほど…人類史を救ったマスターとはこれほどなのですか…。」

キヤスランテ「せめて弓があれば…。」

アチャクレス「そもそもアタランテ、別に弓ならこの小屋にいくつもあるのだからそれを使えば良かったのではないのですか?」

キヤスランテ「…。」

アチャクレス「アタランテ?」

キヤスランテ「べ、別にこいつになら徒競走で負けてもいいかなどか思ったわけでは断じてないぞ! 本当だからな!」

アチャクレス「…。」アタマカカエ

ノツブ「なんじゃ、絆レベルがまだ召喚もしとらんにカンストしとるんじゃが。バグかの?」

メドゥーサ「詫び石はよ!」

おき太「ぐだぐだすぎ…こふっ。」

立香「えつと…うん! じゃあまた今度、味方として弓も見せてくれると嬉しいかな!」
キヤスランテ「…! ふ、ふん。いいとも、私の力を次は見せてやる! ではな!」

シューイン

ノツブ「うーむ、もうツンデレキャラはツインテだけで間に合つとるし、これアタラ
ンテ好きなマスターに怒られるんじゃないかの？」

メドウーサ「あー、まあこれは二次創作なのでそういうことです。はい。」

おき太「こんなんでいいんでしょうか…。」

アチャクレス「…さて、確か…立香で合っていますか？」

立香「はい！藤村立香です！」

アチャクレス「藤村…何処かで聞いたことがあるような気もしますが良いでしょう。
立香、この特異点の中心はここからさらに西にある『形なき島』です。そこにこの特異

点の核たる聖杯があります。」

立香「ほんとうですか!？」

アチャクレス「はい。恐らくそこにいるサーヴアントは手強いでしょうが、貴方達な
らば打ち勝つことが出来るでしょう。期待していますよ、立香。」

立香「はい！頑張りますとも！」

アチャクレス「うむ。それではまたいつか会いましょう。」

シューイン

ヒツジ「…今の大男、さつぱり本気を出していなかったな。」

おき太「…え?」

メドウーサ「そうですね…。宝具も『射殺す百頭』^{ナインライイブズ}しか使いませんでしたし。それに『十三の試練』^{ゴッドハンド}もありませんでした。元々戦うつもりはなかったのかもしれないね。」

ノツブ「うむ、手加減してくれてもギリギリとか大英雄恐ろしすぎじゃな!え?宝具がひとつなのはF G Oの仕様?いやほら、ネロ祭とかアガルタの例とかあるし?」

立香「そうだね。とりあえず今は手加減してくれたことを感謝しておこう。…よし!それじゃあ西へ向かおうか!」

ノツブ「おー。」

く地点C:何もない平原く

ノツブ「…。」

おき太「…。」

ヒツジ「…。」

立香「…。」

メドウーサ「…本当に何もありませんね…。」

ノツブ「いや、何もなかったかそういう次元の話じゃないと思うんじやが！まだドラクエの平原の方が物があるぞ！？木の一本もはえとらんとかおかしいじやろ！」

おき太「いい加減に飽きてきますね…。なんというかひたすらにロードランナーをしているかのような感覚ですなこれ。」

立香「歩き疲れた…というかカルデアとの通信は未だに通じないし…。」

ヒツジ「…おい、お前ら。剣を構えろ。真つ正面に敵だ。」

ノツブ「なんじやと！？うむむ…うむ、敵サーヴァント三騎にちびノブが多数じや！」

立香「誰かわかる！？」

ノツブ「あれは…。」

ダビデウス「やあやあやアビジャグたち！元気かい？」

アテナ^{アルテ}ミス「私がアテナ役とか面白くないかしら、ダーリン？…あ、そつか、今回は

ダーリンはお休みなんだつた…。アテナにはダーリンいないし。」

頭の上の熊の人形『今回は休みですヤッター！』とかかれた紙を持っている

ヘステイカ「あははは、アタシなんか寵の神様でいいのかな？どちらかというところエミ

ヤとかの方が…。」

ダビデウス「いや、彼はどちらかというところ料理の神様じやないかな？」

アテナミス「紅い弓兵…一体何ミヤなの…!？」

ヘステイカ「いや、エミヤじゃない…?」

ダビデウス「だろうね!」

ノツブ「あー、漫才しとるとこ悪いんじやが戦うんでいいのか？」

ダビデウス「ああ、そうだね。彼女の頼みだからね。君たちを倒させてもらうよ。」

おき太「ええい、またアーチャーですか!面倒ですなぁ!」

メドゥーサ「ですがどうやら三人とも聖杯によつて神性を付与されているようです!」

ノツブ「なるほど!ならばわしの出番じゃな!立香、指示を頼むぞ!土方は援護をせ
い!沖田はそこら辺で倒れておれ!」

立香「みんな、行くよ!」

ダビデウス「ふふふ、彼女がああ旗を使えないなら勝てるだろうさ!さあ、戦おう!」
メドゥーサ「総員戦闘可能!提督、ご命令をどうぞ!」

立香「だから連邦じゃないよ!」

サポート

沖田 Lv. 90

信長 Lv. 90

土方 Lv. 90

メドゥーサ Lv. 65 第三スキル未解放

wave 1

ギリシアメカノブ（アーチャー）×3

攻撃モーションはビーム

wave 2

シルバーギリシアメカノブ（アーチャー）×2 ゴールデンギリシアメカノブ（ライ

ダー）

wave 3 ダビデウス（ランサー） アテナミス（ランサー） ヘステイカ（キヤス

ター）

三人とも行動は通常と同じ。

— 戦闘終了 —

Now loading...

ノツブ「ノブアアアアアアア!?!」

ドカーン

おき太「ノツブが死んだ!」

メドウーサ「この人でなし!」

ノツブ「死んだらんわ!というかなんでランサーなんじゃ!?!お主らアーチャーとしての誇りはどうした!」

アテナミス「え、だって今回ダーリン居ないし。」

ノツブ「ぐ、ううむ、な、ならばダビデは!」

ダビデ「ふふ、信長だったかな?」

ノツブ「う、うむ。そうじゃが。」

ダビデ「僕は必要とあらば誇りも捨てるよ。だって…

女性は!誇りじゃ!墜とせないからね!」

ヘステイカ「…えー。」

立香「とりあえずランサーだし沖田さんゴー！」

おき太「我がワープ剣を見るがいい！てーい！」

ダビデウス「おつとお!？」

アテナミス「きやあ!？」

ヘステイカ「うわあつ！」

おき太「くつ、ダビデは仕留め損ねましたか…。」

アテナミス「あー、ごめんねアテナー。ダーリン今いくわねー。」

シユイーン

ヘステイカ「くつ、ごめんなさいヘステイア神、そこまで活躍できませんでした…。」

シユイーン

ダビデウス「ふつ、流石は僕。そしてゼウスだね！初見殺しのワープソードだって回

避けるのさ！」

メドゥーサ「…ゼウス？」

ダビデウス「そうさ！そしてそのエウリュアレは今は旗を使えないからね！僕に勝

てる存在なんていないのさ！」

メドゥーサ「エウ、リュアレ…。ああ、そうか。」

立香「え、メドゥーサがエウリュアレってどう…。」

そのとき。

メドゥーサ「てりやー!」

メドゥーサが、ゲートオブバビロンを、した。

…うん、剣がいてっばいだあ。

立香「…いや!なんでさ!」

ダビデウス「うわわわわわわ!?!剣?!剣が飛んできるとかどんなUBWだい!?!」

エウリュアレ「ええ…思い出したわ。これが私の魔術が一つ…『そうこまじゆっ創庫魔術』!」

ノツブ「いや、倉庫ってしまったものを打ち出すカタパルトじゃないと思うんじゃが!?!」

エウリュアレ「そこはほら、バビロンリスペクトよ!そして今なら!起きなさい、『光の剣』!」

そうメドゥーサもといエウリュアレが言うと、空間から一振りのエクスカリバーに似た剣が出てくる。だが、鏢が黄色で柄が青色のエクスカリバーとは違い、鏢は灰色、柄は黒と無骨な色になっている。

エウリュアレ「立香!今はセイバーとして貴方に従います!指示を!あのクソ爺を切

り捨ててやりましょう！」

ダビデウス「クソ爺って僕のことかい!？」

立香「うん、よし！エウリユアレ、頼む！」

おき太「今こそ貴女の力を解き放つとき！さあ、今がそのときです！」

エウリユアレ「ええ！コマドリルを喰らええええい！」

ノツブ「今の時代コマサンダーとかわかるやつおらんじやろお!？」

――戦闘――

サポート

沖田Lv. 90

土方Lv. 90

エウリユアレLv. 80 第三スキル解放宝具Lv. 5

w a v e 1 ギリシアメカノブ×2 シルバーギリシアメカノブ

w a v e 2 シルバーギリシアメカノブ×2 ゴールデンギリシアメカノブ

w a v e 3 ゴールデンギリシアメカノブ×2 ダビデウス

――戦闘終了――

ザンツ

ダビデウス「ぐうっ!まさかここまでとはね!」

エウリユアレ「とどめよ!立香、ノーブルファンタズムの使用を要請するわ!」

立香「ノーブルファンタズム承認!爆裂的に!撃滅せよ!」

ノツブ「トミカヒーローとか懐かしすぎるんじやが!というかレスキューするきさらさらなくね!」

「いくわ、光の剣、起動…!」

光の剣を前に構え、そうエウリユアレが咄くと同時に剣から凄まじい魔力が溢れだす。アルトリアの魔力放出や、イシユタルの宝石魔術もかなりの魔力が吹き出すがこれはその比ではない。ただただ暴力的な、敵を吹き飛ばすための魔力。近いもので言うと、アルトリアオルタのエクスカリバー・モルガンだろうか。

だが、もちろんダビデもバカではない。正面に立つことを避けつつ宝具を準備しているエウリユアレをいつになく真面目な顔で倒そうと近付いてくる。だが、

「友の鎖」

悲しいかな、そんな行動すら封じられてしまう。アーチャーのギルガメッシュの使う鎖、『エルキドゥ』。それをなぜかエウリユアレが使い、ダビデを捕まえてしまう。

「オールウェポンズフリー
全兵装使用自由……！」

——シールリムーブ 封印解放、スタート 開始。

魔の力よ、我が思う形を取りて、全ての敵を討ち滅ぼせ。

』

エウリュアレが言葉を紡ぐと、剣から魔力の帯が空へ突き刺さる。

』

——ファーストシール 第一封印、リムーブ 解放。

落ちし星の力よ、何処かの世界を救うために、その力を解放せよ。

』

さらにエウリュアレが言葉を紡ぐと、魔力の帯の輝きは一層増していく。既にアルトリアの聖剣と同じ位の輝きを放っているが、更にエウリュアレは言葉を紡ぐ。

』

——セカンドシール、
第二封印、リムープ
解放。

——人と星の力よ、我が剣に集いてその敵を撃滅せよ。

——オールシールズフリー
全封印解放完了。

『』

だが
その言葉を紡ぐと共にさらに光は強まる。ここまでは他の聖剣と同じだったのだ。

『』——侵食、開始。『』

——そうエウリュアレが呟いた瞬間に、夜空の空の如き輝きを放っていた魔力の帯はさながら夏の夕暮れのような優しくも悲しい色へと変わる。

『』

——これは、私が行き着いた『果て』。

——その生涯に意味はあれど、誰も報われることはなく。

『』

その詠唱が紡がれると共に、空へと強く伸びていた帯はその剣へと収束していき

『

—— 例え、私を迎えるのが琥珀色の空のみとなろうとも。

—— それでも、ワタシは敵を斬ろう。

』

最後には、琥珀の刀身の剣となる。

それをエウリュアレは振りかぶり、こう、囁いた。

『『英雄の剣』』

ノツブ「…うむ、なんじやったのじや、さっきの?アロンダイトもどきかの?」

エウリユアレ「えっと、確かにアロンダイトに発想は少しもらったけど…?」

おき太「にしては隙がありません?」

エウリユアレ「あ、それなら大丈夫よ。詠唱破棄すれば多少威力を落として即打てるわ。」

おき太「ひえっ。」

ヒツジ「…にしても、流石に斬った相手が粉々になるのはやり過ぎじゃないのか…?」

立香「粉々というかささらだったよね、完全に塵になつてたし。」

エウリユアレ「久しぶりだったからちよつとやりすぎました。てへ。」

立香「やりすぎだね、うん。ダビデからなにか聞けたかもしれないのに。」

エウリユアレ「うう、ごめんなさい…。」

立香「…あれ?エウリユアレって…瞳の色って…」

エウリユアレ「ああ、これは後天的なものよ。色々とあつて、ね。」

立香「そっか。」

エウリユアレ「えっと…とりあえずこの特異点を終わらせない?」

ノツブ「うむ…まあそうじゃな。今はそっちの方が優先じゃな。行くとしよう。それでよいか、立香?」

立香「うん。行こうか。」

エウリユアレ「わかったわ。」

おき太「うーん、メドウーサさんの外見でエウリユアレさんっぽい喋り方だとなんかすごいむずむずしますねこれ。」

ヒツジ「そうか？俺はいいと思うが。」

おき太「…帰ったらカーミラさんに告げ口してやります。」

ヒツジ「なんであいつなんだ…？」

記念番外編 ぐだぐだギリシア神話!そもさん!

——
かつて、彼女は英雄だった

——
しかし、今は全てを食らう獣

——
女神の持つ狂気が

——
彼女を解き放ってしまったのだろうか?

——
解放記念館跡地にて回収された文章より引用——

ぐだぐだギリシア神話、前回の三つの出来事！

一つ、アキレウスが死んでアタランテがデレた！

二つ、何故かギリシアの神三人が立ちはだかった！

三つ、メドゥーサはエウリュアレだった！

——地点C　　何もない平原——

ツツ——

『先輩……無事でしたか!?!』

立香「おお!?! やつと通信が通じた! うん、僕は大丈夫だよ!」

マシユ『……無事で何よりです!』

ダヴィンチちゃん『それで? 立香くん、状況の報告をお願いできるかい?』

立香「はい、まずですね……」

——少年説明中——

ダヴィンチちゃん『……つまりだ。私たちがメドゥーサだと思っていたセイバーはなん

とエウリュアレだった、と?」

立香「そういうことになりますね。」

ダヴィンチちゃん『…これは、ぐだぐだ関係なくかなり異常な事態だね…。彼女がいた世界自体が亜種特異点になりかねないような事態だと思っただけだな。』

エウリュアレ「あ、それなら恐らく大丈夫よ。」

ダヴィンチちゃん『ほう、その心は?』

エウリュアレ「一つ、この世界における歴史と完全に乖離した異世界だから。二つ、私の世界はその異世界世界線群においても剪定事象とされる世界線で、2500年代前半において滅んだから。三つ、その世界を滅ぼしたのは私だから。」

立香「…ほろ、ぼした?」

エウリュアレ「ええ。といつても、今の私にはその記憶はないのだけど。全てを殺し尽くしたのか、全てを食べ散らかしたのか、全てを侵食しつくしたのか…今となってはわからないわ。」

ダヴィンチちゃん『待った、つまり君は古代ギリシアの時代から2500年始めまで生きていたということかい?』

エウリュアレ「あー、いえ、時間移動をしたわ。大体今の年の辺りからぴよんと。」

ダヴィンチちゃん『…うん、どうやってだい?』

エウリュアレ「んー、ちよつと空間に高次元の穴を開けて？こつちの英霊として召喚されたのもそのときの次元跳躍のときに千切れた私の切れ端のせいだと思うし。……あれ？それってけっこう不味いかも？？なにか悪さしてなければいいけど。」

ダヴィンチちゃん『どうあがいても規格外だね……。まあいい。取り敢えず君のことを話してくれないかい？』

エウリュアレ「いいわ。まず、私がこうなつたきっかけは生まれたとき。そつちの世界ではメドゥーサだけが成長したけれど、私の世界ではメドゥーサと私も成長してしまつた。そしてそのせいで歴史にかなりの乖離が生じたわね。」

ダヴィンチちゃん『待つた、その程度だつたらそこまで酷くは変わらないんじゃないかな？女神とはいえど所詮人類史には大きく関わっていないところだろう？』

エウリュアレ「まあなにもなければそうだつただけで、何故かゼウスに目をつけられたと思つたらヘラクレスに殺されかけて、そしたらなんでか未来視ができるようになったね。そのままぐだぐだとギリシア神話の世界に関わるはめになつちやつたのよ。」

ノツブ「いや、わけわからんのじゃが。というかそれならギリシアの英霊だと納得はしたとしてなんで日本刀なんじゃ？」

エウリュアレ「……さあ？それについての記憶……というかギリシャにいたころの記憶が

かなり磨耗しててあんまりわからないのよ。大筋は思い出せるのだけど。」

ダヴィンチちゃん『もしかするとどこかで…それこそ2500年で何かしら日本と関わりがあったのかもね。それで、その後は?』

エウリュアレ「そのあとは…何故かメソポタミアの冥界でギルガメツシュやエレシユキガルに会って…ギリシアに戻ってからは聖杯大戦が起きて、結果私は宇宙に放り出されたのだったはずよ。」

おき太「うわー、カオスですわねー。」

ダヴィンチちゃん『ストップ、その聖杯大戦に魔術王の関わりは?』

エウリュアレ「ないわ。原因はステンノが作った聖杯だったから。」

立香「…ん?ステンノが作った聖杯?」

エウリュアレ「ええ。私の世界のステンノは変なものを作るのが得意でね…聖杯もそのひとつだったの。それをメドゥーサが起動しちやつて大惨事ってわけよ。」

ノツブ「…なんじゃそりゃ。」

おき太「というかナチュラルに宇宙に追放されてますけど、そのあとどうしたんですか?」

エウリュアレ「ちよつと頑張れば動けたから宇宙旅行をしてたわ。多分400年位かしら。」

マシユ『400年も一人で…それは…』

エウリュアレ「辛くは無かったわよ？ ゆらゆらとしてたらすぐに時間はたつたもの。辛かったのはそのあとだから。」

マシユ『それよりも辛いこととは一体…』

エウリュアレ「そんなの殺し合いに決まってるでしょう？ 何時ものようにふよふよと宇宙を漂っていたら、とある星に違和感をかんじてね。よく見てみたら、バイドに侵食されていたのよ。」

ダヴィンチちゃん『バイド？ それは一体…』

黒髭『…今、バイドと言ったか？』

ダヴィンチちゃん『え、ああ、そうだけでも…』

黒髭『ダヴィンチどの、それは拙者から説明させていだけでござる。バイドとは、日本のアイレムエンジニアリングが販売したシューティングゲーム、『R—TYPE』の敵キャラの総称のことござる。』

ノツブ「ほう、シューティングの敵キャラとな？ ならばわしの三千世界さんだんうちで一網打尽じゃな！」

黒髭『駄目だ。もしバイドが本当に原作通りの設定で存在するんなら絶対に戦っちゃなんねえ。』

ノツブ「む、なぜだ? わしの火縄なら楽々じゃぞ?」

黒髭『バイドは、怪物だとか化物だとかでは表しきれねえような『生物兵器』だ。』

ダヴィンチちゃん『…ふむ、生物兵器ということは作成者がいるのかい?』

黒髭『ああ。R—TYPEにおいては二十六世紀の人間が他の惑星系への攻撃のために作り出した兵器、となっている。』

ノツブ「なるほど、未来の科学というわけじゃな。だが、いくら二十六世紀の科学力でもわしの火縄なら殺せると思うぞ?」

黒髭『いや、バイドの恐ろしいところはそこじゃあねえ。バイドは、何もかもを侵食して己と同じ『バイド』にしちまうんだ。無機物や有機物だけでなく、果てには精神や空間までも、な。』

ダヴィンチちゃん『は…はあ!? なんだいそれ!? 恐ろしすぎないかい!?』

黒髭『そういつてるだろうが。だから、もし遭遇したらすぐ逃げてカルデアに戻ってこい。いいな!』

立香「ら、ラジャーっす! …あれ? でもエウリュアレの話だと遭遇しちやつてない?」
エウリュアレ「ええ、遭遇どころか殲滅したわよ?」

立香「…。」

ダヴィンチちゃん『…。』

黒髭『うん、もうエウエウだけでいいんじゃないかな?』

エウリユアレ「見つけちゃったものは仕方ないから殲滅したわ。んで、そのままズルと戦ってたら突然バイドが次元を越えてやって来てねー。それを追撃してつたらなんか2500年…いえ、二十六世紀にたどり着いてたわ。」

ダヴィンチちゃん『なんてぐだぐだな…。いや、もうこれはぐだぐだの域を越えてるんじゃないか?』

ノツプ「うむ、ぐだぐだでは表し切れない馬鹿みたいな現実はいっそ『エウエウ』とでも呼ばばいいんじゃないかの?」

おき太「馬鹿なことをいつてる場合ですか。それで、二十六世紀に跳んだのはわかりましたけど、それで終わりではないのでしょうか?」

エウリユアレ「ええ。二十六世紀に跳んだ私は元凶を潰しに行つたわ。地球に、ね。そこで、バイドに抵抗していたTEAM R-TYPEと地球連邦軍に協力して元凶と戦つて、撃破したわ。」

立香「…その元凶って?」

エウリユアレ「…ステンノよ。何がしたかったのかはどうでもいいけどステンノは地球をバイド化させたうえに私の時代にまで侵食を広げようとしていた。だから、倒した…いや、消し飛ばした、かしら?まあどちらでもいいわね。」

マシユ『実の姉を、そんなにあっさりど、ですか?』

エウリュアレ「なにか言っていたような気はするけど、こっちに銃を向けていたものなら、やるしかないでしょ?」

マシユ『それは…』

エウリュアレ「それでステノを倒して…そのあとは、太陽に突っ込んで死んだ…はずだったのだけども。」

ダヴィンチちゃん『え、なんでだい?』

エウリュアレ「なんでって、バイドに汚染されてたからよ? 流石に無茶苦茶したからね。だけど、どうも太陽に落ちて死ぬ前に理性を失って消し飛ばしたみたいね。」

おき太「ま、待つてくさい!? つまりエウリュアレさんは、バイド…?」

エウリュアレ「んー、まあ、そうなるわね? でもまあ大丈夫だと思わよ? サーヴァントである限りは。姿形もまだ人の形をしていた頃のものだしね。」

ノツブ「いったい最後はどんな姿を…いや、止めてくれ、話さんでいい。」

エウリュアレ「でしようね。とまあ、こんなところでいいのかしら?」

ダヴィンチちゃん『あ、ああ。そうだね。十分だとも。』

エウリュアレ「よかったわ。じゃあ、さっさと形なき島へ行きましようか。もしステノノがバイドを作ろうとしているのならまた倒さなきゃだしね。」

立香「…うん、そうだね。それじゃ、行こうか。」

―地点D 形なき島―

おき太「ここがやべー女神のアジトですか？」

ステンノ「だれがやべー女神なのかしら？」

立香「ツ！ステンノ、様…。」

ステンノ「ステンノでいいわ、カルデアだったかのマスター？」

立香「わかった、ステンノ。」

ステンノ「それでいいわ。それにしてもすごい面子ね。第六天魔王信長、幕末の天才剣士に鬼の副長。そして…、エウ、リュアレ…!？」

エウリュアレ「…久しぶりね、ステンノ。」

ステンノ「…ああ、ああ！久しぶりねエウリュアレ！ええ、何千年ぶりかしら！三千？四千？そんなことはどうでもいいわね！生きてたときは変な化物に殺されて会えなかったけれど、まさかサーヴァントになつてから会えるだなんて！これほど嬉しいことはないわ！」

エウリュアレ「…この特異点の目的は?」

ステンノ「よく聞いてくれたわね!それはまた三人でのんびりと暮らすためよ!メドウーサの持っていた聖杯と今回の聖杯、合わせて二十一騎のサーヴァントの分の魔力をつかってエウリュアレとメドウーサを召喚したうえでこの空間を完全に固定するの!そうすれば、また三人で、三人で暮らすことが、できるの…!」

ダヴィンチちゃん『…なるほどね。素晴らしい姉妹愛だ。だけど、それは人類史に対しての攻撃だ。完全に関係のない空間に世界を作るのではなく、あくまでもギリシア神話の時代に上書きしているわけだからね。だから…三人をカルデアに招待するついでで妥協してくれないかい?そうでないと、我々カルデアとしては君を倒さなければならぬ。』

ステンノ「…なんで。」

ノツブ「…む?」

ステンノ「なんでみんな私達が三人で暮らすことを邪魔するの!?!」

ダヴィンチちゃん『いや、だから三人でカルデアで暮らせば…』

ステンノ「それじゃ意味がないのよ!人間も他の神も、みな私達を引き裂くことしかない!アテナはエウリュアレを旅に出させてしまった!ヘラはメドウーサを怪物にした!アルゴナウタイはエウリュアレを生け贄にのうのと生き残った!ゼウスはエ

ウリユアレを宇宙へ捨てた！だから、他のやつなんていらぬ！三人だけがいい！

おき太「狂ってますね。他の人のせいだけではないでしょうに。」

ステン「黙りなさい。貴女達もエウリユアレを私達から奪うのでしょうか？だから殺すわ。待っててね、エウリユアレ。邪魔なやつらを殺すから。」

エウリユアレ「…ねえ、マスター。」

立香「なに、エウリユアレ？」

エウリユアレ「…倒すわよ。あれは私の障害だから。」

立香「…わかった。」

ステン「…なんで？なんで私の邪魔をするのエウリユアレ!？」

エウリユアレ「貴女は私に刃を向けた。なら敵でしょう？」

ステン「…なんで…なんで！なんでなんで！」

エウリユアレ「ステン…貴女はどうも狂ってしまったようだから…殺してあげるわ。もう一度、ね。」

ステン「もう、一度？まさか…」

エウリユアレ「戦闘よ、マスター。殺すわよ。」

―戦闘―

―サポート枠―

エウリュアレLv. 80 宝具5

w a v e l ステンノ(ランサー) HPゲージ三本、一ゲージ目HP240000

行動

最初『聖杯の力』発動

毎ターンチャージを2進める

通常攻撃 槍

魔力放出(炎)

のみ

宝具なし強攻撃

一ゲージ撃破で終了

―戦闘終了―

エウリユアレ「ちっ！私の宝具でも駄目か…」

ステンノ「なんで、どうしてエウリユアレ、貴女が、なんでバイドの力を使ってるの!?」

エウリユアレ「なんでって、バイドに侵食されたからに決まってるでしょう?」

ステンノ「誰よ、そんなことをしたのは!」

エウリユアレ「貴女に決まってるでしょ?だってバイドは貴女が産み出したのだから。」

ステンノ「そんな…」

エウリユアレ「私から三人で暮らす可能性を摘み取ったのも貴女だし、私が貴女を殺さなければならなくなったのも貴女の自業自得。」

ステンノ「…やっぱり、あのとときの化物は貴女だったのね…?」

エウリユアレ「さあ?私はずっと人の形のつもりだったけど?」

ステンノ「……。ああ、そんな。私のせいでは……」

エウリュアレ「だから、諦めてとっとと殺されて?」

ステンノ「……ねえ、もしかた三人で暮らせたら、暮らしてくれる?」

エウリュアレ「……無理ね。二人と違って私はもう化物だから。」

ステンノ「……………そう。」

ツツ

ダヴィンチちゃん『解析終了した!彼女はその土地の霊脈から魔力を吸い上げている!』

立香「なら、ノツブ、固有結界を」

ノツブ「あ、それ無理じゃ。」

立香「なんでえ!」

ノツブ「よく考えてみるのじゃ!わしここまで何回三千^{さん}世界^{だん}したと思つとるんじや!?今の状態じゃ発動してもすぐ崩壊するぞ!」

立香「な、なるほど……」

エウリュアレ「……固有結界を張ればいいのね?」

立香「え、もしかして……」

エウリュアレ「できるわ。まあ、代償に消滅はするけどそれは些細なことね。」

マシユ『いえ、それは全く些細なことではないと思うのですが!』
エウリユアレ「私一人の命で世界を救えるなら安いものでしょう?」
ステンノ「待つて、エウリユアレ! なんて貴女が命を捨てるのよ! 世界なんてどうでもいいじゃない!」

エウリユアレ「うん、まあ確かに義理も恩もないけれど

—— 私は、英雄だから。ただ、それだけよ。」

ステンノ「そんなのおかしいわよ……!」

エウリユアレ「マスター、第二宝具展開するわ。」

立香「承認!」

それを聞くと同時にエウリユアレは詠唱を始める。

エウリユアレ「第二宝具、開帳……!」

—— これは我が旅路の果て

—— 夢の果てにたどり着いた悪夢

—— 悪夢の果てに安らぎなど無く

—— されど私を優しく包む

—— 琥珀の空は英雄を包み

—— ただ悲しみと共にそこにあり

—— 故に、過去の英雄は未来へと進み

—— 『宇宙ノ女神ハ果テヘト至ル』

┌

そして、詠唱が終わると同時に世界は光に包まれた。

記念番外編

ぐだぐだギリシア神話！

最終回！

—— 作戦にて彼女は最期、我々の敵として現れた。

—— その圧倒的な力をもって、我々の悉くを無力化した。

—— だがそれでもなお、彼女は人類を守るために戦い、そして散った。

—— 彼女は、化物に成り果ててなお、英雄であった。

—— 終戦の際の地球連邦長官の演説より抜粋——

前回のあらすじ

実はやべーやつだったメドゥーサだと思っていたエウリュアレは聖杯を二つ持ったやべー女神なステンノを倒すために固有結界を発動した!

おき太「なんて酷いあらすじなんだあ!」

ノツブ「いつものことじゃ、諦めい。」

—風が、吹いている。

光が収まり、目を開けると

そこは、不毛の大地であった。

黒い岩の地面が果てしなく広がり、その地には剣や槍、朽ち果てた兵器などが突き刺さり、転がり、果てている。

そして空には、なにもない。ただ青い光を持つ深淵がいつまでも続くだけだ。

これが、エウリュアレの心象。ただただ、終わりだけが広がっている。

ああ、だけれど。

なぜ、この風景に……悲しみを感じてしまうのだろうか。

エウリュアレは……彼女達はただ帰りたかったただけなのに。

ノツブ「立香ア！ 気をしっかりもてえい！」

バチーン

立香「ぬわー!?ちよ、ノツブ!流石にピンタは酷くない!」

ノツブ「呼び掛けても答えんのだから仕方なからう!」

立香「いつつ…でもありがと、ノツブ。」

ノツブ「今のわしはお主のサーヴァントじゃからな!当たり前のことよ!それよりも今はしっかりと気をもて!気を抜けば直ぐに取り込まれるぞ!」

立香「了解!」

ヒツジ「にしても…こいつあどういう心象なんだ?固有結界つてのは自身の心象風景を写すんだらう?」

おき太「そのはずですが…これは…一体?」

エウリュアレ「…これが私の心象風景…らしいわ。ここまでなにもないと悲しくなつてくるわね。うん。」

ノツブ「いや、反応が軽いと思うんじゃない?」

エウリュアレ「いやー、だってこの宝具初使用なのよ。理論は出来ていたけど使う機会がなかったというか、だいたい波動砲でなんとかなったというか。」

ノツブ「いやまあ型的には波動砲とかチート級な武器だし是非もないよね!」

ステンノ「だけど、この程度なら聖杯で…!」

ステンノが聖杯を取り出す。だが

エウリュアレ「させるわけないでしょう？」

というやいなや、エウリュアレは弓を放った。

ステンノ「くっつ!？」

流石のステンノも突然の弓矢には対応できず、聖杯の使用を中断する。

ノツブ「…あれ？エウリュアレってセイバーだったと記憶してるんじゃないが…」

エウリュアレ「…そういえばそうですね。まあほら、剣で戦う弓兵もいるし弓で戦う剣士がいてもいいんじゃない？」

ノツブ「うはははは！その理論でいくとそのうち魔術で戦うランサーとか出てきそうじゃない…あれ？それもウラスとか意味無いとおもうんじゃないが。」

ダヴィンチちゃん『駄弁っている場合じゃないとおもうんだけどなー?』

立香「…はっ!ぐだぐだにやられていた!総員警戒!」

エウリュアレ「すでにしてるわ!取り敢えず喰らえ、本編じゃ未だに出番の無い吹き飛ばす七つの砲!ヒヤッハー!30mm劣化ウラン弾頭の徹甲弾をくらえー!」

そういうやいなやエウリュアレはどこから取り出したごつい機関砲をぶっぱなしまくる。すさまじくうるさい。

立香「ええい、さつきまでのシリアスはどこへいったあ!？」

ノツブ「今更だし是非もないね!というかなんじやあれ、わしの宝具と同じぐらいの火力が出とるような気がするんじやが!」

エウリュアレ「あははははは!神秘特攻に加えて戦車殺しの意味での騎乗特攻もあるわよー!」

ノツブ「まさかのわしリストラ!?!いや、あれセイバーじゃしノーカンじゃノーカン!」
立香「うつつさいノツブ!」

ノツブ「一蹴!?!そんなー。」

ヒツジ「にしてもこれじゃあ手出し出来ねえな。」

おき太「火縄の弾幕とはレベルが違いますしね…。」

立香「エウリュアレ、いけそう!?!」

エウリュアレ「…んー、あー、だめそう。」

立香「…は?」

こいつは何を言ってるんだ?

エウリュアレ「総員、対シヨック、対閃光防御!」

そうエウリュアレが言うと同時にさっきまでの弾丸が着弾していたところから凄まじい爆風と殺気が飛び出す。

ノツブ「急にできるわけなからう!?!のぶあああああ!?!」

おき太「ノツブが吹っ飛んだ！」

ヒツジ「捨て置けえ！」

ノツブ「おのれ、うらむぞ土方あああああ……」

キラーン

ステンノ「くっ、痛い……」

エウリユアレ「ステンノ、諦めて聖杯をこちらへ渡しなさい！そしたら取り敢えず聖劍一発で許してあげるから！」

ステンノ「それはなから許す気無いじゃない!?ええい、ならば……聖杯を使う！」

エウリユアレ「結局聖杯じゃない！マスター、面倒なことになる前に倒すわよ！」

立香「了解！」

ステンノ「聖杯二個持ちが負けるわけ無いでしょ！行くわよおお！」

――戦闘――

サポート

・エウリユアレLv. 80 宝具レベル5

・土方Lv. 90 宝具レベル5

・沖田Lv. 90 宝具レベル5

敵

ステンノ h p二ゲージ 一本目275680、二本目145000

行動

戦闘開始時 『解放・狂気の聖杯』発動、宝具ゲージマックス、プレイヤーキャラ全体に毒(毎ターン500、ターン解除なし、弱体解除有効)と防御ダウン(3ターン、30%)を付与

・通常攻撃

・魔力放出(炎) A+

バスターアツプ+宝具威力アツプ(1T)

・創造魔術(生命) EX

自身の攻撃up(3T)+HP回復(10000)&敵全体に呪い付与(500、3T)

ゲージブレイク時『顕現・狂乱の大聖杯』発動、宝具ゲージマックス、自身の攻撃アツプ(一回)、宝具威力アツプ(一回)、プレイヤーキャラ全体に強化無効(3T)付与

・宝具

『焼き尽くす炎の槍』

単体超絶ダメ+火傷+延焼

—戦闘終了—

..... Now loading.....

ツツ

ダウインちゃん 『大聖杯が顕現！あれを潰せばこの特異点は解決できるはずだ！』

立香 「わかった！エウリュアレ！」

エウリュアレ 「了解！宝具詠唱破棄、英雄の剣完全解放！人類史が作ったものならば！人類史を救ってみせろおおお！」

そうエウリュアレは叫び、

ザシユ、と聖杯からまるで生き物を斬ったかのような音がなり

光が爆発した。

―地点D，
汚染された形無き島―

『……………ぱ…い……………んぱい……………先輩!』

聞きなれた声で目を覚ます。一体何が起こった…? 周りからは…戦闘の音しか聞こえない。

マシユ『先輩! ご無事ですか!?!』

ノツブ「立香、起きたか!? 起きたなら指示をよこせえい!」

みれば、ノツブ達が：沢山の、吐き気をもよおすような赤い肉塊と戦っていた。

立香「…え、ちよ、なにこれ!? というか周りも崩壊してるか肉塊が覆ってるかだし!」

ノツブ「わからぬ! エウリユアレが聖杯を斬ると同時に聖杯が爆発してこやつらが撒き散らされおった! しかもエウリユアレが消えたせいで固有結界も消えたから見事に島も汚染されとる!」

ステンノ「なんで聖杯からバイドが…」

ノツブ「ええい、そのヤンデレシスコン女神! 考える暇があつたら敵を蹴散らせい!」

ステンノ「誰がヤンデレか、誰がシスコンか! 取り敢えずこの島から離脱するわよ!」
おき太「というかこのグロいのなんなんですか!」

ステンノ「多分バイドよ! 汚染されたくなければ脱出するわよ! 私が先陣を斬るわ!」
そのマスター、指示をちょうだい!」

ノツブ「ええい、ままよ!」

— 戦闘 —

サポート

・ステンノ(ランサー) L.V. 90 宝具レベル3
ステータスは後書きで

バトル1

肉塊(フォーリナー)×3 HP65000

行動

通常攻撃

『液体を飛ばす』プレイヤーキャラ 単体HP減少(1000)、防御ダウン

ゲージ攻撃

『汚染』

プレイヤーキャラ単体HP減少(5000)

バトル2

肉塊×6

バトル3

肉塊×9

—戦闘終了—

.....Now loading.....

ヒツジ「くつ、数が多すぎる！このままだどこの島を脱出する前に後ろのやつに潰されるぞ！」

ステンノ「……………なら、私が殿を勤めるわ！貴方達は脱出しなさい！」

ノツブ「お主、死ぬつもりか！」

ステンノ「私が原因なんだからそれくらいするわよ！さっさといきなさい！」

立香「ステンノ……！」

ステンノ「二度も言わせないで！」

立香「わかった！また会おう！」

タッタッタッタツ……

ステンノ「…全く、何がまた会おう、よ。敵だったというのに…。」

ステンノ「…さて、この先は行かせないわよ! 喰らいなさい、私の霊基を全て掛けた宝具を!

『オリバーロード・フレイム焼却せし女神の槍』!」

どがあん、と後ろの方で巨大な火柱が上がる。

立香「ダウインちゃん!」

ダウインちゃん『…駄目だ、女神ステンノの反応は消失した』

立香「くっ。」

おき太「…!! 見えました! 海岸です!」

ノツブ「ようし! 土方、立香を抱えて跳べい!」

ヒツジ「わかった! 行くぞ! おおおおおらあああああ!」

土方さんが俺を抱えて跳ぶ。同じように沖田さんとノツブも跳ぶ。

ドガアン！

ノツブ「よし！脱出成功じゃ！」

ダウインちゃん『まだまだ！あれをどうにかしないと人類史に確実に攻撃を仕掛けてくるぞ！』

ノツブ「ああ、そうじゃった！あれどうすればいいんじや!？」

ダウインちゃん『焼却すれば倒せるみたいだけどそんなことができるサーヴァントなんて限られてる！ええい、今からじゃレイシフトしても間に合わない!』

立香「俺の魔術でカルナさん呼び出したら!？」

ダウインちゃん『無理だ、それでも火力が足りない！もつと、こう、星を消し飛ばす位じゃないと生き残ってしまう!』

立香「じゃあどうすれば!？」

「……………なら、私に任せてくれるかしら?」

立香「な、その声は……」

エウリユアレ「ええ、まだ生きていたわ。んであれは……なるほど、また面倒なことになつたわね。」

ダウインちゃん『エウリユアレ、できるのかい?』

エウリュアレ「どうせダメもとよ。やるしかないわ。」

黒髭『参考までに聞いてくが…なにを使うつもりだ?』

エウリュアレ「…『FINAL波動砲』。」

黒髭『相討ち前提じゃねえか…というのも今更か。』

エウリュアレ「ええ、本来なら消滅しているはずだったしね。いまここにいるのはほぼ確実に抑止力のせいね。」

立香「エウリュアレ…」

エウリュアレ「…マスター、ここまでありがとう。貴方は…結構気に入ったわ。獣^{ビースト}に

気に入られても嬉しくないか。」

立香「いや、すでに一人気に入られてるから大丈夫だよ。」

エウリュアレ「…ええ…、それどうなの?」

ノツブ「人たらし、女たらしじゃ、今更じゃよ。」

エウリュアレ「…そう。じゃ、ぱっぱと行って撃って終わらせてくるわ!じゃあね!」

立香「うん、またね!」

エウリュアレ「あはははは!ええ、またね!」

——そのあと、まばゆい光とともに島は跡形もなく消滅し、特異点は解決された。聖杯はいつの間にかノツブが回収していた。

特異点も解決されたのでレイシフトして帰還、自分の部屋へと帰ってきたのだが…

エウリユアレ「…えつと、おじやましてます。」

ステンノ「取り敢えずお近づきの印に聖杯いる？」

立香「あ、結構です。」

なんでか、二人はカルデアに仲間入りしたのだった。

立香「どうしてこうなったんですかねえ…」

龍馬「あはははは…まあ、僕という前例もあるからなんとも…」

お竜さん「お竜さん的には面白いからいいとおもうぞ？」

立香「いやほら、パワーバランス的な意味で…」

龍馬「あははははは…まあ、頑張ってるね。」

立香「ぐあああああああ！」

今日もカルデアはぐだぐだでした。

キヤラクター設定的な？ ギリシア編キヤラまとめ

第十五話時点

・エウリュアレ

ギリシアの鍛冶の女神（自称）。

創造魔術と付与魔術という特殊な魔術を使ってさまざまなチートアイテムを量産する。聖杯も作ってしまった模様。因みに性能は虎聖杯以上ムーンスル以下。

生まれたときのバグとかゼウスがいらんことしたりした結果成長。胸が既にメドゥーサと同じかそれ以上。

新撰組をリスペクトしているのは土方に新撰組にスカウト（強制）されたからだった。別世界ではビーストに成り果てているとか。

・メドゥーサ

ギリシアの女神の一人。ポセイドンの愛人であり仲は良好。

戦闘スタイルは長短二刀による二刀流。ビームも撃てる（重要）。

ヘラの呪いとエウリュアレの聖杯がうまいことなんやかんやあつてゴルゴーンのすがたになってしまった。しかし精神はメドゥーサのままなので結局メドゥーサである。

三姉妹の中で一番常識にとらわれているような気がする。

素の戦闘能力は三姉妹でトップ。ただし魔術や能力は上の下程度なのでお遊びモードのエウリュアレととんとん位。

・ステノン

恐らくエウリュアレを除くと最も原作から解離した存在。性格は穏和で誰に対して多少は悪態はつこうとも優しく接する。ギリシアの料理の女神でありまた美の女神でもある。

戦闘能力もかなりのものであり、エウリュアレを止めることができる存在の一人。槍術、弓術共に達人のものであり、凄まじい魔力量もあり恐ろしい瞬間火力を誇る。また、アキレウスと並ぶ程度には足が速い。弱点は耐久。

まだまだ成長したいと思っている。

嫁にしたい女神なんばーっ。なんばーわんはヘステイアさん。（株式会社ギリシア神話調べ）

因みにエウリュアレのふざけたことに巻き込まれてどんどん成長している。素の戦闘能力と家事スキルではエウリュアレより上。

・ポセイドン

メドウーサの愛人。

エウリュアレに殴り倒されたり魅力の魔術を掛けられて嵌められたりと意外と散々。ただ、なんだかんだいってメドゥーサ達とは仲良くやっている。

最近メドゥーサとよりが戻った。

・ゼウス

黒髭タイプのおっさん。

エウリュアレの事を好いている…のかな？エウリュアレ達にはかなりの支援をして
くれている。エウリュアレがボンキュッボンになったのもこいつのせい。

ちなみにエウリュアレと互いに全力で殺しあった場合意外とエウリュアレが勝つ。

エウリュアレがシリアスに染まるとゼウスが勝つ。

・ヘラ

今作のラスボス(?)。

ヘラクレスにエウリュアレを殺させようとしたり、メドゥーサに呪いを掛けたりとか
なり色々やっている。

でも呪いの内容はちよつと(一)成長するだけという可愛いものであった。

なんだかんだでエウリュアレ以外とは和解したようで、ギガントマキアにおいては共
闘もした。エウリュアレは居ないからできていない。

・ヘラクレス

ギリシア最強の人間。恐らくギリシアでヘラクレスに勝る人間は居ない。

強化するする詐欺の被害者。いつかするから…。

今のところエウリュアレとの戦いで戦績は一勝一敗。

戦力としては最強と言っても過言では無いだろう。

ギガントマキアにおいて人間側で参戦し、戦闘の最後まで戦場にいた。

まあ、結果はあれなのだが。

・アテナ

ギリシアの戦いと知恵の女神。エウリュアレを止めることのできる存在の一人。

戦いの女神というだけあって戦闘能力はかなりのものである。ステンノの師でもあ

る。強い。

本人は認めないがステンノを溺愛している。強い。

エウリュアレは友である。つよい。

盾はエウリュアレ作成のものである。ツヨイ。

最近出番がない。つよい。

・ヘファイストス

ギリシアの鍛冶の神。エウリュアレとは作るものの方向性は違うがそれ故に色々と

良いインスピレーションを得れるとか。

ちなみに本気を出せばエウリュアレ以上のものを作る。だが面倒なのでやらない。聖杯について検査したりと鍛冶関係ないことまでやらされる悲しい神。

・ヘステイア

ギリシアの女神であり、そして

ギリシアの良心である（重要）。

家事と子供をあやすのが得意。ステンノに家事を教えている。

なぜエウリュアレに信仰されているかはあまり理解できていない。

書くときのイメージはブーディカ。

…もちろん胸はでかい。

最近ステンノに教わることも増えてきていて少し嬉しいやら悲しいやら。

ギガントマキアには多数の反対があつて参加しなかった。いや、できなかった。

・アレス

ギリシアの戦神：だが話の外でエウリュアレを襲撃した挙げ句半殺しにされた悲しいヤツ。

恐らく以降関わることは無い（断言）。無い（確定）！

ギガントマキアでは一番最初に投げ飛ばされた。

・エミヤ

守護者で見せ筋。実はエウリュアレについて知っている数少ない『人間』。ちなみに抑止力はエウリュアレをどうにかすることは諦めている。

なんかオルタも出てきた。そしてギャグ時空に囚われた。

フィツシャーの適正もあるバトラーである。

冬木では流石に活躍するはず。釣りで。

・沖田

エウリュアレが日本で修行しているときに夢に出てきた幕末誌氏。こいつのせいでエウリュアレは縮地をマスターしてしまった。

つまり戦犯。

まさかの本編にて登場。クラスセイバー。主に信長をいじる。

特に活躍もなく戦いは終わった。いつか土方さんも出したい。

・アタランテ

エウリュアレもといエコーの弓と走りの師であったが、自分に自信がなくなり今は修行をしている。

最近琴で矢を放つことができるようになった。

だがなんだかんだで生きており、ギガントマキアにも参戦。地味に弓で目を潰して援護したりしていた。

神話でやってたかけっこ勝負はしていないので未だ未婚。

・イアソン

アルゴナウタイの船長。そしてメデシアの夫。

原作ほど屑ではないのでとても円満な家庭ができています。またエウリュアレを切り捨てる決断を悔やみ、全てを救えるようにと日々研鑽を積んでいます。エウリュアレを止めることのできる存在の一人。基本は剣だが場合によっては槍や弓、斧も使う。

また魔術もかなりのもので、正直なところイアソンだけで国を一つ滅ぼせる。

ギガントマキアにも参戦したが、正直きつかった。

・ティーピュス

エウリュアレを信仰する英雄。過去に形なき島にやって来たこともあり、エウリュアレの姿も知っていた。

エウリュアレが死んだ（生きていたが。）後は各地で魔物を倒したりする傍らエウリュアレの信者を増やしていた。

結果として更にエウリュアレの神性が高まることとなった。

エウリュアレ復活後も布教を続け、今ではギリシアでもトツプクラスの教団の教祖である。

・メデシア

裏切りの魔女とならなかつたifなメデイア。今はイオルコスでイアソンと平和に過ごしている。

魔術は原作以上に成長しており、家事から戦闘、果てには《電波妨害を受けている！》までなんでもイアソンの援護をする。イアソンいてこそこのメデイアであり、またメデイアいてこそこのイアソンである。

子供は二人。

イアソンとともにギガントマキアに参戦するも、流星に敵しかった。

・『私』

エウリュアレの元々の魂。現在はエウリュアレの深層意識でのんびりと過ごしている。

本人曰くエウリュアレには自分から体を明け渡したのだとか。

ちなみにまだギリシア編だが既にサーヴァントとしての能力を持っている。

予想以上に楽しんでいる模様。

・アンリ・マユ

なぜかエウリュアレの深層意識に居る土郎モドキ。

どうやら外の状況を知る手だてがあるようだが…？

というかなにやらエウリュアレの中にすんでいる可能性が？

ほんと一体何者なんだ…？

・ギルガメツシユ

既に過労死で死んでる超ご機嫌な賢王。エウリュアレは気に入っており、エレシユキガルとは何というか保護者ポジに近いのかもかもしれない。

エレシユキガルをいじって遊ぶのがかなり楽しいようだ。

ちなみに過労死したせいかなかなりキャラが壊れている。

セイバーには全力でキャラを否定された。

地味にステンノを救ったりとやっぱり良い人な賢王様でした。

・エレシユキガル

メソポタミアの冥界の女主人。エウリュアレは初めてにして唯一の友達。そしてエウリュアレによって強化されてしまった存在の一人。ちなみにエウリュアレがあげた槍とマントはエレシユキガルの第三再臨のあれ。あの白黒の槍。

イシユタルは大嫌い。

今作の癒しの一人。

ギルガメツシユとエルキドゥは家族のようなものである。

最近ヒロインはエレちゃんていいような気がしてきた。

・エルキドゥ

ギルガメツシユの変わりっぷりに結構驚いた親友さん。エルキドウも結構キャラが壊れている。

エレシユキガルは信頼に値すると思っている。イシュタル？なにか投げつけるものはないかい？

・イシュタル

今作で扱いの悪い女神の一人。他はヘラとアレス。

本編で一瞬出たのに消し飛ばされた。ざまあ。

因みにこの世界ではイシュタルとエレシユキガルはあることがきっかけで顔をみたら殺し会うような仲である。

あることつてなにか？そりゃー、ギルガメツシユについてです。

・ランサー

会話のなかで散々殺される人。

ちなみに現在考えている第五次聖杯戦争はギャグ時空なので、ランサーは死ぬ。

沖田達と共に本編登場。だが、

ギャグ時空だ。

しかしどうもシリアスに傾いてきたからかFGOのオルタと戦うことに。

だがどうせギャグ時空だ。

しかも冬木に召喚されていることが判明。月に二十回は事故に巻き込まれている。つまり死ぬ。

十七話にてマスターを思う発言をしたいやつ。

だが死ぬ。

ところが無事冬木に帰ることができた模様。

まあ事故つてたが。

・アキレウス

とてもはやい。はやいっただらはやい。サラマンダーよりずっとはやい。ステンノと同じくらい。

・織田信長

アーチャー。FGOとコハエースの記憶持ちだったりする。つまりメタ要員！主にリアクション役。というか沖田のおまけで参戦してきた感じでもあったり。

三千世界での広範囲射撃でそれなりに活躍した。

・ニトクリス

キャスター。思い付いたのがこの娘だった。後悔はしていないけどなんというか原

作から解離してしまっているような…。ごめんなさい。

今作の良心の一人かもしれない…。

影が薄い。

あ、そのメジエド様ローマに染まってますよ？

・山の翁

アサシン。初代様。つよい。

なぜ召喚されたとかそういう真面目なことは考えてはいけない。だってギャグだし

ネ！

ご本人のキャラもギャグに傾いてきている。

首おいてけ。

地味に出てきていない。

・タマモキヤット

バーサーカー。まさかの本編登場である。

エウリュアレをご主人と慕っている。

因みにこのキヤットはヘラクレスとためをはれる。つまり強い。周回のお供にどう

ぞ？

エウリュアレとは気が合うのか相性がいいのか仲が良い。

そしてまさかのレギュラー入りの可能性……。うむ、キャッgod。

・黒髭

ライダー。なんでこいつをチョイスしたのか私にもわからん。

なんというか私の力不足でまともになっている？

ドレイクBB/A好きは相変わらず。

せっかくドレークと戦えたのに、エウリユアレ旗下の日本武尊に口号弾で一発で消し飛ばされたので悲しんでいる。エウリユアレとは絶対にわかりあえねえ！いや、男の口マンについては例外でつけど!?とか。

・アルトリアオルタ

敵のセイバー。

ヘラクレスの『射殺す九頭』はギリギリ凌いだものの、『斬り殺す一頭』にて敗北する。

どうやらこの演劇についてなにか気づいたようだ。

・ランサーメドゥーサ

敵のランサー。

狂化が入っているため意志疎通は不可能。

じいじに瞬殺された。

因みに武器はハルペー。

・エミヤオルタ

敵のアーチャー。

ステンノの一言によつてギャグに引きずり込まれた。

最後はステンノによつて腹に槍を突き刺され死亡。地獄に落ちろデミヤ…とかは冗談でも言わないであげて。

・フランシス・ドレーク

敵のライダー。

ゴルゴーンになったメドゥーサに同情してゴルゴーンの味方となった。

なお消し飛んだ。

・カーミラ

敵のアサシン。

ゴルゴーンになったメドゥーサには思うところがあつたらしく、手を貸した。

アテナとそれなりにやりあつたが、じいじの不意打ちにて敗北した。

実は死んでない。けど出番はいつになるかはわからない。そんな設定はなかつた、いいね？

・メフィストフェレス

敵のキャスター。

戦闘中に悪のめっふいーと善のめっふいーに分裂したため悪のめっふいーはす巻きにされている。

何かしらの思惑があつてエウリュアレ側についた。が、活躍なく退場。

・クー・フリーンオルタ

敵のバーサーカー。

クー・フリーンとやりあつていたところじいじに罵倒された上で殺された。俺その麻婆と関係なくねえか!?

・タマモワンコ

この小説の筆者にしてタマモナインの追加戦士枠、怠惰と墮落と劣化の化身、タマモワンコなり！クラスはライダー、だつて調子に乗つてるからネ！もちろん狂化はEXだ！

好物は安い豚肉と牛乳で牛肉と野菜は苦手。でも最近乳製品禁止を言い渡された。

感想とUAとお気に入りが増えることが一番の喜び。

宝具は『無限あんりみてっどわーるとわーくすの妄想』。やられそうになっても妄想の世界に逃げて事なきを得るぞ！

こいつが小説を書き続けるのは皆の感想のおかげだ！これからも頼むぞ！

番外編　　これがエウリユアレの全てだ！（大嘘）

エウリユアレ

身長：170cm

体重：55kg

スリーサイズ：上から90、57、88

出典：ギリシア神話（改）・メソポタミア神話（外）・クトゥルフ神話

地域：欧州・日本・古代メソポタミア・フォーマルハウト

属性：混沌・中庸

隠し属性：地

性別：女

一人称：私

二人称：貴方、貴女、あんた、○○（呼び捨て）

三人称：貴方達、貴女達、あんたら、○○

イメージカラー：白銀

特技：修行、道具作成、ビーム

好きな物：ステンノ、メドウーサ、ビーム

嫌いな物：訳のわからないもの

天敵：ヘラとアレスとアルテミス

レア度：☆4

CV：浅川悠

概要

原典のエウリュアレに、転生した未来の一般人の魂が憑依した存在である（…と、本人は考えている）。

創造、付与、加工魔術という特殊な魔術を得意とし、その場で武器を創造したり、普段から武器を創ってそれを使って戦う。ただ、いろいろと作りすぎて最近ゲートオブパピロンは『王の財宝』の真似事すらできそうなことになっている。勿体無いのでやらないが。（ただし、キャスガルのように魔術を撃つかわりに剣ビームを撃つとかは楽しそうだなー、とかは考えている。やめろください。）

得意な武器は刀と弓、そして銃。縮地の練度がかかなり高く、数十キロ先から一瞬で敵の目の前に移動し首を斬る、なんてこともできるしそれなりにやっている。相手が格上だとみたときは斬る代わりにビームが超至近距離から飛ぶ。弓は、真面目に撃つと世界

が滅ぶのであまり使わない。

本人の性格はかなり適当である。先のことまで考えているようで実はなにも考えていない。なにかあつても『まあ、なんとかなるでしょ』でなんとかするから困る。ただその瞬間にやりたいことができ、面倒なことかが起きなければ良い。

基本的に慢心ぎみである。最初から本気は出さず、ノってきたらちよつとずつ上げていく。ただ、なぜか自己評価が低いので同等程度の力を持つていたりすると全力でかかつてくる。なんだこれ。

冠位に関してはアーチャー、セイバー、キャスター、アサシンとしてはできなくはないが、やはり一芸に秀でた存在たちには劣る（と本人は思っている）ため現状取ることはない。分かりやすく言えば蹴った。

パラメーター

・筋力：B

↓本来であれば成長しないエウリュアレだが、ゼウスの加護によって人並みに成長するようになった。ただし、この筋力は修行の成果である。

・耐久：B

↓筋力に同じ。

・敏捷：A++

↓基礎の速度もあるが、縮地の恩恵も大きい。短距離における速度ではアキレウスには敵わないが、長距離における最終的な移動速度ではエウリュアレが勝つため敏捷の値はアキレウスのA+に勝っている。長距離でのタイムと短距離でのタイムで長距離のタイムを元に評価をしているみたいなもの。

・魔力：A+++++

↓いい加減にEXで良いような気もしてきたがまあそれはそれ。ここまで魔力の+の数が多いのはエウリュアレ本体の魔力量が多いのに加えて『魔力を増幅する装置』をエウリュアレが創造できるからである。そう、一話にて当たり前のようにメドゥーサの語りのなかに出ていた魔力増幅装置である。あれがあるので事実上無限に魔力を増やせるのである。さながらLHCで延々と原子を加速させるかのように！

……ちなみに、どこまでがエウリュアレの素の魔力で、どこからが増幅を加味した数値なのかは……

……かにのみそしる。

・幸運：EX

↓これに関しては原典通りである。ただ、幸運の度合いは原典よりも高いかもしれない。

・宝具：EX

↓正直なところ増えすぎたためともにステータスとしての役割を果たしていない。

・スキル一覧

・対魔力：EX（A+）

↓原典エウリュアレは対魔力はAだが、このエウリュアレは素でA+ある。また、魔力をたつぷり使って結界を幾つも重ねに重ねることで擬似的にEXの値も出すことができる。ただし、魔力消費はトツプサーヴァントの宝具など目ではない。それどころかヘラクレスの宝具である『十二の試練』^{ゴッドハンド}の命のストックを十二個一気にそれも常に回復させる方がマシなレベルである。

・付与魔術：A

↓エウリュアレの不思議魔術その一。

物体、生物、果てには概念にまで『何か』を付与することができる。近いものでは強化魔術やエンチャントなどがあるが、これは基本的に『どんなことでもできる』。無論魔力消費は強化魔術の比ではないが。

エウリュアレはこの魔術を武器への特殊効果付与にのみ使っているが、やろうと思えば筋力倍増だとか光速で移動できるように、なんてこともできなくはない。どんな反動

があるかは知らないが。

エウリュアレが実際にやったのは『互いに引き合うという効果の付与』や『空間を挟むという効果の付与』などエミヤの宝具の再現のためが大抵だが、『ホロウな服』などにはバリバリと付与しまくっているし、エレシユキガルにあげた槍についていた能力もこれによるものである。

応用の利きすぎる能力は打ちきり漫画の常だが、これは漫画ではないので問題ない。

・高速神言：D

↓詠唱速度に関わるスキルなのだが：魔術がそもそも詠唱をしていないせいで空気となりつつあるスキル。そしてこの先も使われるかは：うん。FGO編で役に立つたら良いね！

・陣地作成：C+

↓自らに有利な陣を作るスキル。冥界でひたすらにいろいろと創っていた時にエレシユキガルに教えをうけてここまで強くなった。エウリュアレの陣地はただひたすらに創ることに特化した物となる。一年くらい余裕で引きこまれる。

・神性：A+++++

↓あくまでも初期は神霊の体に人間の魂が混ざったものであったためBランクであつた。だが、ゼウスとそれなりの関係であつたりポセイドンとガチで殴りあいをした

り一度死んで蘇ったりゴルゴーンとなった妹であるメドゥーサを救って死んだ（ということになっている）りしていたうえに、アルゴナウタイの舵取りのティールピュスが各地でエウリュアレについての布教をしていたせいで信仰が集まった結果ここまで上がった。ただしこの小説では神性EXイコール神性A×100とする。

・単独行動：A

↓単独でどれだけ行動できるかの指標。アーチャーのクラススキルだが、サーヴァントでもないエウリュアレにとってはただのフレイバースキル。いらぬ。

・魔術：A+++++

↓基礎的な魔術を一通り修得したということを表すスキルである。まる。

・創造魔術：A

↓ある意味このエウリュアレをエウリュアレたらしめているスキル。想像したものをその通りに創造できる。ただし魔力はバカ食いするが。

未知の素材や空想上の素材であっても創造することができる。故に『絶対に折れない剣』なんてものも作れてしまう。

ちなみに今作の衛宮士郎もこれを使うが、セラの魔力補助無しでは剣も作れない。

・加工魔術：A

↓物体を加工することができるスキル。ランクが高ければ高いほど元の能力や素材

の特性をそのままに加工できる。

創造の練度が低かった初期は素材を創造して加工していたが、現在は船などであってもPONと出せるため影の薄くなった悲しい子。ただし、エミヤごっこには必要。

・転移魔術：A

↓座標の点と点を移動する魔術。俗にいう瞬間移動。

：なのだが、エウリュアレのこれは実は瞬間移動ではなく次元潜航からの浮上だった。しかしそれを気付くものがおらず転移ということになっている。

・魅惑の美声：A

↓魅力されちやう良い声。エウリュアレを（性的に）狙う存在が増えたからかここまですべて戻ってしまった。やめてー!?

・無限の魔力供給：EX

↓どこからともなく魔力が供給されるけどそもそも魔力とか有り余っているのだからまり意味はなかった。ちなみにルビーちゃんは関係ないですよ？

一体何杯の仕業なんだ…？

・転生者：A

↓転生したという記憶を持つものが持つスキル。前世の記憶がある、という人物はこのスキルを持っているのかも…しれない。

このランクがE Xなら完全に前世の記憶を持っている。つまりよくある転生主人公はこれのランクがE X。エウリュアレはまだ。

・一意専心：D

↓一度始めたら止められない？ならこのスキル持ちですね。つまりそういうことだ。

・圏境：A+

・絶招：A

・中国武術：A

↓この三つはまとめ。

前世においてお隣のお爺さんから教わっていた中国武術をひたすらに修行したもので、言峰と正面切つてやりあえなくはない。やりたくないけど。

・射撃：B

↓射撃に関するスキル。同じランクにアン・ボニーが居る。

一応エウリュアレもそれなりの技術はある。やらないが。

・道具作成（兵器）：A++

↓道具作成に関するスキルだが、エウリュアレは武器や兵器の作成に特化している。これと加工魔術を組み合わせて初期はいろいろと作っていた。今は使われない悲しい子。

・縮地：A+

↓武芸の極致が一つ。ここまで来ると仙術である。

どこであつてもどんな距離でも一歩かつ一瞬で移動できる。ただし宇宙とかは無理。

・心眼（真）：EX

↓修行にて培った目はヘラクレスとの戦いにて開花した。その戦いではドジ踏んでやられたが。

その後はギルガメッシュと戯れていたらいつの間にかこんなことになっていた。どうしてこうなった。

・ゼウスの祝福EX

↓ゼウスによる加護。神性がEXより低い、又は持っていない相手との戦闘では全ステータスが一から三段階まで上昇し、おまけで幸運は普段の生活でもかなりのものになる（幸運EXならもつとよくなる）。また場合によつてはゼウスの雷による援護射撃もある。

しかし、役だったところを見たことがない。

・千里眼（偽）：A

↓エミヤに未来を見ることができると偽ったことによりできてしまったスキル。逸話からの派生タイプ。実際は『衛宮士郎及びそれに関連する人物の生きている時代』及

び現在しか見通すことはできない。正しい千里眼とは違うためAランクの千里眼を持つアーラシユのように読心のようなことや未来視なんてことはできない。もちろん視認できる距離も遠くはならない。

また、衛宮士郎との繋がりが薄い人物しか居ない時代は見通すことが難しい。さらに未来を見た場合確定とはならない。

・深淵の加護：E X

↓深淵、冥界の炎を操ることができるようになるエレシユキガルの加護。キングハサンのあれ。もちろん即死効果もつく。

宝具

・『旭の旗の下に』 宝具ランクE〜A+

——その旗は、旭日旗だった

前世にて日本に関係のある乗り物であり、かつエウリユアレが作成したものに限り召喚が可能。また自立戦闘を行う。召喚された乗り物はそれぞれに宝具ランクが決まっております。一部のみを召喚することも可能。現在はあまり数がないのでまだ弱い。エウリユアレが乗り物を作れば作るほど強化されていく。また、同じものをコピーして複数

召喚することも可能である。が、ロマンがないのであまりやりたがらない。

ちなみに創作の世界のものであったとしてもエウリュアレ本人が当てはまると判断すればこれで召喚できる。その場合、乗組員もいけば召喚が可能。

ちなみに発動の詠唱はただの雰囲気出し。フレーバー。

以下現時点で召喚可能なもの一覧

・日本武尊ヤマトタケル 宝具ランクA+ 対軍宝具 ×3

↓荒巻義雄原作の仮想戦記、『旭日の艦隊』および『紺碧の艦隊』に登場する超大和型戦艦。この小説では紺碧の艦隊OVA版最終話の時点でのものを基本として考える。

主砲51cm45口径三連装砲三基をはじめとしてさまざまな兵器を搭載する巨大戦艦である。その戦力は単艦にて敵艦隊を撃滅せしめるほど。

召喚された場合、大抵は大石司令長官を中心とした乗組員が共に召喚される。

・日の丸A-110 宝具ランクC+ 対人宝具×20

↓一部のミリタリー好きな日本人の中で空想される日本所属のA-110対地攻撃機。それがこれである。一応鬼頭 莫宏原作の漫画『なるたる』にも出ているがまあそれはそれ。やはり30mm七連装ガトリングはロマンなのである。無論エウリュアレの魔改造入りなのでA-110と甘く見るとドッグファイトで落とされるので気を付けるべし。具体的にはどこぞの金ぴかのヴィマーナとやりあえる。そしてなにより、対『人』宝

具である。

・零式艦上戦闘機五二型 宝具ランクC+ 対人宝具×100

↓日本人なら恐らく誰もが知っている『零戦』である。特攻の象徴だとかほざくやつがいたらとりあえず四十六サンチ三連装砲パンチをお見舞いしてやろう。ちなみにゼ口と侮るなかれ、これももちろん魔改造入りだ。具体的には金ぴかの (ry

・九七式艦上攻撃機 宝具ランクB 対艦宝具×50

↓艦これをやっているなら嫌というほど見ることになる艦上攻撃機。真珠湾の功勞者の一つ。

艦艇を攻撃するのに特化して改造してあるため対艦宝具というカテゴリとなった。

・伊601潜水艦 宝具ランクA 対軍宝具

・伊501潜 宝具ランクA― 対軍宝具

・伊502潜 宝具ランクA― 対軍宝具

・伊503潜 宝具ランクA― 対軍宝具

・伊701潜 宝具ランクA― 対軍宝具

・伊702潜 宝具ランクA― 対軍宝具

↓荒巻義雄原作の^{火葬}仮想戦記『紺碧の艦隊』等艦隊シリーズに登場する潜水艦。上記六

隻及び補助艦艇にて紺碧艦隊を成す。

端的に言えばチート。その時代以上の兵器を装備しており、まず捕捉すらされない。

伊601潜には前原一征少将も召喚されるのだが、彼自身もかなりのチートというか…。遠見やら予知やら。

・伊401潜　宝具ランクB　対軍宝具

↓うってかわって普通○のリアルな潜水艦。うん、普通ダヨ？ちよつと強化してあるだけで。

・巨大空母：『建御雷』^{タケミカヅチ}　宝具ランクA　対軍宝具

↓『紺碧の艦隊』シリーズに登場する巨大空母。言ってしまうえば強化された空母『信濃』。ここにおいては下記の電征のみを搭載している。

・艦上戦闘機：『電征Ⅲ型』^{でんせい}　宝具ランクC+　対人宝具×50

↓『紺碧の艦隊』シリーズに登場する艦上戦闘機。OVA版を採用している。20mm、30mm機関砲や対地噴進弾などが装備でき、どちらかというところ戦闘爆撃機となっている。もちろん魔改造しており、具体的には（ry

・迎撃機・高高度噴式戦闘機：『噴式蒼葉』^{ふんしきそうら}　宝具ランクA　対人宝具×200

↓『紺碧の艦隊』に登場する高高度ジェット戦闘機。最高速度は時速1000kmを越える。武装は30mm機関砲4門または57mm機関砲2門。57mm砲とは…当時のチハと同じである。ひえー。

・中戦車：『九式・蒙琥』^{もうこ} 宝具ランクBー 対人宝具

↓『紺碧の艦隊』に登場する戦車。事実上の74式である。無論魔改造済みなり。

・駆逐艦多数

↓駆逐艦がいっぱい。

・Rー9A2『DELTA』 宝具ランクEX 対星宝具

・RXー10『ALBATROSS』 宝具ランクEX 対星宝具

・Rー13A『CERBEROS』 宝具ランクEX 対星・対軍宝具

↓アイレムソフトウェアエンジンニアリングから発売されたゲーム『RーTYPE

△』に登場するR戦闘機。何故召喚できるか？…このゲームのstageの背景をよ

く見てみるといいかも。

・Rー11B『PEACE MAKER』 宝具ランクA++ 対軍・対悪宝具

↓この機体は石川県警にも配備されている…らしい。

・『偽・我が神はここにありて』^{りゆみのしてえてるねっる} 宝具ランクA++ 結界・対軍宝具

↓本家『我が神はここにありて』^{リユミノジテエテルネットル}とは違い、どちらかというと『熾天覆う七つの円環』^{ローアイアス}

に近い。

大量の魔力を使用して広範囲に何十、何百という数の結界を重ね、決して破れること

のない一枚の結界を作る。

さらに、その結界の中に重火器を召喚し攻撃することもできる。火器の宝具ランクは一律にDとなるが。

・『なんかビーム撃てる剣』 宝具ランクA 対軍宝具

↓初期に作成したビームが出る剣。これの強みはノータイムでぶっぱなせること。ただしダメージ式は筋力×5。

しかし、メドゥーサ戦にて壊れた。

・『陰剣・陽剣』 宝具ランクB 対人宝具

↓エミヤの使う『干将・莫耶』のエウリュアレ版…みたいなもの。ビームが出るとかの特殊すぎる能力は無いが、とにかくひたすらに頑丈である。それはアロンダイト並だった。

・『吹き飛ばす七つの砲』 宝具ランクA 対人宝具

↓復讐者の名を冠し、攻撃機A―10の装備する機関砲である『GAU―8 アヴェンジャー』。それを歩兵用に改造したものである。背中のバックパックと砲がセットであり、バックパックにはミサイルがたんまりと積んである。

・『勇者の弓』 宝具ランクA― 対人宝具

↓イメージはゼルダの伝説ブレスオブザワイルドの王家の弓。怪異や神秘に対して特に強いダメージを与える。つまり神秘や怪異の少ない現代や現代英霊に対してはた

形はゼルダの伝説ブレスオブザワイルドのマスターソードで威力はエクスカリバーと同程度。まあ…なんだ、とても強い。ただし、隙もその分大きい。

・『きしんのまそう』 宝具ランクB 対人宝具

↓刃が刺さるとほぼ確実に死ぬ。そんな槍。形はドラゴンクエスト9の『きしんのまそう』。

・『どくばりのやり』 宝具ランクB 対人宝具

↓マイルドきしん。確定即死が八分の一の確率で即死になった。そんな槍。にしてもきしんって聞くとマクシム・キシンがすぐ思い浮かぶんだけどこれどうおも（不必要なためカットされました）

・『えむふおーかーびん』 宝具ランクB 対人宝具

↓ちよつとホーミングして神秘に特攻ついててついでで魔力を込めたらビームが出るちよつとよくわからない代物。なぜビーム。

・『しんとう神刀：無』 宝具ランクD 対人宝具

↓装備すると縮地のランクが二つ上がる。ただそれだけの頑丈な刀。ただし縮地のスキルを持っていないければ恩恵はない。

・『エウリュアレの服』 宝具ランクB 対人（自分）宝具

↓強力なダメージカット、再生、そしてフィット機能。いつになっても着れて使える

素晴らしい一品。

ただし、色々と大きい姿でこのフリフリミニニスカは少し恥ずかしいかもしれない。

・『勇者の盾』 宝具ランクEX 対人宝具

↓ブレエリちゃん大歓喜の盾。形はゼルダの伝説プレスオブザワイルドのハイラルの盾：の青いところを赤くしたもの。

圧縮アダマンタイトを十枚重ねて盾とした一品。アダマンタイトとは：とつても硬い鉱石である。色は赤。

・『^{リボルケイン}王の杖』 宝具ランクEX 対人宝具

↓皆様ご存知仮面ライダーBLACKRXの必殺の武器：を擬似的に再現したもの。

キングストーンなどあるわけがないので仕方なく魔力増幅装置を詰め込みに詰め込んだ。

無論ビームも出るし反射もできる。

・『ホロウな服』 宝具ランクA 対人（自分）宝具

↓メドウスが fate/hollowataraxia にて着ていた服、そう上縦セタ下ジーンズである。

もちのろんで強化が施してあり、『エウリュアレの服』以上のダメージカット、再生能力に加えて異常なまでの耐久性も備える。基本的に描写がなければこれを着ている。

・『偽・燕返し』 宝具ランカー 対人宝具

↓無名の剣士が辿り着いた極致たる『燕返し』、それを模倣したものである。多重次元屈折現象は起きてはいるのだが本人はそれに気づいていない。一応高速の三連閃である。

・『悪即斬』 宝具ランカー 対人宝具

↓新撰組の一人である齋藤一の提唱した『左片手一本突き』、それを本人が昇華したのが『牙突』である。

その技をエウリュアレは沖田を通じて夢で会い、伝授してもらった。

この『悪即斬』はその牙突のコンボ技のようなものである。命名は沖田。

まず一気に接近し牙突にて突く。離れた相手に対して跳びつつ接近、空中からの牙突である牙突二式を放ち、一度刀を抜き空いている右手で相手を投げる。次に対空の牙突である牙突三式にて突きあげる。

最後に零距离にて放つ最強の牙突、牙突零式にて止めを刺す、という流れである。無論この通りでなくとも良い。

クトウグア曰く零式ならばただではすまないとのこと。そんなチートで本当にすまない…。

・『新撰組』 宝具ランカー 対人宝具

↓新撰組の副長の：…なんだろう、格ゲーでいう超必？がこれである。

これを新撰組の信念と沢庵の良さと共に夢でエウリユアレは叩き込まれた。つまりエウリユアレは新撰組である。

この宝具（？）の最大の強みは『氣迫』である。大抵の存在では動くことすらままならない。エウリユアレでこれだから本人だともつとヤバイ。

・『無明三段突き』 宝具ランクー 対人宝具

↓新撰組の天才剣士、その生きざまを表すかのような剣技、それがこれである。

三步にて懐に入り、三つの突きを内包した一突きにて敵を穿つ。

これをなんでか夢に現れた本人にエウリユアレは教わり、修得した。なんでこんなところまでぐだぐだギリシヤ神話とかやってるんじゃないやおき太あ！

・『^{エルキドゥ}神の鎖』

↓メソポタミア神話における英雄王ギルガメッシュ、その唯一の友がエルキドゥである。

そしてこれは彼から譲り受けた彼の操る鎖である。もちろん賢王には許可はもらっていない。

…英雄王？ハハハ、エアられるんじゃないですかね？

・波動砲 対星宝具

↓メソポタミアの冥界から脱出する際に作った宝具。全てが対星宝具に少なくとも分類される。もちろん場合によっては他のカテゴリも追加されるがなにせ波動砲だけでもかなりあるのでここにかいてられん。というわけで出てきたやつのみ紹介する形になると思う。

波動砲は全てグローブ型のものと通常の砲の形をしたものの二種類が作られており、場合によって使い分ける。バビロンごっこをするときにグローブが出てきたらシユールすぎるからネ！

冬木編

第二十二話

冬木と衛宮とぐだぐだと

『……………問おう、汝が我が契約者か？』

衛宮邸、それはサーヴァント六騎という現状世界で最大の魔術的な戦力をもつと言っても差し支えないただの武家屋敷である。

そんな屋敷のリビングに今夜、集まり得る最大の戦力が一同に会していた。

「士郎、それはつまり——また聖杯戦争が起こるといふことなのかい？ それも、聖杯が自ら起こすと？」

そう問うのは衛宮家の大黒柱、衛宮切嗣。世界的に有名な『魔術師殺し』であり——
「今は、家族の味方だ。」

「ああ。十年前の第4次聖杯戦争の時に願われた願いがトリガーになって起こる、らしい。」

そしてそれに答えるのは正義の味方志望の少年、衛宮士郎。第4次聖杯戦争にて孤児となり衛宮切嗣に救われた、第5次聖杯戦争の勝利者である。

「だが第4次聖杯戦争の勝利者はおらず不完全に終わったのだろうか？ ならば誰が願いを

願ったというのだ？」

その答えに対し疑問をぶつけるのは第5次聖杯戦争にて沙条綾香のサーヴァントであったアーチャー、英霊エミヤ。

「その夢でアンリ・マユが言っていたのは前に話した夢に出てきたエウリュアレが願った、らしい。」

「ああ、3日前の朝に話していたあれですか。たしかチートなエウリュアレが無双する夢でしたっけ？」

その疑問の答えに情報を付け加えるのは衛宮家のメイドにして衛宮士郎の『相棒』であるセラ。彼女はアインツベルンによって手を加えられた人間であり、リズとは違ってホムンクルスではない。

「ああ、それだ。どうもあれは夢は夢でもサーヴァントの過去を見るような感じの夢みたいなんだ。」

「なるほど、それならばエウリュアレの妹にあたるライダーが関係しているのではな

いですか？どうですか、ライダー。」

そうライダーに発言を促すのは第5次聖杯戦争の勝利者、セイバーのサーヴァント、ブリテンの騎士王、アルトリア・ペンドラゴン。

「恐らく私は…いえ、恐らくこの世界の歴史に存在する人物は関係が無いのではないのでしょうか。なにせアンリ・マユが生まれたのはギリシアの時代よりも後ですから。それにエウリュアレ姉様がそんなのになつてるとか信じたくないです。聖杯の泥が見せた悪夢という線はありませんか、士郎？」

そして促されて回答するのは第5次聖杯戦争の間桐桜のサーヴァント、ライダー、メドウサー。だが、彼女は正真正銘の夢ではないかと語る。

「…いや、そいつは現実だぜライダー。なにせ俺はそれに実際に巻き込まれたからな。」

しかしそれを否定するのは第5次聖杯戦争のギルガメッシュのサーヴァントだったランサー、クー・フリーン。我が家の稼ぎ頭の一人だったりする。もう一人はライダー

である。

「この前にランサーが話していたことか…。」

「ああ。ありやあ確かに現実だったと少なくとも俺は感じた。」

「なるほど…。ランサー、もしそのエウリユアレと敵対した場合…勝算はあるかい？」

「…………正直に言うが、こちらが十全どころか出し得る力の十二割をここにいる全員が出したとしても…億、いや兆にひとつもないだろうな。」

「ランサー、さすがにそれは言い過ぎではないですか？ 仮に私やアーチャーに抑止力の補助が加わったのなら可能性はあるのではないでしょうか。」

「そうですねよランサー。神霊であつても神造兵器にして星の聖剣たるエクスカリバーなら…。」

ランサーの結論にセイバーとセラが反論する。しかし

「残念だがセイバー、それでも無理だ。」

「ああ…アーチャーの言うとおり、厳しい。」

「…とまあ、アーチャーも坊主も同じ意見だ。」

「なぜですかアーチャー、シロウ！」

「そのエウリュアレには会ったことがある。あれの強さは…例えるならばその場のノリで動く英雄王だ。乗り気でなければ適当にあしらうだろうし、乗ってしまえば最悪対界宝具の使用すらありえる。」

「な、対界宝具だって…!?!」

「それ以外にも俺のゲイ・ボルクの上位互換やらアーチャーの固有結界じみたものやら明らかにエクスカリバーよりも火力の高い剣やら坊主の創造魔術やら…なんでもあり、スーパーパーのバーゲンセールつてところだ。」

「…ふむ、魔術師殿、発言よろしいですかな？」

アーチャーとランサーが絶望的な内容を述べていくところに、アサシン、呪腕のハサンが意見を具申する。

「ああ…なんだ、アサシン。」

「それほどの強さのサーヴァントであるならば、倒すよりも味方につけることを考えた方が良いのではないでしょうか？」

「…やっぱり、そうなるか…。」

「まあ、そうなるよなあ……。」

「じゃあ士郎、その方針でいいかい？」

「ああ。みんなもいいか？」

「私は何があつてもシロウに協力するだけです。」

「マスターであるシロウの指示に従います。」

「どうしようもないなら……仕方ありません。」

「よし、じゃあそうしようか。」

「……ではシロウ！頭を使ってお腹が空いたので夜食を作ってください！」

「りよーかい。それじゃあばばと……。」

「……いや、残念だがお客さんが来たようだ。」

「ん？そりやどうということだアーチャー？」

「ふむ、流石おかん、客の気配には敏感ということか……!？」

「ええい、誰がおかんだ！姿を見せろ！」

「よかろう！そして姿を表したならば名乗らねば狐の名が廃るといふものなのだな！」

そういいながら現れたのは、巫女服を着た…耳と尻尾が生えた女性であった。

「我が名はバーサーカー、タマモキヤット！ご主人を封印から救うために冬木に降り立ったしがないメイド狐なんだ、ワン！」

「えつと…犬？猫？狐？巫女？メイド…？」

「ライダーさん、多分あれは全て合成したナマモノかと。」

「ええい、なんなのだこのカオスは！ネコカオスか!?ネコアルクもいるのか!?虎聖杯なのか!？」

「虎聖杯…イリヤ…小悪魔キヤラ…うっ頭が」

「虎聖杯…遠坂…カレン…魔法少女…うっ頭が」

「安心してキリツグ、うちのイリヤは小悪魔キヤラじゃないわ！どちらかというと魔法少女チツクよ！」

「安心して下さいシロウ、傷は深いです！」

「キヤットよう、なんかおめーさんが来てから一気にぐだり始めたんだが。」

「仕方なからう、ランサー。カオスなのはキヤットの特権、ぐだぐだなのはご主人のせいなのだからな！」

「なるほど、つまるところエウリュアレのせいかな。」

「まあ、そうなるんだワン！」

「…ハッ！シロウ、なんだか嫌な予感がします！具体的にはまだ他にも来るような気が
！」

「もうやめてくれえええ…」

「ふははははははははははは！流石の直感だなアルトリア・ペンドラゴン！」
「な、この高笑いは…！ギルガメッシュですか！」

キャットによつてぐだぐだし始めた空間に颯爽と黄金の光が！

あれは誰だ!?余か?余か!?それとも余か!?

「ふつははははははははははは！もちろん我^{われ}だ！」

「なにい!?英雄王だと!？」

「ふははははははははははははははははははははははは！そう、英雄王ギルガメッシュ……………」

…ではない!

今の我は賢王! キャスターギルガメツシユである! 弓の我のことは忘れよ! あんなのが我とか正直嫌だし!

「ギル、人の家の扉の上に立つちや駄目だよ?」

「だからといって玄関からお邪魔してもつまらんだろう!」

「まあ、そうだね。じゃあいつか。」

「いやいやいやいや!? よくないのだわ!? ちゃんと玄関から入るべきってドウムジも言っていたのだわ!」

扉の上に現れたのはなんか少し落ち着いているような気がするギルガメツシユに緑の髪をした中性的な人、そして金髪な遠坂(?)であった。

「…え、遠坂が…金髪?」

「…士郎、やっぱり虎聖杯なんじゃないかな? ああ…イリヤがまた小悪魔に…」

「シロウにキリツグ! 今回の虎聖杯ではなくて大聖杯のせいですから! あんな力オスにはならないはずですよ! どちらかというとしリアスかと!」

「そうよキリツグにシロウくん! まだネコは溢れてないから、ね!」

「すさまじくカオスなんだが…」

「ランサー、これどうにかなりませんか？」

「すまんライダー、セラさん。俺には無理だわ。」

「ごははははははつ！久々のぐだぐだでキャットは喜びのあまりオムライスを作ってしまったんだワン！」

「オムライス！不思議な狐よ、私にそれを！ぷりーず！」

「うむうむ、食に素直なのは良いことだワン！ではタマモ地獄オムライスバージョン！受けてみるんだワン！」

「ひゃつはー！ごはんだー！」

「大変よキリツグ！セイバーまであっち側よ!?!」

「士郎：僕はね：正義の味方になりたかったんだよ…」

「なんだよじいさん：諦めちまったのかよ…?」

「キリツグにシロウくんー!?!」

「予想以上にカオスで我かなり困惑。」

「現世って面白いところなのね。」

「いや、違うはずだぞエ……………セイバー。」

「そういえばギル、いちおう真名は隠した方がいいのかい?」

「いや、隠す必要もなからう。どうせうっかりばらしてしまうだろうからな?」

「……………なによ、私がうっかり真名をばらすとも思うの?」

「うむ。」

「うん。」

「ひどいのだわ!? 私はそこまでうっかりではないのだわ!」

「うっかりその双剣を無くして大慌てしたのは誰だったか?」

「うぐつ。」

「うっかりセーターを洗濯しちやって縮ませちやったこともあったね。」

「うにやつ!」

「私の秘蔵の線香花火の山にうっかり火を放ったこともあったなあ?」

「……………あ、それはわざとなのだわ。」

「……………なにい!? エレシユキガル貴様、いまのは聞き捨てならんぞ!」

「むしゃくしゃしてやった、八つ当たりできればなんでもよかった、いまも反省も後悔も

していないのだわ。」

「反省はせんか! よくも我が精神的に辛いときに一人で楽しむために作っておいた線香

花火を！」

「まあまあ、あのときは三人で楽しく線香花火を作ったんだし許してあげなよ？」

「それとこれとは話が別だエルキドウ！反省していいのならば罪は重い！よってエレシユキガルは一月の間風呂上がりのコーヒー牛乳は無しとする！」

「!?（ガーン）」

そ、それは嫌なのだわ！お風呂上がりのダビデ印のコーヒー牛乳がないとやってられないのだわ！」

「ならば諦めて反省するのだな。」

「その時の分は線香花火を作って償ったのだわ！よってこの処罰は不当なのだわ！上告するのだわー！」

「ええい、反省せぬのなら朝のヤクルトACEも一月の間抜きだ！」

「!!?（ガガーン）」

そ、そんな、横暴なのだわ!?朝のヤクルトがないとお腹の調子が整わないのだわ!?」

ワーワーギャーギャー

「…ランサー、エレシユキガルにエルキドウだそうですけど…」

「あー、たしかメソポタミアの冥界の女神にギルガメッシュの唯一の友だったか。どっちもやべえじゃねえか…。」

「これ、かなりヤバイ状況なのでは…?」

「キャットさん、おかわりです!」

「よかろう! 次のオムライスを食らうがいい!」

「こ、これは…カレー!?!」

「オムライスと言ったな、あれは嘘だ! ワン!」

「なるほど、美味しい! アーチャーもどうですか?」

「う、うむ、ならば一口…:…:…むう!?! これは美味しい! 口のなかに辛みが一瞬現れたと思っ
たらすぐに消えていく…:…:…しかも肉に至っては掬えばポロリと骨がとれるほどの柔ら
かさ…:…これは一体…!?!」

「ちよつとキリツグ! アーチャーくんまであつちに行つちやつたわよ!?!」

「じいさん、なら俺がなつてやるよ…。」

「そうか…ああ、安心した…」

「キリツグ? キリツグうううう!?!」

「……小次郎殿、これはどう収集をつければ良いのでしょうか……？」

「ふむ……そうさな……：時間が決まれば解決してくれることもあるのではないかな？」

「要するに諦めろ、と。」

「まあ、そうとも言うな。」

「……はあ。全く平和ですなあ……。」

「そうだな……。」

今日も冬木は平和でした。

第二十三話 猫とサバとタイガーと

前回のあらすじ

「大変よキリツグ！シリアスが死んじやったわ！」

「大丈夫だよアイリ……僕も、頑張つていくから……」

「ちよ、キリツグ、それは貴方の台詞じゃないわよ!？」

「おのれ エレシユキガル！我は怒つたぞ！」

「にやあああああ!?!エルキドウ助けて!?!」

「もういつそ殺し会えばいいんじゃないかな？」

「エルキドウううう!?!」

「うむ、ぐだぐだなんだな！」

「ここから本編っぽい？」

「んで。」

とりあえず落ち着いた衛宮家のリビングに士郎の声が放たれる。

「なにがどうなつてこうなつたんだ？」

「ふむ、我にもわからん。」

「アタシは知つてるぞ。だからそのもさもさしたおっさんは懐の拳銃から手を離してくれぬか？」

「……………もさもさしたおっさんつて僕のことかい？」

「そうだな、衛宮切嗣。とりあえず銃をいつでも撃てる状態じゃあビビつて話もできない。銃から手をはなせ、オツケー？」

「オツk…」銃取りだし

「ストップよキリツグ、それは声優が違うわ!? 貴方はコマンドーというよりもCTUよ!?」

「アイリスフィール、確かに声は似ていますがキリツグはジャックバウアーではないですよ……。」

「今のやり取りに似たのを知ってるのだわ。たしかネコネコ動画で見たのだわ。」

「コレクターの我としてはその弾丸が気になるのだが……」

「ギル、今は抑えてね。」

「うむ。」

「………んで、タマモキヤットだったか。説明をお願いできるか?」

「よかろう。まずこの亜種聖杯戦争……長いな、召喚戦争と呼称するでしょう。これの原因は十年前の第4次聖杯戦争の時に叶えられた願いが切っ掛けで起きているのだが……」

「ああ、その辺りは士郎が言っていたね。それにその本人とランサーは遭遇しているようだし。」

「あー、エウリュアレの世界……そうだ、聖杯の中の世界だから聖杯史と呼ぶことにするんだワン。………そういえば聖杯史での聖杯大戦ではそのランサーも呼ばれていたな。」

「ああ。………さて、今の今まで忘れていたのかよ?」

「うむ、やけに馴れ馴れしい青タヌキがいるなあと思つてたんだワン。」

「タヌキ?! いやなんでタヌキなんだ!？」

「知らない方がしあわせだワン。その聖杯大戦の面子もかなりおかしかつたがそれはまあいいのだな。それでこの召喚戦争の目的はひとつはその願いを叶える事だワン。」

「えつと……たしかアンリ・マユが言うには『二人を守ること』だったか?」

「……なるほど、お前がくろすけの言つていた観測者なのだな?」

「……おそらく。ずっと夢で見せられてたからな。」

「ふむ……まあ今はいいか。とりあえずその願いはこっちに復活すれば良いみたいで、だから聖杯は復活させようとしているわけ。」

「なるほど、つまりその『聖杯史のエウリュアレ』は元々は現世の人間で、聖杯史においてはエウリュアレという名前と形を与えられていたに過ぎない、ということですか。それで復活させるのに良い状態になったので封印してこっちにもつてこようとしていると。」

「その通りだ腹ペコ王。」

「誰が腹ペコですか誰が!」

「ふつ。それでこの召喚戦争のもう一つの目的は『聖杯内の魔力を使いきる』ことなんだワン。」

「…魔力を使いきること、ですか？」

「うむ。実はだな、冬木の大聖杯にはたつぷりと魔力が残留しているんだワン。それも第1次聖杯戦争から第5次聖杯戦争まで、使いきらなかった魔力がすべてだワン。」

「……………それってかなり危険な状態だと思うのだけれど？」

「その通りだエレちゃん。」

「え、エレちゃん？」

「まあ、そうだな…下手をすれば日本がまるまる聖杯の泥で覆われるかもしれぬ魔力の量だろう。」

「…たった五騎のみだった小聖杯でさえ冬木の新都が壊滅したというのに、それほどの魔力が大聖杯にあるのか。」

「うむ。故にこの召喚戦争は成功させないと…まあ問題を先送りすることになるわけだな。」

「……………なあ、じいさん。これは…」

「ああ。この国に住む人々を死なせるわけにはいかないからね。どうにかして、終わらせよう。」

「うむ、うむ！ではこれからの話をするにしよう！とりあえず金ぴか達はこの後どうするのだ？」

「我か？我はとりあえず英雄王の我が買っていた家に三人で住むつもりだが？」

「ふむふむ、ではアタシもそこに滞在させてもらおう！良いか？」

「良い、許す。」

「ではそういうことだ。切嗣よ、それで構わぬか？」

「ああ。そろそろ夜も明けるし、そっちに向かった方がいいんじゃないかい？」

「ではそうしよう。いくぞエルキドウ、エレシユキガル、タマモキヤット。」

「うん。それじゃあ、お邪魔しました。」

「えっと、お邪魔しました！これからもよろしくお願いするのだわ！」

「邪魔したんだワン。」

「うん、お邪魔されました。」

.....

「……………結局徹夜してしまったね。士郎は今日は学校だろう？」

「あー、そういえばそうだった。んじゃちよつと風呂入ってくるかな。」

「ではお風呂の準備をしますね、シロウ。」

「ふむ……では私は朝食の準備でもしておこう。時間はあるからな、期待しておくとい

い。」

「期待！あのアーチャーが言うということは素晴らしいものが沢山出てくるのですね！」

「あー、んじや俺は朝飯まで釣りでもしてくるわ。」

「了解した。良いサバを期待しているぞ、ランサー？」

「うっせえアーチャー。今日こそは大物釣り挙げてやらあ。」

「ふっ。どうだか。」

「だー！ムカつく野郎だよほんと！」

「ふむ、では私は門の番に戻るとするかな。」

「では私は街の方で異常がないか探つてこようと思ひますがよろしいか、魔術師殿？」

「ああ、頼むアサシン。」

「御意。それでは。」

.....

「おはよろしろー。」

「あ、おはようイリヤ。」

「イリヤちゃんおはよう〜。」

「おはよう、イリヤ。」

「……あれ、キリツグとお母様が起きてる!？」

「なんだい、まるで僕たちが寝坊助のような言い方だね？」

「い、いやそういうわけじゃないけど……。」

「まあ、座りたまえイリヤスフィール。もう朝食はできているぞ？」

「あ、アーチャーさん。おはようございます。」

「うむ。今日はサバが大漁だったのな、サバの味噌煮にしてみた。」

「サバばっかで悪かったな〜たくつ、なんでこうもサバしか釣れねえんだか……。昔はもっとでかいのも釣れたんだがなあ。」

「そのでかいのってかなり危ないやつではないですか、ランサー？」

「まあちと手間はかかるが焼いただけでも結構旨かったぞ。骨も再利用できたしな。」

「へー。それってどんな魚なんですか？ランサーさん。」

「んー？知りたいか、嬢ちゃん？」

「はい！」

「まずとにかくデカイ。俺でも陸に引きずり出すのに半日もかかったからな。」

「釣りに半日って、どんな大物ですか……」

「でけえ船ぐらいの大きさはあったな。外見は……あれだ、日本のフタバスズキリユウつてやつに似てるな。」

「いや、フタバスズキリユウはとつくの昔に絶滅してますよ?」

「……まあそんな感じでな、しかも陸に上がってからも暴れに暴れる。仕留めるのにもかなり時間がかかったなあ。」

「あははははは……。……冗談ですよ?」

「……ま、そう形容できるほどの大物だったんだ。」

「そんな奴でも今はサバしか釣れんが。」

「うっせえ!」

「はあ……とりあえず食べないか?アーチャー、ランサー。」

「なにをいつている、衛宮士郎。まだあと二人来てないぞ?」

「なにいつてんだ、うちのは全員揃って……あー。」

「そういうことだ。む、来たようだな?」

ダダダダダダダダダダ!

スパァン! (襖を開ける音)

「おっはようございます切嗣さーん！」

「おはよう士郎ー！」

「おはよう大河ちゃん。今日も元気だね。」

「藤ねえに立花…まだ朝早いんだからあんまり大きな声を出さなつて。」

「あつはつはつはー！朝から大声を出せなきやー日を元気に過ごせないよ、士郎？それでそれで？今日のご飯はなんじやろなー？」

「今日はサバの味噌煮だ。」

「やったー！サバだー！……またサバかー。」

「ええい、藤村のねーちゃんまで俺をばかにしやがるのか!?悪かったなサバしか釣れなくてよー！」

「え、ランサーさんが釣ってきたの!?こんなに!?すごつ!というかいつものサバでもしかして全部!?え、うちに欲しいかも。サバ食べ放題じゃん。」

「大河ねえ、早く食べよう！」

「うむうむ、私の妹である以上食べ物を求めるのは仕方ないが先に席につくとはどういうつもりじゃ妹ー！」

「ぎゃー！いたい大河ねえ！頭ぐりぐりしないでー！」

「……タイガとリツカはいつも通りでなんだか安心しますね。」

「藤ねえと立花はイリヤと並んでこの家の日常みたいな存在だからなあ。」
「それよりも大河ちゃん、食べなくていいのかい？ 今日も早いんだろう？」
「あ、そうだった！ じゃあ食べましょ食べましょ！」
「うん。それでは、」

「「「「「「「「「「いただきます！」」」」」」」」」」」」

なんやかんやあつても結局衛宮家は平和でした。

.....

いいーい。

できとうに封印ライフを楽しんでるエウリュアレちゃんですよー。

いやー、暇すぎてたまらない。やることといったら武器とか兵器とかつくってあとは鍛練するだけだし、つまらないったらありやしない。ああ、人と話したい。

武器は思い付くものはあらかた作り尽くしちゃったし兵器もまともな兵器だけでアメリカどころか世界を相手に圧勝できちゃうくらいにはそろっっちゃったし。

仕方ないから架空兵器作ってもネタは無限じゃないから全部作りきっちゃったし…。

つまるところやることがないんだー！うがー！

もういいし！ネタに困って作ってしまった、次元の壁を物理的に叩き壊せる対界宝具なハンマー、時空砕きを振り回して遊んでやるー！うらー！

………うえ、回りすぎて酔った。取り敢えずハンマー地面に置こう…。
もういいや、てきとうに投げて倒れよう。えいつ。

バリン。

「……………え?」

なんか床に穴が空いたんだけど。というかなんか自由落下なうなんですけど。

「……………なんでさあああああああああああ!?!」

一体どこへ落ちるのこれえええええええええ……………

第二十四話

黒き聖剣と光の剣

前回のあらすじ

「サバ！サバ！サバ！サバしか釣れなくてランサーとして恥ずかしくないのか!?」
「うるせえ！悪かったなアーチャー！」

「ふはははは！我ら天下無敵の藤村姉妹なり！そのサバの味噌煮は頂いていく！」
「だー！カオスにカオスを重ねるんじゃないやねえ！」

「なんか落ちてるんだけどおとおお!?」

「こんな感じだった。」

「ここからほんへ」

いえーい。

絶賛自由落下中のエウリュアレさんだよー。

そろそろ自由落下始めて一時間近くたってるけどまだ落ちてるんだけど。長い。

……む、なんか下の方にビルが見える。よし、パラシュート展開！

バツサア

……よし、着地成功！いやー、実際にヘイロー降下をやるはめになるとは。ほんと
魔術世界は地獄だぜ！

さてさて、ここはいつたい何処やら……どうやら世界の裏側に近い場所みたいだけでも

……

「喰らえ、対界宝具を対国宝具まで落とした簡易型！ 『女神の弓矢』！」
ゴツデス・ボウ

エウリュアレの戦いはこれからだ！

.....

「——もうちつとどころかまだまだ続くんじゃないや。」

「あー、衛宮よ、なにを言っているのだ？」

「悪い一成、なんか言わなきゃならない気がしたんだ。」

「そうか。ならば仕方ないな。」

「あ、流すんだ。」

「あの、士郎くん……一緒にお昼ご飯を食べてもいいかな？」

「ん、森山か。いいか？ 一成。」

「構わん。」

「だとき。」

「うん！」

うん、これが平和というやつなのだろう。このまま何事もなく一日が終わればいいんだがなあ。

……………駄目だったよ。

「シロウ、なぜイリヤスフィールが魔術師と一緒に、しかもこんな夜中に河川敷に来るなんて…。」

「それがわかれば苦労しないかな。」

うむ、今セラが説明した通り、イリヤが夜中に家を抜け出してツインテと金髪ドリル

の魔術師と一人の友人？とともに河川敷に来ているのである。流石に無視するわけにもいかないので付けてきたのだが…。

「なんだあの姿。魔法少女かなにかか？」

「確かにイリヤスフィールは魔法少女物は好きでしたがまさか本当になるとは…。」

「…ん？なんか術式を展開してないか？」

妹が魔法少女に変身したと思つたら結界みたいなのを発動していた。

「おや、あれは…転移魔術の類いでしょうか。」

「解析と再現は？」

「解析はほぼ。再現はできません。」

「流石だセラ。」

そんなことを言っていたらイリヤ達は転移してしまった。

「…よし。それじゃあ俺たちも飛ぶか？」

「そうですね。何かあつては遅いですし。ただ、イリヤスフィールに見つかつても問題ないように変装はしましょうか。」

「魔術で？」

「はい。メディア師匠曰く、『夫の不倫捜査用の完璧なマジカル変身魔術ヘカテー式』だ

「そうです。」

「なんじやそりや…。まあいい。とりあえず頼めるか？」

「わかりました。術式起動！『これぞヘカテー魔術式！マジカルリリカルルリララー！』」

「うっわー、恥ずかしい詠唱!?! ってなんか煙が出てきた!?! うわー!?!」

セラが変な呪文を唱えると魔方陣から煙がもくもくと溢れだし、もくもくと二人を包み込んだ。そして煙が晴れたときには…

「……………なあ、セラ。これは変装というよりも変身じゃないか…? 明らかに身長とか伸びてるんだが。」

（この先、解除するまではシロウはアーラシユの、セラはアナスタシアの姿となっていない。）

「…確かにそうですね。まあなんとかなるでしょう。あ、あちらではシロウはアーチャー、私はキャスターという符丁で行きましょう。それではシロウ、あちらへ飛びますよー!」

「お、おう、わかった!」

「それでは。術式再編、次元転写開始! 回廊作成、完了! いきますよシロウ! 転移!」

ジャンプ

瞬間、光に包まれ…

次に目覚めた先は、魔力弾の降り注ぐ戦場であつた。

「ツ！シロ…いえ、アーチャー！防御術式を起動します！近くに！」

「了解したセラじゃなくてキャスター！」

セラが腕を振り結界を起動すると同時に魔力弾がこちらにも降り注ぐ。

「これは…」

「恐らくメディア師匠の魔術です。が、少々弱い気がします。」

「キャスター…まさか召喚戦争か!?イリヤ達は!?!」

「一体何処に…な、アーチャー、上です!」

「…な、イリヤが…:…飛んでる!?!なんだよあれ?」

「仕組みはわかりませんが飛んでいます…あ、メディア師匠を見つけました!あそこです!」

そういつて空の一点をセラは指差す。

「…見つけた。だが転移を繰り返しているな。」

「あれを繰り返されるとイリヤスフィール達が不利ですね…。どうしますか、アーチャー。」

「……………そうだな、困ったときのアーチャー頼みといこうか。『赤原獵犬』フルンデイングを使う。キヤスター、魔力補助を頼む。」

「わかりました。魔力同調を開始しますね。」

「ああ。」

『トレース 創造 オン 開始』。』

創造するのは無銘の弓、そして無銘の弓兵の投影つぐり出した、狙った獲物を何処までも追いかける獵犬の名を持つ劍。

『トレース 創造 オフ 完了』。』

その劍の形のみを創り——そして、作り替える。

『トレース 同調 オン 開始』。』

基本骨子、解明。

構成材質、不明。

基本骨子、変更。

変更行程、完了。』

赤き剣であった物を紅き矢へと作り替え、創造した弓へつがえる。そして、

『——効果付与^{エンチャント}——完了^{コンプリート}。』

ただの剣であったものに、獲物を追い詰める獵犬の力を付与する。

「さあ、緋色の獵犬、今こそ走れ！ 『^{フェイク・フルンディング}妄想・赤原獵犬』！」

そして、敵のキャスターへと放つ。

紅き獵犬は空へと走り——

その身をもってキャスターを食い破つた。

「命中です！」

「うん、当たったな。これでなんとかなったかな？」

「そのようです。空を覆っていた術式も消滅しました。」

「敵のキャスターは？」

「えつと……どうやらイリヤスフィールらが止めを刺したようです。」

「そうか。これで一件落着かな。よし、じゃあ見つかる前に帰ろうか」

その時であった。

どかん、という音とともに黒き極光が空へと伸びた。

叫びとともにセイバーが美遊を切り払う。

「きやあつ!」

「美遊!大丈夫!」

「くっ…あつ…!」

「駄目です、美遊様の変身を維持できません!変身、解除されます…!」

「そんな!」

「イリヤさん、あとは貴方だけです!なんとか持ちこたえて撤退するのがいいかと!」

「だけど美遊は動けないし、凜さんとルヴィアさんは吹き飛んじやって見当たらないし!どうすればいいのよルビー!」

「——ならば、我々に任せてもらおう。」

「え?」

「『フェイク・カラドボルグ』。」

その言葉とともに後ろから、魔術弾か何かが飛んできて——それに当たったセイ

バーが吹き飛んだ。

「——む？まさか当たるとは思わなかったな。本来の彼女ならあの程度軽く避けるのだが……」

「どうやら本来のセイバーよりも数段ほど弱いようですね。これならばまだなんとかなるかもしれません。」

「だどいいがね。」

そこに立っていたのは、黒い髪に褐色の肌で、東洋系の屈強な男性と、まるで雪のような白い肌と髪をした、お人形のようなお姫様だった。

「貴方…達は？」

「我々か？そうだな…アーチャーとキャスター、とだけ名乗っておくでしょう。」

「アーチャーとキャスター…まさか、貴方たちもサーヴァント!？」

「ふむ……ここでさらに敵に増援があると、こちらに勝ち目がなくなってしまうですね？」

そんな、ただでさえ二人もサーヴァントがいたのに、さらに二人もなんて……!

「我々がサーヴァントかどうかということよりも今はセイバーの撃破が先決なのではないかね？」

「え…？たしかに、そうだけど…」

「ならば問題あるまい。君は下がっていたまえ。我々があれは受け持とう。」
「…わかり、ました。」

今はセイバーは二人のサーヴァントに任せて、美遊を助けないと…！

「美遊、大丈夫!? サファイア!」

「大丈夫です、治療は完了しています。あとは意識を取り戻せば完璧です。」

「ならよかった…。」

「イリヤ!」

「美遊!」

「凜さん、ルヴィアさん! 無事だったんですね!」

「ええ! それよりもイリヤ、サーヴァントは!?」

「えっと、黒いセイバーのサーヴァントが突然現れて二人が吹き飛ばされて、そのあと美遊もやられちゃって…」

「そのセイバーは!?」

「いま、何処からかやって来たアーチャーとキャスターのサーヴァントが戦ってます！」

「な、サーヴァント同士が戦っているの!? 一体どういふことなの…!? どこ!?」

「あつちです！」

「わかった…見えた! な、なによあれ!？」

「どうしたのですかトオサカリン！」

「あれが…サーヴァント同士の戦闘…? 次元が違いすぎるわよ…!?」

「凜さん、なにが!？」

「早すぎて、アーチャーの動きが見えないのよ! それにキャスターの魔術も私たちのものどころか、さっきのキャスターの魔術以上の威力よあれ! もう、なんなのよほんと!」

「うわー、なんですかあれー。イリヤさんとかさっぱり相手になりませんよー。たぶんセイバーを倒したら次はこちらですわねー。どうしましょうかねー。」

「そ、そんな…どうしよう凜さん！」

「そんなこと言われてもあんなのどうしようもないわよ! だけどあれを倒さないとだめなのよー!」

「そんな…。」

どうすれば、いいの…?」

.....

黒の聖剣と、白黒の夫婦剣が闇の中にて切り結ぶ。

「セイ……ハイ………フオオオオ！」

「ふむ、聖杯を求めているのか？となると、これは召喚戦争とは別なのか……？」

「わかりません。ただ先程のキャスターとこのセイバーが召喚戦争のサーヴァントであるなら重複して召喚されていることになります。そうになると、これまでの知識は役に立ちませんね。」

「別物なら別物でまた厄介だが、な！」

「アア！」

「遅い！」

黒が斬りかかり、それを白黒がかわし、離れる。

シロウへと魔力補助をしつつ軽めのレーザーを放って援護をする。

黒く染まったセイバーは、本来のセイバーとは比べるに値しないほどに弱かった。

加速の弱い魔力放出では数々の大英雄を見、そして剣を交えたシロウを振り切れず。弱体化した直感では本来の物を知り、それに食らいつくその剣をかわせず。

並以下となった対魔力では神代の魔術に並び得ると言われる私の魔術は弾くことができず。

そしてセイバーをセイバーたらしめている剣技でさえも、本物を知る二人にはかすらせることすらなしえない。

現代イリヤに生きるただの人間スや、それに少々フイー毛が生えた程度ルの人間魔術師であればこのセイバーであつても容易く切り伏せることが出来ただろう。

しかし、今回ばかりは相手が悪かった。なにせ、人々を救うために数々の英雄達に真正面から立ち向かった正義大馬鹿者の味方が相手なのだから。

「ガ、アツ！」

「…まさか、ここまで弱いとはな。」

騎士王が膝をつく。

戦い始めてすぐは、セイバーの持つ高すぎる直感によるカウンターを警戒してできる限り近づかないようにシロウは立ち回っていた。しかし、本来のセイバーであればあつ

さりと叩き潰せるようなその消極的な戦い方であってもセイバーは傷ついていった。

そして今、セイバーが放った剣を右の白剣にて切り上げ、左の黒剣でカウンターを叩き込む。

本来のサーヴァントであれば、この程度では霊核にはなんともないがどうやらこのセイバーは今ののでさえ傷がついたようだ。

これで決着はついた。このまま時間が立てば霊核に傷のついたセイバーは消滅する。だが、それでもなおセイバーは剣をとり、そしてこちらと距離をとる。

「ウアアアアア！」

そしてその身の全てをもつて——聖剣に火をくべる。

反転した極光が空へと伸びる。

「む、エクスカリバーを撃つのか。すぐにとどめを刺すべきだったか。」

「シロウ、このまま撃たれるとイリヤスフィール達が……」

「ああ、そこまで折り込み済みだろうさ。だから、こちらも真正面から立ち向かう。」

「ですが……」

「大丈夫さ、セラ。剣は、もうできてるから。」

「…わかりました。魔力は回しますが、やるからにはちゃんと勝ってくださいよ！」
「わかってるよ。」

——いくぞで。

——『創造^{トレース} 開始^{オン}』。』

シロウが創造魔術で一振り of 剣を創る。その形はセイバー、アルトリア…いや、アーサー王の持つ剣であるエクスカリバーそのものである。ただし、形だけであるが。

シロウの最も得意とする魔術は『創造魔術』。頭のなかで創造したものを、凄まじい量の魔力を使ってこの世に作り出すという魔術だ。

この魔術はシロウの起源である『創造』によって成されている魔術で、アーチャーとはまた違ったものである。アーチャーの投影は固有結界の記録から零れ落ちたものだが、こちらは一から作っている。

しかし、アーチャーの投影とは違ってこの創造魔術ではなにかの能力をその物につけることは出来ないという難点もある。それを補うためにエンチャントを使えはするが、精度はあまりに粗末なものだ。

ゆえに、あの剣はただの剣であるはずなのだが——

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「さあ、勝負だセイバー……！」

——脇に構えられたその剣は、光を放った。

黒き騎士王は高く構えた聖剣から闇の帯を空へと伸ばし、対する弓兵は脇に構えた剣から白い光を溢れ出させる。

そして、

「約束された勝利の剣エクス……カリバーアアアアア！」

「永久に届かぬ光の剣フエイク・アウローラアアア！」

二つの帯が、衝突した。

冬木編 キャラ設定等

・衛宮士郎

17歳。

原作主人公にしてギリシア編と冬木編の橋渡し役。また第5次聖杯戦争の勝利者。

この世界では色々と生存しているため士郎自身もさまざまな教育を受けている。(魔術、射撃、剣術etc:)

現在は穂群原学園高等部の二年生。弓道部に参加してはいるが第5次聖杯戦争以降幽霊部員になりつつある。

契約しているサーヴァントはセイバーアルトリア、ランサークー・フリーリン、アーチャーエミヤ、アサシン佐々木小次郎、アサシン呪腕のハサン。ただし魔力はセラが負担している。

この世界の衛宮士郎はアヴァロンの影響を受けてなお起源が変わっておらず、べつに投影魔術は異質ではない。その代わりに、起源によって使える特異な魔術である創造魔術を中心に戦う。無論通常の魔術も十全に使える。

魔力の量は原作の衛宮士郎に比べれば格段に多いが、創造魔術の魔力消費が多すぎる

ためにセラなどによる魔力の支援がないと継戦能力はほぼ皆無となる。その代わりに魔力支援があれば場合によっては英霊とも正面から殴り合うこともできたりする。

もし契約している鯖と魔力支援ありの状態で本気で殺しあった場合、相手の土俵に立たなければ呪腕、佐々木、エミヤ、アルトリアには勝つ可能性がある。クー・フリーンにはほぼ勝てない。

ちなみに神性特効が刺さる。

セラルートまつしぐら。

・ セラ・アインツベルン

19歳。

もしかすると冬木に出てくる人物で最も設定が変わっているかも知れない人物。

原作においてはホームンクルスであったが、この世界ではアインツベルンによって次代の完璧な小聖杯の作成のため様々な調整を受けた人間である。魔術回路の移植増設や身体機能の改造などを受けており、神秘の薄い現代であっても神代の魔術をワンアクションで行使用することすらできる。

第4次聖杯戦争後に衛宮切嗣の手によってアインツベルンからイリヤとリズとともに連れ出され、アインツベルンの養子という扱いで日本へと来る。

第5次聖杯戦争においてはマスターとなった土郎の補助役兼魔力タンクとしての魔力の消費がひたすらに多い土郎を魔力、そして精神の面においても支えた。どうやってかって？まあ、そういうコトだ。

虎聖杯騒動のあとはキャスターに教えを乞うた結果やべー魔女となっている。その技量は単独での鏡面界への移動を可能とするほど。当たり前だが土郎とともに封印指定クラスである。

恐ろしい量の魔力の根元は第二魔法の一端であるという噂がある。噂だといいいね。

土郎への好感度値はすでにMaxなのであとは告白イベさえ起こせばゴールインである。

・リズ

みんな大好きハルバード系ゆるふわメイド。シロウとセラは私がそだてた。

面倒くさがりな性格は変わらないけど、あつちの私と違って完全な戦闘用ホームクルスであり並のサーヴァントなら場合によっては完全勝利もありえるぞ。

家事の能力も多少はある。やらないけど。

とある魔術機構をその身に宿しているのだ。

いけいけリズ、冬木の未来は君の手にかかっているぞ！

・衛宮切嗣

39歳。

この世界では聖杯の泥によって呪われることもなく、されど正義の味方は諦めて家族の味方となった。プリヤ切嗣ルート亜種といえるのか…？

今の目的は冬木の大量杯の解体であり最愛の妻たるアイリスフィールと、第4次聖杯戦争で関わったロード・エルメロイⅡ世と協力して解体へ向けて日々動いている。

士郎の創造魔術とセラの魔力のお陰で起源弾は実質無限となっている。ただし、『サブマシガンに起源弾を沢山詰めてばらまいたらほぼ勝てるんじゃないか？』という幼少期士郎の提案にセラと切嗣が賛成してキャリコに起源弾を詰め込んだりしていた結果作成の時はアイリの同伴の元でやるというルールが最近追加されたとか。

・アイリスフィール・フォン・アインツベルン

スーパーゆるふわお母さん。だいたいプリヤのおかーさん。

原作では振り回す側だがなんだがこの世界ではサーヴァント達や士郎達に振り回されている。このままいくと常識人ポジになりそうな気がする。

・セイバー：アルトリア・ペンドラゴン

第4次聖杯戦争における切嗣のサーヴァントにして第5次聖杯戦争の士郎のサーヴァント。第4次では二槍のランサーや英雄王やバサスロットに囲んで叩かれた結果早々に退場した。

第5次においては幸運にも勝利でき、気がついたら勝利者になっていた。だいたい士郎とセラがなんとかしていた。騎士王とはいったい……うごご。

……ああ、なるほど。はらぺこ王か。

・ランサー：クー・フーリン

虎聖杯にて復活したランサー。第5次においてはギルガメッシュに召喚されたが早々に士郎と契約、共同戦線を張った。だが死ぬ。

カニファンのネタキャラ感と本編のスゲーやつみを併せ持つ強いランサー。ただし死ぬ。

なんだかんだで士郎の下のんびりと暮らしている。それでも死ぬ。

過去にクリードを一本釣りしたこともあるすごい釣り屋。しかしサーヴァントになつてからはサバばかり釣れるんだとか。

・アーチャー：エミヤ

虎聖杯にて復活したアーチャー。第5次聖杯戦争においては沙条綾香のサーヴァントであった。

本編、カニファン、FGOの中だとFGOみが最も強い。おかん。

この世界では衛宮士郎が自身の過去と完全に解離しており復讐する気も失せ、なんとなく正義のために日々過ごしている。

人助けから迷子探し、暴漢の退治などをしていた結果付いたあだ名は「冬木の英雄」。

・ライダー：メドゥーサ

第5次聖杯戦争にて間桐桜のサーヴァントであった、まともな歴史のメドゥーサさん。まともなのでセイバー適性はない。ビームも剣からはでない。まとも。

なんだかんだで第5次聖杯戦争も生き抜き、セイバーと一緒にちやっかり受肉したのだが、魔術にあまり関わっていない間桐慎二と一緒に家で過ごすのはあまりよくないということになり衛宮家に居候している。

ランサーと共に商店街でバイトをしている。

なんだかエウリュアレが関わらないと影が薄くなる。

・アサシン：佐々木小次郎

皆さんご存じオルレアンの大英雄、ツバメキラの農民。

虎聖杯騒動で再召喚されたもののキヤスターは騒動が終わって少したつたら新婚旅行に行ってしまったため現在は士郎と契約して衛宮邸の門の前で佇んでいる。なお別に門の前から動けないということもなく、ただ心地がいいから門の前に居るだけなのだから。

彼を見た遠坂やルヴィア、美遊が大慌てするのは少し先のお話。

・アサシン：呪腕のハサン

虎聖杯騒動の際に冬木に初めて召喚されたアサシン。虎聖杯騒動では士郎&セラに協力して騒動の解決を行い、そのあとは士郎と契約して悪と戦いつつのんびりと暮らしている。

はっちゃけたやつが多いなかでの常識人ポジ。

衛宮家の家事のうち料理はアーチャー、士郎、セラが、その他は士郎、セラ、ハサンが行っている。

まともにアサシンしているすごい人。

・バーサーカー兼アルターエゴ：タマモキヤット

亜種聖杯戦争たる『召喚戦争』にバーサーカーとして召喚されたエウリユアレと一緒にいた方のキヤット。

さすがに現世でもみみしっぽにくきゆうは不味いと考えてなんとか仕舞つたらまともになってアルターエゴの判定が出た。

とりあえず召喚戦争の間はギルガメツシュのところに居候することになった。

ご主人を救うために頑張るんだ、ワン！

・キヤスター：ギルガメツシュ

突然現世にやって来た系賢王。

『召喚戦争』のキヤスター枠だが別に魔術に限らずなんでも使える。つまるところ慢心しない話の通じるまともな英雄王。FGOで魔術のみなのは魔術王に対抗してだからほら…。

本気の彼を止められるのは正直なところエルキドゥとエウリユアレぐらい。

現在は新都の方にある、英雄王のギルガメツシュがなぜか買っていた一軒家に四人で暮らしている。

・ランサー：エルキドゥ

突然現世にやって来た系友。

『召喚戦争』のランサー枠にしてギルガメッシュのブレーキ。

じみに影が薄い。だが戦力としてはトップクラスである。

・セイバー：エレシユキガル

突然現世に連れてこられた系女神。

エウリュアレがあげた双剣のせいでセイバー適性が発生し、しかも双剣に太陽パワーが込められていた結果なんか冥界の女神なのに太陽神扱いとか言う訳のわからないことになった。

キヤットにエレちゃんと呼ばれてかなり嬉しかったりする。

なんだかんだで現世に適応してパソコンやテレビ、携帯を操りぐうたらな生活を始めるのは少し未来のお話。

・藤村大河

みんな大好きタイガー。その身にジャガーはまだ宿してはいないので一応ただの一般人である。ただ虎聖杯騒動で関わってたりするので一般人に近いなかである。

この世界ではとなりに衛宮ズが住んでいるのでよく来襲している。しかし切嗣には妻がすでにいるので初恋はすでに過去のものになっている。

・藤村立花

17歳。

人理を救いそうな外見をした女の子。大河の妹。

第4次聖杯戦争での孤児であり、切嗣に救われた士郎に対しこちらは藤村組に救われ、養子となった。

性格は姉である大河に似てトラブルメーカーでありまた元気。

外見とか髪の色とかからよく学校では士郎と双子扱いされたりする。たいてい士郎が兄とされる。

魔術の知識はない一般人である。

・アサシン：山の翁

召喚戦争のアサシン。本人曰く休暇で冬木にやって来た旅人。なお契約者マスターも既にいる模様。

休暇中なのでハサンは殺さない。

・アーチャー：ステノ

召喚戦争のアーチャー。なんかぴこーんと来たので召喚戦争に召喚された。死んだタイミングはギガントマキアから数十年たっているためかなり成長している（体格は変わらないが）。

・ライダー：イアソン

召喚戦争のライダー。死んだのはギガントマキアはかなり後だが、今回はライダーで召喚されたためアルゴナウタイの時の姿で召喚されている。セイバーやランサー、アーチャーならもう少し後の姿で召喚されるとか。

・謎の契約者

山の翁と契約するなんて、一体藤何立何なんだ…!?

・イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

魔法少女になっちゃったイリヤ。クラスカードの名前と家にいる父親の知り合いが同じ名前なのが気になっている。

・ルビー

素敵なステツキ、ルビーちゃんですよー？

ええ、イリヤさんと契約しましたがあの家は色々おかしいですねー。いやー、でもまあ、面白いので黙っておきます！下手にしゃべると文字通り消されちゃいそうですから！

・サファイア

カレイドステツキのサファイアです。

美遊様と契約させていただいています。

なにか一言…？そうですね、姉さんをどうかしてくれる方募集しています！

・美遊・エーデルフェルト

もう一人の魔法少女。セイバー（クラスカード）にやられた。

・遠坂凜

魔術師のツインテの方。虎聖杯騒動には巻き込まれてたりする。

・ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト
金髪ドリル。

・キャスター（クラスカード）

クラスカードによって顕現したキャスター。イリヤたちはこれを倒すために頑張つて修行したわけだが…士郎の放った矢によって撃墜された。

・セイバー（クラスカード）

クラスカードによって顕現したセイバー。幼女相手に無双したら保護者が出て来てボコボコにされた。どうしようもないので聖剣（設定上オリジナルのエクスカリバーと同威力のはず）を放ったら真正面から迎撃されてやられた。

・エウリユアレ

封印されている間記憶を取り戻すべく集中して、武器をすごい勢いで量産していた。ハンマーを振り回したらなんかバサクレスの前に落ちた。とりあえず撃つた。効かなくなったら効くやつで撃ち殺した。なんかヒュドラの毒を託された。なんでさ。

・バーサーカー（クラスカード）

なんかヤバそうなのが落ちてきたので歓迎したら弓撃たれました。

クラスカードによって顕現してはいるがその魂は第五次聖杯戦争において召喚されたバーサーカーのもの。故に士郎たちのことも知っている。だからといって士郎にヒュドラの毒を軽々しく託すのは如何なものか。

第二十五話　デタラメばかり

前回のあらすじ

「ええいなにものかあーー!」

「げえつ、ヘラクレス! とりあえずビィイム!

「ぬわーっ!!ー!」

「イリヤスフィールが魔法少女に!」

「こつちも変身して援護しよう!」

「キヤスターが居ます!」

「フルンディングを使う!」

「セイバーの宝具も来ます!」

「なんかできたビームを喰らええええ!」

「アアアアアアアアアアアアアアア!」

「なんなのよこれ!」

「効いていない!? 嘘お!」

なんでえ!? まさかさつきのがまぐれ当たりだったとか!? ダイスロールでクリティカルだったかんじなのか!?

「■■■■!」

ぬおわあ!? あぶねえ! からだのすぐ横を大剣が通つてつた! 流石ヘラクレス、近距離じゃやっぱこえーよ!

なー! 思い出せない! なんだ、何が駄目なんだ!? 火力か? 火力が足りないのか?

「……………だー! もう、めんどくさい! 面倒な宝具なんざまとめて吹き飛ばしやあいのよ! 来い、『魔猪アヴェンジャーの怒り』!」

「■■!?!」

呼び出すのはアメリカ空軍の攻撃機A-10の主兵装であるGAU-8 AVENGER 30mm七連装機関砲…を改良して歩兵用（歩兵が使えるとは言っていない）にし、ブースターとミサイルポッドを兼ねたバックパックに取り付けた『アヴェンジャー』。ビジュアルのイメージは機動戦士ガンダム第08MS小隊の陸戦型ガンダム

る。つまるところ、飛翔するこの弾丸は神秘の一欠片も内包しない物でしか迎撃できず、この弾丸は神秘による防御はできないのである。

本来は形なき島に居たときに将来の対サーヴァント戦の対策のために『宝具の干渉を受けたい弾丸』を作ろうとしたのだが、なんでか想定以上の効力を持った弾丸になってしまった。なおこの弾丸の特性はこれらの後に作成された『勇者の弓』や『星を射落とす女神の弓矢』に活用されていたりする。

まとめると、この弾丸ならヘラクレスのゴッドハンドも別に問題なく貫通できるのである。魔術的には証明できない理論で動いているのは多分聖杯のせいなので考えてはいけない。いいね？

「……………」

そんなことを解説していたらヘラクレスがかなりぐったりしていた。恐らく蘇生中なんだと思うけど、一体何度死んだのだろうか。かわいそうに。

「……………」

「あら、やっと復活？さつきよりも遅くなっていないかしら？」

もしかすると貫通せず体内に残っている弾丸が蘇生を阻害してるのかもしれない。これは検証の余地ありかね？

な……」

「まあ、私はそういうのへのメタみたいな物だからね。それで？この世界で誰かに言伝てなんてあるかしら？それぐらいしか私にはできないけれど……。」

「……そう、だな。それならば……あの、赤い髪の少年にこれを渡してやってほしい。」

そう言つてヘラクレス（正史の人だった）は紫の液体の入ったピンを渡してくる。

「……これは？」

「……まあ、俗に言うヒュドラの毒だ。」

「おいこら、ただの小市民に大英雄すら殺すヤバイ毒を譲渡するんじゃないわよ。」

「ふ、彼ならば正しく扱えるだろうさ。それでは、な、強き女神よ……」

「……女神だと言つた覚えは無いけどなあ。流石大英雄なのかな……？とりあえず、これはどうするかなあ。」

もしかすると神性の封印が駄目なのかな……。あとで封印しなおしておこう。

「……ん？なんだこれ。」

なんか金色のカードが落ちてる……まあ、とりあえずひろっておくかな。

「…なによ、あのデタラメ。あれが、本物の英雄の力なの…?」

光と闇の帯が消えた後に訪れた静寂は、凜さんの眩きが破った。

剣士のサーヴァントは、あの二人のサーヴァントによって容易く打ち倒された。

「どうするのですか、トオサカリン！キャスターのクラスカードは回収しましたけどセイバーのクラスカードはあの英霊に回収されてしまいましたわよ!？」

「そんなこと言ってもどうしようもないでしょう、あれ！イリヤスフィールと美遊を簡単に倒すようなやつを完封するような化物よ!？」

「ですがどうかしないと皆殺しですわよ!？」

凜さんもルヴィアさんも混乱していて戦えそうにない。

それに、美遊はまだ意識が戻らない。なら、私が、戦わないと、守らないと。でも、どうやって？

「だー！もー！どうするのよ！こっち来てるんだけど!？」

「撤退！撤退ですわ！イリヤスフィール、早く撤退を！」

どうやって？どうすればいいの？

『戦うための力が欲しいのかしら？』

そうしないと、みんなを守れない。

『なら、私の言うとおりに動きなさい。』

…そうすれば

『ええ。皆を守るでしょうね。』

………わかった、お願い。私に、みんなを守る力を……！

………

セイバーとのビーム対決を征し、無事に生き残ることができた俺とセラなわけなのだが。

「…さて、キャスター。無事にセイバーを倒したわけだが…このカード、なんだと思う？」

「魔術礼装の類いのようですが…詳しく調べるにはここでは難しいですね。」

「…なら、こいつらと戦っていたイリヤ達に聞いた方が確かか。」

「そうですね…。」

とりあえず、イリヤ達に話を聞くと言うことでまとまった。

その時であった。

凄まじい魔力の暴風とともに、空へと光が延びていく。

それも、イリヤから。

「セラ、あれって！」

「あれは…不味いです！それになぜ今更小聖杯としての封印が解けるのですか!？」
「知らないけどとりあえずどうする!？」

「わかりませんよ!」

「無幻インストール召喚」

そして、何かを呟いたイリヤに光が収束し――

――なんかアーチャーチックな服装になったた。

「……………へ?」

「あれは一体!?!というかなぜイリヤスフィールが英霊の力!?!」

「いやまあ義理の兄妹だしアーチャー兄の力を使っても可笑しくはない…か?」

「おかしいですよ!ああもう!一体なにが何やら!」

その当事者であるイリヤは

「『トレイス・オン
投影、開始』」

と眩き、干将・莫耶をつくり出す。

『トレイス・オン
創造開始』、だつて？まずいな、この状況で敵とされるとしたらー」

「…私たち、ですかね。とりあえず無力化するしかなさそうですね……。」

「わかつた。セラは防御を頼む。『破壊すべき全ての符』は」

「イリヤスフィールにどんな影響があるかわかりませんから駄目です。」

「了解だ。『トレイス・オン
創造 開始』。サーヴァント、アーチャー！いざ参る！」

.....

理解が追い付かない。

キヤスターをなんとか倒したと思えば突然セイバーが現れて吹き飛ばされ、戻ってみ

れば美遊は気絶していてルビーとサファイアはそっちの治療に付きつきり、しかもセイバーとはどこからか現れた二騎目のアーチャーとキャスターが戦っていてしかも完封してしまう。

そしてその二人への対応をどうするかルヴィアと言い争っていたら、イリヤがカレイドステッキなしでクラスカードを使い変身、サーヴァント達へ特攻してしまった。

そして――

「…ふむ、予想外にあっさりと無力化できてしまったな。」

「ええ…そもそもよく考えてみれば魔術に関わったことのないただの少女でしたからね…。なんにせよ想定より簡単に無力化できたのは良かったです。」

「流石に『偽・螺旋剣』カロードボルグIIを使ってきたときには焦ったがな。」

イリヤは、あっさりとやられてしまった。

変身したイリヤは白黒の剣をどうやってか召喚し、それを構えて突撃したのだが…

同じように似たような剣を召喚したアーチャーに両方の剣を一撃で碎かれ、退きつつ放った矢はアーチャーの出したピンクの花（恐らく宝具だろう）に防がれ、キャスターの放った魔力弾を辛うじてアーチャーが出していたピンクの花（こっちはアーチャーの

ものより少し小さかった）で防いだところで、一瞬で接近していたアーチャーに腹パンをされてあっさりどと気絶、変身も解除されてしまった。

見ていて感じたのは、サーヴァントらはかなり手加減して戦っていたように思えたことだ。一体どういふことなのか…？

「…さて、それでは色々話を聞かせてもらおうか。残念だが逃げるのならば命は保証しない。」

「……………わかったわ。ただし、先にイリヤスフィールと二枚のクラスカードをこちらに渡しなさい。話はそれからよ。」

「ほう、魔術師は等価交換が基本だと聞いていたが先に私が賭けるものを決めてしまっているのかね？こちらがなにを吹っ掛けるかもわからんのだぞ？」

「確かにそうね。だけど、それでもそのカードと…協力させている一般人に過ぎないイリヤスフィールは奪われるわけにはいかないのよ。」

「ふむ、魔術師としては協力者を切り捨ててでも目的のカードを手に入れるべきではないかね？」

「それは…そうだけど…」

「…ふ、心の贅肉だな。」

「う。」

「だが魔術使いに過ぎない我々とすればむしろ完全な魔術師でなくて良かったと思うが……キャスターはどうだ？この話、それでいいか？」

「そうですね……その少女とその少女が使っていたカードに関しては渡しても良いでしょう。ただ、あのセイバーから回収したカードについては話の内容を聞いてから判断しましょう。場合によっては我々で解析した方が良いかもしれませんし。」

「だそうだ。こちらから求めるのはこのクラスカードについて、そして先程の魔法少女についてだが……ふむ、どうやらこの空間が崩壊し始めたようだな？」

「え？どういうこと……？まだサーヴァントが居るのに崩壊し始めるなんて……？」

サーヴァントがいるのに崩壊するってことはもしかしてこの二人はサーヴァントじゃなくてただの人間……!?ま、まさかね？

「……取り敢えずはこの空間から脱出することを優先するでしょう。キャスター、彼女らもあちらに戻すことは可能か？」

「ええ、可能です。」

「ならば、まずは外に戻るとしよう。それでいいかね、ツインテールの魔術師？」

……うん、もうわけわからん！

「……もういいわ。戦闘はなしよ!？」

「当たり前だ。ではキャスター、頼む。」

「わかりました。それでは。術式再編、次元転写開始！回廊作成、完了！それでは、ジャンプ転移！」

色々考える事を諦めた私たちは、そのまま光に飲み込まれたのだった…。

第二十六話 やつぱり冬木は魔境

ぜええんかいのあらすじい！

ヘラクレス「これを…衛宮士郎に…」つヒユドラの毒

えう「危なくない？」

ヘラクレス「彼ならばきつと…」

えう「ええ…。」

凜「イリヤが暴走した!?!」

シロウ（無言の腹パン）

イリヤ（気絶）

シロウ「さあ…交渉をしようじゃないか。」

凜「ヒエー」

おそらくこんなもん。

というわけでエウエウズレディーゴー！

いえーい。

放て熱線、弾ける宝具、我こそは魔法の一端すら修めし最強クラスの魔法少女（幼女モード時に限る）、エウリユアレゾー。ものども、ひかえおれーい。

………とまあ、そんな下らないことを考えていられるくらいに暇なう。

何をしているかって？

そりゃー、いつものごとく落下ですとも。ヘラクレスを倒したと思っただら空間が崩壊してポイですとも。

恐らくここは虚数空間的な何かだと思っただけれど……まあ、いざとなったら波動砲で

も撃って脱出すればいいか。いまは虚数潜航(?)を楽しもつと。

にしても私って落ちすぎな気がしなくもないなあ…。もしかして私って落下系ヒロイン？

……………落下系ヒロインってなんだよ…。

……………

あの後、私たちはサーヴァントの試行した魔術で河川敷に戻ってきたわけなのだが…

「さて、では知っていることをキリキリ吐いてもらおうか…いや、この協力者の少女を家

に返す方が先かね？」

「そうね。だけど、イリヤスフィールは気絶してるしどうしよう…」

「ふむ、それは問題無い。なにせ親は呼んであるからな。」

「え？」

こいつは何をいつているんだ？というかいつの間に…？

そんなことを考えていたら、近くのベンチに座っていたくたびれたコートをきた男性が近づいてきた。

「そういうことだ。見つけてくれてありがとう、弓郎君、術子ちゃん。まさかイリヤが夜遊びに出るなんて思わなかったよ。」

「私もだ、切嗣。この少女達からは私が事情を聞いて後々報告する。切嗣はイリヤスフィールを連れて帰るといい。彼女を夜風に当て続けるのは良くないだろうからな。」

「ああ、そうさせてもらうよ。それと、君達。」

「…え!? あ、はい!」

「…イリヤもそういう年頃…なのだと思うし、反抗的な面もあるんだろうけど…できれば、連れ出すならば親に許可はとってほしい。いいかい？」

「…はい、わかりました。」

「うん。それじゃ、弓郎くん、あとは頼むよ。」

「了解した。それではな、切嗣。」

そういつて、イリヤスフィールの父親…切嗣とやらはイリヤスフィールをおぶつて去つていった。恐らくイリヤスフィールの家に帰つたのだろう。

「…ああ、そういえば言つていなかったな。魔術に係属していない人には『夜遊びに出ていて、疲れて寝てしまった』といったところのカバーストーリーを伝えてある。魔術の秘匿は問題ない。」

「さ、流石ね…。」

「根源など目指していかない我々からすればどうでもいいことだがね。」

「…あ、そうよ！貴方たちは一体何者なの！？常に魔力を纏つてるからサーヴァントかと思つてたら違うようだし！というか冬木を拠点にしてるんだつたらセカンドオーナーである私に金を払いなさいよかねえ！」

「ふむ、我々程度でサーヴァントとは…本物に失礼だな。本物のサーヴァントならば我々程度容易く消し飛ばすだろうさ。まあ…代行者クラスになればやりあうやつもいるかもしれないがな。」

「ならあんたたちは何者なのよ！」

「ただの魔術使い…いや、『正義のヒーロー』かね。」

「なによそれ…ああもう、訳がわからないわ。」

「さて、そろそろ本題に入りたいのだが。まずは君たちについてだ。」

「私たち…？あー、名前も言っただけじゃなかったわね。私は冬木のセカンドオーナーの遠坂凛よ。んでそっちの金髪ドリルがー」

「金髪ドリルとは失礼な！わたくしはルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトですわ！そしてこの子は美遊・エーデルフェルトですわ。」

「なるほど、ドリルヴィアさんに美遊さんですね。覚えました。」

「なんだか不名誉な渾名が!?おのれトオサカリン！この赤まな板!」

「はあ!?うっさいわよこのキンキラドリルホルスタイン!」

「不毛な争いはやめてくれ…。とりあえずあの空間とサーヴァントはなんなんだ？サーヴァントは黒化していたが…」

「あそこは鏡面界といって、いわばこの世界の影みたいなものね。地脈の乱れに依じて大きくなるみたいよ。そしてサーヴァントは、このクラスカードによって召喚されてるようね。」

「…ふむ、それならばやはりこちらで解析すべきだな。」

「無理よむりむり。時計塔が全力を尽くしても全貌を解明できなかったのよ？貴方達でも流石に無理よ。」

「そうか…まあそれはいいだろう。それで、なぜイリヤスフィールが戦っていたのだ？」

彼女は一般人なのだろうか？」

「あー、うん…本来なら私とルヴィアが戦うはずだったのだけど…そのー。」

「…戦うために必要なカレイドステッキが、美遊とイリヤスフィールに勝手に契約してしまつたのですわ。」

「…管理がなつていないな。」

「うう…そのとおりです…。」

「契約解除も難しいしな…仕方あるまい、さつきとこの騒動を終わらせるのが一番か。面倒事が増えたな…。」

「そういえば、今のところ撃破したサーヴァントは何騎なのですか？」

「今のところ撃破したのは五騎ね。残りはアサシンとバーサーカーのはずよ。」

「…撃破したサーヴァントの真名はわかるか？」

「アーチャーは不明。ランサーは恐らくクー・フリーン、ライダーは不明、キャスターも不明、セイバーは宝具からして…アーサー王かしら。」

「ふむ…アーチャー、ライダー、キャスターの特徴はわかるか？」

「アーチャーは私達が戦つたわけではないから不明よ。限定展開インクルードしても黒い弓が出るだけよ。そういえばさつきイリヤスフィールが使つたのもアーチャーのカードね。」

「…なるほど。」

「ライダーは…たしか二振りの、鎖付きの鉄杭を使っていたわ。あと女性だったわね。キャスターはローブを被っていたからよくわからなかったけれど、恐らく神代の魔術師ね。」

「…なあ、キャスター。これは…」

「…おそらく、そういうことでしょうね。」

「…わかった。恐らくだが、この先の2騎は今まで以上に強い相手だろう。そちらがよければ我々もこの先のクラスカードの回収に協力したいと思うのだが…どうかね？」

「…どういう意図かしら？」

「なに、さっさとこの騒動を終わらせればイリヤスフィールを巻き込む理由も無くなるだろう？それは我々の望むことだからな。」

「…そう。なら電話番号を渡しておくわ。連絡を一度頂戴。」

「了解した。さて…それでは解散としようか。子供はもう寝る時間だからな。」

「そうね。それじゃあ、また会いましょう。」

.....

「…さて、そろそろ変身を解こうか、セラ。」

「そうですね、シロウ。それでは魔術式…解除…よし。」

ポフィン！

「…うん、やつぱりいつもの姿のほうがしっくり来るな。体の大きさが違うとリーチと
かも変わってくるから大変だった。」

「そうですね。私も移動が大変でした。」

「…そういえば、アサシンとバーサーカーと、あの姿で戦わなきゃならないんだよな…。」

「…考えないでおきましょう、シロウ…。それよりも帰ってキリツグ達に報告しましよ
う。」

「だな。」

.....

「…つまるところ、イリヤは召喚戦争とは別件の魔術騒動に巻き込まれたわけだね、シロウ?」

「ああ。今ある情報を見るかぎりではどうも第五次聖杯戦争を、少なくともサーヴァントはなぞつているようだ。」

「となると残りのアサシンとバーサーカーは…小次郎さんとヘラクレス…かな?」

「恐らく、な。佐々木小次郎はなんとかなったとしても、ヘラクレスはどうにもならないだろうからな。」

「ああ…彼は強かった。本当にね。シロウがメタを張れなければ勝てなかったんじゃないか?」

「そうになると、弱体化していた黒化セイバーに一方的にやられていた彼女達ではいくら弱体化したとしてもヘラクレスには勝てないだろう。だから、協力を申し出たんだが…」

「先にこちらで倒すことはできないのかい?」

「できればそうしただけ…クラスカードのある場所がこちらではわからなかったんだ。」

「ある程度の目処はついているのですが、術式の展開に失敗すると場合によっては世界の外なんかには飛ばされてしまう可能性があるのので下手に跳べないのです。」

「なるほど、クラスカードの位置はあちらが抑えてるうえ、試しに跳ぶ、なんてこともできないわけか。うん、なら仕方ないね。」

「まあ、クラスカードについてはこれくらいだ。」

「わかった。とりあえずイリヤとは話し合いかな。でもまあ、イリヤがグレたとかでなくて良かったよ…。」

「お兄ちゃん嫌い、だなんて言われた日には…」

「きつとシロウは悲しみのあまり引きこもってしまおうでしょうね。」

「…うん、容易に想像できるよ…。」

ガラガラガラ。パンツ！（障子を開ける音）

「雑種！居るか！居るな！」

「うおお!?ぎ、ギルガメツシュ!?」

「ちよつと、ギルガメツシュ！うるさいのかわい！」

「仕方なからう、緊急事態だ！アサシンとアーチャー、ライダーが小競り合いを始めた！とりあえず猫と我が友を向かわせたがどうなるかわからん！」

「な、わかった！クー・フリーン！」

「おう、どした坊主……って金ぴかじゃねーか。つーことは戦いか？」

「ああ。ギルガメツシュ、先導頼む！」

「よかろう、ついてくるがいい！」

.....

《冬木市・新都》

「エルキドゥ！無事か！」

「あ、ギル。全くもって大丈夫だよ？」

「……む？小競り合いはどうなったのだ？」

「安心するといいよギル、いつものぐだぐださ！」

「安心していいのか、それは……」

「とりあえずサーヴァント達に会えるか、エルキドゥ？」

「いいとも。」

.....

俺達がエルキドゥに先導されていった先には、異様な光景が広がっていた。

…とても、異様な光景が。

「…いや、なんだよこれ。」

「…我に聞くな。うん、聞かないでほしい。」

「私の記憶だここは新都のど真ん中のはずなのだけれど…」

そこには――

地面に畳が八畳ほど並べられ

ちやぶ台と座布団が並び

そのちやぶ台を骸骨の剣士と、ツインテの少女と、金髪の青年と、キャットが囲んでお茶を飲んでいた。

「うん…なんでさ。」

なんでさ。

「知らぬわ…。」

「…あら、お客様かしら？」

「いや、どちらかというと敵だと思うんだが。」

「彼等を敵と決めつけるのは早計であろう。」

「キングハさんの言うとおりのだな。少なくとも戦闘を進んでするつもりは無いと思うぞで？」

「…まあ、そうだな。とりあえず話し合いといこうか。俺はライダー、イアソんだ。それでこっちは——」

「アーチャー、ステンノよ。弓はあまり得意では無いけれど、弓兵よ？」

「なるほど、貴様があのエウリユアレの姉であったか。なるほど、なるほど。あれの姉というだけあって、充分すぎるほどに規格外だな。」

「あら、それほどでもないわ。だってエウリユアレには遠く及ばないもの。」

「あれを目標にしているのはダメだと思うがな…。」

「えっと、それでそっちの骸骨の方は誰なんだ？」

「…雑種よ、もう少し会話を楽しむ心をだな…。」

「良い。我が契約者も少々慌てているようだから、今のうちに自己紹介は済ませてお

こう。我は初代山の翁、幽谷の淵より——休暇を取って此処に参上した。故に今の我が身はハサンを殺すハサンにあらず。只の旅人也。」

「まさかの旅行客だったよ……。」

「暗殺者が旅行に来る街とかどうなのでしょう……そういえばうちのキリツグも暗殺者でしたね……」

「我、こんな危険な街は滅ぼした方がいいと思うのだが。」

「……正直否定できないのだわ……」

「……あー、とりあえずうちに場所を移さないか？此処だと何かあつたら困るしな。」

「私がかまわないわ。イアソンは？」

「むしろ移動したい。吹きさらしに畳広げるとか俺には理解できなかったしな。」

「ふむ……ならば、我は我が契約者を連れて後から向かおう。」

「契約者……ってことはマスターがいるのか？」

「是なり。契約者なれど魔術師にはあらず。善良な市民である。」

「……まあ、関わってしまった以上仕方ないか。それじゃ、ステンノとイアソンはついてきてくれ。」

「了解だ。」

「わかったわ。」

第二十七話 戦争の終わり?

前回のあらすじ

凜「貴方は一体なんなんだあ！」

えみやーちやー「通りすがりの正義のヒーローだ。覚えておけ！」

キヤスセラ「なんですよ、ドリルヴィアさん。」

ドリルヴィア「だれがドリルですってえ!？」

ギル「貴様らは何をしているのだ…。」

ステンノ「暇してる」

翁「旅をしている」

イアソン「多分聖杯戦争だと思うんだが…」

えみやん「とりあえず家来ようか。」

なおエウリュアレは落っこちた。

えうりあ「さあ、はじまるぞますよ！」

ぎるがめ「いくでがんす！」

えるきど「ふんがー。」

しゆき「まともにはじめてほしいのだわ!？」

《衛宮邸》

正義のヒーローを目指す少年、衛宮士郎は困惑していた。

なぜなら——

衛宮邸はいま、混沌カオスに包まれているからだ。

…ああ、いつぞやのように猫ネコのような怪生物モンスターが溢れかえっているわけではないので安心して欲しい。

事の顛末はこうだ。

まず、ステンノを見たライダー（メドウーサの方）が一瞬だけ気を失って倒れ。

それを受け止めようとして受け止めきれなかった冬木の英雄な方のアーチャーが幸運：E（もしかするとEX）を発動してなぜかライダーを押し倒した上で両胸を鷲掴みにし。

気を取り戻していたライダーが少し顔を赤らめながら『……………まあ、貴方なら……………』とか言つて余計に状況が悪化し。（恐らくライダーの悪ふざけ…だと信じている！）

ちやぶ台の横に座ってお茶を飲んでいたステンノが『貴様なぞに妹をやるかあ！』と見事なまでのちやぶ台返しをして淹れたて熱々のお茶を被った親父がリタイアし。

エアソンはちやぶ台が顔面に直撃して悶え。

青いランサーと金金びか金と緑のランサーは大爆笑し。

衝撃が伝わって隣隣の家家ではみかん一個を犠牲に固有結界が発動し。

そしてなぜかライダーとアーチャーは正座をさせられてステンノに説教をされてい

るのだった。

「…なんなんだろうな、この状況。」

そう呟けば、

「…召喚戦争始まってからずっとこんな感じですし、召喚戦争のせいじゃないですかね？」

と、隣でプリンを食べているセラが返し…

「いや、そんなわけ無いのかわ!？」

と、エレシユキガルがツツコミを入れる。この状況でもまともなのは真面目ゆえだろうか。

「そもそも女性のおもちを驚掴みにするとかサイテーじゃないかしら!？」

「いや、あれは不慮の事故であってだな！」

「喧しい！言い訳なぞ見苦しいだけよ！確かにメドウーサのおもちは大きいけど！」

「何をいつてるんだね君は!？」

「メドウーサのおもちのことよ！」

「あの、上姉様…」

「貴女は少し黙ってなさい！」

「ええ……？」

まだ説教は続く……

一方その頃。

「何処だ………」

「ねえじいじ、私ずっと冬木に住んでるけどここ知らないよ……？」

「……魔術師に家の場所を聞いておくべきであったか……」

「とりあえず一旦家に帰ろっか。」

「……うむ。」

山の翁と謎の契約者は迷っていた！

.....

「…にしても山の翁、遅いな。」

「ですネ。」

「いいわね、すっかりとメドゥーサを幸せにするのよ！」

「いや、なぜそうなる!？」

「不束者ですがよろしくお願いしますね、アーチャー。」

「待て、貴様もかライダー!?! 待て待て待て待て!?!」

「メドゥーサを…お願いね…!」

「お、おい衛宮士郎! この状況をどうかしろ! ステンノはともかくメドゥーサは貴様のサーヴァントだろう!」

「あ、ごめんなアーチャー。これからセラと一緒にアマゾンを一気見するから助けられそうにない。」

「シロウ、早く見ましよう。昭和ライダーのリメイクとなれば見ないわけにはいきません。」

「ア、ウン、ソウダネ。」

「…なぜ片言なのか、シロウ?」

「…ハハハ」

「…え、え?」

「おのれ衛宮士郎! おい待て、ライダー、引つ張るな! 何処へ連れていくつもりだ!」

「もちろん寝室ですよ? ほら、行きますよ?」(怪力A発動)

「ぐ、おああああ!」

「…ねえ、あれいいの? アーチャーはかなり嫌がつているように見えるのだけれど。」

「アーチャーか? 大丈夫さ、流石にライダーも本気じゃないだろうしな。」

たぶん。

「シロウの言うとおりですよエレシユキガル。もしライダーが本気だったとしても星は取得してあるから問題はないですし。」

「いや、問題大ありなのだわ!」

「ははは。」

『——マスター。』

「ん、アサシンか。どうした?」

『いやな、今屋敷の前を恐ろしい剣気を纏った骸骨が通って行ったのだが…どうすれば』

「いっ!?」

「サーヴァントか？」

『うむ、恐らくな。』

「わかった、すぐに出るから呼び止めてくれ。」

『承知した。』

.....

「うむ…魔術師の家は一体何処なのか…」

「そもそもその魔術師さんってどんな容姿なの？」

「容姿か。たしか髪が赤い少年であったが」

「あー、そこな御兩人。少し、宜しいかな？」

「うひゃあ!?!え、侍!?!というかいつの間に!?!」

「契約者よ、我の後ろへ隠れよ。恐らくサーヴァント、それもセイバーだろう。我が召喚されているのであれば、他に召喚されていてもおかしくはあるまい。」

「ふ、私はただの農民…いや、今はサーヴァント、アサシンか。仮に私が柵のない身の上

であれば貴公と一つ果たし合いでましたかったところだが……駄目なのだろう、マスター？」

「ああ、今回はなしだアサシン。それで、山の翁はどうしたんだ？かなり時間がかかったようだが。」

「うむ……家の場所がわからなかったのだ。許せ。」

「……あー、うん、教えてなかったな。すまなかった。それで？あんたのマスターってのは誰なんだ？」

「それは……」

「……もしかして士郎？」

「…………な、まさか立花か!? どういうことだ山の翁!」

「うむ……それがだな……」

「ごめん! 私のせいなの、士郎!」

「どういうことさ、立花。」

「実はね……」

ぼわんぼわんりつかー

.....

数日前……………

「ふははー！ たつだいまー！」

「あ、大河ねえお帰り！ やけに機嫌がいいね？」

「ふっふっふー、聞いて驚くがいい！ 実は今日、古本やさんでただで凄そうな本をもらったのー！ これも私の美しさ故ねー！」

「はっはっはっは、そんなわけ無いよ大河ねえ、きつと誰も買わないから処分したかったんだよいたたたたた！ やめて、頭ぐりぐりしないで！」

「むー。まあいいわ、これ立花にあげるから面白かったらおしえてちよーだい？」

「えー、自分でよまないの？」

「だって難しそうだしー。それじゃ、ちよつと土郎達のところに行つてくるわね！」

「いつてらー。」

ダダダダダダダ：

「…さて、鬼が出るかジャガーがでるか…、読んでみるかな。なんだろうこれ…魔法の本かな？」

パラパラ：

「…あ、なんか召喚の呪文みたいなのがある。えーつとなになに？ 『素に銀と鉄、礎に契

約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ満たされる刻を破却する。

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うなら応えよ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成るもの。我は常世総ての悪を敷くもの。」

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

「……………なんてね。こんなんでくるわけ……」

ヒュオオオオオオ

「……え、風？というかなんで魔方陣が、書いた覚えなんて……まさか……」

ズズズズ……

「え、なんか出てき……骸骨う!？」

「怯えるな契約者よ。アサシン、山の翁。聖杯の導きのもと顕現した。」

「え、ええ!?!なんぞお!?!」

「…なるほど、おおむね理解した。落ち着け、契約者よ。一から説明しよう…」

.....

「てなわけでなんか召喚しちゃって、じいじに色々教えてもらった！」

「…山の翁、今は…」

「事実だ。」

「…わかった。とりあえずその本は没収な。後で持ってきてくれ。」

「えー。」

「えーじゃない。下手すると死にかねないから没収だ。」

「死…？え、そんなヤバイの？」

「そもそもサーヴァントをなにもなしで召喚して平然としている時点で異常だ。場合によつては魔術師に捕まって魔力タンクにされるとか解剖とか、最悪ホルマリン漬けとかもありえる。」

「ひえっ、は、はやく家に入ろう、士郎！」

「はあ…。山の翁、護衛は頼むぞ。」

「請け負った。」

.....

「と、いうわけで山の翁のマスターは立花だった。」

「…よりによつてリツカですか…。これはまた身内が巻き込まれてしまいましたね…。」

「立花の嬢ちゃんまでこつち側たあまた不幸なことだな。」

「えーつと、なにになに？もしかしてランサーさんとセラさんも魔術師なの？」

「残念だけどな、この家にいる人型の生き物で魔術に関わっていなかったのはイリヤだけだ。そのイリヤも最近別件で巻き込まれたけどな…。」

「ちなみに俺とアーチャーの野郎、ライダー、セイバーはサーヴァントだぜ。」

「え、ええ…。えつと、魔術師であることは…」

「絶対に秘匿すること。さつきいった通りバレれば殺されると思うといた方がいいな。」

「うへえ…。」

「それだ。とりあえず七騎のサーヴァントは揃ったわけだけど…どうすればいいんだ？」

「…いや、我が知るか。知つてるとしてもあの黒いのだろう。」

「アンリ・マユか…だけどあいつどこに行つてるのかわからないんだよな…。」

「…あ。」

「ん、どうしたステンノ？」

「いや、アンリ・マユなんだけど、この聖杯戦争の説明に来たときにちよつとムカついてぼこぼこにして倉庫魔術の中に放り込んだままだったわ。」

「…出してやってくれ。」

「ええ。」

「ミヨンミヨンミヨン、と変な音とともに真つ黒の影が現れる。」

「おう…流石にこの仕打ちは酷いと思うんだが。」

「私の妹にした仕打ちの罰よ。」

「いや、その妹が願ったことなんですけどね…？んで、サーヴァントは七騎ともそろつたわけかい？」

「ああ。この面子だと下手すると冬木が滅びかねないからできれば平和的に解決したいんだが？」

「なら簡単なこつて。七騎のうち二騎、自害した上で俺を殺しやいいぜ。元々俺は死ぬつもりだったからな。」

「自害…か。誰か、してくれるか…？」

「我は断る。せつかくエルキドウとともに召喚されたのだ。第二の生を楽しみたい。」

「僕もギルと一緒に居たいかな。」

「うーむ、キャットはご主人と再開すると約束した故な、まだ死ねないのだな。」

「我が有給を妨げるのならば聖杯であろうと斬る。」

「いや、斬つちや駄目なのだわ!! えつと、私は…エウリュアレには、会いたいけれど…う…」

「……………俺は自害しよう。」

「…イアソン、いいのか?」

「ああ。俺はエウリュアレには返しきれない恩があるからな。少しでも返したい。それ
に此処にいるメデイアは俺の知るメデイアじゃ無いらしいしな。」

「わかった。ステンノは?」

「……………自害、かな。あつちでは結局エウリュアレは死んでしまったから、こつちで生き
られるのなら嬉しいもの。」

「…わかった、イアソン、ステンノ、ありがとう。」

「…なあ、坊主。思ったんだが、ここで自害しなくてもどうせ聖杯戦争終了とともに皆消
えるんじゃないのか?」

「おう、それなら大丈夫だぜ? なにせ聖杯に魔力は有り余ってるからな。俺ら三騎の魔
力を足したものでエウリュアレを召喚、受肉して、余りの魔力で他は受肉できるからな

！」

「…ん？なら別に三騎分の魂つて要らなくないか？」

「いやいや、それがそうもいかないのさ。魔術の発動に必要な魔力と消費する魔力は違うからな。例えるなら電気だな。起動に必要な電圧は高いだろ？あれだあれ。」

「そうか。」

「…それじゃ、自害するとするか。庭の端を借りるぞ？」

「ああ。………すまないな、イアソン、ステンノ。それにアンリ・マユ。」

「なに、縁があればまた会えるさ。いづれな。」

「エウリュアレなら軽々と召喚しそうだしね。それじゃ、またね。」

「さーて、それじゃいつちよ死にますかね。ほんじゃな、坊主。」

.....

「…サーヴァント三騎の消滅を確認しました、シロウ。」

「了解だ、セラ。なあ、ギルガメッシュ。なにか違和感とかはあるか？例えば霊体化できないとか。」

「…む、む？確かに出来んな。エルキドゥはどうだ？」

「ふむ…確かにできないね。」

「私も出来ないのだから。」

「む、キャットは…耳と手足の肉球だけ消えたぞ！」

「我はできるな。」

「まあ、山の翁は見た目があれだしな。てことは、上手いこと成功した…のかな？」

「だといいがな。それで、エウリユアレはどこだ？」

「…なにか心当たりつてあるか？」

「…無いな。」

「……………エウリユアレって戦術核とかと同レベルのヤバイやつだよな…？」

「ああ。」

「……………い、急いで探すぐおおお！」

「我もそれに賛成しよう！行くぞ！あれを野放しにしてはならぬぞ！」

「え、ええ!？」

「なんか大変なことになったな。」

「私たちも行きますよ、ランサー。」

「あーいよ。」

今日の衛宮家は大変でした。

.....

やあやあ、虚数空間的な所を絶賛落下中のエウリュアレさんだよー。

いやー、暇だね！ちよつと下の方に出られそうな空間が見えるんだけど、いつまでたっても落ちないね！時空が歪んでるね。

.....む、なんか思い出しそう。

思い.....出した！

……やっぱ思い出してないわ。うん。

いや、思い出したのかも知れないけどどこかの英傑のように映像は流れなかったや。
んー、なんか引つ掛かってる感覚はあるけどとりあえずあそこに降りてから考えよ
う。

それじゃ、降りるまで寝るかな。おやすみー。